

---

# 家庭教師ヒットマンリボーン ～二人の天使～

帆乃女

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

家庭教師ヒットマンリボーン ～二人の天使～

### 【Nコード】

N50160

### 【作者名】

帆乃女

### 【あらすじ】

親友と学校に登校していたら、隕石に直撃して死んだ！？理由は神が故意にやったらしい……………  
天界では日本のテンプレマンガがはやっていてマネを試みたらこ  
うなった？  
ものすごく迷惑なんだけど…………… こっちは平穏に暮らしてただけ  
なのに……………

えっ？ 好きな世界に転生させてくれるって？ やっぱりテンプレ

なんだ。どうする、親友？

「家庭教師ヒットマンリボーンの世界がいいな！いいよね？いいでしょー！」……………

というわけで僕達は家庭教師ヒットマンリボーンの世界に行くことになった……………

原作開始時刻から見たい方は第4章までですっ飛ばしちゃってください

修正終了致しました！

なんとベタた始まりなんでしょう（前書き）

初作で、ダメダメかもしれませんがよろしくお願いします

1月24日修正いたしました

なんとベタた始まりなんでしょう

その日はいつもと同じ日常だった。

僕達はいつもと同じように学校に登校していた。

僕の親友である新崎雪奈<sup>あらたきゆきな</sup>が話しかけてきた

「翡翠、またニュースで隕石のことやってたよね」

最近、僕達の間ではこの話でないと仲間に入れてもらえないぐらい人気があるのだ

「翡翠」というのは僕の名前で、フルネームは田川翡翠である

「ああ、毎日やってるよね……っていうか騒ぎすぎ」

隕石のこととは、ここ5日間に毎日日本にふってきた奇怪現象である

しかも、少しずつ隕石の大きさが大きくなっていつているらしいのである。



可愛いな〜雪奈は

こんなに慌てちゃって……

そんな雪奈に僕は冷静に言葉を返す

「大丈夫ですよ雪奈さん。きっと幻聴に違いありませんし、

まさか真上に隕石なんてあるはずありませんよ。お忘れなさい」

そう、僕は雪奈の言う事を信じず上を見なかったのだ………素直に見ておけよ、と後々思ったけど

「ちよつつ翡翠ちゃん！？幻聴なんかじゃないよお！ホントに上にいんせく「大丈夫です。何を心配しているかは知りませんが、大きく息を吸って深呼吸しんこきゅうをしましょうか」

………見てくれなきゃ嫌いになっちゃうよ?。」

まったく………雪奈は心配性なんだなあ、まあそんな所も可愛いけどね〜などと思いながら、雪奈の言うとうりに上を見てみると………

「……………へ?。」

そこには燃えている大きな岩みたいなのが……………

いや、僕はあれがニュースの隕石だと心の奥では分かっているよ？でもさあ、それを理解しちゃうとき、次に死つていう文字が浮かぶことを雪奈は知っているのかな？

チラリ、と僕は雪奈の方をしてみる

そこには、まるで瞳に夜空でも入っているかのように錯覚してしまうほど、雪奈は嬉しがっていた&喜んでいた&期待に満ちていた

思い出した！雪奈はテンプレに憧れているという事を……！

まさか、雪奈はコレでテンプレが出来るとか思っているのか！？……いや、「思っている」んじゃない！信じているんだ！どこにそんな確信があるのか知りたいな！

ゴツンッッッ



結構シヨボー音だったなあ…

でもまあ、僕死んだんだよね

ああ薫さん、先に死んじゃってごめんなさい……………恩返しできなくてごめんなさい

アイツは……………どうでもいいなあ

そうして僕は死んじやいました

なんとベタた始まりなんでしょう（後書き）

感想、誤字、脱字などがありましたら教えてください

一応、書いておきますが翡翠ちゃんは正真正銘の女の子です

神登場（前書き）

3月14日修正

## 神登場

あれっ？

気がつくと僕は上も下も、四方八方が白い空間にいた

足元には雪奈が気持ちよさそうに寝ている

隕石に潰されて死んだと思ってたけど……………

何か向こうに人が何人かいるし……………

もしや、雪奈の思ってた通りのテンプレっすか？

「おお、起きたか」

向こうにいた人の一人（老人）がこっちに気づき、歩いて来た

「あなた誰ですか？っていつかどこどこですか？」

僕はとりあえず、そう老人に聞いた

ん？このオッサンどこかで見たことあるような……ま、いつか

老人は僕の顔をチラリと見たあと、質問に答えた

「わしらは神じゃ。そして、ここは世界と世界の狭間はざまじゃ」

かつ神！？やっぱ実際にみると電波なのかって思いそう……

と、とりあえず冷静に……

僕はスーハースーハーと深呼吸を何度かする

「なんで僕達世界の狭間にいるのですか？」

僕は神（ただのジジイに見える）に聞いた

「ただのジジイって……聞こえておるぞ……」

まあ、それはともかくおぬし達がここにいる理由はお……

そこに寝ているもう1人の子が起きたら話すとするか」

もう1人の子って雪奈のことか……

ていうか、ナニあれ読心術？

でもまあ、こつこつのも定番だよな

「おい雪奈あ起きろ」

僕は雪奈の頬を右手でペチペチと叩いてみたが、全く起きる気配が無い。むしろ、気持ちよさそうに……アレッ雪奈ってMだったっけ？

何をしても起きない……………こうなったら、奥の手だ！

僕は困ったときの奥の手を使った。雪奈の耳元に僕の口を近づけ囁いた

「雪奈、起きないとね……………ウフフフフ」

僕がそう言つと、彼女は即座に起きた

「何！？起きないと何なの！？………<sup>どこ</sup>ってどこ何処？」

ハア……………やっと起きたか

僕はため息をつきながら雪奈に僕がわかる現状を説明した

「雪奈、ここは世界と世界の狭間なんだって」

そして、そのオッサンは他人の思考をのぞき見る変態ジジイさ」

間違つてはいない………だろ？

「えっ変態？」

雪奈は驚いて翡翠の前に居る初老の男性を見る

「違つっ！断じて違つわっ！」

必死で神（変態）は言い返す

アハハ滑稽滑稽こっけい

僕は改めて神（変態）を見て、言う

「それで神（変態）さん、何で僕達ここにいるんですか？」

「スルー！？まあいいわ。それはじゃのゝあのゝ……………」

神（変態）は口を濁すにご

僕は段々とイラついてきた

早く言えよ、このクソジジイよお

「く、クソジジイじゃと！？もっとひどくなっておるでわないか！」

「！？急にどうしたんですか？変態さん」

急に大声を出した神（変態）を氣遣ったのか、雪奈が心配そうに言



った

ああ、やっぱり雪奈は優しいなあ

こんな変態の事も気遣うなんて……

「わしは変態でもクソジジイでもないわっ」

いやいや、変態ですし、クソジジイですから（笑

「脱線してます。早く言ってください」

僕は神（変態）にスッパリと言ってやった

そして、神（変態）はしぶしぶ答える

「ああ、それはわしらが君達を隕石で潰して、殺した、からじゃ」

やっぱり死んだのか……でも、もっといい死に方とかあったと思う

……

……ん？‘殺した’だって？間違っじゃなくてか？

僕より早く気付いた雪奈が神（変態）に怒鳴る

「ひどいつ！私達だって寿命を全<sup>まじ</sup>ったのにっ！……うっ……ぐすん……」

んな！？雪奈の泣き顔見惚<sup>みと</sup>れる……

じゃなくて、このジジイに制裁を

僕は出来る限り黒い笑みをジジイに浮かべた

「どうしてくれるんですか？雪奈が泣いちてしまいましたよ？

何で殺したかちゃんと説明しないとどうなるか分かってますよね？クソジジイ」

きっと、雪奈が望んでいたのは‘間違って殺しちゃった’っていう、テンプレなんだよね」

うんうん、僕はわかってるよ

ちょっと矛盾してつけどね

「怖っ!!!」じ、実は……………

今天界では君達の住んでいた国のマンガというものが流行っている……

中でも、てんぷれ、ちゅうものが人気での。わしら真似することにしたんじゃ」

すると後ろの方にいた人達が近寄ってきた

「そうなの。それで隕石を落として死んだ人にしようとしてたんだけど……………」

ロリっ子体型の子がおっとりとした口調で喋る

幼女……………だと!?マジでカワイイんだけど!!

……いや、これじゃ僕がロリコンみたいじゃないか…

「それで人が死ななかったなどうるつもりだったんですか！」

雪奈が泣きながら叫ぶ

絵になるヨ！写真撮りたい！……いや、今はこんな事思ってる場合じゃ…

「なかなか死なねえから少しずつ大きくしていったんだよ。」

感じの悪いマツチヨが喋る

途端<sup>とたん</sup>に僕は眉間<sup>みけん</sup>に皺<sup>しわ</sup>を寄せる

うわゝなにコイツ感じ悪ッ！

ム力つくねえ

「それでようやく死んだのが君達だってわけSA」

チャラそうな金髪野郎も喋る

しかし、それを聞きいつそう泣く雪奈

まあ、普通は怒るか泣くよね

「そんな……………ヒドイッ」

テンプレに憧れてるんならこついつこつことも覚悟しなきゃいけないんだよ

つて、聞こえてないか

そんな雪奈の姿を見て僕は神達に微笑みながら言う

「それじゃあテンプレの定番通りに……………ね？」

ニコリ、と顔は笑っているが目は１ミリたりとも笑っていない

むしろ怒りがこもっている

「ええ。特殊能力を付加後、好きな世界に転生させてあげますわ」

艶やかな微笑美人が言った

彼女を見た僕は鼻を手で覆う

エッ！ボディラインが……ちよっ……

何でチャイナ服！？……メツチャ似合う……

……鼻血出そう……カモ……

いやいや、これじゃあまるで僕が変態みたいな……

そんな微笑美人の発言を聞き、雪奈の顔が少し明るくなった

「ホントに！？それじゃあ次は死なないように不老不死を頂戴よ！

いいよね！翡翠ちゃん」

よかった……ようやく雪奈が泣き止んだヨ……………

僕は安堵しながら返事をした

「オーケー」

まあ、僕は死んだっていいんだけど、雪奈がそう言うならいつか

軽いつて言っなよ？

「不老不死、ですね。それでは翡翠さん雪奈さんこれを飲んでください」

艶やか美人に渡されたのは白い光を放った直径1センチの玉だ

いったい、どこから出したんだ？

僕達はその白い玉を人差し指と親指で摘まみ、口に入れる

ゴクンッ

それを見た神の1人が言う

「はい。不老不死の能力付加完了です」

「マジ！？チョー簡単じゃん！」

僕は驚いて敬語じゃなくなってしまった……………失態！

でも、本当に簡単だ……………味は無かったけど！

「ほかの能力はどうします？」

さっきの若い男の神が言う

「ちょっと相談させてください」

僕は神にそう言って、雪奈の方を見てアイコンタクトをとる。



「どうする？ 翡翠ちゃん」

「とりあえず案を出していこうか……」

それから数十分、あるいは数時間、僕達は相談し続けた

## 神登場（後書き）

今回はいったん区切って残りは3話で！

誤字、脱字、感想等がございましたら教えて下さると幸いです

能力付加（前書き）

読み続けていただいております

1月16日修正

## 能力付加

そうして相談して決まった僕の能力がこれだ

・記憶能力、精神力をM X Sにする（M X Sにするって言い方おかしいけど）

・超能力（念話、瞬間移動、念力、金属曲げなどなど）

・空想具現化能力

・超強力な幸運

まあ、言っちゃえばチートだな

雪奈は身体強化とその他いろいろ（いろいろって何よ）で十分だと言っていた

「了解……………はい付加終了。ちなみに空想具現化能力は武器とか限定だから」

眼鏡をかけた真面目そうな奴が言う……って、武器限定かいな！

……なぜ？

でもまあ、結構ハンサムだよこの人

「生命はつくれないってこと。あと飲食料も作れない。お金とかは  
大丈夫だけど」

なるほど、生命は作れず飲食料もつくれないのか

お金とかつくっちゃったら財政混乱とかしそうだからやめとこう

「翡翠ちゃんは、身体強化、付加させないの？」

雪奈がそう尋ねてきた

「ん……だってさ、僕は頭脳担当だろ？ 身体強化はいらない  
さ」

「あ、そっか……忘れてた」

雪奈はエヘへと僕に笑いかけてきた

和<sup>なご</sup>むな

「というか、どの世界行く？」

僕はふと、思った疑問を言う

「行くならやっぱ家庭教師ヒットマンリボーンの世界がいいな！

いいよね？ いいでしょ！」

雪奈は僕に有<sup>うむ</sup>無を言わずに決める

そういえば、雪奈ってリボーン大好きだったっけ…………

まあ…………最後は半ば強引だったけど雪奈の行く世界だったら、どこだ  
ってついて行くけどね

「じゃあ能力追加したほうがいいよね」

僕はリボーンの世界で有ると楽<sup>らく</sup>になる能力を考えた

・死ぬ気の炎を全属性使える

・死ぬ気の炎を全属性使えるリングを2人に渡す

うわぁ……………マジでチートじゃんけ

「……………終了」

今度は根暗そうなくろぶち眼鏡が言う

コイツ、学校でいじめられそうだな

ギロリ、と根暗メガネに睨まれた様な気もするが無視だ

「あっそうだ！ 僕できるだけ多くの原作キャラのふれあえるポデ  
イションにしてね」

その方が楽しそうじゃん？」

僕はそう言った

だって、せつかくの第二の人生がつまらなかったら意味が無いじゃないか

使えるモノは使って利用できるモノは利用し尽くしてやる

「じゃあ、私は……………その、雲雀さんの関係者で」

雪奈も僕につられて自分の要望を言った

そういえば、雪奈って雲雀さんのファンだったっけ……………

「承知した」

昔の侍みたいな渋いおっさんも言う

イケメンだ！ コイツ、高校とかでモテるな



そのときは絶対に剣道部だからなッ

そして、このイケメン結構僕のタイプだ!!!

微妙に口角が上がったような………やっぱり、筒抜けなのかな？

「それでは元気でっ」

最初の神（変態）が言った

もう、コイツには会いたくないな………うん、なんかそんな感じだ

コイツには二度と会いたくない

「私達の出番がめつきり無くなるから、たまにはたよってね」

あのロリっ子少女が天使のような無邪気に笑いながら言う

ロリなら喜んで呼ぶけどね

突如、二人（雪奈と翡翠）の足元が沈み始める

「美人さん方、お元気で！」

僕がそう言って手を振ると、雪奈も慌てて手を振る

「変態さんも、皆さんもお元気で！」

「「「「「「「「最後まで誤解してる！！」「」「」「」「」「」

神と人間の心が一つになった瞬間だった

## 能力付加（後書き）

読んでくださってありがとうございます

感想・誤字・脱字などがありましたら教えて下さると幸いです

僕、誕生！（前書き）

勉強という名の悪魔が……

注意：これから長い原作までの下積みがあります。自分は原作が読みたいんだっ！という方は第4章まで飛ばしちゃってください

僕、誕生！

その日、病院に元気な産声が響いた

おぎゃあ

おぎゃあ

おぎゃあ

「かわいい女の子ですね」

看護師が生まれたばかりの赤ちゃん（僕）を見て言った

く、苦しかった……………母さんの腹の中は結構居心地がよかったのに……………

痛かった……………生まれる時……………メツチャ痛かった……………

思い出したくもない……………頭が割れるように痛かった……………

「おお！かわいいのう」

あゝ……この声はお父さんだな

もうおじいちゃんっていう年齢だけど……

「ああ！私の子……！ やっと、やっと生まれて来てくれたのね」

こっちは母さんの声だ

スッゲー喜んでるよ……

「この子が……俺の、いもうと……」

これは兄ちゃんだな

…… 5、6歳年はなれてっけど

……？あれっ？この3人、（特別にお父さんが）見たことあるような……

「おめでとつございます。9代目」

近くにいたもう1人の男性が言う

ってオリヤアアアアアアアア！！！

この人綱吉のお父さんの沢田家光じゃん！？

………あれ？きゅ、9代目！？ってことは、兄ちゃんはザンザスか！？

というか母さん、ザンザスの母親やんけ！？何、本当に妊娠してんだよ！

「生まれて来てくれてありがとう、あなたの名前は翡翠よ」

前世と同じ！？

イタリア的には変じゃないのか！？

陰謀を感じるぜ 三

母上よ・・・・・・・・玉たまの輿こしですねえ

（3年後）

僕が生まれてからもう3年か……………

今、僕は専門の執事に英才教育を受けている最中である



めんどいけど……

雪奈は、なにをしているんだろうか

「よそ見しないで早く問題を解いてください、クソガキ」

とりあえず……………

この執事ムカつく

僕、誕生！（後書き）

目があ、肩があ、手足の先があ  
・  
・  
・

く骸達との出会い1く

「とりあえず……ディアの手作りパウンドケーキが食べたい」

今、僕は大変危機的状况にある……

ことの始まりは数時間前

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

「それでは翡翠様、この問題を解いてください」

コイツは家庭教師兼私専用の執事であるデイリアである

「断っておくよ」

僕はそう言って、カップの中の紅茶を飲み干した

毎日毎日勉強と武術の練習ばかりでつまらない

「では強制的に」

ディリアはそう言ってニコリ、と笑った

一見、コイツは優男のように見えるが、正体は“超腹黒ドケチ執事”だ……！！

コイツ本当にムカつくな……

僕は自分の顔が引きつるのが分かった

「お前さ、ご主人様の僕に逆らうってのかよ」

僕がそう言つと、ディリアは僕のカップに新しい紅茶を淹れながら答えた

「翡翠様が皆様の前で猫かぶりしているのは知っていますので」

「チッ」

僕は無意識に舌打ちをした

こいつは妙に勘がよくて、1人でコッソリ超能力の練習をしていたら何故かバレタ

よし！瞬間移動で逃げよう！

思い立ったが吉日

そう思い、僕はすぐに行動に移した

シュッ

「あっ！ 翡翠様！？」

[illegible]

「迷った……」

失敗した

急ぐばかりに知らない場所に出てしまった

ここは……どこかの路地裏か？見たことが無いな

汚れた壁や地面をジッと見つめる

すると、後ろから誰かが話しかけてきた

「おや？お嬢ちゃん、迷子かい？」

僕が後ろを振り向くと、そこには30代後半と見えるオジサンがいた

「うん、お母さんとはぐれちゃった」

僕はそう答えた

なるべく年相応に見えるようになる

ちなみに、僕は今7歳だ

「おじちゃんが案内してあげるよ」

オジサンは笑ってそう言った

助かつた……

やっぱ、幸運を能力付加しといてよかった〜

そのまま疑いもせず僕はその男性について行った

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

冒頭に戻る

僕は気が付いたら子供が数人いる建物に閉じ込められていた

……騙された

……あの人悪い人だった

……ていうかここ何処？

「おや？もしかして誘拐されたのですか、あなた貴女」

僕が蹲うずくまっていると、子供の1人に話しかけられた

「改めて言われるとショックだな」

そう……ショックだメツチャショックだ



僕はそんなことを思いながら、話しかけてきた子供を見た

子供は僕より少し年下くらいの少年だった

あれっ？この髪型……………もしや……………

「もしよかったら、貴方の名前を覚えてくれるかしら？」

僕は少年にそう尋ねた……………もちろん、年相応の女の子っぽく

なぜなら、髪型があのだ道骸に似ていたのだ

「六道骸ですよ……………貴女は？」

ビンゴ！やっぱり、六道骸だ

それなら、名乗って損は無いな

「……………田川翡翠」

ホントは田川じゃないんだけど……ま、いつか

「『翡翠』ですね。では、貴女はここが何処だか分かりますか？」

骸はそんなことを言ってきた

もちろん分かりますけど？

とは言わない

「全然分かんないの……よかったら教えてくれる？」

僕は、そう骸に言った

涙目で上目遣いでな

すると、骸は驚いた顔をした

「いいですよ。そのかわりに……」

なぜ途中で止めるんだ！

間を空けるな！間を！！

「そのかわりに……………何だ？」

早く言えつてのー！！！！

「手を……………組みませんか？」

……………

……………ハア？

「どうして？」

僕が折角可愛く聞いてやったのに、骸はこんな返事をしやがった

「手を組むのなら教えて差し上げます」

のあっ！コイツってばディリアに似てるよ

僕はしぶしぶ答えた

「いいけどさ……友達とか相棒とかじゃだめなのか？」

骸は数秒考え、ハアとため息をついた

何ため息ついとんじゃゴルア！！

ため息ついてえのはコツチだっつの！！！！

「しょうがありませんね、相棒でいいですよ」

「“しょうがありませんね”って！何で私が格下みたいな扱いなのよ……！！

言っておくけど私、あなた貴方より年上よ？」

「年上なんて関係ありませんね……」

後輩には厳しくしませんと、調子に乗りますからね」

そんな骸の顔は笑っていた

「誰が後輩じゃあああああ！！！！」

こうした雑談が続き、翡翠が自分の置かれた状況に気づくのが後回しになったのであった

く骸達との出会い1く（後書き）

ネタが……

うん、ネタが無い

く骸達との出会いく（前書き）

家庭教師ヒットマンリボーン第9巻参照

2月6日修正

「骸達との出会い？」

改めて僕は話を切り出した

「で、ここどこ？」

「ここは、エストラネオファミリーの人体実験施設ですよ」

こいつはサラッと何大変なことってんのかな？

人体実験だなんて日本の一般市民には到底理解してもらえないんだよ？

まあ、僕は一般市民っていうよりオモイッキリ正反対ですけどね！

だってマフィアのボスの娘だもん！

「人体実験施設って………何でそんなことしてんのさ？」



「話せば長くなるんですけどね」

骸はポツポツとことの始まりを話し始めた

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

驚くことに、骸の説明は分かりやすかった………なんかショック！

「なるほどね」

「なるほどね、って……貴方も人体実験のモルモットにされるんですよ？」

………そういえば、そうだねえ

………

………

「あつ…………やべえじゃん」

今ごろになって自分の危機に気づく僕

まあ、骸が施設壊すまで生き残ればいいんじゃない？

自分のことには軽い僕なのだ

「今気付いたんですか……………」

なんか骸が呆れたような顔をしてため息をついたが無視だ！

つておい！何ため息ついてんだよ！！

人の顔見てため息つくなんて失礼な！！！！

この際、ハッキリ言わせてもらう

「僕は自分の身は守れるけど……………君は？」

「へえ、どうやってですか？」

明らかにコイツ絶対に信じてないよな、と思いながら僕はつけていたリングに炎をとす

まあ、僕もお兄様サンザスみたいに憤怒の炎ならぬ、感情で色が変わり、想いの強さで純度が変わる炎を出せるんだが……

どうだ！と心の中で叫びながら骸をチラリと見てみると……

「……………何の冗談ですか？ 手品を見せるだなんて」

案あんの定手品じょうていだと思ってた！？

「冗談って、マジだから！本物の炎なんだから！」

僕が必死に言っても骸は信じない

ああ、この子は手品でお金を稼いでいたんだなあ、などと骸は思っていた

「信じられませんね……見かけは普通の子供なのに」

「じゃあ、すごい人は見かけで何か変わるってのかよ」

僕がそう言つと、骸はまるで幼い子供の嘘に付き合うかのような返事をする

「ハイハイ。信じますよ」

ムカつくな、コイツ

「ところで翡翠は六道輪廻を信じますか？というか知っていますか？」

信じるも何も前世の記憶メツチャ覚えてるし

っていうか、急に話変えたよなコイツ

「お前、どこまで僕を馬鹿にすれば気が済むんだ？知らないとしても思ったのかよ…」

それぐらい知ってるし信じるが……なぜそんなことを聞く？」

骸は一度、口を嚙<sup>つく</sup>み、また口を開いた

「実は、僕は前世の記憶があつて、その前世で授かった能力が僕の武器です。

記憶があるということは知識や経験もあるという事なんですよ。分かりましたか？」

「へえ」……………「んで？その能力とやらは今つかえる？」

僕と骸を長い沈黙が包む

「……………まあ、いつか使える日が来るでしょう」

骸は上を向いて言った

ようするに

「今は使えないんだね……………ハハハ役立たず」

最後のほうは小声で言ったから聞こえていないだろう……

てか聞こえてたらヤバイよね？なんか、一瞬僕を睨んだような……

今は使えないとすると、人体実験で使えるようになるのか……

いや、一応聞いておこう

「なんで使えないの？」

「僕も知りませんが、リミッターみたいなものがついているようです」

……ああ、下手に使えば大量虐殺みたいなこともできるし、成長途中の体に影響を及ぼすかもしれないしね

「この施設の人たちはリミッターをはずそうと頑張ってるみたいですね」

その頑張りには成功するけど、そのせいで死ぬだなんて思ってもいないだろうね。ココのやつらは

「貴方、僕が怖くないんですか？」

今度は目を逸<sup>そ</sup>らさずに骸はそう僕に言う

誰が知識だけの子供を怖がるんだよ、とは言わないほうがイイヨネ

「今更<sup>いま</sup>何を……怖かったらとつくに逃げてるよ」

アハハハ、と笑いながら僕が言つと骸は安心したのか、こう言った

「それでは、これからよろしく願いしますね、相棒<sup>・</sup>」

僕はそれで思考が一瞬フリーズしたが、すぐに言い返した

「おうよ！相棒！」

こうして相棒こと骸との施設暮らしがはじまったのであった



く骸達との出会いく（前書き）

2月19日修正：狙白さん、ありがとうございます

く骸達との出会いく

僕がこの人体実験施設に来てから数日がたったはずなんだけど……

今さらながら状況確認を試みる

僕はちゃんとしたボンゴレファミリー9代目の実の娘なのだが、い  
っこうに助けが来ない

まあ、瞬間移動で来たから足取りが分からんしな

もとはと言えば自分のせいなのですが、それを棚に上げるのが僕の  
特技みたいなもんなんですヨ

ズガンッ！

どこからともなく、銃声が聞こえた

そして、火薬のニオイもしてきた

すると、向こうの部屋から声が聞こえた

「トニー……」 「これでも駄目か……」 「トニーが、トニーが  
あ」

どうやら今日はトニー君とやらが犠牲になっただけらしい

可哀そうにな……まだ子供なのに

最近は子供の人数も少なくなってきた

……が、このファミリーの奴らは一般市民を誘拐しているらしく見知らぬ子供も少なくは無いのだ

「そういえば、翡翠はどうしてまだ1度も実験台モルモットになってないんですか？」

隣にいた骸が話しかけてきた

僕はそれに平然と答える

「研究員に、私をモルモットにしないようにする、っていう、暗示をかけているんだよ」

「そういうことも出来るんですか……」

骸は僕を驚いたような顔で見えてきた

まあ、実際僕もこんなことできるとは思わなかったけれどね

あ、こんなことも出来るかな？

と、思って遊び半分で作ってみたら、なんか出来ちゃった

「他にも武術、幻術、体術もある程度できるよ」

そう言っと、骸は苦笑いしながら僕に言ってきた

「貴方が敵でなくてよかったです。」

でも…大抵の術士は体術と武術が苦手なのに、出来るだなんて反則技ですよ」

そうなのか？初めて知ったな……

そういえば、ゲームとかのコマで魔法は得意なのに、剣術やら格闘系が苦手な奴が多かったな

魔王とか勇者は別として

そう思うと、なんだか得意げになってしまっ

「フフン」

「ムカつきますね」

なんなのさ！少し調子に乗って笑っただけじゃないか！

そのとき、誰かが僕に話しかけてきた

「おい」

「骸、なんか喋った？」

今、僕の近くには骸しかいないので、必然的に骸が喋った、ということになる

「いえ……ついに頭がおかしくなって幻聴が聞こえたんですか？」

嫌味たっぷりに言ってくる骸

相変わらずム力つくね

「るせえよ」

おかしいな……

空耳？にしては、やけにハッキリと聞こえたんだよね

それに、あの声、どこかで聞いたことあるような……

すると、またあの声が聞こえてきた

っ おーいってばあ っ

僕はすかさず、声の主に聞き返した

（ 誰？ ）

心の中で言ったのだが、聞こえたのだろうか……？

それにしても、どこかで聞いたことがあるような……無いような……

っ 忘れたのか？ わしじゃよ わし っ

その瞬間、僕は思い出した

（……………あのクソジジイか）

ハ クソジジイって……というか、絶対忘れてたじやろうがハ

そう！あの、雪奈を泣かせた男として最低なクソジジイの声だ！

（何か用か？）

ハ いや……特に何も……）

特に何も無いなら話しかけんなよクズ！

（なら失<sup>う</sup>せる）

ハ ひどいのうっだってえハワシらの出番がまるっきりないんじゃないじゃもんハ

（神の出番だなんてそんなもんだろ？最初だけ登場して後は忘れ去られていく）



「ひどい！！暇じゃ暇じゃ暇なのじゃあ」

暇なのじゃあ、ってオイ！ガキかコイツは！？

（神って案外暇人なんだな……………絶対なりたくねえ）

「ぬわぁにいいい！？なりたくない、じゃと！？」

信じられん……………天職だろうに……………」

まあ、二つの意味で天職だろうな

「そうじゃ、暇じゃから新しい能力を付加してやろう」

なんなんだ？“そうだ、旅に出よう！”的なノリは！？

（そんなのできんの？）

普通は転生前の魂の状態みたいなきに付加するんじゃないの？

「もちろんじゃ！わしを誰と思うとる？早速じゃが何の能力がいい？」

神がそう聞いたと同時に骸が話しかけてきた

「急に黙り込んでどうしたんですか？」

コイツの存在忘れてたな

「うつんゝなんでもないよゝ」

僕がそう答えると、骸は目を細めて言ってきた

「今、失礼なこと思い浮かべませんでした？」

たとえば、存在を忘れていた、見たいな感じで

うわwなんでコイツ、妙に勘がいいんだよ

「な、なんでもないよ。僕もう寝るね、おやすみ」

骸は数秒見つめてきたが、諦めたのか「ハア」とため息をついて返事をした

「そうですか。おやすみなさい」

（ 治癒の能力で ）

ふ いきなり喋るでない、治癒の能力じゃな。……よし っ

目の前に突然、あの光る白い玉が現れる

もちろん、部屋の隅で蹲うつすくまってますので、骸にバレル心配はいりません！

ふ 前回と同じようにそれをのめば完了じゃ っ

神はそう言ってきた

そして、僕はその玉を手馴れた手つきで飲みこむ

ゴクン

僕は、飲み込んでから見渡せる範囲で体を見てみた

（ とくに変わってないな…… ）

僕が心の中で呟くと、神が説明みたいなものを言ってきた

「 治癒の能力は精神力に比例するから…… 」

おぬしの場合…… まあすごいことになるのぉ  
「 」

（ …… 今、気が付いたが晴れの活性を使えばいいんじゃないか？  
）

「 …………… あ…………… そうじゃの 」

なんで！思いつかなかったんだ！能力もらった意味ないじゃないか  
！！

「 なんか可哀想じゃから、特別にこの能力もやろう 」  
「 」

神がそう言つと、またあの光る玉が出てきた

僕はそれをつまみ、口に入れる

ゴクンッ

飲み終わってから神に聞いてみる

なんの能力が分からなければ使えないしね

（これは……なんの能力なんだ？）

「それはじゃのお」原作キャラを自然と惹きつける能力じゃ」

（原作キャラを惹きつける能力とか要<sup>い</sup>らないか？）

僕が、そう神に言つと、神は数十秒返事を返さなかった

「まあいいじゃないかあ」それじゃあ、また暇になったら来るか  
らの」

（ 来なくていいし ）

本当に来なくていい！

く骸達との出会い3（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます

く骸達との出会い4く（前書き）

シリアスは苦手分野です



く骸達との出会い4く

はあ、昨日はあのクソジジイに変な機能付けられたなあ

そんな事を思いながら、僕は目を覚ます

なんだか胸あたりがムカムカする

「翡翠、おはようございます……………ってどうしたんですか、その瞳は？」

近くにいた骸に僕は振り向くが、骸は目を見開いて驚いている

「どうしたんだ？　僕の瞳がどうした？」

瞳……………何かあったんだろうか？

充血？

わかるはずが無えだろ

自分自身の目など確かめる方法が鏡で見る、ぐらいしかないのだから

「翡翠の瞳が翡翠色に……………」

骸の呟きに僕は反応するが、ハッキリ言って意味不明

「ダジャレか？」

僕がそう聞くと、骸は首を横に振る

「違いますよ……無自覚なんですか？ その変化は」

ハッキリと言わない骸に僕はだんだんとイラ立ってくる

「変化って何だよ、変化って」

そもそも目なら自分で分かるはず無えだろうがよ

「とりあえず鏡を見てきなさい」

骸にそんなことを言われ、僕は仕方が無く鏡を探した

「はぁ………」

どうしたんだろ、骸………僕の目に何があったんだろ？

ようやくトイレに鏡を発見！

僕が鏡を覗<sup>のぞ</sup>いてみるとそこには………

………

………

………

………え。何コレ何コレ何コレ

「……何、コレ……僕の目が緑色になってる」

そつ、僕の瞳の色が黒から緑になっている

僕の名前からして、翡翠色と言ってもいい

思い当たるとすれば……昨日の能力付加か！？

「理由は分かりませんが、似合ってますよ」

追ってきた骸が僕に呟いた

まあ、お世辞<sup>せじ</sup>だとしても一応礼を言っのが礼儀だろう

「あり、がとつ……？」

「どうして疑問系なんですか……」

「いや……なんとなく……」

褒められた気がしないからだ、とは言わないほうがイイヨネ

「おい、六道骸来い」

白衣を着た研究員の1人が骸を呼ぶ

どうやら骸の番のようだ

もう生き残っているのは骸と僕を含め4人だけ

その、生き残った奴らってのが、柿本千種と城島犬という名前だ

そのまんま、柿ピーと犬をちっこくしたみたいな姿だ

「では、行ってきますね」

骸はのんきに僕に言ってきた

「骸お死ぬなよ」

僕ものんきに言い返す

それ以外、選択肢が無いからだ

「当たり前です」

骸はそう言って微笑する

ああ……………どうしてこの子がこんな目に会わなくてはいけないんだ

いくらマフィアの子だからといって、今は完全な子供の笑みではなかったよ……………

そう、たとえば自殺するまえの死に覚悟して死に怯える大人のような目だった

ま、実際にはそんな大人見たこと無いんだけどね

「早くしろ」

研究員に急<sup>せ</sup>かされた骸は歩き始める

心配なので、僕も幻術で身を隠し、後を付いていった

廊下を曲がり、実験室に入ると、複数の研究員達と2人の少年……  
千種と犬がいた

研究員が多すぎてよく見えないな……

そのとき骸のものではない、大人の声が聞こえた

叫び声だった

「ギャー」

ガシャーッ

「君！やめなさい！！」

「コラ！何をする！！」

ドサッ！

「やめる！うわああッ！！！」

僕は、それを全て、動画やアニメとして自己暗示をして見た

だって、それはまだ僕には刺激が強すぎたから

「クフフ、やはり取るに足りない世の中だ。全部消してしまおう…  
…一緒に来ますか？」

地だまりの中で骸が他の子供に言う

原作で見た通りの光景で、違うのは僕がいること

そんなとき、骸が僕のほうへ振り返った

「そこにいるのは分かっていきますよ、翡翠……貴方はどうしますか  
？」



目が合った

え、ウソ、バレてた!?

「見つかったっただけ？　んゝ返事は……今のところ保留ってことで」

笑って誤魔化しながら、幻術を解いた

骸、君は“保留”というそんな答えで納得してしまうのか？

僕は今、君から逃げ出したいとも思っているんじゃないかな？

だって、ホラ

手が震えているよ？

僕がそんなことを考えている中、犬と千種が突然現れた僕を凝視する

僕が口を開く

「君達はどうするの？ 骸について行くの？」

とっさにうなずいてしまった2人

血の臭いが部屋に充満していく

嫌な感じだ……ここにはいたくないねえ

僕はそう思い、口にする

「一旦、外に出ない？ ここにはもういたくない」

そうして、僕たちは外に出た

「近くに町があるはずだから、先に行つてて」

考えもなしに、僕はそんなことを口にする

「貴方はどうするつもりですか？」

骸が聞いてきた

僕だって分からない

「燃やすのさ……この研究所を」

誰かが喋った

そんなことを言ったのが僕だと理解するまで、時間はそうかからなかった

自分が思った以上に、僕は混乱しているらしい

そして、3人が離れていったことを確認して僕の両手に炎がともしられる

「塵ちりになってしまえばいいのに、このクズどもめ」

燃え盛る建物の前で笑う僕の姿が、そこにはあった

でも、僕は認めたくなかった

「私」はそんなことで笑わないよ………笑えないよ

そんなことを、心の奥底で呟つぶやいた

輝夜カグヤの姿を思い浮かべて



く骸達との出会い4く（後書き）

なんか少し翡翠ちゃんのキャラが・・・

今回、翡翠ちゃんは目の前で人が死んでショックで混乱してるようです

## 閑話（前書き）

今回の話は雪奈がメインのお話です

最近・・・というか、ほとんど彼女には出番が無いので・・・

今回の雪奈の会話には「」がほとんどつきます

3月3日修正

## 閑話

翡翠が骸と出会ったとき、雪奈は日本の並盛町にいた。

「はあく幸せ、今死んでもいいように」

幸せそうにケーキを頬張る彼女に雲雀は言った

「ケーキ1つでそんなに幸せだっ  
て言う人初めてみたよ」

現在、雪奈は従兄であり幼馴染の雲雀恭也の家でケーキを食べていた

「だってだってえ、おいしーんだもん」

（そういえば、翡翠ちゃんは今どうしてるんだろう？）

フォークを片手にそう思っていた雪奈は大切にとって置いたイチゴを雲雀に横取りされたとか、されてないとか……



研究所に奇妙なクシャミが響く

「ぶへつくしよ～～～ん」

（ 風邪？ それとも、誰か僕の噂でもしてるのかな？ ）

翡翠がそんなことを考えながら、鼻をすすっていると、隣にいた骸が笑いながら翡翠に言った

「クフフフ、翡翠らしい変なくしゃみですね」

「なんじゃい、ムカつく言い方だなあ～翡翠らしいって何だよ……」

「らしい」って」

明らかにバカにしている言い方だ  
あき

「褒めてるんじゃないですか、素直によろこんでくださいよ」

「そんなところがムカつくぜ」

（そつえば雪奈は今何してるかな？）

この2人は仲が良いのか悪いのか分からないが、それが1番良い関係なのかもしれない

研究所にて翡翠が雪奈の事を考えた同時刻、この家にもクシャミの音が響いた

「つくちゅん」

翡翠とは違う、かわいらすいくしゃみだ

「おや、寒いのかい？ それとも、風邪？」

雲雀が珍しく心配して、クーラーの設定温度を上げようとしたが、雪奈がそれを止めた

「だいじょーぶ、だいじょーぶ」

「……………そう」

すると、雲雀はリモコンを置きケーキを食べ始める

「おーい、聞こえておるかーい？」

「恭くん、大丈夫じゃないみたあい…幻聴が聞こえてきた」

（ 実を言うと、私は宇宙人は信じるが幽霊は信じないっていう種類の人間なのよねえ ）

こういうのは背後霊の仕業しわざじゃなくて、幻聴しやうていって考えるのが一番無難だよね！ ）

「もう、寝たほうが良いんじゃないの？」

雲雀がそう言ったとき、雪奈にまたあの声が聞こえてきた

「 幻聴じゃあないぞー、わしじゃ。分かるか？ 」

（ も、もしかして、あの変態さんですか！？ どうかしたんですか？ ）

そう！声の正体は、あの時の変態だったのだ

「 変態じゃないわい！！ 神様じゃ！！ 名前もちゃんとあるぞい！！ 」

…………… 田川翡翠、後で何かするか…………… 」

最後の方にボソリと言った言葉を雪奈は聞き取れなかった

（ えっ？ 何か言いましたか？ ）

ハ いいや、なんでもないぞ ヽ

神の声は明らかに動揺うごちゆしていたが、天然さんな雪奈はまた気付かなかった

（ どうやって話しかけてるんですか？ ）

ハ 念じておる。そなたも出来るぞ？ 現げんにやっておるしな （

（ あ……………無意識でした ）

やっぱり雪奈は天然だった

（ それで、どうかしたんですか？ ）

……………も、もしかして翡翠ちゃんに何かあったんですか！？  
（

それ以外神様が私に話しかける用事が無い、かのように雪奈は翡翠の心配をする

「そうでわないのじゃ」実はのお「優しくて、純粹で、清らかな君に

新しい能力を付加してやろうとおもってなあ」

（！？ いいんですか！？）

翡翠の身が安全だった事と、予想外の発言に驚いて大きい声で言う雪奈

「君からは、あの子みたいにドス黒いオーラが感じられないからの」

（あの子って翡翠ちゃんのことですか？）

雪奈は神にそう聞き返したが、神は話を逸<sup>そ</sup>らした

「まあそのことは置いといて、どんな能力がいいかの？」

神の発言に、雪奈は数秒考え込んだ

（ そうですね……………嘘や幻覚を見破る目をください ）

後に来る六道骸との戦いに備えたのか、雪奈はそう言った

「 了解したぞ……………コレでよいな 」

雪奈は目の前に現れた光る白い玉を飲み込んだ

（ 恭君……………は気付いてないね。能力をくださって、ありがとうございます ）

周りを見て、従兄が突然出てきた白い玉に気付いていない事を確認し、神にお礼を言う雪奈

そんな雪奈を見て、神はこんな事を呟いた

「 やっぱり、君は礼儀正しくて偉い子じやのう 」

その言葉を聴き、雪奈は親友の翡翠が何か勘違いをされていると思

ったのか、翡翠のフォローをしはじめた

（ 翡翠ちゃんだって、年上の人と尊敬してる人にはよほどのことがない

限りは礼儀正しいですよ？

ゝ わしにはヒドインじゃが……どうしてなんじゃ？

雪奈は数十秒考え込み、理由を探す

よほどの理由が無い限り、翡翠は礼儀正しいということを証明するために

（ あゝ……それは、もしかしたら……初めて神様達に会ったときに

私、泣いてしまいましたよね？

ゝ そうじゃが……それがどうしたんじゃ？

（ 翡翠ちゃんは女の子を泣かした人には制裁を下すって言ってました）



雪奈の言葉を聴き、神は改めて翡翠の恐ろしさを実感する

っ 制裁って……やっぱり怖いのう っ

（ 今度からは気をつけてくださいね？ ）

っ うむ、充分気をつけよう っ

完全に神との会話に集中していた雪奈に突然、雲雀が話しかけた

「いきなりボーっとして、本当に大丈夫？」

そう言いながら、雪奈の肩に手を置いた

すると、なんと可愛らしい驚きの声がある

「ほわぁ!？」

そんな雪奈をスルーして、雲雀は雪奈の手を引いて立たせる

「本当に大丈夫？ ほらっ、早く寝てよ」

（ 何だかんだ言って優しいんだから…………… ）

精神年齢は上なので、可愛い弟を持った気分になる雪奈であった

（ それじゃあね、変態さん…………… じゃなかった、神様♡翡翠ちゃん  
によろしくね ）

そう言い残し、雪奈は雲雀に引っ張られて行った

「 それじゃあの…………… それにしても、女子おなこを泣かせた者に制裁を  
下すって部分は

「 あの御方おかた、にそっくりじゃのう…………… 」

神のその言葉は誰の耳にも届かずに闇に消えていった



## 閑話（後書き）

雪奈ちゃんのお話でした。

作者「翡翠のくしゃみおもしろいっすね」

翡翠「死ね作者」

作者「翡翠様、私も女の子なの」「だまれ」ちょ、やめれっ、ぎゃあ  
あああ」

完

雪奈ちゃんのお話、どうでしたか？

これからも、雪奈ちゃんをどうぞ応援してください！

「今日は神様の命日だよ」by翡翠（前書き）

翡翠の能力の一つの、感情で色が変わり、思いの強さで純度が変わる憤怒の炎を応用したものをこれから「感情の炎」とすることになりました！

「今日は神様の命日だよ」by翡翠

翡翠が燃えている施設を眺めている途中、また神が話しかけてきた。

「翡翠さん、ちょっとよろしいでしょうか？」

「何だ！？急に改まって……………ジジイ口調でもなくなってるし

……………

……逆に気持ち悪いぞ」

翡翠は誰も見ていないことを確認し、嫌そうな顔をする

「ヒドッ！まあ気にせずに……………どうやって施設燃やしたんですか？」

あくまでも、下に出る神

「見てなかったのかよ、暇なんじゃないの？」

翡翠はハア、と溜息ためいきをついて呆れるあき

「雪奈ちゃんの所に居たんじゃよぉ〜それよりどうやったんじゃ？」

（急に敬語じゃなくなったな……）

態度がコロコロ変わる神を不思議に思いながら、翡翠は説明を始めた

（お前忘れたのか？

お前から貰った超能力の中に発火能力があったじゃないか）

数十秒の間

「……………あっ」

なんともマヌケな声である

（僕の場合は燃やすものによって変わるから。

普通に燃やすときは発火能力を、炭とかにするなら感情の炎を

使っただけだね  
(

ハ さっすが翡翠様~~~~~~~~~  
ヾ

( キモッッッ!? てか、一体どうしたんだよ  
(

だんだんと翡翠の体に鳥肌とりはだが立っていく

ハ あれっ? もしかして.....忘れてる?  
ヾ

その言葉により、翡翠の脳はフル回転する

( はあ? 何言ってるの? 僕が何を忘れてるって?  
.....  
あ ああっ!  
(

翡翠から尋常でない殺気が放たれる

ハ ヤ・バ・イ  
ヾ

( テメェ! この目の色は何だ!  
(



今までスツカリ忘れていたが、墓穴を掘った神の発言により思い出した

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

その後、似たような発言を神がくり返し数分経過

（分かった分かった。謝罪はいいから説明をしろ！説明を！）

翡翠がそう言うと、神は態度を急変させた

「そうじゃのお、いくつかあるがのお……」

雪奈ちゃんにわしのことをちゃんと教えなかった腹いせじゃ」

（死ぬか？クソ神）

相手（翡翠）が手の届かない場所にいるというのに、怯える神

「まってくれ！お願いじゃから！理由はもう一つあるから！

ヾ

翡翠は数十秒考え込み、神に云った

( ..... 話せ )

「前に、原作キャラを惹きつける能力をあげたじゃろ!?」  
ヾ

( それが、どうしたんだ? )

神は一瞬、口籠くちごもる

「珍しくて印象に残るかな?とかあ、名前と一緒に話が弾むかな?とかあ、」

わしの好きな色だな?とかあ.....  
ヾ

( 緑色の目をした人種さんも他にいるし!! 弾まんわ!! )

てか、最後おかしいだろ!? お前の個人的な意見じゃねえか  
!!--!  
)

ツッコむ翡翠に逆ギレする神

「似合っんじゃからいいでわないか!! 骸とやらにも言われたじゃろ!？」

「そうだけども……あつ、そっだ!」

翡翠はそう言つと、いかにも悪いことを考えていそうな顔をする

「なんじゃ? なんだか嫌な予感がするー」

そして、翡翠は可愛い声色で言つた

「ねっ、死んで?」

「やっぱり……可愛く言つても駄目じゃから!」

翡翠はくじけず再チャレンジをする

「……………ね?」

目を潤ませながら上目遣いで神を見る翡翠　神がどこで見ているか  
分からないけどね〜by作者

そんな彼女に神は負けた

神は死んだ（精神的に）

（神様〜？　どうしたの〜？　お願いだから返事して〜）

またまた、可愛い声色で神に話しかける翡翠

神は生き返った（精神的に）

ふっ~~~~~か~~~~~っ!~!~!

（チッ……生き返ったか）

明らかに嫌そうな顔で翡翠は舌打ちをした

ハ ええええええええええ！？ さっきと態度が全然違っ！？  
？ ヽ

「それじゃあ、骸達のところに戻るか……………」

そう言って歩き出す翡翠

ハ スルー！？ ヽ

（ そっといえば、雪奈はどうだったんだ？ ）

ハ 幻術と嘘を見破る目をあげたぞお。おぬしは要<sup>い</sup>らないのか？ ヽ

（ 精神力がMAXのやつに幻術は効かないだろ？ ）

嘘は……………相手をよく見れば癖があるはずだし、超直感もあるし  
な ）

（ いつ、雪奈に会えるんだろうか……………？ 早く会いたいな…………… ）

ゝ

彼女は知らない

彼女の願いを叶えるために強力な幸運が動き出したことに……

「今日は神様の命日だよ」「bY翡翠（後書き）

次こそ骸達が出る・・・はず

3月6日修正

「骸とサヨナラ」

神との会話を終え、骸達のもとへ行つた翡翠

「てかアイツらどこやねん！」

1人でツツコム翡翠……………<sup>むな</sup>空しいね

どうやって骸達の居場所を知るかを考え出して15分

「むう……………何も案が思いつかない……………しょうがない！こんな  
つたら

僕の体内に流れている“ぶらっとおぶぼんごれ”とやらを信じて、  
ほぼ勘で探そう！」

オイオイ、それでいいのか！？ 翡翠！

数分後、翡翠がたどり着いた場所は<sup>ひとけ</sup>人気のない裏通りのゴミ捨て場  
だった



ゴミ捨て場近くにいた人影がこちらに気付いて声を出した

「おや、来ましたか翡翠。どうするか決めましたか？」

そこには骸達の姿があった

ビンゴ！？　すごいね翡翠ちゃん

骸と犬は熟したリンゴを食べているが、千種は寝ているように見えて、本当は気絶していた

「マジで当たったのか！？……その前に骸、少し聞きたいことがあるんだが」

翡翠も自分の勘が当たったことに驚いていた

「何ですか？」

「お前は……マフィアが嫌いかな？」

翡翠は一瞬口にするのを躊躇<sup>ためら</sup>ったが意を決して口にしたが、骸はそれに即答した

「クフフフ、何を今更。当たり前じゃないですか。それがどうしたんですか？」

そう言われた翡翠は重そうな口を開く

「じゃあ……僕がマフィアの娘だって言ったら、骸はどう思う？」

骸は翡翠の口から紡<sup>つむ</sup>がれた言葉に、一瞬驚いた顔をしたがすぐさま元の表情にする

「どうも思いませんね。僕だって親はマフィアですし……」

…それにしても、貴方<sup>あなた</sup>マフィアの娘だったんですか」

“どうも思わない”と言われ安心したのが、翡翠の顔には安堵<sup>あんど</sup>の笑みがつつすらと見えた

「うん！ それでね、僕は家族のところへ戻ろうと思うんだけど…  
…」

「一緒には来ないという事ですか？」

「うん…でもね、出来る限り君たちの手助けもしたいんだ。だって

……

…その……僕は君の………骸の相棒だと思ってるから」

顔を赤らめて俯<sup>うつむ</sup>きながら言う翡翠に、骸は深いため息をついてこう言った

「しょうがないですね」

「上から目線！？ この恥ずかしい言葉を結構勇氣出して言ったのに！？」

確<sup>たし</sup>かに

今までのシリアスっぽそうな雰囲気はどこへ行ったのやら

「後輩の願いを聞き入れるのも、先輩の役目ですからね」

まだ続いてたんだね、その設定

（　ここまで上から目線だと……　）

「殺したいほど憎<sup>にく</sup>たらしいんだけども」

あくまで表面上はにこやかに、瞳の奥では怒りの炎を燃やし、翡翠は骸に言った

「クフフ、できるのならどうぞ」

そう言った瞬間、骸の左目の数字が変わり始めた

「なんだろう………骸<sup>かゐる</sup>って薫さんと同じ性格なのかな!？」

「その人がどういう性格なのかは知りませんが、これでも僕を殺そうと思うんですか?」

骸はそう言つと邪悪な笑み（子供なら一目見ただけで10日は泣き続けるほど真っ黒な笑顔）を浮かべる

「ス……スミマセンデシタア！」

「どうして片言なのかは、あえて聞きませんね」

バタッ

どうやら、犬も眠ってしまったようだ

そこには、地面に倒れている2人の子供の姿があった

それを見て、骸は何を思ったのかこんなことを言った

「僕はどっかのマフィアでも潰してくるので、二人を頼みますね」

「了解……って！　僕は託児所じゃないし！

マフィア潰すとかスゴイ簡単に言ってるけど大丈夫なのか!？」

翡翠がそう叫ぶと、骸はさきほどのメチャクチャ邪悪な笑みを浮かべた

「僕に無理だとしても言いたいんですか？ 翡翠は」

「ウソです、ウソです、ゴメンナサイ……………」

でもまあ、“頼む”ってことは、また会えるってことだよね」

「それじゃあよろしくお願いします」

骸はそう言つと、翡翠に背を向けて歩き出す

「絶対絶対また会いに来てよね！！」

翡翠は骸に大声で言い、骸を見送った

そうして何分かたった後、翡翠はこれからどうしようか迷っていた

「この2人、運ぶのメンドイ……………てか、どうやって城に帰ろうか……………」

そんなとき、1人の男の声が裏通りに響く

「翡翠様あああああああ……!!」

「うっさいわ、ボケエ」

発狂しながら翡翠に抱きついてきたのは、翡翠の専門の執事である

ディリアだった

どうやら、ボンゴレの保護隊＋ディリアが来たみたいだ

どこに行ったか全く分からない状態で翡翠を見つけるとは、なんと優秀なんだろうか

ディリアはいつもの嫌味<sup>いやみ</sup>を全く言わず、別人かとも思えるような言葉を発した

「今までどこにいらっしゃったんですか！　どれだけ心配したと思ってるんですか！！」

それほど翡翠ちゃんが心配だったんだね〜ディリア君は

本当は心の底から翡翠ちゃんに誠実なんだね〜

「お前性格変わり過ぎだって」

ディリアの変わり様に驚きながら（若干引<sup>ひ</sup>いている）も、翡翠はとりあえずツツコム



「そういえば……この子供たちは？」

数分がたち、ディリアは落ち着き2人の少年の存在に気付く

「詳しいことは後で話すから……丁重に扱え」

「かしこまりました」

いい執事を持ったな、と思っている翡翠には後で父親から稲妻が落ちた

く骸とサヨナラく（後書き）

温厚な9代目でも娘のために鬼になるんですっ

次回、日本に行けるかな？

新キャラ（もちろんオリジナル）の影も出したいです

3月22日修正

く日本へ行くく (前書き)

読んでいただきものすつごく感謝！

翡翠の考え

雪奈〓雲雀の関係者〓雲雀の近く〓並盛〓日本

く日本へ行こう

「それでは翡翠、もう勝手にどこかへ行かないね？」

僕の目の前でお父様が仁王立ちになって言った

「はい、お父様。お約束いたします」

今現在、僕はお父様（ボンゴレ9代目）から長い説教を受け終え、もう二度としないと誓っているところである

「それなら、もう戻っていいよ」

「はい」

9代目の自室から出た僕は自分の部屋へと向かう

いやあ……………怒ったお父様、超怖かったなあ……………

薫<sup>かある</sup>さんと同じぐらいに…

「翡翠、もう二度とこのようなマネはよせよ」

うおっと…お兄様がドア付近で待ち伏せしていたようだ……

オドロイタア

「お兄様……その言葉もう何十回も聞いていますよ」

僕はフウ、とため息をつく

「もし、次やったら生まれてきたことを後悔するぐらいのお仕置きをするからな」

「怖いよ！ お兄様！..」

厳<sup>いか</sup>つい顔でなんてこと言うんだこの人は！！

しかも超本気じゃねえか！

一応、僕は貴方の妹ですよ!?

いや……妹だから、かな

「もう二度とやるなよ」

「はあゝい」

2度も言わなくなたって……

僕はそのまま、僕の私室に向かって歩き出す

お兄様も後に付いてくる

ほどなくして、僕の部屋に到着した

「それじゃあ、俺は仕事に行ってくる……それと、似合っているぞ、その瞳」

そのセリフ、今まで会った全員に言われてるよ!

そんなに緑が似合うんかい

「はいはい、あんがとさん……仕事、気をつけてね」

僕はお兄様を見送り、自分の部屋へ入る

ちなみに、この古城は9代目家族、信用できる人物にしか教えていない、超極秘の家である

「9代目の説教は終わったんですね」

目の前には平然としているディアアがいた

なんだ、あの取り乱した姿は一体どこに行ったんだよ

「まあね……」

チラリ、と部屋の片隅にいる犬と千種を見る

「このお菓子うめえびょん」

「犬、汚い」

現在、僕の部屋にはディリア、犬、千種、翡翠の4人がいる

ダメだ………コイツら汚ねえ…

「それで、翡翠様……この子供たちは？」

ディリアが僕の視線を追い、話しかけてくる

「ああ、実はな………」

僕はエストラネオファミリーの人体実験施設でいろいろあつて目の色が変わり、突然火事がおきて、その混乱に乗じて逃げてきたのだ、と説明した

多くの真実に少しの嘘を混ぜるのが巧い嘘のつき方だ

「9代目には言わなくていいんですか？」



「秘密にしようって……今からばれるといろいろと面倒だから」

もう1回説教が待ってるな……

「なんで言わなかった」とか「どうして秘密にしていた」とか「言ってくれば行くべき場所に送れた」とか言ってくるだろう…

「その年で面倒って、翡翠様は将来、不良ですかね」

「聞こえてんだよ、貴様<sup>キサマ</sup>」

ピコーン    ピコーン    ピコーン

！？

何やら変な音声が頭に響く……

どうやらこれは……

「おや、僕の超直感が危険を伝えているぞ」

しかも、かなり危険で…

「翡翠様の超直感なんて信じられませんね」

いちいちいらん茶々を入れるな

「貴様、聞こえているぞ。とにかく、犬と千種はベットの下に隠れて」

「何でだびょん」

「めんどい」

そこで「めんどい」って言われるとコッチはスゴイ困るんだけど……

「いいから早く！ 後でいっぱいお菓子あげるからさあ」

この言葉に食いついた犬によって2人とも隠れ終わった、ちょうどその時

ボタンッ

「突然だが、日本に行かないかい？」

お父様が入ってきて、開口一番にそうやってきた

あつぶねー……

てか何で日本？ …… まあ、雪奈に会えるしいつか

「いいですね…ですが、どうしていきなり日本へ？」

「同じ日常に退屈して屋敷を抜け出したんだろう？旅行ぐらい連れて行ってあげるし、

家光の所には翡翠と年の近い息子が居るからね」

お父様はそう言った

……ん？ 家光？

と、いうことはツナにも会えるのか

それにしても、理由が僕の為<sup>ため</sup>だなんて……

「お父様がお父様でなかったら、きっと惚れていますわ私」

<sup>わたくし</sup>  
私ファザコン宣言

「うれしいね…それじゃあ明日行こうか。

日本への旅行は一週間ぐらいになるだろうから、準備をしておゆき」

「はい、お父様」

僕がそう言つとお父様は自らも準備をしようとする部屋を出る

「と、いうことだ、ディリア……犬と千種に不自由ないようにしておあげ」

僕はお父様の出て行ったドアを見つめながらディリアに言った

「かしこまりました……言い忘れていましたが、翡翠様が退屈しないように」

年の近い孤児を引き取るようになりました」

……孤児？

めんどろな奴じゃないならいいなあ…

「了解」

その日の夜

（夢（精神世界））

「では、日本に行くのですね？」

「そういう事」

僕は骸に今日あった出来事を説明した

こうやって僕は毎日骸と精神世界と一日の結果報告みたいなことをしている

「僕はもう少しかかりそうですね……」

骸はまだマフィアを潰そうとしてんのかい……

「いやいや、マフィア潰すのに1日2日で出来たら、苦労しねえって」

てか、逆に出来たら拍手してやんよ

「クフフフ、それもそうですね……では僕はこれで」

骸はそう言つと、精神世界を出て行つてしまった

「じゃあね」

一足遅く、僕は言った

（翌日）

「着いたあああああ」

日本に！

まだ空港だけだね

「静かにしなさい、翡翠」

怒られちった

でも、このハイテンションはそうなかには下がらないぜ！？

「だってだって、初めての日本なんだよ！！」

久しぶり！ 僕の故郷





ゝ日本へ行くゝ（後書き）

遊び相手は2章が終わった後に出てきます。

次回！雪奈と再開・・・かも

12月18日修正

く翡翠ちゃんと原作キャラ達く（前書き）

2日連続投稿デース

「翡翠ちゃんと原作キャラ達」

「あら、可愛い女の子ね」

そう言われながら、僕は頭を撫でられる

「翡翠です！ 5歳です！」

さて問題です！ 今翡翠ちゃんはどこに居るのでしょうか？

1、沢田宅

2、雲雀宅

3、新崎宅（雪奈ちゃんの家だよ）

正解は……………

1番です！ さっきの方は奈々ママンですよ

「奈々も可愛いよ〜ん」

そんな溺愛な発言をしたのは家光オジサンだ

「やだ〜もう人前で〜」

そう言って照れる奈々ママン

のろけちゅう  
惚氣中

げんざいのろけちゅう  
現在惚氣中

「よろしくね、つなよし君」

僕はそう言つて奈々さんの足にしがみ付いてたツナに挨拶をした

「うああああん」

泣き出した！？ 何故？？ この私の超絶天使スマイルで！？

「綱吉君は人見知りなんじゃな」

“なんじゃな” ってお父様！？ 何のんきに言ってるんですか！

これじゃあ僕が泣かしたみたいじゃないですか！！

「すみません9代目」

おいおい……奈々さんの前で9代目とか言っているのかよ家光!?

「フンフンフン」

奈々さんは包丁を手に台所で料理を作っていた

奈々さん全然気が付いてない!?

そつえば、天然だったっけ……

どうしよう、これじゃあ雪奈に会いにいけないな

「呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃん」

うおお！　また面倒めんどうなのが来た!?

（微妙に違うのか？　ていうかなんの用だよ）

「困っている子羊に手をさし伸ばそうと思ってのう」

うわあああ…… ナルシストっぽいわあ

（ 言い方は癪に障るがまあいい、なんの用だ ）

用が終わったらさっさと帰ってくれ

てか、どうでもいい内容だったらぶっ殺そうかなあ……

へ 神様パワーでここに居る全員に翡翠がいると錯覚させる、ってのはどうじゃ？

…… ハア！？

神様パワーだあ！？

別にそんなの使わなくても、僕は幻覚が使えるから奈々さん達はオツケーだとして……

ああー…… 無理だ



お父様を騙<sup>だま</sup>す自信が無い……

（ハア………しょうがないな。まあ寝てるように見せてよ）

ハ イエツサーボス！！ ヽ

ボスう！？

（え？ ボスって何？）

ハ あっ、すまぬ………つい癖<sup>クセ</sup>で………

翡翠ちゃんみたいな上司が前にいてのう、その上司をワシはなんと………！

‘ボス’と呼んでいたんじゃないよ！ ヽ

僕みたいな性格なら、絶対にウザがってたよ………

ハ ウソじゃがのう。実際にあだ名がボスだったのは同僚の子なんじゃ  
ヽ

ウソなのかい！

……ん？ ‘前にいた’ だって…？

（今は違う上司なのか？）

僕がその言葉を発してから、十数秒経過した

へ………死んだんじゃよ ㇿ

暗いなあ………まあ、上司が死んだんならこんなものか？

想像つかなかった……ジジイが暗い

………死んだ？

（神様って死ぬのか？）

へ 基本的には不老不死じゃが……自ら望めば、死ぬことができる  
のじゃ………

あのお方は……後追い自殺あとおじやった……」

う……

コイツにもそんな過去があつたのか……

気まずいな……上司が恋人追つて、後追い自殺か……

（その……さ、元気出せよ！ お前がはしゃがないと何処どこかおかしい

っていつか……その……まあ、そんな感じだ）

「むう、慰なぐさめてくれたのか……礼を言っぞ

いぞ」  
それでは、神様パワーを使うとするかのう……瞬間移動テレポートしてよ

そう、なのか……？

それでは……いざ、テレポート……！

瞬間移動する最中、<sup>さなか</sup>どうして僕は上司さんが“恋人を追って”と思  
ったのだろうか、と気付いた

まるで、元<sup>もと</sup>から知っていたように

~~~~~

〈雪奈視点〉

「どっしりよう、どっしりようどっしりよう」

現在、私は残念なことにチンピラに囲まれていた

「コイツだよコイツ」

チンピラさんの一人……チンピラ1号さんが突然私を指差して言  
ってきたの

「でも、ガキじゃね？」

「コイツと一緒にいたやつが俺らの仲間ぶった切ったんだよ」

「可愛い子でちゅね」

「うわっ、でたよロリコン」

「うるせえよ、ロリコンの何が悪い！！」

総勢5名、子供1人相手には多すぎる人数だよ

そして、約1名、私にとって超危険な人物がいる

「怖がってる姿も可愛いな」

「キモッ！ キモッ！！」

何でこうなったんだっけ？……………<sup>たし</sup>確か

私は記憶の波を遡るさかのぼ

確か、この人達は昨日恭君に並盛を汚したからってボコボコにされてた人達だ。《空き缶捨てただけだけどね》

「助けて、助けてよお恭君……………翡翠、ちゃん……………」

来るはずのない者の名を呼ぶ雪奈

「まず、こいつ攫さらってから話しようぜ」

チンピラ1号さんが言った

攫さらう？

今この人攫さらうって言った？

日本では犯罪だよ？

「そつだな」

そうだなって…チンピラ2号!!

どうしようどうしよう

迫ってくるチンピラ共<sup>ども</sup>

「うう、ええん……助けてえ、助けて翡翠ちゃん!!」

必死で、必死で、必死すぎて、また呼んでしまった

いつも、私のピンチにはいつもいつも駆けつけ<sup>か</sup>てくれた翡翠ちゃん

「あいよ」

幻聴が聞こえた

だって、いるはずの無い人の……翡翠ちゃんの声が聞こえたんだから……

「「「「え？」」」」

チンピラさんたちの声が一致した

それもそのはず

翡翠ちゃんが空中から突然現れたのだ

ゴキッ      バゴッ      グシャッ      ゴツッ      グキッ

説明しなきゃ！ 上から

翡翠ちゃんがチンピラの1人の左腕をかかと落として折った音

翡翠ちゃんが2人目のチンピラの足を蹴<sup>け</sup>り、凹<sup>へこ</sup>んだ音

翡翠ちゃんの右フックでチンピラの3人目の鼻を折った音



翡翠ちゃんの足<sup>あし</sup>払いでチンピラの1人が頭<sup>きようた</sup>を強打した音

翡翠ちゃんの鳩尾<sup>みぞおち</sup>を狙<sup>ねら</sup>ったパンチでチンピラの1人の肋骨<sup>あばらほね</sup>が折れた音

「汚<sup>きた</sup>ねえ手で雪奈に触ろうとすんじゃないよ、クズ共<sup>てめ</sup>が」

翡翠ちゃんがチンピラさん達に言った

その瞳<sup>ひと</sup>は、酷<sup>ひど</sup>く、冷<sup>さ</sup>めていた

「翡翠ちゃん、翡翠ちゃん~~~~~ん」

私は翡翠ちゃんに抱きつく

「雪奈!! 何か変なことされなかったか?」

翡翠ちゃんが心配そうな声で聞いてきた

「うん！ だいじょーぶ」

私がそう言って笑うと翡翠ちゃんも微笑<sup>ほほえ</sup>んでくれた

「雪奈が無事でよかった」

本当に安心してる声色……心配してくれてたんだ…

「ありがとう！ ……でも、これは救急車呼んだほうがいいよね」

私はチラリ、とチンピラさん達を見る

そこには酷<sup>ひど</sup>い惨状<sup>さんじょう</sup>のチンピラさん達が…

「何で！？ 雪奈を攫<sup>さら</sup>おうとしたんだから当然の報<sup>むく</sup>いだよ！！」

翡翠ちゃんはさもそれが当然のように言ってきた

「それでも、人殺しはよくないよ」

大切な翡翠ちゃんには人を殺して欲しくなんかないよ

「うーん」

私は未だ<sup>いま</sup>、納得していない翡翠ちゃんを<sup>なだ</sup>宿め、携帯電話で救急車を呼ぶ

この後、チンピラたちは雲雀によって死んだほうがマシだと思うような体験をし、二度と復讐などしないだろう

く翡翠ちゃんと原作キャラ達く（後書き）

雲雀さんは小さい時もぱねえっす

翡翠は激強です

く翡翠ちゃんと原作キャラ達2く（前書き）

神様

く

く

普通の会話

く

く

念話

く

く

となっております

「翡翠ちゃんと原作キャラ達？」

現在、翡翠と雪奈は並盛総合病院のロビーにいる

「よかったあ、翡翠ちゃん、あの人たちが生きてるって!!」

雪奈は医者からさりげなくチンピラ達のことを聞きだし、翡翠に伝えた

「よしっ、次会ったら殺しておこう」

坦々（たんたん）と、無表情に決定事項と告げる翡翠

「殺すのはダメだよ!! 翡翠ちゃん!」

ふう、とホッペを膨らませて翡翠に可愛く怒る雪奈

「なら、半殺しはいいんだな」

あくまで表情は冷静にツッコむ翡翠だが、内心は雪奈の姿を脳内永久保存しようと頑張っていた

「うう……気を付けてね？」

反論ができず、なぜか応援する雪奈の姿を翡翠は微笑ましい者を見る目で優しく見つめていた

「半殺しもダメだと思うよ、雪奈」

優しく、易しく、あくまでも、やさしく、言った翡翠

「えっ？ あれっ？ うん？ ……何がなんだか分からなくなってきた」

混乱する雪奈を翡翠はいつまでも穏やかに見つめていた

〳〵数時間前〳〵〳〵

「とりあえず大きな病院の方がいいよね。一般人が見てもすごく酷  
いって分かる傷だから」

雪奈の視線の先には、出血はしていないものの内出血の痕が多数  
見られるいかにも「チンピラです」という風貌ふうぼうの青年達が失神して  
いた

「……………テヘッ」

‘テヘッ’では済まない傷だと思う

雪奈は雲雀に何かあったときに助けを呼べるようにと、持たされて  
いた携帯電話でこの近くで1番大きな並盛総合病院に電話をした

～～～回想終了～～～

翡翠と雪奈はチンピラ達は何故あねあぜなっていたかを説明するために、



救急車に寄せられたのである

「じゃあ、喧嘩ケンカをしていた所を偶然お嬢ちゃん達が通りかかったんだね？」

中年の白髪混じりの髪をした医者イカが雪奈と翡翠に優しく聞く

「「はい」」

雪奈と翡翠は声をそろえて返事をした

「これだから最近の若者は……」

「物騒ぶっそうな話しねえ」

「あの子たち可愛いわあ」

「ゆとり」かしらねえ……」

などなど、病院の看護婦さん達が話をしている

『おお、見事に騙せたぞ！　ん？　どうしたんだ、雪奈？』

看護婦の話を盗み聞きし、うまくいった事を喜び、雪奈に念話で話す翡翠

『嘘、ついちゃいけないんだけどな……………』

良心の塊のような雪奈は少しの嘘でも罪悪感を覚えてしまったようだ

『大丈夫、大丈夫。本当のこと言っただけで信じないし』

雪奈に比べ、翡翠には良心そのものがなさそうである

『でもお、今のお母さんに嘘はダメだって言われてるし』

そんな雪奈の発言を聞き、翡翠は少し暗い表情を見せる

『母親……………かあ……………僕の母親はねえ、死んだんだよ』

当然のように、初めて知った雪奈は驚く

『えっ！？……………ごめん』

『大丈夫だよ。あの人が、食いすぎで死んだから……………メタボだぜ？  
生活習慣病だぜ？』

なんとか暗くなった空気を明るくさせようとする翡翠

『余計にごめん』

逆効果だったようだ

「ここの居たんだ、雪奈……………と君、誰だい？」

突然2人に話しかけてきたのは、なんとちっこい（幼い）雲雀恭弥  
だった

「僕の名前は田川翡翠。雪奈がチンピラに襲われそうになったときに  
助けて知り合った」

翡翠は雲雀の問いに翡翠はそう答えた

『あれっ？ 私達、元<sup>もと</sup>から知り合いだよ？』

『前世の記憶があることはコイツに言ったのか？』

翡翠は答えず、逆に雪奈に聞き返す

『言っていないけど』

『なら、知り合いならおかしいだろ？』

『あ、そうか……そうだねえ』

雪奈は翡翠の答えに納得する

「そうなんだ……じゃあ、御礼をしないとね」

雲雀は翡翠にそう言った

(……………2人同時に会話って疲れるな……………)

こんなこと思ふ暇が翡翠ちゃんにはあるじゃないかな？

「御礼おれいねえ……………じゃあ、僕と友達になつてよ。知り合いとか、友達とかいないし」

翡翠はニコツと雲雀に笑いかけ、言った

「？ 君、ここ(並盛)に住んでるんじゃないの？」

雲雀は翡翠に聞く

「この近くに遠い親戚が住んで、会いに来たんだよ」

翡翠は坦々と答える

『そうなんだあ、並盛に住んでないんだあ……………って、親戚って誰！？』

「僕は群れるのが嫌いだけど……雪奈を助けたってことはそれなりに面白いんだよね？」

それでも、すぐ並盛から出て行くんじゃないの？」

雲雀はニヤリと笑い、雪奈は雲雀の言葉を聞き、驚く

「えっ！？ 帰っちゃうの？」

「ここ一週間はいるし、10年後ぐらいにはバッチリこっちに移り住んでると思うぞ」

これまた決定事項を言うように翡翠は坦々と言った

‘バッチリ’って、翡翠ちゃん……

「それじゃあ、早速<sup>さっそく</sup>たたく「じゃあ、私達の住んでる並盛を案内するよ！」……

……雪奈、君ねえ……」

雪奈に言葉を遮<sup>さへぎ</sup>られ、雲雀はため息をつく

雪奈は翡翠をどこに案内しようか迷っている

翡翠はそんな2人を面白そうに眺<sup>なが</sup>めていた

~~~~~

「ここがパン屋で、あっちが洋服屋さん」

雪奈の案内がズサンだったため、結局、雲雀が並盛を案内することになってしまっていた

「アイスでも食べようよ！」

雪奈は翡翠と雲雀の腕を掴み、輝く目をして言った

「そつだな」

と、翡翠

「あれがショッピングモール……って君達、聞いてる？」

時既に遅しとはこれのこと

翡翠と雪奈はアイスを買いにショッピングモールの中へ

くくいろいろあつて数十分後くくく

今は公園にいる翡翠一行

「君達のお守り<sup>も</sup>は疲れる……………」

雲雀はぐったりとして公園の日陰に座っている

「だらしねえなあ、男のくせに」



翡翠は嘲笑を雲雀に向ける

「誰のせいだと思ってるんだ、君は」

雲雀はそう言つと翡翠を鋭く睨み付ける

「さあねえ、あえて言つなら、この広い並盛のせいじゃないか？」

おどけたように翡翠は返す

「ム力つく、咬み殺す」

（このセリフ直に聞いてみたかつたんだよねえ、できれば、他人に言っているのを

見たかつたが）

戦闘態勢をとる雲雀だが、どこか変だ

「ダメだよ恭君！！ 相手は女の子だよ！？」

雪奈は慌<sup>あわ</sup>ててとめようとする

「関係ないね」

キツパリ言い張る雲雀

「そうだな。相手になってやる」

精神年齢は上なのにね、翡翠ちゃん子供みたいだ

く翡翠ちゃんと原作キャラ達2く（後書き）

雲雀さんと翡翠の対決！！

結果は次話で！！

雲雀「雪奈、どうして持たせた携帯を使って僕に助けを呼ばなかったの？」

雪奈「ああ！！ その手があったね！！」

翡翠「つまり、忘れてたんだね。でも、そういう所も可愛いなあ」

ある、病院の一角での会話く

く翡翠ちゃんと原作キャラ達くく（前書き）

今日の午前中は母親が出かけていて、パソコンが自由に使える＆ネタがひらめいたので・・・

投稿します！

バトル描写初めてですので何卒お手柔らかに

「翡翠ちゃんと原作キャラ達」

「ケガしないようにね」

雪奈は闘<sup>たたか</sup>う気満々<sup>マンマン</sup>の2人に注意をする

「ケガなんてしないよ。瞬殺だから」

雲雀はニヤリと笑い

「ナッポーヘアよりムカつくね」

雲雀はニヤリと笑い言い、翡翠はギリツと奥歯を噛<sup>か</sup>み締め<sup>し</sup>ながら言  
った

たぶん、マンガならば火花が散っている場面である

ザッ

雲雀が先に動き、翡翠の方へ走る

翡翠は何もせず、雲雀が来るのを待っている

「!？ 何を考えてるんだい。君は」

雲雀が翡翠の顔にパンチを喰らわそうした瞬間に翡翠は地面を蹴り上げた

そして、雲雀の頭上を越え後ろに着地する

「君の一瞬は長いんだね」

クスリ、と笑って翡翠は雲雀の法を向き、言った

「ムカつく」

雲雀は再度翡翠の方へ突進する

その瞬間翡翠は何かを空想具現化能力で作り出し、瞬間移動で消えた

「!？」

「あれ？ 翡翠ちゃんが消えた!？」

ガツッ

翡翠は雲雀の後ろに瞬間移動し、足を払った

その瞬間、転んだ雲雀の首筋に冷たい物が当たる

「キャッ！ 翡翠ちゃん!？」

雲雀の首に当てられたのはトンファアの先端せんたんだった

「勝負アリ、だねえ。僕の勝ちだ」

翡翠はそう言い、雲雀に手を差し伸べる

「最後のあれは何なのさ」

翡翠の手を掴み、立ち上がりながら言う雲雀

「アレ……？ ああ、瞬間移動さ。ねえ恭弥、コレやるよ」

ポイツと投げられてソレは雲雀の手に掴まれた

「なにコレ」

雲雀はジロジロと手にあるトンファーを見つめる

「普通のトンファーだよ？ ……………いろいろと仕込みつきの、ね？」

仕込みつきを普通とは呼ばないのだが……

「いや……………だからなんで僕に？」

「友情の証<sup>あかし</sup>じゃダメかなあ？ 素手<sup>すて</sup>じゃ勝負にならないって意味も



あるけどね  
」

フッフ、と笑いながら翡翠は雲雀に言った

「ムカつくね……………後悔させてあげるよ、僕にコレを渡したことを」

そう言って、雲雀は翡翠を睨みながら不敵に笑う

「わあ、なんか2人の距離が一気に……………」

～～夜、沢田宅～～

「お母さんハンバーグおかわり！」

幼い綱吉が無邪気に母親にハンバーグのおかわりをねだる

「ごめんね、ツツ君。お父さんがおかわり全部食べちゃったのよ」

奈々は家光の方をチラリと見て、困ったように言う

（ ドンだけ食うんだよ家光叔父さん ）

翡翠はそう思い、呆れながらため息をつく

「私のあげるよ、綱吉くん」

（実は、雪奈から帰り際に貰ったホールケーキ食べちゃったら

おなか一杯になっちゃったんだよね）ハハハ、一石二鳥じゃん）

「ありがとう、ひすいちゃん」

ツナはニコツと微笑<sup>ほほえ</sup>み、翡翠のハンバーグを食べ始める

（ハハハ、笑った………笑ったぞ！ 人見<sup>ひとみ</sup>知りのツナが笑ったぞ！！

しかも僕の名前呼んだぞ！！）

その夜、仲良し度がアップした2人は一緒にお風呂に入って、一緒に寝ましたとさ

その様子を見て、「将来結婚するのでは？」とか「むしろ許婚にしよう」とか大人が話していたのは別のお話

くく夜、雲雀宅くくく

「そういえば、なんで翡翠は僕の名前を知っていたんだろう」

雲雀はふと、昼の少女のことを思い出す

「私が、恭君、って言ったからじゃないの？」

その問いに雪奈は冷や汗ひあせを掻くか

「彼女は、恭弥、って言ったよ」

鋭い問いに雪奈は答えられなかった

「あ……………そうだね、なんでだろうね？」

原作を知っているからだとは言えない雪奈であった

く翡翠ちゃんと原作キャラ達く（後書き）

翡翠と雪奈って能力あまり使わないから宝の持ち腐れですよ

く翡翠ちゃんと原作キャラ達4く（前書き）

く翡翠ちゃんと原作キャラ達2くの最後に雲雀がかまえた時に翡翠が感じた違和感とは、トンファーをかまえていなかった事なんですよ。気付きました？

「翡翠ちゃんと原作キャラ達4」

「沢田宅」

「ひすいちゃん、あーそーぼー」

沢田家にツナの大きな声が響く

昨日のハンバーグ効果が、綱吉とすっかり仲が良くなった翡翠はにこやかに答える

「いいよ！ そうだねえ、何して遊ぶ？」

「ううん……」

としばらく考え込むツナ

そして、考えついたのか、またパアッと笑って翡翠に言う

「公園で砂遊びしようよ！」

「公園に行つて来ていいですか、奈々さん？」

翡翠は一応、奈々に許可を取る

「いいけど、気を付けるのよ？」

奈々がそう言つと、ツナと翡翠は声を合わせて元気に返をした

「はい!!」「」

（翡翠視点）



「翡翠ちゃん、お団子できた!!」

そう言っつてツナがまんまるの泥団子を僕に見せてくる

今、昨日雲雀と戦った公園に来ている

綱吉が可愛いよ!!　なごむ!!

うん、ここは僕も初心に帰って精神年齢を5歳くらいまで下げるとするかな

「すごい、綱吉君！　ありがとう、おいしいね」

そう言いながら、僕はツナ特製どろ団子を食べたふりをする

「あつれえ〜？　翡翠ちゃん!?　……………と誰？」

おっと、雪奈登場!?

どんな偶然ですか!?

なんと、公園の入り口付近に雪奈がいたのだ

「う……うわああああん」

「「!?!」」

雪奈の顔を見たと同時に突然、ツナが泣き出したのだ

「え？ あれっ？ わ、わわ私、ななな何かした、かな？」

わあ………雪奈がすごい焦<sup>あせ</sup>ってるよ……

「ん………そういえば、綱吉君って人見知りだったけ……」

僕がそう言つと雪奈はさらに焦った顔をして、僕に怒<sup>いら</sup>鳴<sup>な</sup>ってきた

「なっ、何冷静に言ってるのよ!! 泣き止ませないと! 翡翠<sup>翡翠</sup>ちゃんどっにかしてよ」

そんな“ドラ もん、どうにかして”みたいなノリで言われてもなあ……

「綱吉君、大丈夫、大丈夫だよ。この女の子は雪奈っていう子で、優しい良い子

だから………ね？ 泣かないで、大丈夫だから」

僕はそう言いながらツナの背中をさする

「うつ……ひつく……いい子？」

よしっ！ 効いた！

「そう、いい子だよ。綱吉君も優しい、いい子。一緒だね」

一押しで言う

すると、念話で雪奈が話しかけてきた

『ちょっと、ちょっと……その子って、もしかして、あの沢田綱吉？』

『そうだよ。よく分かったねえ』

『よく分かったねえ……………って、さっき自分で、綱吉君、って呼んでたじゃない!』

うん、まあそうなんだけどね…

ツナは涙を拭くと雪奈を向き、笑いかける

「よろしく、ゆきなちゃん」

ニコツと笑ったツナなんだが、すっげえ可愛いですけど

……現在、雪奈はツナの天使スマイルで思考が停止しているようだ

まったく……………しょうがないなあ

「ゆきなさあん? 聞こえますか?」

僕はそう言い、雪奈の目の前で手を振る

「ハッ！……………よ、よろしくね。綱吉君」

そう言った雪奈は手を差し出し、ツナと握手をする

握手できたツナはさらに明るく微笑<sup>ほほえ</sup>む

『綱吉君……………食べちゃいたい……………』

わっ！いきなり念話で話しかけてくるなんて……………それよりも

『発言がアブナイよ！？雪奈！！』

~~~~~

それから、3人で1時間ぐらい遊んだ

「のど渴<sup>かわ</sup>いちゃった」

「それもそうだね。私も渴いちゃった」

ツナと雪奈がノドを抑えてそう言ったので、僕はポケットの中の財布を確認する

もちろん、自腹のおこづかいで空港で換金してもらったし、お父様には内緒だ<sup>ないしょ</sup>

「じゃあ、僕買つて来るから遊んでてよ」

「はい」

と、ツナが返事をする

「了解！ 気を付けてね」

と、雪奈も返事をしてきた

このとき、どうして1人で行ってしまったんだろう、と後悔する事になるのを僕はまだ知らない

く翡翠ちゃんと原作キャラ達4く（後書き）

今回は長くなりそうなので、一旦終了いたします！

それでは、また次回！！



く翡翠ちゃんと原作キャラ達く（前書き）

2日連続投稿！！読んでくださってありがとうございます！！

「翡翠ちゃんと原作キャラ達5」

「……………もしかして、道に……………迷った？」

現在、僕はツナと雪奈の飲み物を買いに1人で並盛をさ迷っていた  
… 迷ってんじゃない！by作者

「……………もしかしなくても、迷った？」

1人だとなんか、無償<sup>むしょう</sup>にむなしい！！

瞬間移動しようにも、現在地がわからないから移動できないという  
レベル不足……

道の左側に何人か人がいるな……………でも、取り込み中のようだ

僕の前方の左側には小さな草むらがあるのだが、数人の子供たちが  
何か話している

「こいつら裏切り者なんだぜ！」

「うつわ、近寄るなよ」

「裏切り者には、お仕置きが必要だよな」

なにやら、いじめっ子集団が、裏切り者、君をいじめてるらしい

3人いるので、上から、いじめっ子A、いじめっ子B、いじめっ子C、としよう！

それにしても……何この低レベルなイジメ

絶対、いじめっ子の大將って太ってて、油で照か<sup>て</sup>って不細工<sup>ふさいぐ</sup>なんだろうな……まあ、僕は関係ないよな

と思った瞬間、僕の耳に女の子の声が聞こえてきた

「止めなさいよアンタ達！ 私たちは裏切ってなんかいない！」

なぐるほどねえ……いじめっ子集団がいじめてたのは女の子だったのかあ

いじめっ子集団はあ……偶然なことにい……男の子だけの集団だ  
ったよねえ……

これは、ほっとけないねえ……

いじめっ子集団に、制裁を

ボキッ

突然、その音だけが響いた

まあ、僕が瞬間移動していじめっ子Bの後ろに行き、右腕めがけて  
こんしん かかとお  
渾身の踵落としをしたのだ

「うっわあああああー！ うっうっ、腕があああ」

いじめっ子Bうるさいなあ……

「へっ？」

「何、女の子いじめてんだよクス共が！」<sup>ども</sup>

「なっ なっ なな何なんだよテメエ」

いじめっ子Bは目から汚い汗を流しながら僕を見てくる

「気持ち悪いなあ……ていやあッ」

「ぎゃあああああああああああああああああああああ  
あ！……！」

翡翠ちゃんがいじめっ子Bに何をしたかは、ご想像にお任せします。  
べっ別にめんどくさかった訳じゃないんだからね！！by作者

「ねえ」

僕がそう、いじめっ子Cに話かけると、Cは僕に汚い唾をとばし  
ながら叫んできた<sup>さけ</sup>

「なんだよテメエ！！ 俺達に手え出すと酷い目に会っぜ！！」

続いていじめっ子Aも僕に何か叫んできた

「そそそそそそんなだぞ！！？ おおお俺達の親は、ヤクザ  
なんだからなッ！！

ジャパニーズマフィアだぞ！？ スゲーんだぞ！！？」

いじめっ子A噛みすぎだっばっうける！

ってかさぁ……………マフィアでもヤクザでもボンゴレよりは弱いでしょ

そして、僕は口を開いた

「……………で？」

すると、いじめっ子Aは驚いた顔をしてまた何か叫んできた

「で、って……………テメエ今の状況分かってんのか！？」

うわっ！仲間（？）が1人やられてるのに、なにあの態度……ム  
カつく

「それは、こっちのセリフだよ？ 大丈夫、目が覚めたら病院だから」

僕はいじめっ子達に微笑みかける

「「はあ？」」

ドカッッッ

ゴシシシッ

~~~~~

「ありがとうございます」

あの少女がお礼を言ってきた

いや、それほどでもない

「助けてくれて、ありがとう」

と、気付かなかったんだがもう1人いたらしい

うーん、こっちは女の子か男の子か区別がつかんなあ

「怪我<sup>ケガ</sup>はない？ それと貴方<sup>あなた</sup>たちの名前聞いても良いかしら？」

とりあえず、いじめっ子は放置ってことで！

「私は鈴木アーデルハイトと言います」

「……………古里炎真」

……………あつれえ？？  
どっかで聞いたこと見たことあるような  
……………ないような……………？



「あなた貴方は？」

まあ、いいや

僕はアーデルちゃんの問いに答える

「翡翠」 田川 翡翠だよ。よろしくね？」

とりあえず手を振る

その時、炎真（君？ ちゃん？）がアーデルちゃんの背中に隠れようとした

「男なんだからテレない！」

あ、男の子なんだ

「どうして助けてくれたんですか？」

そう尋ねられた僕は、少し考えて言った

「人として見捨てちゃいけないから……………じゃダメかなあ？」

本当は女の子がいたからと、道を聞きたかったからなんだが……………

炎真は、そう言った僕に少し驚いた様子で尋ねてきた

「でもっ…………アイツらの親がマフィアだって、怖くなかったの？  
止めようとしなかつ

たの？」

やっぱり、見たことあるような…………

ないような…………

「だから！ 相手がマフィアだろうが何だろうが、人として見捨て  
るのはダメでしょ」

僕がそう言つと、2人は啞然とする

「どうしたの？」

僕は不安になり、聞き返す

すると、アーデルちゃんは目を輝かせて言ってきた

「スゴイです！ 自分より大きな相手に立ち向かう、その勇氣、尊敬いたします！」

自分より大きな相手って………本当は僕のほうが上なんだけど………

「そ、そんなことないよ……それじゃあさアーデルちゃん、自動販売機に案内してくれ

ないかなあ？ 道に迷っちゃったんだよね。アハハハハ」

「もちろんです！」

………あ、結構、アーデルちゃん可愛いなあ

~~~~~

自動販売機に案内してもらい、ジュースを買った僕

「また、会えるかな？」

炎真君が言ってきた

「会えるよ……絶対！ 僕の勘は結構当たるんだよ？ それとアーデルちゃん、

これで次、いじめっ子たちが来たらボッコボコにしちやいなさい」

そう言って、僕がアーデルちゃんに渡したものは、鉄扇子だ

空想具現化能力で急いで作ったんだよ

なんかさあ、<sup>ふんいき</sup>雰囲気ふんいきがそんな感じなんだよ

「コレで、ですか？」

「うん、そう」

「……………」

うつ！　なんか炎真君が、僕には何かないのかな、的な目で見つめてくる！？

「あ、のさあ……………炎真君」

「なに？　翡翠ちゃん！」

コレ絶対期待してるよ……………なに渡わたそうか……………

あ！　そうだ、コレが良い！！

「炎真君にはコレ！」

僕は手に持ったモノを炎真君に差し出す

予想通り、炎真君は目を輝かせて喜んだ

「わあ！　綺麗きれい！　ありがとう！！　大切にするよ！！」

僕が炎真君に渡したモノは翡翠色の直径3センチくらいの宝石がついたペンダントだ

「ねえ、翡翠はこころへんに住んでるの？」

アーデルちゃんが聞いてきた

「外国に住んでるのよ。ここにはねえ、親戚しんせきに会いに来たんだあ。

アーデルちゃん達は？　どうしてここに？」

「保護者の人に着いて行って、はぐれてしまって……あの3人に会ったの……」

あ、でも帰り道は分かるから大丈夫よ」

そっか、安心安心……………それにしても、まだ炎真君喜んでるよ…

ふと、そこで僕は思い出す

アレ？ この2人、至門中の転校生の…………

ああ……………ダメだ、続き読まずに死んだから…………

「ねえ、翡翠……………思ったんだけど、1人で缶ジュース3つも飲むの？」

「ん？ 違うよ」コレは雪奈と綱吉君なので……………って、忘れてた！

戻らなきゃ！！」

ホントに忘れてた

「お別れ、なの？」

炎真君が悲しそうな目で聞いてきた

「うん、ゴメンね？ でも、10年後ぐらいには会えるから！  
じゃあな、2人とも！」

そう言って、僕は疾走し、2人から僕が見えなくなったら瞬間移動をした

~~~~~

「遅いぞ、翡翠ちゃん」

雪奈がほっぺを膨<sup>ふく</sup>らませて起こってきた

「悪い悪い、迷っちゃったんだよ」

あつぶん、瞬間移動って超便利じゃないか？

「そろそろ帰らないと……」ご飯に遅れちゃうよ？」



ツナが飲みながら言うてくる

「そうだな、帰るか……またな雪奈」

「またね。翡翠ちゃん、綱吉君」

~~~~~

「アーデル……」

「なんですか、炎真」

「翡翠ちゃん、また会えるといいね」

「そうですね、本当に……炎真、顔が赤いですが大丈夫ですか？」

「平気……たぶん」



く翡翠ちゃんと原作キャラ達5く（後書き）

はいっ！至門の2人との出会いですっっ

何かもう、第2章のネタが無くなってきましたっっ

く翡翠ちゃんと原作キャラ達5'5' (前書き)

この回は、ちょっとしたおやすみみたいなものです

く翡翠ちゃんと原作キャラ達5く

現在、翡翠は沢田家にお世話になっているのだが……

「暇だあああ！」

女の子らしからぬ声で叫ぶのは翡翠

「じゃあさ、じゃあさ、何かしようよ！」

そういつて笑いかけるツナに、翡翠はつられて笑ってしまう

「いいよ　でも、何して遊ぶ？」

（癒されるっ！　何もしなくても和むっ！　カワイイ！  
！）

「うんとね………何する？？」

（かわいい 可愛い かわいい カワイイ かわいい 可愛い か  
わいい カワイイ）

「ねえ、綱吉君」

ふと、思い出したように翡翠はツナに話しかける

「なあに、ひすいちゃん？」

対してツナは首を傾<sup>かし</sup>げて可愛らしいポーズをとる

「つなよし君のこと、ツナって呼んでいい？」

一瞬、キョトンとしたツナだがすぐに笑いかけ答えた

「いいよ！　じゃあ、僕もひすいちゃんのこと、翡翠ってよんでいい？」

「もちろん！！　というか、ぜひ」

距離が縮まった翡翠とツナだった……………

~~~~~

翌日

「翡翠！ あそぼ」

朝からツナは大きな声を出し、翡翠を遊びに誘う

そんなツナに翡翠は元気に答える

「もちろん！ ツナは何して遊びたい？」

「うんとね……………かくれんぼ！」

2人しかいないが、それでも楽しいものは楽しいらしい

「じゃあ、私が鬼になるからツナが隠れてね」

翡翠がそう言うと、ツナは満面の笑みで返事をした

「うん……!」

「あらあら、何時の間にこんなに仲良くなったのかしら」

そう言うのは奈々さん

2人の姿を隠れてみていた大人達の会話はますますヒートアップしていく

「こりゃあ、将来本当に結婚するかもしれないね」

と翡翠ちゃんのお父さん

「しかし、綱吉が翡翠ちゃんを射止められますかね?」

なんか悲しいことをいう家光さん



すると、奈々さんが画期的な考えをだした

「もういつその事、いいなすけ許婚にしちゃいませんか？」

「いい考えだが、綱吉君と翡翠に好きな人が出来るかもしれんし……」

頭を捻るひね翡翠父

そこまで娘が大事か

「それなら、〃歳までに結婚しなかったら、とか決めれば問題ありませんよ……！」

ごり押しのツナ母

というか、そこまで2人を近づけさせたいのか

「良いのか、家光」

押しの一手

「喜んで！」

いいのかよ！　なんで喜んでるんだよ

「それじゃあ、何歳にします？」

「20歳は、早いな……」　「23でどう？」　「いやいや30とか……」

こうして大人たちの朝は過ぎていく……

~~~~~

「それじゃあ、27歳までに2人にいい相手がいなかったら結婚する、で良いかしら？」

「これで、綱吉の将来も安心だな」

このことを翡翠が知ったのは次の日のことだった

く翡翠ちゃんと原作キャラ達5.5く（後書き）

今回は、割と短めです

## 別れの日（前書き）

日本とオサラバ！イタリアへ帰ります

## 別れの日

日本に来てから、あっという間に一週間がたち、翡翠たちはイタリ  
アに帰る日となった。

「世話になったな、家光」

お父様が家光オジサンに礼を言う

「9代目と翡翠ちゃんのためならば何だって致しますよ」

家光オジサンはそう言う

僕たちは現在、空港にて別れを惜しんでいた

「またね、ツナ……………私のこと忘れないでよね？」

大丈夫、原作開始までには会いに行くから！

そう、心の中で付けたし、ツナに向かって微笑<sup>ほほえ</sup>むが……………

「うわああああああああああああああああああ」

なんとツナが大声で泣き出したのだ……………何故！？<sup>なぜ</sup>

「ツツ君。翡翠ちゃん達にはまた会えるから、もう泣かないの」

僕たちとまだ別れたくないと駄々<sup>ただ</sup>をこねるツナをなだめる奈々さん

「ごめんね、翡翠ちゃん……………」

ツツ君ったら、翡翠ちゃんと明日別れるって昨日言ったら、ずっとこの様子で……………」

奈々さんにそう言われた僕は微笑み返して言った

「いえ、ツナが別れたくないって思ってくれてるってことですから。嬉しいです」

ツナったら、そういう所<sup>ところ</sup>も可愛いな

どうやら時間のようだ

「おや、もうこんな時間か……………翡翠、行かなきゃならない」

お父様が時計を見て、私の手を引く

「9代目、お大事に」

家光オジサンがそう、お父様に言いながら礼をする

やっぱ、9代目って言っても奈々さんはなんのことかサッパリわかってないようだ

「じゃあね、ツナ、奈々さん、家光おじちゃん」

僕は次にツナを見て口を開こうとするが、ツナが遮った

「翡翠ちゃん……………また会いに来てね」

まだ目に涙がたまっているが、ツナのその言葉はちゃんと僕の耳に届いた



うん…………カワイイ

「うん！ 絶対に会いに行くから！！ だから…………だから、元気でいてね」

無言のままツナは頷いた

僕は右手を差し出した

「約束しよ？ 僕は絶対にツナにまた会いに行くから、ツナはそれまで元気にいる……」

……………ね？ これで心配ないでしょ？」

ツナも右手を出した

「指切りげんまん 嘘ついたら針千本飲ーます 指切った」

その言葉に安心したのか、またツナの目から大粒の涙がこぼれ始める

「奈々さんもお元気で！」

僕は叫<sup>さけ</sup>び、手を振った

また、次に会う日まで

…サヨウナラ

~~~~~

同時刻・並盛

「どうしたの？ 雪奈」

雪奈は雲雀の問いに涙声で答える

「あのね……翡翠ちゃんが、イタリアに帰っちゃったんだって」

雪奈の手には、翡翠が書いた手紙があった

「手紙じゃなくて直接言えばいいのに……」

雲雀はハア、とため息をついて言った

「直接会って言うてしまおうと泣いてしまいそうだし泣かせてしま  
うかもしれないから、

手紙で言います、って書いてあるよ……うえええええん」

雪奈はついに泣き出してしまったようだ

「……………別に泣いても良いのにね」

「恭、君もッ……そう、思う……で、しょ？」

雲雀は無言で雪奈にハンカチを渡す

「涙を拭<sup>ふ</sup>きな。翡翠は、泣かせないために手紙で書いたのに、その手紙で

泣いちゃあ……意味が無いよ」

もう既に、雪奈は泣いているのである

「ありが、とう………恭君」

~~~~~

イタリア行き空港機内

「楽しかったね、翡翠」

そう言って笑いかけるお父様に僕も笑い返す

「はい、お父様」

本当に楽しかった

雪奈や、いろいろな原作キャラにも会えたしね

僕が死んでから、こんなことしてると、カグヤ輝夜が知ったらなんて言うかなあ……

## 別れの日（後書き）

さて、最後に出てきた輝夜くんはすぐ出てきます

番外編ゝ白ゝ（前書き）

イタリア生活番外編！

## 番外編く白く

これは、翡翠が骸達と出会う前のお話……

ここは、イタリアのボンゴレ9代目のプライベートの古城である

「翡翠様ー！ どこですかー？ どこにいますかー翡翠様ー！」

わたくし  
私の名はディリア

翡翠様専用の執事である

なんか最近出番が減っている（もともと出番なんて無い）が……翡翠様の一番お傍そばにいる身であるので、一番に危険を察知しなければいけない

というか、たぶん皆さんに忘れ去られていたような気が……

いやっ！



今はそのようなことを思っている場合ではない！

また翡翠様に逃げられてしまったのだ……早く捜<sup>さが</sup>さなければ！！

「翡翠様あああああ！！ 出てきてくだされええええええ」

（翡翠視点）

今現在、僕は執事のディリアとかくれんぼをしている………というのは嘘で、逃亡中（笑）なのだ！

「翡翠様あああああ！！ 出てきてくだされええええええ」

チツ、まだ長距離の瞬間移動はまだ出来ないんだが……やるしかない！！

シュンッ

「……………ここ何処どこだよおおおおおおおおお！！！！！！」

しまった……………動揺どうごうして、つい大きな声を出してしまった

僕が居るのは、どこかの裏路地のようだ

むやみに力を使うからこんなことに……………

いやいや、あの時<sup>とき</sup>力を使わなかったらどうなっていたことが……

すると、どこからか声が聞こえた

「おいっ！　今こっちから声が聞こえなかったか？」

「そうだな、俺たちのナワバリに入るドブネズミにやあ、どんなこととしてやるうか……」

それは、僕の後ろの方から聞こえたような気がする

……いや、間違い無く僕の後ろの方から声が聞こえた

やばい様<sup>よう</sup>な気がする……

あれっ？　ドブネズミって僕のことなのかな……

とりあえず走っておこう、と思ったのがいけなかった

カランッ

しまった！　なんでこんな所に空き缶なんか落ちてるんだよっ！！

蹴<sup>け</sup>っちゃったじゃないか！

すると、また野太い声が聞こえてくる

「おいマルコー！　やっぱり誰かいるぞ！..!」

「とっ捕まえる！　ジャン！..!」

やっぱり僕のことだったか.....

それにしても、マルコーにジャン！？ 弱そうな名前だなあ

ガシッ

「！？」

急に何かが僕の腕を掴んだ

え？ ウソ！ 捕まった！？

「マルコー、コイツ餓鬼だぜ」

「いいナリだなあ！ 衣服は売ってその餓鬼はどっかのマフィアに売っちまえ」

！？！？！？身の危険を感じる！！！！！！

そうだ！ 助けを呼ばないと！！！！

「たっ、助けてー！！ 誰かつ！ 誰かああ！！！」

僕が大声を出すと、僕の腕を掴んでいた男が手を振り上げた

咄嗟とつぱのことに僕は目を瞑つぶってしまった

「喋しゃべるなッ！ この餓鬼がが！！」

ドンッ！！！！

その音がすると同時に、腕が自由になる

途端<sup>とたん</sup>に、誰<sup>たれ</sup>かに手<sup>て</sup>を掴<sup>つか</sup>まれた

え？ 何？ なにが起<sup>お</sup>こつたの？

僕の目の前にはジャンでもマルコーでもない第3の人物がいた……  
…少年だけでも

「早く走<sup>はし</sup>つて!!」

その少年はそう、僕に叫<sup>さけ</sup>んできた

く??視点く

僕はいつものように家に帰ろうとしていた

そのとき、声が聞こえたんだ

「たっ、助けてー！ 誰かつ！ 誰かああ」

女の子の声が聞こえた

「また奴らか……」

僕はひびき呟く

あの路地裏から聞こえた

あの路地裏はジャンとマルコーという歯止めの効かない奴らが溜まり場としていたところだった



「とりあえず、見ておくか」

いつもなら無視するはずなのに、今日にかぎって、妙な胸騒むなさわぎがしたんだ

まあ、サラッと見て帰るだけなら……大丈夫、だよな？

そう思って、僕は路地裏を見た

そこには、ジャンに腕を掴まれている見たことのない少女がいた

その少女は今まで見たどんな女の子よりも可愛かわいい子だった

その少女を見てから、僕は「助けなければ」という衝動に駆かられた

いつもはこんなこと無いのに……

そして、気が付いたらその少女からジャンに体当たりをかまし、少女の手をとっていた

「早く走って!!」

そう言っ僕は少女の手をひっぱり、走っていた

く翡翠視点くく

あれから随分の距離を走った

けれど、<sup>あた</sup>辺りはまだ路地裏だ

「どうやらうまく撒いたみたいだ……………」

ハアハアと息を切らし、汗を流しながら助けてくれた少年が僕に話しかけてきた……………

ていうかこの人の髪、白いな

とりあえず、お礼、言わなきゃ

「助けてくれてありがとう。私は翡翠って言うの。貴方あなたの名前は？」

「僕は、白蘭かな……………ヨロシク」

僕はその言葉を聞いたとき、耳を疑った

というか、信じられなかった

「ビヤ……ビヤクラン?」

マジ!? 確かに髪は白いけど……マジで!?

なに!?! この、仕組しくまれた感がありまくりな感じは……

「漢字だと白い蘭って書くんだ」

珍しいでしょ?

そう言って、白蘭は微笑ほほえんできた……まだ息切れてるけど……

漢字までピツタシかあ……原作に出てくる白蘭で確定だな……

絶対に仕組まれてるよ、コレ

などと思いながら、僕は数秒考え込み、1度言ってみたかったことを口にした

「じゃあ、言いにくいからシロ兄ちゃんね」

今まで、ザンザスのことはお兄様と呼んでいたし、前世でも1人っ子だったので他人を兄ちゃんと呼んだ経験が僕には無かったのだ

「悪くないね　えーと……翡翠ちゃん」

「どうしちえ……どうして助けてくれたの？」

「噛んだ！！　恥ずっ！　だって子供なんだから呂律がうまく廻らないことだってあるさっ！！」

「おうい！　なに笑っとんのじゃー！　あらあ！」

僕が噛んだことに少し笑っている白蘭は、ほどなくして僕の問いに答えた

「あゝ………なんでだろうね？」

なんでだろうねってコイツ頭おかしいんじゃないのか？

見ず知らずの赤の他人を身を挺<sup>てい</sup>して助けるだなんて……………

それとも、本当は良い奴、とか？

「意味分かんない……………自分でやっというて、意味分かんないよ……………」

とにかく！ 助けてくれてありがとう」

僕がお礼を言うと白欄は「あっ！」と言って手を叩く

「そうだ！ 君に運命を感じたから、とかじゃ駄目かな？」

天然？ キザ野郎？ それともただのアホ？

「……………シロちゃんは運命を信じてるの？」

それにしても運命とかコイツ……………変態だったのか？

「<sup>なが</sup>永い<sup>なが</sup>永い人生の中で、1度くらい神秘的な出来事に会つと僕は思

ってるよ？

というか、シロ兄ちゃんじゃなくて、シロちゃんになってるよね」

そこツツコムな

「その人生の1度きりをこの年としで使っちゃうんだ？ ……オモシロイネ」

ハハハ、と僕はかわいた笑い声のどを喉しほから搾り出す

「オモシロイ、かあ………そういえば、一人で帰れる？ ………て  
いうか君何処どこに

住んでるの？」

「秘密 一人で帰れるから大丈夫よ」

僕には秘儀！ 瞬間移動というものが使えるのさ！

どうして腕を掴まれた時に使わなかったかは聞かないでくれ

「また会えると良いね、翡翠ちゃん」

そう言って、シロちゃんは今日何回目かの微笑みを僕に見せる

「また、ね」

~~~~~

「まったく、何処<sup>どこ</sup>行つてたんですか!？ 翡翠様!!」

デイリアは急に帰ってきた翡翠に怒鳴る

「秘密」



飄々<sup>ひょうつ</sup>としている翡翠<sup>ひすい</sup>はその後、ディリアに3時間説教させられたとか……………

番外編〰白〰（後書き）

番外編！！まあ、早く骸達と絡ませたかったから飛ばしましたけどねっ

1月18日修正

く新しい遊び相手く（前書き）

12月25日修正

く新しい遊び相手く

スウウウウウウウウウ

僕は思いつきり息を吸い込む

「我が家<sup>わ</sup>だ<sup>ゃ</sup>あああああああああああ  
」

そう！　ここは、イタリアの古城

ボンゴレ9代目と親しい間柄の者しか知らない、プライベートの城  
なのだ！！

僕は階段を駆け上がり、お兄様の部屋の扉を開ける

ドンッ

「お兄様！ 翡翠、ただ今帰りました！」

「見りゃわかる」

ああ、冷静なお兄様なのね

どうやら、今日は仕事が無かったようだ

そう思っているとお兄様が声をかけてきた

「翡翠、少し時間いいか？」

「なんですか？」

むう??

なんだか、お兄様の様子が少し変なような……

「……俺が、その……あの老いぼれの、本当の子供じゃなかったとしたら……」

……どうする?。」

なっ!?

なぜお兄様がそのことを知っているんだ!?

もしや、旅行の最中に日記を見たのか……………!?

いや、その筈はずは無い

確か、日記を見た後あとにスクアールとパーティーで出会っていたから

……………

スクアールは数ヶ月前にヴァリアーに入ったから、日記を見たのは数ヶ月前って事……………かな

僕あいだが考えている間も、お兄様は僕の返事を待っていた

「なに言ってるの、お兄様。私にはお父様と血が繋がっていいようが、  
いまいが

関係ありませんよ」

お兄様は一瞬、驚いたような顔をした

ちよつとヒデエよ？

「何故、<sup>なぜ</sup>そう思つんだ？」

お兄様は次にそんなことを聞いてきた

ふう、とため息をついて僕は答える

「お兄様は野暮<sup>やぼ</sup>なことを聞きますねえ。だって、お兄様はお兄様ですもの。」

血が繋がっていなくなつて、それに変わりはありませんわ」

お兄様はうつむくが、すぐに顔を上げ、言った

「意味が分からんな、お前は」

その顔は、何かスッキリとした様な顔だった

「でもね、お兄様？ お父様のこと老いばれなんて言っちゃいけませんよ？

年齢がどれだけ離れていようと、父親に変わりありませんからね」

人差し指を立て、そうお兄様に言つとお兄様はそっぽを向いてしまった

「…………別に、いいだろ」

「よくありません」

「もついい。出てけ」

ずいびんとヒドイお兄様なこと

自分で引き止めておいて、用が済んだら“出てけ”だなんて

まあ、スッキリしたようだし……………いっか



「……………それじゃあ、私はもう行きますね」

そう言っ僕はお兄様の部屋を出る

「もうすぐ、ゆりかご、か……………」

僕のそのつぶやきは誰にも聞かれること無く闇へと消え去る

~~~~~

「お帰りなさいませ、翡翠様」

「お前なんか帰ってこなくて良かったびょん」

「……………めんどい」

ここは、僕の自室なので専門の執事であるデイリア以外居ないはずなのだが、そこには今、2人の少年の姿がある

てか、誰だかみんな分かるだろう

「ただいまデイリア、犬、千種。犬、そんなこと言つと骸に言いつけるぞ？」

千種、死ねば楽になるぞ……………っと、冗談だじょうだんつて！ 死のうとすんなよ」

「なんれ、そこに骸さんが出てくるんだびょん！」

そう言つて黙る犬

この言葉は犬にはすごく効くな……………

「千種……………人生きつと、いい事あるから！ 死なないで!!」

千種は……あつかいづらいな

冗談を真に受けるし……

まあ、‘無口’が僕の苦手なタイプだからなんだろうけど

見かねたようにディリアが僕に話しかけた

「翡翠様、前に話していた遊び相手ですが、今は訓練場にいるそうです」

遊び相手？ たしかに、そんな事言ってたような……

てか、会っの今日なんだ

「訓練場？」

「はい。彼には翡翠様を守る術と、仕事として暗殺<sup>すべ</sup>をしてもらうのでそれを覚えて

もらつ<sup>ため</sup>為です」

瞬間、僕の思考がフリーズする

「……………はい？」

イマコイツナンテイッタ？

「チッ……………もう一度言いましょうか？」

今舌打ち聞こえたぞコイツ

「なんで仕事すんの？ 仕事なんてしたら遊べないじゃないか！  
しかも暗殺

だつて！？」

「無料<sup>タダ</sup>でここに住まわせられないんです。翡翠様の勉強時間とか睡眠時間とかに仕事

をしてもらうので大丈夫です。心配いりませんから」

心配も何もあるか！

ソイツ可哀想じゃないか！

僕の寝ているときは仕事（暗殺）で勉強時間も仕事で遊ぶときだけ子供の時間じゃないか！！

僕はディリアと睨み合う

- 
- 
- 
- 
- 
- 

.....

[illegible]

.....

.....

.....

負けた

「……………分かったよお。もうそれでいいよお。……………それで、ソイツの名前は?」

ディリアは勝ち誇<sup>ほこ</sup>ったような顔をして僕に言うてくる

「イタリアでは珍しい名前ですよ。翡翠様と同じ、日本風<sup>ジャッポーネ</sup>の名前でですね、

それが決める要因にもなっ たんです」

日本風ねえ……………たしかに<sup>イタリア</sup>ここじゃ珍しいな

「それで……………名前は?」

ディリアは数秒考え込み、答える

「たしか……………  
鳳雷山<sup>ほうらいざん</sup> 輝夜<sup>かくや</sup>ですよ」



く新しい遊び相手く（後書き）

またまた、最後に出た輝夜君！！

某キャラクターと読みが似てることなんて気にしないでください！

気にしたら作者が死にます

次回はその輝夜君視点です



## ある少年の人生（前書き）

今回からは、輝夜視点になります。

## ある少年の人生

「いい子にしてるのよ。お母さん達すぐに帰って来るからね」

「輝夜は男の子だから、一人で留守番くらい出来るもんな？」

「うん！ 行つてらっしゃい」

それが、俺と両親との最後の会話だった

父さんと母さんは交通事故に遭い、父さんは即死、母さんは病院に搬送されてから8時間後ぐらいに死んでしまった

俺は、親戚中をタイ回しにされた結果、遠縁で、しかも会った事もない家族に引き取られた

「あなたが輝夜君？　これから、君のお世話をする事になった、翠」といいます。

翠さんって呼んでないいわよ?。」

「私は宝だ<sup>たから</sup>」

そう、遠縁の夫婦の人達は言った

でも、俺は知っていた

宝さんが俺を鬱陶<sup>うつとう</sup>しく思っていることを

毎日、俺が眠った後に翠さんに「あいつはいつまで居るんだ」と言っていた事を聞いたことがある

俺が宝さんのそばに寄ると、嫌そうな顔をして離れていく

まあ、そんなもんかと今までの経験で思って、数日が経過した

そこに日突然、翠さんが俺に笑顔で言ってきた

「輝夜君、今日ね、私達の娘が退院するの。だから病院に迎えに行  
って来るから」

「はい、翠さん」

娘がいたなんて、そのときまで知らなかった

けど、やけに子供用の道具とか絵本とかあったから納得した

翠さんと宝さんの間には、俺と年が近い娘が一人居た

俺が来たときは、盲腸で入院していたらしい

この年で盲腸って……………

どっちにしろ、俺は鬱陶しがられるだけだ

子供一人増えたって変わらない

そう思っていたけれど、実際は違った

初めて会った翠さんたちの娘は、俺に会った途端<sup>とたん</sup>、笑顔で寄って来た

「はじめまして！ あなたがかぐやちゃん？ 私はね、ひすいって言うの」

翡翠と言った子は俺を女の子と勘違いしているらしく、遊び相手ができたと言んでいた

その日から、逆に俺が彼女を鬱陶<sup>うつたう</sup>しがるようになった

「ねえ、輝夜ちゃんのかぐや姫の生まれ変わりなの？」

‘かぐや姫’の絵本を手に、翡翠は何度も聞いてきた

何度も違つと言ったが聞かなかった

竹から出てきてねえし

そもそも女じゃねえし

「翡翠、輝夜とあまり話しては駄目だ」

そう何度も宝さんに言われているはずなのに、翡翠は相変わらず話しかけてきた

翡翠と俺がじょじょに会話し合う頃だった

翠さんが死んだのは

曲がり角を曲がりきれなかったトラックに、信号待ちをしていた翠さんは轢かれて、荷物が翠さんの体に落ち、打ち所が悪く、即死だったらしい

「ねえお父さん。お母さんはなんで眠ったままなの？　なんで、起きないの？」

ねえ、お父さん、なんでえ？」

翡翠は、まだ‘死’というものを理解していなかったらしい

そんな翡翠を宝さんは無言で抱きしめた

それから俺は翡翠が見ていないところで、度々暴力をふるわれた

「お前がつ、お前が翠を殺したんだ！ お前が来てからずっと不幸が続いているんだ！

悪魔の子！ 疫病神！」

ひどい、罵声をあびせられた

たしかに、俺の両親も交通事故に遭ったが、翠さんのことまで俺のせいになるだなんて

完全に、ただの憂さ晴らしだった

そして俺は思ってしまった

お前も死んでしまえば良いのに

お前が俺に暴力をふるっていることを翡翠が知ったら、きっと彼女もお前を拒絶するだろう

そう思った2時間後、翠さんが死んだ場所と全く同じ場所で、宝さんはスピード違反の軽自動車に轢かれて死んだ

宝さんのお通夜に、翡翠にこう言われた

「最後まで助けてあげられなくてごめんね。お母さんもお父さんも「かぐや姫」が好き

でね、輝夜君がかぐや姫の生まれ変わりだったら、仲良くしてくれると思ったんだ

けどね……………」



俺は驚いた

けれど、俺が言葉を発する前に、翡翠がまた喋りだす

「でもさあ、輝夜君はお父さんのこと嫌いなんですよ？　だって、お母さんが死んで、

お父さんが輝夜君に暴力ふるってたときに、お前も死んでしまえば良いのに」って

まなこじ  
眼でお父さんを見てたから……………

そりゃあ、そうだよな。自分に暴力ふるってる奴に“幸せになれ”とは思わないよね」

コイツは最初から俺が男だと分かってたのか？

翠さんが死んで、宝さんに抱きしめられたときの様子は嘘だったのか？

俺が暴力を振るわれていたことを知っていたのか？

知っていたのなら何故、俺を助けなかった？

「知ってたよ。でもね、僕が出来ることなんてないでしょ？ 僕が  
“止めて”と言って

お父さんは止めてくれたかな？ それとも私も一緒に殴られろっ  
て？ ……僕には、

僕にはそんな勇氣無いんだ…………

「ごめんね、僕の身勝手な理由で輝夜君を傷つけてきたよね」

そう言って、一瞬悲しそうな瞳をした翡翠

俺は不思議と、彼女を責める気持ちにはなれなかった

「なんで、俺の、思っていること……………」

「僕ね、そういうのを察知<sup>さち</sup>するのに長<sup>た</sup>けてるんだよね。でもね、お母さんが

死んだときは本当に思ったことを言っただ。そして、お父さんに抱きしめられたとき

分かったんだ。

これが、‘死’ってやつなんだなあ、って」

俺は分かってしまった

確かに彼女は他人の気持ち<sup>たし</sup>を察知するのに長けている

だからこそ、彼女はあんなに大人びていて、深い悲しみを持っている

普通の子供<sup>あわ</sup>ならば、まだ死というものを理解しておらず、いつか会えるという淡い望み<sup>あわ</sup>を持てる

「でも、もう抱きしめてくれたお父さんは居ない。私は、君と同じ‘独り’になった」

どんなに、大人びていても彼女はまだ子供なんだ

そして、俺も子供だ

独りは、さびしい

独りは、つらい

独りは、こわい

俺が、彼女に出来るのは1つしかなかった

それを、俺は迷うことなく実行した

「!？ いきなりなにを……………」

俺がした行動に、翡翠は驚く

「俺が宝さんの代わりに抱きしめてやる。お前には俺が居る。だから、‘独り’じゃない。」

今も、これから……」

そう言った俺は、さらに強く翡翠を抱きしめる

いつの間にか、翡翠も俺の背中に手を回していた

「ありがとう、輝夜。約束だからね」

その声が涙声なのは気にしないでおう

その日から、俺達はずっと一緒に、独り、じゃなかった

あの日、翡翠が死んでしまうまで

## ある少年の人生（後書き）

輝夜の過去と翡翠ちゃんの過去が明らかに！！

自分が言うのもなんですが、輝夜が最後に言ってることなんかカッ  
コ良くないですか？

（小話）

輝夜「なあ、お前の一人称って、私、と、僕、どっちなんだよ」

翡翠「信頼してる奴の前では、僕、だ。だがな、両親や友達、ご近  
所さんの前では、私、だぞ」

輝夜「へえ、そうなんだ。じゃあ、宝さんのお通夜ときは俺を信  
頼してたのか？」

翡翠「……………不覚っっ」

輝夜「ひでえ、最初のころと態度違うし」

翡翠「お前にはどんな態度とってたって大丈夫だろ」

輝夜「なんなのさ！ お前ってなんなのさ！」

翡翠「うっせえよ」

ゴツッ

く完く

輝夜「俺って、交通事故に縁があるよな……………」

12月20日修正



ある少年の人生2（前書き）

輝夜II ある少年

## ある少年の人生2

俺達はおもつともつと遠い血も繋がってるか分からないほどの親戚に預けられることになった

今日、その人とはじめて会った

「はじめまして！ 私は薫<sup>かおる</sup>よ。薫お姉さんって呼んでね」

彼女は黒く、艶やかなその髪を眉毛の上で切り、腰までありそうな長い髪の毛をポニーテールにしていた

胸は……………無いように見えるが少しある

スラッとしたモデル体型で、足も長い

俺は薫さんが離れているあいだに、翡翠にそう言った



いつのまにか俺の背後に黒い笑みを浮かべた薫さんが立っていた……

あつ、嫌な予感がする！

身の危険を感じるよ！？      これは速<sup>すみ</sup>やかに逃げなければ！

と、考えている間に拘束

その後、俺は地獄を見た

というか体感させられた（体罰・虐待じゃないよ！）

うん、まあぶつちやけ般若<sup>はんにゃ</sup>の形相<sup>ぎょうしやう</sup>した薫さんに拘束された後、放<sup>はな</sup>さ

れて追いかけてトラウマになったぐらいだから！

~~~~~

俺は未だ痛む体を無理矢理走らせ、思考を廻らせ<sup>めく</sup>る

翡翠は薫さんと出会ってはいけなかったと思う

チラリ、と後ろを見る

「輝夜あゝ僕のサンドバックになれえ……てか走んな！ 止まれ！  
！　　<sup>コト</sup>　　ウターンしろ！

僕はお前ほど外で遊んでないから体力がないんだ！！」

ヤバイ、翡翠が逆切れしだした

なぜ翡翠がこんな事を言っ<sup>て</sup>俺を追いかけているのかというと

……

「数分前」

「翡翠、変態に襲われそうになったらすぐに、教えた護身術でフルボッコにしてやれ。」

「まずは、実践あるのみだ。ためしに輝夜をサンドバックにしてみな」

「ハイ！ 薫先生！！」

後ろで2人がこんなことを言っている

聞き流そう

「薫さんは根にもつタイプかあ」。以後気をつけよう」

どうせ冗談だろ

とか、のんきに思っていた俺はその後翡翠によって回し蹴り（もう護身術じゃない）を喰らわされたのであった

~~~~~

俺達が薫さんの家にお世話になってからもう2年が経っている

重そうな大量の荷物を持ち、薫さんは玄関に立っていた

「じゃあ行ってくるね。ちゃんと栄養のあるものを食べるんだよ。家事も洗濯もキッチンと

やるんだよ。それから……………」

「もういいよ、薫さん行っただけじゃいい」「

「……………行ってきます」「

薫さんって意外と心配性？

「私がちゃんと輝夜をしごいて全部やらせますんで、ご心配なく行  
つててください」

翡翠はさらりと薫さんに言う

「そう……………ってダメじゃん！何で俺がしごかれんの！？」

俺がみごとにツッコミ役を果たすと薫さんが笑顔になる

「アハハハハ、じゃあ……………行つて来るね2人とも」

ガチャリ

薫さんの仕事は出張がよくあるそうで、こんかいはフランスだった  
(どんな仕事だよ)

薫さんが、フランス語を覚えるために3ヶ月かった



そのおかげで、俺も翡翠もフランス語は完璧にマスターした

俺達と比べると薰さん物覚え悪いなあ

それとも、子供の俺達の方が吸収が早いのかな？

「今日の昼ご飯と晩ご飯は僕が作るから、洗濯と風呂掃除と掃除機と雑巾がけとか……」

その他いろいろヨロシク」

薰さんが出て行ったドアを見つめながら、翡翠が言ってきた

「はい……………あれっ？俺、損じゃないか？」

翡翠      飯×3

俺      洗濯・風呂掃除・掃除機がけ・雑巾がけe t c…

~~~~~

「っ はい！ 卵焼き完成。後は……………ご飯が炊き上がるのを待って……………」

台所からこんな声が聞こえた

薫さんが出て行ったのが朝の7時ごろ（早っ！

昼になっても俺の雑巾がけは終わらなかった

5時間もやってるんだぞ！？

いくら子供で行動が遅いからって5時間ありゃ終わるだろ！

てか、1人暮らしでこの家の広さって……

薫さんって何者？

そう考えながら手を休めていると翡翠がリビングから叫んできた

「輝夜あまだ終わらんのかあ？　終わつたらんと昼飯食わせんぞい」

言動がお爺ちゃんっぽいな、とは口が裂けても言えない

「終わったあ~~~~~飯い~~~~~」

俺は素早く雑巾等を片付け、リビングへと向かう

結局、翡翠も雑巾がけを手伝ってくれた

リビングには質素な料理が並べられていた

俺はリビングのテーブル上の箸<sup>はし</sup>に手をつける

その瞬間、翡翠が俺の右手の甲を叩きつけ、睨<sup>にら</sup>み付ける

「お行儀悪いっス。ご飯は手を洗っていただきますと言ってから食べるっス」

な、何すんだよ！      右手、痛え……

俺は口を尖らせて席に着く

「早く食べるっス。冷めちゃうっス」

平然と言う翡翠

「うん、そうだね…………そのっスっス止めてくんない？ ムカつくんですけど……………」

俺は翡翠に抗議の視線を向け、手に箸を持つ

「って！ コラ輝夜！！ 手を洗ってないじゃないか！ そんな悪い子には……………」

お仕置きだっちゃ  
」

え？      ちよっ！      何その構え！

ゴシッ      ゴンッ

~~~~~

翡翠の手料理はなかなかの腕前であった……………スゴクオイシカッタデス

上目線でゴメンナサイ

謝るから

そんな怖い目で見ないで翡翠様

「翡翠って料理できたのか？」

何気なく、口にする

簡単な料理だったけど、美味しかった

けれど、翡翠は料理なんてした事があっただろうか？

翡翠には料理をしてくれる両親がいる

翡翠は「ハア？」という顔をしながら答える



輝夜オタクモード発動！

「いきなり奇声を！？ キモっっ」

ヤッチマッタヤッチマッタ

デモ、タシカニ萌えタンドスモン

コレガ‘ツンデレ’ナンドスヨネグへへへへへへへへへへ

「止めなさい！ 気持ち悪いよ輝夜！」

「すみません」

「……………気持ち悪っ！ ちょ、近寄んな！」



ゴッッ

あいたっ！

俺は、今日一日でどれくらい打撲が増えただろう………

ある少年の人生2（後書き）

翡翠&薫      最強・最凶・最恐トリプルSタッグ

マジで強いです

12月20日修正

### ある少年の人生3（前書き）

誰か、感想という名の水を与えてください。（でなければ枯れます）

11月29日修正

アケザキさん、感想ありがとうございました

### ある少年の人生3

薫さんが出張に行ってから4日たった

後、6日ぐらいかかるらしい

現在俺たちはリビングにて今日の割り当てを決めていた

「じゃあ、また僕が料理作るから」

翡翠がそう俺に言う

あれっ？

ここ3日間連続で翡翠がご飯作ってるよ？

「俺が作るよ。翡翠に作らせっぱなしってのも悪いしな……」

そうなのだ

初日は翡翠が作り、2日目の朝ごはんを俺が作ったのだが、それ以降、作らせてもらっていないのである

俺の発言に翡翠は眉間みけんに皺しわをよせて、いかにも嫌そうな顔をした

「…ドアホ。自覚していないのか？ この脳味噌無しが」

翡翠は俺を睨にらみつけてくる

え？　なんで？　俺なんかした？

「ひでえ……………自覚って、何を？」

とぼけたように俺は言う

だって本当に心当たりが無いんだもん

そして、翡翠があきれた様に言ってきた

「テメエの作る飯がマズイって言ってんだよ！　ミジンコ」

み、ミジンコ！？ 俺が！？

えっ？ マズイの？ 俺の作る飯が？

衝撃で言葉が発せられないため、表情で伝える

「先日の料理では洗剤の味がした。油と間違えて入れたと推理。脳味噌の無さを改めて実感」

改めてって………もともと脳味噌無いって思ってたのかよ

「最後の言葉は余計よけいだろ！ 料理はたしかに間違えて入れたけどさあ、そんなに

マズかったのか？」

俺はそんなにマズイとは思わなかったんだが……

数秒黙り込む翡翠

そして重々しく口を開く

「もともと洗剤は味を楽しむためには作られていませんし、注意書きに食べたら危険と

書かれていた物を食べさせるなんて、言語道断なのですよ。コレ、殺人容疑で訴え

られるかしら………?」

う、訴えるですって!?

「訴えないで!? お願いだから!」

泣き付く俺に微笑む翡翠

「じゃあ、僕の言うとおりにする?」

しますします、なんでもします

ニヤリ、と翡翠が笑う

俺の脳内に一瞬、危険警告が鳴ったが遅かった

「じゃあ、僕のお人形さんになって？」

~~~~~

今、俺はリビングの床にうずくまっている

「お婿に行けない！ 恥ずかしい意味での門外不出だ」

泣き言のようにそう言つと、翡翠が返事を返す

「大丈夫、僕が貰ってあげるから」

お願いだから幸せそうな顔にならないで！



なんで俺見てそんな顔するの!?

「ひ、翡翠？　これに、なんの意味が？」

おどおどしく俺が尋ねると、翡翠は淡々と答える

「80パーセントは嫌がらせで、残りの19パーセントは僕の趣味」

残りの1パーセントは？

そう思った俺の気持ちを知ってか知らぬか、翡翠はトンデモナイ発言をした

「残りの1パーセントは……………その、僕が見てみたかったから」

翡翠の瞳には、輝夜のドレス姿（化粧つき）の可愛い姿が写っていたとか

〽数日後〽

「ただいまあ」

家の玄関に疲れきった薫さんの声がこだました

「薫お姉ちゃん、コレ見て！」

薫さんが帰ってきてすぐ、翡翠はインスタントカメラで撮った俺の



それからご近所さんで、「あの家の人、頭イカれてるんですって！」と噂されたのは言うまでもない

~~~~~

時は流れ、俺15歳、翡翠は16歳

「薫さんお世話になりました」

「翡翠、何かあったらすぐに帰って来るんだよ？」

翡翠は有名な名門高校に受かり、寮生活となったため家を出ることになった

もちろん俺は頭が悪いため、そこらへんの高校だが……

平日は滅多に会えないが、翡翠は日曜日には必ず家に帰ってきた

それから何ヶ月も経って、翡翠のいない毎日にも慣れてきた頃だったかな

その日は日曜日だった

親友の課題がまだだから、という理由で翡翠はいつもより早い時間で寮に帰るらしい

「じゃあ、僕もう行くから」

「気を付けろよ？ ホラ、最近隕石がよく落ちるじゃんか」

俺がそう言つと、翡翠はフツと笑つて俺の肩を叩いた

「輝夜は僕が隕石に当たるとでも思つてる?」

翡翠の笑みを見ると、とても安心できる

「そんなんじゃないよ……またな」

彼女はいつもと変わらず去つていった

それが彼女との最後の会話だった

俺は、神を憎んだ



ある少年の人生3（後書き）

最後、詰め込みすぎましたね・・・

私は枯れそうです・・・

12月20日またまた修正



少年の不幸（前書き）

連続投稿！

## 少年の不幸

翡翠が死んだ

話を聞いたときは信じられなかった

何故死んだんだ？ と何度叫んだことか

何故、俺と薫さんを置いていった？

翡翠の遺体は無かった

遺体が残らないほど隕石の熱で燃やされたのか、押しつぶされたのか

隕石が落ちた場所はクレーターが出来ていた

隕石が直撃したと！？　信じられるか！

だって、あいつはあんなにも元気だったのに

一緒に犠牲になった子も居たらしい

俺は、その子だけが死んでいれば、と最低な考えを持ったときもあった

翡翠が死んでから隕石は落ちていない

まるで、あいつを殺すことが目的だったように

世間はたった2人の犠牲だ、と喜んでいた

たった2人だと？　死人が出て何が嬉しいとほざく！！

俺は世間を憎んだ

俺は世界を憎んだ

俺は、神を憎んだ

でも、いつもと変わりなく過ごした

友人に、‘お前悲しくないのかよ’と言われた事もあった

そりゃあ悲しいよ？  
翡翠のことを一番わかっているのは俺だと思っ  
思っから

翡翠のことなら、翡翠に分らない事でさえ分かるから

それほど一緒にの時間を刻んでいた

‘ずっと一緒にいる’ という約束を守れなかったことも悲しい

でも、泣き喚<sup>わめ</sup>いたり、引きこもったりなんてしない

だって、引きこもったりしたら翡翠にボコボコにされちゃうからな

薫さんは3日間ぐらい泣いて、目が充血していた

でも、薫さんも‘笑っていないと翡翠に怒られるよな’ と笑顔なのに悲しそうな目で言う

時間が経<sup>た</sup>って、悲しみがだんだん薄れてきても、憎しみが薄れること

は無かった

俺の部屋にはベット、制服、翡翠と撮った写真といったシンプルなものしかない

そして翡翠とその友達がハマッたっていう「家庭教師ヒットマンリボーン」のマンガ

1階の和室にある翡翠の仏壇に手を合わせる

「行つてきます」

決して返事が返されることの無い遺影に語りかける

チラリと時計を見ると、もう家を出る時間を過ぎている

「やべっ……遅刻するよ」

家を出て、しばらく走ると交差点に突き当たる

信号待ちをしているのだが……

高校へは走れば25分程度で着くが、信号の待ち時間が長いのが欠点だ

ふと、目をやった先には赤信号なのに渡っている女の子

女の子めがけて走行しているトラック

「やばくねえか……」

ちよっ、あの女の子何してんの!?

トラックは止まるうなんてしない

一か八か俺は、走る

頼むから間に合えっつ

ドンッ！！！

女の子を突き飛ばす

だが……

キキイイイイイイイイイイイイイイイ



かん高いブレーキ音が耳に焼きつく

ああ……翡翠、君にもう一度会いたい

## 少年の不幸（後書き）

（裏設定）

輝夜くんのお父さん

鳳雷山 ほうらいざん

帝人 みかど

輝夜くんのお母さん

鳳雷山 ほうらいざん

魅月 みつぎ

帝人・・かぐや姫が不死の薬を渡した天皇 帝より みかど

（終了）

…鬱つすね　輝夜君が翡翠ちゃんを好きだっことは分かりま  
すけど、恋愛、友愛、家族愛……さて、どれでしょうか？

輝夜君はまだ雪奈ちゃんのこと知らないんですよ

12月20日修正

7月24日 再度修正

## 少年の死の理由（前書き）

3話連続とか…ドンだけ暇人なんだよ俺

## 少年の死の理由

気が付いたら、白い空間に浮いていた

「あれっ？ 俺、トラックにはねられたはずじゃ……」

「そうですよ。そして死にました」

突然、後ろから声がした

俺が声のした方向を向くと、黒いローブをかぶった子供がいた

声から推測するに、性別は男

身長は中学生ぐらいの、見た目年齢12、3歳ぐらいの少年がいた

「貴方<sup>あなた</sup>、面白いですね。普通の人ならば、すぐに死んだことを否定するの……」

いや、面白いってあーた

奇跡でも起こればトラックにはねられても生きてますから

コレが夢だつていう可能性もあるからね

それに、俺は混乱しすぎると逆に冷静になって口数が少なくなるタイプなんですよ

「お前は誰なんだ？」

一応、聞いてみる

「僕は死神。死を管轄する神、ですよ。鳳雷山輝夜」

「！？　なんで俺の名前……」

……変な詐欺師か？

催眠術でもかけられてるとかな、ハハハ

それともやつぱ夢か

「変な詐欺師ってヒドイ人ですね」

「なんで、俺の思ってることを…？」

いや、別に驚くことじゃないんだが言ってみる

「僕も一応は神ですから、読心術ぐらい使えますよ」

「なんか、翡翠と話してる気分だ。で、アンタ本当に死神？」

本当は俺、生きてて夢とかもありえるからな」

「信じていませんね？　そうですね、貴方が死んだときの映像を見せてあげましょう」

そう言うつと、アイツは右手を上にする

すると、俺の目の前にあの交差点が映った

え？      これどーゆー仕組み？

映像の交差点のところに、やがて1人の高校生がやってくる

……俺だ

まさか

そう思ったとき、映像の中で女の子が歩き始めた

迫り来るトラック

そこからは、もう早かった

高校生（俺）が走り出し、女の子を突き飛ばし、トラックにはねられ、グチヨグチヨになる

……正直グロい

そのとき、ほかに人も人がいたが俺が盾になっただけで死んではいなかった

「ハイ、これで信じましたか？」

信じます信じます

てか死神とか、本当に存在したのかよ

すると、死神はさして困っていないような声色で俺に話しかけてきた

「それで実はですねえ、僕、困ったことに間違って貴方を殺してしまったたんですよね

……ハア？      ってことは、俺は間違って殺されたのか？

どんなマンガだよ

「ということで、しょうがいんめつ証拠隠滅のため貴方を違う世界に転生させるつもりなんだ」

………どんなテンプレだよ！



「そう。そのテンプレマンガが天界で流行って、わざと殺された人間もいるんだよね」

ホント、上の神って下種げすだよな

「だから嫌いなんだよ！ 神ってのは何処どこまでクズなんだよ！！」

俺は死神に叫ぶ

「すごい憎しみだね。誰か大切な人が死んだの？」

死神が聞いてきた…… 案外、コイツ良い奴かも

「ああ…… 幼馴染だ」

「そっかあ、それは…… つらい、よね。」

僕もね、似たようなモノでたくさん大切な人達が上の神様に殺されたんだ。

そして、僕もその神に殺されたんだ。そして、僕は神を憎んでい

たんだ。

人間に転生した僕は、また別の神にわざと殺されてね、そこからいろいろあつて……

今、死神をやってる」

うわっ、なんか俺よりヒドそう……

「なんで死神やってるんだ？ 神を憎んでたんだろ？」

思わず、そう聞いてしまう

「人間だった僕を殺した神と取引してね。

『死神の仕事をするなら、僕と大切な人達を殺した憎い神に復讐してもいい』

っていう条件でね。それに、殺された大切なあの方にも会わせてくれるって」

そうか、会えるのか……アンタは大切な人に

「でも大丈夫、悲しまないで。君の存在はもともと無かったことに

なるから」

………？

「理解していないようだね。」

君の幼馴染から、世界の全員からも君に関する記憶はなくなる。

…これは、君に拒否権は無いから」

はあ！？      なんだそれ！！

「そんなんで納得できるわけねえだろうが！」

「だろうね。だから、君の願いは出来るだけ叶えてあげるつもりだよ。」

クビになりたくないからね、この仕事。給料高いし」

おい、さっきまでの話は嘘かよ！

「再度言うが、君に拒否権は無い。納得しないならこのまんま転生させるからね」

なんちゅ・ことすんだこの死神め

「……分かったよ。拒否権は無えんだろ？」

よし、王道まっしぐらといこうか！

とりあえずチートライフを歩んで……ハーレム作って……

「うん、まあね。じゃあ、転生する世界は……」と

ぬぽぽっ

「うわっ！ なにすんだよ」

死神がいきなり俺の腹に手を突っ込んできやがった

「君の記憶を見たんだ。君の興味がある世界にしようと思ってね」

「……………ハア」

なんか精神的に疲れたよ

もうダメだ……ダメだよパトラ シュ

「転生先は『家庭教師ヒットマンリボーン』だね」

うお！ マジで！？

「マンガもありなの！？ てか、一般人の俺じゃ生き残れねえよ」

すると、死神から“チッ”という舌打ちが聞こえた……オイ！

「能力もつけてやるよって話、もう忘れたの？ 鳥の脳ミソ並みなんだね。」

全属性の炎を使えるようにしてあげるし、強力な治癒力もつけてあげる。

これで大抵の傷は一瞬で治るし……身体能力も無限大しちゃうお。

おまけにどんな武器でも使えるよう……っと」

あれ、なんか口調変わってないか？

しかもゲームのキャラクターみたいな扱いになってるし！

「でもまあ、そんなぐらいいして貰わないとなあ………」

チートライフが、ハーレムライフが消えていく

死神が咳いた

「……………あ」

「どうしたんだよ」

なんか怖い……

「結構前からの先客がいるな。」

その先客が綱吉側の守護者だから、お前はヴァリアー側の守護者だな」

なあんだ、転生できないとかそういうのじゃないんだ

良かった

いや、良くない！

「先客って誰だよ、しょうがねえなあ。ツナ側（特に黒曜チーム）のほうが好きなんだが」

もうこの際、転生できるんだったらなんだって良いよ

「その先客の影響で結構原作が変わっちゃったりしてるねえ。

原作にいなかった人物とかもかかわってきてるけど、その点は新規応変にヨロシク」

「マジで！？」

面倒くさいな……………誰だよ先客ってよ……………

予想がしずらいじゃないか

「じゃあ送るぞ」

「おう！」

死神が右手を前に突き出すと、俺の足元が凹<sup>へこ</sup>んできた

今更<sup>いまなひ</sup>、大丈夫かな？      この死神信用ならないんだよな

だんだん、体が吸い込まれていく

そして、俺の意識は無くなった



少年の死の理由（後書き）

12月20日修正

7月24日 再度修正

## 少年のセカンドライフ（前書き）

翡翠ちゃん久々登場！

## 少年のセカンドライフ

死神と別れた後、俺は頭が強く締め付けられるような痛みを感じた

「おぎゃああああああ」

！？ 俺は今痛いつて言おうとしたはずなのに

俺の意思とは関係なく声が出続ける

「生まれたのか！？」

遠くでそう、男の人が言っていた

もしかしてこの人が俺の新しい父親かな……？

少し時間がたって、ちゃんと呼吸ができるようになった

「生まれて来てくれてありがとう」

今世の母と思しき女性に抱かれつつ感じる、懐かしくも寂しくもあるこのぬくもり

すると、父親らしき男性がおもむろに言った

「お前の名前は輝夜だ」

……え？  
何故に前世と同じ名前！？  
なぜ

「よろしくね輝夜」

母親も俺に笑いかける

いや、だからなんで前世と同じ名前！？

~~~~~

そして、俺はイタリアに生まれた生粋のイタリア人として至極普通に育った

日本風の名前の由来は、父親に日本人の親友がいたらしく、その親友が名づけてくれたとか…

あまりにもリボーンの世界と思えず、母にボンゴレファミリーについて聞いてみたことがあった

「ボンゴレファミリーはイタリアを守ってくれているのよ」

母はそう答えてくれた

~~~~~

俺が5歳になったとき、両親が流行り病で死んでしまい、孤児院に預けられた

その孤児院に俺の人生のターニングポイントがあった

孤児院に入って2カ月後、高級そうな服を着た男がやってきた

どうやら、どこかの金持ちの執事らしく、お嬢様とやらの遊び相手として子供を引き取りに来たらしい

そのお金持ちがこの孤児院に多額の寄付金をしているため、孤児院は逆らえないんだとか…

そして、一番遅く孤児院に来たという理由で俺が引き取られた

執事のはじめの感想は、“どこか俺を忌避<sup>きひ</sup>している目だった”

男は俺をチラリと横目で見ると目を逸<sup>そ</sup>らし、なにかの書類を見ながらこう言った

「私の名は、ディリアといいます。お嬢様の専門の執事です」

専門？      どのお嬢様だよ……………あつ、金持ちのお嬢様が

「アナタにはお嬢様との遊びが終わった後に、空いた時間で仕事を  
してもらいます」

??      仕事ってなんなんだ？

ていうか、こんな子供に仕事させるのかよ

「仕事って…?」

俺がそう聞くと、執事は間髪<sup>かんぱつ</sup>入れずこう答えた

「暗殺です」

イマナンテイッタコイツ

あまりに突然だったため、俺が黙っていると執事は明らかに嫌そう  
な顔をした

「理解できませんか？　これだから庶民の子供は……」

うわっ、今ムカつくと言われた。庶民の子供だから何なんだよ！！

「<sup>タダ</sup>無料で屋敷にアナタを置けませんからね。暗殺で金を稼いでもらいます」

コイツむかつく

コイツとは絶対に波長が合わない

こんな奴原作にはいなかった

俺はむかついたので少し嫌味を含んで反論した

「庶民の俺が暗殺なんて出来る訳ないだろ」

執事はまた間髪入れず答えた

「でしょっね」



ハア！？      なんなんだよコイツ！！！！      なあにが“ でしょうね” だよ！！！！！！

男は眉間に皺を寄せた俺の表情を見て深いため息をついた

「ですので、最初の2、3年は訓練です」

コイツと一つ屋根の下なんて、絶対に嫌、だあゝ！！！！

~~~~~

「うゝお、おい、その調子じゃ暗殺者になれねえぞおお」

俺はおもり錘でできたリストバンドをつけ、せま迫り来るライオン猛獣から必死で逃げている

「わかってるって！」

ああ、大声出しちゃったからライオンが興奮して…

てか、イキナリこれはないでしょう！？

俺、素人<sup>トシロ</sup>じゃなくて翡翠にあれこれやられて危機管理能力が高かったから良かったものの

「少し休憩しろ」

数十分し、やっとのことで大声男…もといスクアーロが休憩を許可してくれた

なぜ、こうなったかというと……

お金持ちのお嬢様はボンゴレファミリーの超重要な関係者の娘さんらしく、ヴァリアーに入隊させられました　って感じた

……このままだと、出世コースでヴァリアー側の守護者かあ

でも、なんでスクアーロが俺みたいな子供と……？

他のヴァリアー幹部（知らない1人を除く）全員揃ってるし？

「なんで、アンタみたいな幹部が俺みたいな子供を……」

口に出して言うと、スクアーロは意味不明なことを言ってきた

「なんだあ、お前知らねえのか。お前が遊び相手になる奴はなあ、あの悪ガキだぞお」

…あの悪ガキってなんだ！？      お嬢様じゃないのか！？

すると、幹部の中で唯一、俺の知らない野郎が出てきてスクアーロに注意した

「スクアーロ、悪ガキなんて言ったら、また酷い目に会うと思うんだけど……」

この人、誰だ？      しかも、またって何だよ！またって！

「オツタビオは黙ってるお！ お前だってアイツの酷さは知ってるだろおが！！」

だから、どんなお嬢様だよ！？

ていうか、あの男オツタビオっていうんだあ

「誰が酷いって？ スクアーロくん？ 覚悟は出来てるんだろっ  
なあ！」

声のした方を振り向くと、綺麗な緑色の瞳をした美少女がいた

アレッ？ この女の子、どこかで見たことあるような？

聞いたことあるような女の子の声が耳にこだまする

## 少年のセカンドライフ（後書き）

ヴァリアー来たああああ！！！！

ディリアは目上の者には礼儀正しいですけど、どうでもいい人にはいい加減です

転生者が前世と同じ名前なのは、皆さんに分かりやすくするためと、作者が考えるのを放棄したからです　オイッ！

翡翠は最後しか登場してませんね。  
翡翠とヴァリアーの関係はいつ書こうか…

12月20日修正

8月2日再度修正

少年と翠の天使の出会い（前書き）

遅くなってすみませんデシタ！

サブタイトルの翠はみどりと読みます

翠の天使<sup>みどり</sup>＝翡翠ちゃん  
というわけで題名にも繋がりますね

## 少年と翠の天使の出会い

「ちょっと時をさかのぼって翡翠ちゃん視点」

「たしか、鳳雷山ほうらいざん 輝夜かへやですよ」

……ハ？

ディリアが口にした言葉に、僕は耳を疑った

輝夜？      本当に、輝夜のこと？      聞き間違いとかじゃないよね？

いやいやいや、前世のそのまんまの名前と違ってありませんよね

まあ、僕も下の名前は前世と同じなんですけどね！

雪奈も雲雀が“雪奈”って呼んでたから、下の名前は一緒なんだろう……

「もう一度言ってくれ」

僕は淡い期待を胸に、その言葉を言った

「鳳雷山輝」もう一度」……耳、大丈夫ですか？」

いやいや、何？ 耳大丈夫ですか、って……

再度、輝夜のフルネームがディリアの口から紡がれた

でも、同姓同名だって可能性も無くは無いのだが……

「別に、耳はいたって通常だが？」

なんだその納得してない顔は！

「ですが、翡翠様が私が言った事を聞き取れないなんて、耳か頭に異常があるとしたか



「思えませんし……」

くっ！     ディリア、お前って奴はそこまで僕を信賴して……

と、喜ぶ流れなのか？     ここは

「嬉しいのか、嬉しくないのか、ややこしい言い方をするよな。お前って」

そう、僕が言つと、ディリアは芝居<sup>しほ</sup>じみた動作で大きく礼をした

「お褒<sup>ほ</sup>めいただき、光栄です」

「いやいやいや、１ミリたりとも褒<sup>ほ</sup>めてないし！

それで、子供は本当に鳳雷山輝夜という名前なんだな？」

「はい。ちゃんと聞き取れていたんですね……………」  
「……チッ」

チッ？     コイツ今舌打ちしなかったか？     けっこう最後の方に

「まあ、舌打ちは聞かなかった事にして、早速その子供の所に行きたいんだが……」

その子供のいる訓練場って何処どこの訓練場？」

訓練というからには、それなりの設備があるところなんだろうけど

「暗殺ですから、ヴァリアーの訓練場ですよ。というか今日、正式にヴァリアー入りしま

したよ」

ヴァリアーって言うとお兄様の所か……

それならついでにアレも持ってくか

「じゃあ、ちょっと待っていてくれ」

「もしかして、日課のアレですか？」

ディリアが目を細めて言ってきた

「うん、そだよ」

おいディリア！      なんだその呆れた<sup>あき</sup>ような、  
可哀想<sup>かわいそう</sup>なものを見る  
ような目は――！

~~~~~

「……よし完成！」

僕はそうして、出来上がったソレを犬と千種用に数個置いて行く

「まったく……包丁でケガでもしたらどうするんですか？

というか、何処<sup>どこ</sup>で覚えたんですか？      その無駄<sup>ムダ</sup>知<sup>チ</sup>識<sup>シキ</sup>」

包丁でケガとか過保護かつつの！      というか無駄とはなんだ、無駄とは！

「この知識だって無駄じゃないぞ。お兄様達だって、おいしい、って言ってくれるし？」

僕だっていつか嫁にいくんだし？」

許婚だって決まったし！　まあ、ツナのことなんだが

「メイドにやらせれば良いじゃないですか」

そう言いながら、デイリアは僕と車に乗り込む

なんでもメイドにやらせる気が、お前は！

「手作りのほうが愛情がこもってて良いじゃないか」

「ですが……」

他にもデイリアがグチグチと言ってきたが、僕は適当に聞き流した

え、デイリアが可哀想？　　カワイソウ　んなわけないだろう

~~~~~

「はあ、やっと着いたか……」

この、一見古そうに見える古城が実はヴァリアーの本拠地だなんて大抵は思わない

すると、不意にディリアが何か言ってきた

「ここに、翡翠様は毎日1人で来ているんですね。どうやってですか？」

うわっ、痛いところ突いてくるよなあコイツ………本当は知っているくせに

僕は自信を持ってこう答えた

「乙女の秘密さ」

「一人称が僕の奴に乙女の秘密だなんていう資格ねえよ」

.....何か聞こえたって？      H A H A H A、空耳さ

あ、そうだ！      デイリアに言い忘れてたことがあった

「デイリア、遊び相手に僕が名乗るまで名前で呼ぶなよ」

「かしこまりました」

ふうん、なぜとは聞かないんだな

もし輝夜が僕の知っている人間と同一人物だとしたら、僕が翡翠だということがバレると、からかいがいがなくなるからな

すると、遠くから僕の大っ嫌いな若白髪の聞きなれた声が聞こえた

「うゝお、おい、その調子じゃ暗殺者になれねえぞおお」

「わかってるって!」

「ありゃ? この声は……」

「この声はスクアーロと鳳雷山輝夜ですね」

「声が、似てる………輝夜に」

「少し休憩しろ」

また、あの若白髪の声が聞こえた

休憩しているな

っていうか、声がでかくてまだ遠いのにこっちまで聞こえるよ

「……アン……た……ぶが……いな……を……」

やっぱり、普段は普通の大きさだけど、戦っている途中は声が大  
きいところは輝夜に似てるな

まあ、戦ってるっていても僕が一方的に攻撃してただけだけど

「なんだあ、お前知らねえのか。お前が遊び相手になる奴はなあ、  
あの悪ガキだぞあ」

プチッ

何かの音が聞こえた

何？ 何？ あの悪ガキって僕のこと？

HAHAHA、笑えないね

あの若白髪ぶっ殺す

「落ち着いて下さい！ ひ……お嬢様」



アブナイアブナイ

ディリアに止められてなかったら出て行ってたな……………

「スクアール、悪ガキなんて言ったら、また酷い目に会うと思うんだけど……………」

よく言ったオツタビオ！ お前の事は嫌いだがね

だんだん、近付いているので、普通の音量でも聞こえるんだよね（  
^。^ /

「オツタビオは黙ってるお！ お前だってアイツの酷さは知ってるだろおが！！」

ブチッ

さっきのが血管が一部切れた音だとすると、この音は血管が破裂した音だよな

さあ、大馬鹿者に制裁を加えに行こう！  
いざ、瞬間移動テレポート

「あつ、お嬢様ッ！」

おやおや、イキナリ瞬間移動で出てきたから、みいんなが驚いて目を見開いている

「誰が酷いつて？ スクアーロくん？ 覚悟は出来てるんだろうなあ！」

そのとき僕は、かなりの腹黒笑顔をしていたと思う

一瞬、金髪で藍色の瞳をした美少年と目が合った

どこことなく、輝夜に似ているなと思ったのは、内緒である

## 少年と翠の天使の出会い（後書き）

やっと出て来ましたよねー翡翠ちゃん

実は、コレの題名を何にするか迷ったんですよ……

雪奈は何色にしようか……

こんな話が見たい等、雪奈の色のリクエストがあれば下さい！

12月20日修正

8月5日再度修正

**翡翠ちゃんと殺人クッキー（前書き）**

本当にヴァリアーとの絡みいつ書こうか・・・

## 翡翠ちゃんと殺人クッキー

（輝夜視点）

その女の子はいきなり現れて、こう言った

「誰が酷いつて？ スクアーロくん？ 覚悟は出来てるんだろっ  
なあ！」

結構酷い言い方で、お金持ち、しかもボンゴレの要人の娘とは思え  
なかった

一瞬、その女の子と目が合ったような気がした

その子の目は、綺麗な緑色で正直、見惚<sup>みと</sup>れてしまった

「うゝお、おい、その変な技いつか絶対見切ってやるからなあ！！」

え？ 変な技って何だよ

見れなかったじゃないか！

女の子はスクアーロのことを呆れた<sup>あき</sup>ような目で見ていた

「今、そんなこと言ってる場合かよ……………とりゃ」

いきなり女の子が変な声<sup>こゝろ</sup>を出しながら、スクアーロの右足を払おうとするが……

「そんな簡単にやられるかあああああ」

避けた……………それよりも俺の鼓膜が破れるって！！

「当たり前だろうがっ」

女の子は、最後の言葉を言い終わる前にスクアーロの背後に一瞬で移動して……………って、浮いてる！？

「ガハッ」

スクアーロはそう言って前のめりになった

女の子がスクアーロ頭に踵落<sup>かかとお</sup>としをしたのだ

「あのスクアーロをほとんど一瞬で倒すなんて……………」

信じられない

俺でさえ、傷一つ付けられなかったのに（別に、俺がすごいって訳じゃないけど）

俺の呟<sup>つぶや</sup>きを聞いていたのか、ルッスーリアが俺に自慢するようにつてきた

「当たり前でしょ！ あの踵落<sup>かかとお</sup>としては私が教えたんだからっ！」

……………ハ？

あの子、お嬢様じゃないの？

お嬢様でルッスーリアの弟子なわけ！？

意味わかんねえよ……

「貴方が、私の新しい遊び相手かしら？」

いつの間にか、女の子が俺の目の前に移動していて、話しかけてきた

「あ、ああ。俺の名前はほう「鳳雷山輝夜でしょ？　ディリアに聞いたわ」……はあ」

ディリアって、あのム力つく執事だったよな……

あつ、アイツこの女の子の専門の執事だったっけ……

性格、どんなのだろう

悪かったら終わりだな、俺

でも、あの執事が世話してるんだから、俺のことも庶民の子って差別するのかな



「お嬢様！ お怪我は在りませんか！？ まったく、置いていかに  
いでくださいよお」

おっ、執事がやってきたな

走ってきてるのに、息切れてねえし……………チッ！

「なんで僕がお前を待たなくちゃならないんだよ！ てか、息切れ  
てねえし。」

普通は切れる流れだろ、ここは！

シンクロ！？ 俺もそう思ったぞ

「まあまあ、そう言わずに……………おや？」

うっ、目が合った

「いたんですか？ てっきり、もうくたばっているかと思いました  
よ」

うわっ！ ムツカつくー！ なにコイツ、地獄に落ちればいいのに

見たいな感じで睨<sup>にら</sup>んでいたら、女の子が話しかけてきた

「ねえ！ 2人で話さない？ 仲良くなるうよ」

女の子の言葉に執事はひどく焦っていた

あ、なんかこの執事が焦つてるとおもしれえや！

「なつ何を仰<sup>おほ</sup>っているんですか！ そんなこと出来るわけないでしょう！」

そんなに、必死に止めようとしなくても良いじゃないか

まあ、何処<sup>どこ</sup>の馬の骨ともわからん奴<sup>やつ</sup>には任せ<sup>まか</sup>られねえっか……

「出来ないのなら、それを出来るようにするのが、お前の仕事じゃないのか？」

女の子は執事を見ながら、目を細める

一方、執事は何も言い返せない様子だ

「少々お待ちください」

執事はそう言ってどこかに行ってしまった

すげえ、この女の子を味方に付ければ最強じゃないか？

そう考えていると、スクアーロにオッサビオと呼ばれた男が女の子におどおど話しかけた

「ちょ、ちょっと待ってください。その右手に持ってるバスケットの中に入ってるのって、

やっぱり……」

女の子はそんなオッサビオの様子にニヤリと口を歪ゆがませて言った

「今日はクッキーだぞ」

クッキー？　なんで？

俺が理解できずにいると、まだ幼いベルがししつと笑いながら女の子にこう聞いていた

「それじゃー、ハズレとアタリは何個ずつ？」

.....ハズレ？

女の子は平然とベルの質問に答えた

「27個中7個さ.....ハズレじゃなくてアタリなんだけどなあ」

「アタリ、ハズレって何のことだ？」

俺が痺れを切らし、その女の子に聞くと、予想外の答えが返ってきた

「普通のクッキーが20個、唐辛子<sup>とうがらし</sup>入りのクッキーが7個って意味」

めっさハズレじゃん！！

「はい、1人3個ずつ取って行ってね……後の3個はお兄様のところにと」

最後の方、なにか呟いて居なくなった女の子ともていない執事を除く全員がクッキーを三個ずつ貰った

（翡翠視点）

「ハローお兄様！ 今日のおやつはクッキーです！ アタリは唐辛子入りだよ」

僕がそう言ってお兄様にクッキーを差し出すと、お兄様にこんなことを言われた

「唐辛子入りなんぞいらねえ」

まあ、そう言う事は予測できましたから

「そう言うと思ってえ、お兄様に渡したのは普通のクッキーですよ」

そう言うつと、安心したのか、兄ちゃんは黙々と食べ始める

次の瞬間、誰かさんの悲鳴が聞こえてきた

「<sup>から</sup>辛ああああああああああああああああい」

「誰か、当たったみたいね」

僕はそう言うつと窓を開け、外を見してみる

そこには、走り回る人影が……

ああ、上から見下ろすつて気持ちいいなあ？

く輝夜視点くく

女の子はどこか行ってしまった

誰も、クッキーを食べようとしない

「まあ、食べよつと」

そう言つて、俺は一口食べた

その味は、翡翠がいつの日か作ったクッキーにすごく似ていた

「あつ、普通に美味い」

俺がそう言つと、スクアーロが羨ましげに言つてきた

「どうやらデメエは無事だつたみたいだな」

もう一枚と思い、調子に乗ったのがいけなかった

サクリ

クッキーを食べた瞬間に口の中を強く刺激される

「辛ああああああああああああああああい」

俺の口内はいま焼け爛れているような感覚だ

そのまま、辛さを紛らわすために俺は辺りを走り回った



俺の他にスクア一口が3個全部唐辛子入りで、残り3個の内2個が  
レヴィ・ア・タン、1個がオツタビオに入っていた

スクア一口<sup>かわいそう</sup>可哀想に……

**翡翠ちゃんと殺人クッキー（後書き）**

今回もタイトル悩みました

誤字・脱字・感想がありましたら、是非ください

8月6日修正

翡翠ちゃんの殺人クッキー（前書き）

遅くなってすみませんデシタ！！！！

翡翠ちゃんの殺人クッキー

く翡翠視点くく

僕は、お兄様にクッキーを渡した後スクアー口達のところに戻ったんだが……

「辛いつつ！！！！ 水水水水水水水水う！！！」

うわっ、輝夜の口から今にも火が出そうだよ

顔真っ赤だな

「うっお おい！ 早く水持って来い！！！！」

アハハハハ、スクアー口も耳まで真っ赤だ

うん、見てて面白いや

「□があああ！！！！ □が焼けるようだああああ！！！！」

レヴィは……………気持ち悪いなあ

「この辛さ、やみつきになりますね」

1人、涼しい顔をしてクツキーを食べている男がいる

……………オッタビオだ

成功かと思っていたんだが、約1名（オッタビオ）苦しんでない奴がいた……

明日はもっと辛くしてやろう！

とか、僕が誓っている間にディリアがやって来た

「お嬢様、準備が出来ました……………って、ヒドイ状況ですね」

ちょっと引いているっぽい目で見てくるけど、無視だ

く輝夜視点く

死ぬかと思った！ 何なんだよ、あの辛さ！

水をコップ20杯飲んでやっと、収まってきたぞっつ

「こんなものを毎日食べてんのかよ……………大変だな……………」

俺は水を飲みながら呟いた

すると、金髪王子が俺に自慢するように説明してきた

「しししつ、でもなあ俺とマーモンとルッスーリアは1度も当たったことないんだぜ。」

まあ、俺は王子だから当たり前だけど」

……………陰謀を感じる

あのお嬢様、わざとやってるんじゃないのか？

そう思ってたなら、あのお嬢様とム力つく執事ディリアが何か話して、俺のほうに歩いてきた

「準備ができたらしいわ。着いて来て」

そう言って、足早に歩き始めた

歩く速度チヨー早えよ

建物の中に入って、しばらく歩き、1つの部屋の前で止まった

「ここよ。入りましょうか」

お嬢様はそう言ってドアを開け、部屋の中に入る



俺も、お嬢様の後に着いて行く

中は、案外広く20平方メートルぐらいありそうだ

その中であつたソファにお嬢様が座つた

「ねえ、輝夜は前世って信じてるかしら？」

唐突にお嬢様が話しかけてきた

いつの間にか呼び捨ててるし……

……前世って言われても、俺、前世の記憶バリバリ有るし……

「信じるぞ。なんでそんな事を聞いて来るんだ？」

俺がそう答えると、お嬢様は目を閉じた

「友達にね、前世の記憶がある人がいるの」

……………マジッすか！？ 誰だよ、それ！！

「その友達の話に『鳳雷山輝夜』って人がよく出てきてね、貴方あなたの名前を聞いたときに

もしかしたらって思ったのよ」

俺は思わず目を見開く

前世の記憶があるだけでなく、俺と同じ世界から来た転生者であり、俺のことを知っている人なのだから

「その友達の名前はね、田川翡翠って言うの」

翡翠……………だと！？ やっぱり、あの死に方は何かあると思ってたんだよね！！ 落ち着け俺！ 翡翠にもう一度会えるかもしれないからって、興奮するな！ っていうか今翡翠何処どこにいの？ 早く会いたいよー！！ いやいや、だから落ち着けて俺！ そう急ぐなよ……………翡翠は逃げたりなんかしないって……………いや、生きてるか

ら逃げるのか？　そもそも、翡翠が俺に会いたいつて思ってたのか？　って、あの死神は俺の存在は最初から無くなるって言ってたけどなんで覚えてんの！？　えっ、もしかして夢！？　夢才チなの！？　それだったら、俺が轢かれて死んだことが夢だったらなあ……俺の夢長えな、早く目え覚めろよ！

「君、大丈夫？　言っておくけど、コレは現実だよ」

……ハッ

現実なのか……じゃあ、翡翠にもう1度会えるのか！？

「その友達どこにいるんだ？」

つい大声を出してしまつて、お嬢様が驚いている

「翡翠ちゃんが言つてた、輝夜君、は君で間違い無いのね？」

俺はその答えにすぐ頷く

「エッ!？」

俺が頷いた瞬間、お嬢様が泣き出したのだ

全ッ然意味わかんないんですけど

どうすればいいんですかー

「な……んで……夜が……こ……いに……いのよ」

何か喋ってるけど、泣いてるので、よく聞き取れない

「えっと、そのお……よく、聞き取れません」

俺がそう言った瞬間、お嬢様の動きは一瞬止まり、涙を拭き始めた

「なんでこの世界にお前がいんのかって言うてんだよ!!!」

突然叫んだかと思ったら、乱暴な口調まるで翡翠みたいな言い方でお嬢様が喋り始める

「この世界にいるってことはお前死んだってことなんだろうーがつー！」

そして、俺が言葉を発する前にまた喋り始める

「薫さんを1人にしてんじゃねーよ！ 馬鹿輝夜！」

そして、俺はようやく気付いた

ああ、彼女が翡翠なのだ

「もしかして……………翡翠なのか？ いや、翡翠なんだよな」

アレッ？ 違った？

俺が喋ると、時間が止まったように動かない彼女

「今まで気付いてなかったのか？」

.....アッ.....

いろいろと思い当たる節々ふしぶし

そういえば、あのクッキーは翡翠が前に作ったクッキーの味と一緒に  
だったなあ

そういえば、歩き方の癖とか、スクアール相手に格闘してたときの  
いろいろな癖が翡翠と全部一緒に気が付く

チラリ、と翡翠を見ると.....スゲエ、怒ってた

「輝夜あああああああああああああ！！！！」

俺は、迷うことなくその言葉を発した

「ゴメンナサイiiiiiiiiiiiiiiiiiiii」

うん、相手を怒らせたときにはこの言葉が一番だよ

ギュッ

ゴッッ

説明しよう！ ギュッは翡翠が輝夜に抱きついた音（えっ、音出んの！？）

ゴッッは輝夜の頭が床に当たった音

俺はそのまま翡翠からバックドロップを喰らいながら気を失った

「今度こそ、約束守ってよね」

翡翠がなんか言ったと思うが言葉は聞き取れなかった

俺は多分、嬉し過ぎて涙を流していたと思う

## 翡翠ちゃんの殺人クッキー（後書き）

ついに！翡翠ちゃんと輝夜が真実を知りました！

次回、もっと詳しく話し合います。



「これからのあくしゅ

く翡翠視点くく

やり過ぎたか？

つい、輝夜にバックドロップを喰らわせたのだが……

「輝夜……早く起きろよ、退屈だ」

かれこれ30分ぐらい気絶しているのだ

コイツ、どうしようか……

あまり時間をかけたら、ディリアに怒られるからな

「本当に、輝夜なのかな……まさかの夢オチとかじゃないよね？」

（10分後）

輝夜はまだ起きない

なんか、段々イラついてきたな

「おい、起きろお」

そう言いながら、頬を2、3回叩いてみても、起きようとしない

まさか頭ぶつけて脳に損傷とか……

まさか、ねえ

あの輝夜に、そんなこと……あるわけないよねえ

うわっ、なんか心配になってきた

でもまあ、輝夜なら何があっても大丈夫かなあ

普通に気絶してるだけでしょ

ちょっと悪戯<sup>いたずら</sup>してみようかな

「よし！　ねえ輝夜、後30秒以内に起きなかったらこここの窓から突き落とすから！」

早く起きた方が良いと思うけどな」

とか、輝夜の耳元で呟いてみた

「いーち、にーい、さーん、よーん、ごー」

〃

「にじゅー、にじゅーろく、にじゅーなな、にじゅーはち」

やっぱりダメか……？

そう思いながら、窓から見える景色に目を走らせる

「にじゅーきゆう、さんじゆう！ よし、突き落とすか」

クルリ、と視線を戻すとそこにはまさに頭隠して尻隠さずな状態の輝夜がいた

具体的に言うと、カーペットの端に頭を突っ込んで隠してるが背中丸見えだし、カーペットが盛り上がってる

あんな短時間にいつの間に

「お願いだから突き落とさないでえ！」

輝夜は叫ぶ

なあんだ、聞こえてたのか

「聞こえていたならさっさと起きろ！」

僕は輝夜をカーペットから引き離して腹に踵落とししをした

かかとお

ゲボッ

あっ、吐血した

ごめん、そんな強くやっちゃったかな

そついやあ、勢いあまって全体重かけちゃったよ

「うう、腹イテエ…………俺はちゃんと30秒以内に起きてたじゃねえか！」

なんで踵落としするんだよっ！ 横暴だ！」

踵落とした辺りを擦りながら、輝夜が言ってきた

「あつれ〜？ 僕が30秒以内につて言っただの聞いてたんだあ？」

聞いてた〓起きてた      みたいな感じになるんだけどね

「本能で感じたんだよっつ」

本能……………ね

まあ、輝夜にしては上出来かな？

く輝夜視点く

「だから！　なんで、踵落としたんだよっつ」

俺は翡翠にせめてもの抵抗で睨みながら叫んだ

おかげで吐血したじゃねえか！

あり？？

……………　なんか翡翠が目を細めて笑った

「どうしたんだ？　翡翠」

「別に、特に意味は無いけど……………ただ、懐かしいな、と思って」

本当だ

翡翠に何年ぶりに会っただろう

「本当だな……………」

俺もそう言ってしまった

……………あれっ？

何かタイセツなことを、忘れてるような……………

「って！　なんで俺に踵落としたんだよー！！」

「それも別に、たいした意味は無いよ」

サラリと言われた

翡翠ヒデエ……

たいした意味無い、って……………それなら蹴るなよ



「それなら蹴るなよ、って顔してる。本当に懐かしいな、これ夢じゃないの？」

「自分で現実って言うておきながら、そりゃ無いんじゃないの？  
翡翠サン」

ハハハ、と俺たちは2人で笑い合った

「そつえばさ、なんで翡翠はこの世界に居んの？」

今思い出した

なんで、翡翠はこの世界にいるんだ？

「ほら、僕ってさあ、隕石にぶつかって死んだじゃん？」

あれってさあ、神様が故意にやったらしいんだよね」

……………ハア！？

じゃあ、あの死神が言ってた‘神にわざと殺された’人間とか、先客ってのは翡翠なのか！？

「なんかさあ、天界でテンプレマンガが流行<sup>はや</sup>ってたらしくてね、それで転生させてくれた

んだよねえ」

神様もマンガ見るんだな（日本製の）

「思ったんだけど、なんで‘家庭教師ヒットマンリボーン’の世界なんだ？

最初っから決まってたのか？」

翡翠がこの世界にきたおかげで会えたんだよな（俺は必然的）

リボーンのマンガが俺たちを引き合わせたと言っても過言ではない

「それはね、一緒に死んだ親友の雪奈って子がリボーンの世界が良  
いって言ったから」

親友って、俺が翡翠に貸した、リボーンのマンガ読んでハマったっ  
て言ってた子か

その子のお陰<sup>かげ</sup>で翡翠に会えたんだから、感謝しなくちゃな

「じゃあ、ツナ側の守護者ってどっちなんだ？」

「雪奈じゃないの？ っていうか、僕は守護者になれないと思う」

なんで？ なんで翡翠は守護者になれないんだ？

「『なんで？』って顔してるね、しかもアホ面<sup>いじ</sup>。どっちかって言う  
と、ならさせてくれない

んじゃないかな？」

「……ハア？」

思わずアホな声が出てしまった

翡翠は説明してくる

「ほら、10代目守護者ってボンゴレ9代目と門外顧問の沢田家光が決めるでしょ。」

僕は、身の安全とか重視してならせないと思う。お父様が」

今気付いた（思い出した）

コイツ《翡翠》の父親ってボンゴレの要人の娘じゃん！！

娘を守護者なんて危ないものにしないってわけか

「お前の父親ってボンゴレの重役っつーか、要人だもんな」

「……………要人？ ボンゴレ9代目本人なんだけどね……………」

翡翠が何かボソリと言った

「今なんか言っただか？」

「なんでも無い、脱線したな。輝夜は何でこの世界に？ っていうか死因は？ まさか、

バナナの皮で滑り死んだとか？ アハハハハ！」

バナナの皮はないよ

ああ、なんて言えばいいんだろう……

「なんかな、トラックにボンッてなって、男？ ガキ？ に会って、それから夫婦に

生まれて……………うん……………」

「そういえば、輝夜は説明するの下手なんだよな……………」

うっ………凶星だ

前まで、翡翠が俺の意思を汲み取ってくれたから良かったんだけどな

こればっかしは伝わらんだろう

「ああっっ！！！」

翡翠がいきなり大きな声で叫んだ

「なんだ！？ どうした！？」

いきなり大声出して、ビックリしたじゃないか！！

「いい方法思いついたんだ！ 輝夜、目え瞑<sup>つぶ</sup>って」

俺は、言われた通り、目を瞑った

「輝夜、もういいぞ」

翡翠に言われ、俺は目を開けた

「一体何をしたんだ？」

この数十秒でなにか出来たのか？

「輝夜の記憶を読み取ったのよ。能力で」

ハア！？ なんの能力だよ！！

テンプレ補正か!?

「大体わかった、分かりたくないものもあつたけどね……」

翡翠がなぜか俯うつむいた

「ハーレム、チート、ハーレム、チート……ってキモい。軽度オタクめ」





「なんで、翡翠は俺のこと覚えてるんだ？ 死神が言ったことも知っただろ？」

もしかして、死神が、俺存在を消すことに失敗したとか？

「もう死んでる人の記憶を変えたって意味無いじゃん」

……あつ、そっか

「その死神……どっかで見たことあるような気がするんだよね」

…え？

てことは、翡翠はあの死神にどこかで逢ったことあるのか？

「ああ！ 思い出した！！ 昔飼ってたペットのシロちゃんに似てるんだ！」

シロちゃん………ペットっすか

死神、可哀想（笑

「まあ、これからよろしくね。輝夜」

翡翠はそう言って右手を差し出してきた

これは……握手のポーズ？

「早く手、出して」

催促さいそくされてしまった

「お、おう」

俺たちは強く、握り合った（翡翠の握力が強くて俺の手が腫れたけど）

## これからのあくしゅ（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます

実は、雪奈がリボン好きになったのって、輝夜が翡翠にリボンのマンガを貸して、さらに、翡翠が雪奈に貸した、っていうやらしいんですね

8月12日修正

翡翠ちゃんの長い一日の終わり（前書き）

12月18日修正

## 翡翠ちゃんの長い一日の終わり

（翡翠視点）

輝夜との握手で彼の手をおもいきり赤くしてやったんだが、ふと、あることを思い出した

……そういえば、アイツらどうしよう

アイツら＝犬&千種

輝夜に会ってから、スツカリ忘れてた……

輝夜は犬と千種の事知ってるから、会わせても良いと思うけど……

輝夜は骸ファンだからなあ、面倒くさそうだな

「おい、聞いてるか？ 翡翠い」

静かにしろよ！ こっちは考え中なんだよっ

「……うるさい」

でもなあ、骸に言ってもなんて説明しようか…

「翡翠いゝ、おゝい聞こえてますかゝ？ 翡翠さゝん」

ついに輝夜は僕の目の前で手を振る

この動作、イラッとくるわぁ

永眠させとこうかな

「ひゝ」うるせえって言うてんだろぅがよ！ バカ輝夜！」「……」  
めんなさい」

僕が怒鳴るとすぐに顔を青くして謝る輝夜

「でもよ、俺の話を聞いてなかった翡翠も悪いんだぞ？ 何度呼びかけたって無視する

しよ〜……耳が聞こえなくなったのかと思っただぜ」

ぐっ……たしかにそれは正論だ

たしかに無視していたが……

「はいはい。僕も悪うわるございました。で、何を話してたっけ？」

実際、考えてて輝夜の話は聞いてなかったんだよね

「結局、聞いてなかったじゃん！ 内容は、俺ってこれからどうなの？ ってこと」

ああ、その話か

どうしよっか……………永眠する？



そう考えていたら、不意に輝夜がこんなことを言ってきた

「俺ってさ、ここにいたら一流の暗殺者になるのかな？」

そういえばコイツ、ヴァリアー側の守護者になるんだっけか

守護者になるってことは、幹部ってことだからな

「まあ、そうなんじゃない？ 輝夜が一流ならあり蟻は超一流だろうけどね」

「ヒドッ！ 俺はアリ以下ですかい！？」

そんなことを話していると、部屋の扉が叩かれた

コンコンコンコン

「私でございます、お嬢様。もうお時間ですが、よろしいでしょうか？」

ディリアか……

もうそんな時間か？ まあ、話したいことは話したから、もういいだろう

「入れ」

ギイイイイ

扉が少し音を立て、ディリアが入ってきた

「これ以上は無理です。充分でしたか？」

まあ、僕が翡翠だって伝えられたから充分っちゃあ、充分だな

「大丈夫だ。それと、もう名前で呼んで良いぞ」

もう僕が翡翠だってことを隠す理由はないからな

それに、ディリアは僕を“お嬢様”と呼ぶことに何か無理をしているようだった

失礼な奴だと最初は思った

でも、違かったんだ

ディリアが無理をしていたのは“僕をお嬢様と呼ぶこと”ではなくて“誰かをお嬢様と呼ぶこと”だった

なんか、過去にトラウマがあるような……

「かしこまりました。翡翠様」

このディリアの声で、意識が現実に戻る

ディリアの視線は輝夜へ行った

そういえば、訓練場でも何か亀裂の様なものがあつたな

僕の知らない所で何かあつたのか？

「さつきはお嬢様って呼ばれてたけど、本来は翡翠様って呼ばれて  
んのか？」

輝夜が僕に話しかけてきた

そして、一瞬だがディリアの眉間に皺が寄った

「普段はね」

僕がそう答えると、ディリアはさらに眉間に皺を寄せた

「翡翠様に気安く話しかけるなんて……普通だったら殺されてま  
すね」

殺すまではいかないと思う

まあ、圧力が掛けられるぐらいはすると思うが……

睨みつけるディリアの視線を無視し、輝夜は僕に聞いてきた

「お前ってそんなに凄いのか？」

輝夜……………お前、空気読めっつの！

今、僕の事‘お前’なんて言ったらディリアの機嫌がもつと悪くな  
ると思うが……………

「まあ、ボンゴレの中じゃ、影響力はバツグンですけど……………」

‘何言ってるんですか。そりゃあ、父親がボスですから’みたいな  
顔でディリアが見てくるが無視だ

「翡翠様たちが話をしていたかは知りませんが、他の方の前でそ  
の口の利き方は止

めたほうがいいと思いますね。

それと、貴方は2年ぐらいこのヴァリアーの訓練場で寝泊りして  
もらう事になりました」

なんだ2年なら、犬と千種のこととは心配要らないな……………

横で、嫌だ嫌だという顔で輝夜が訴えてくるが、これも無視だ

「それじゃあ、行きましようか翡翠様。貴方は、スクアーロ達の所にでも行ってください」

ディリアは輝夜に指示すると部屋を出て行ってしまった

僕は急いでディリアに着いていった

「長かったな……………」（一日的な意味で）

「そうですね、同感です……………」（話し合いが、という意味で）



**翡翠ちゃんの長い一日の終わり（後書き）**

皆様！

何か、翡翠の料理についてアイデアがあれば、教えてください！

8月14日再度修正



## 執事日記帳

執事日記〜1ページ目〜

私、ディリアは明日からボンゴレ9代目直々に9代目の御息女ごめいじょの執事を命じられた。

御息女の名前は「翡翠」というらしい。どんなお方だろうか？

ここで、9代目御息女の噂をまとめてみよう。

恥ずかしながら、私は1度も見た事が無いため、御息女に関する噂を聞きまわってみた。

万が一にも失礼の無いように、と。

噂1、天使のように可愛らしい、という噂だ。

今はまだ3歳で、純粹無垢であることは間違いない。

噂2、きちんと礼儀をわきまえている、という噂。

これは、立場上、必ず身に付くであろう。

噂3、かなりの大食いらしい、という噂。

信じられないが、御息女専用の料理人の話であるため、真実なのだろう。

話によると、夜中、翌日の料理の準備をしていた所、食料保存庫に入って来て、食べ物（たべもの）を貪（むさ）っていたと言っていた。

御息女に見つかった料理人は、「このことを誰かに話したらクビだ」と言われたらしい。

脅しだなんてどこで覚えたのだろうか？

私に話しても良いのか？と思い、聞いてみると、今は仲が良く、グチを言い合う仲らしい。

さて、今回はこれで終わりにて、また明日、御息女に会ってから書

「う。」

「2ページ目」

今日、ボンゴレ9代目御息女にお会いした。

私が自己紹介すると、天使の様な微笑みで、「これからよろしくお  
願います」と仰おっしゃられた。

噂1は本当だった。

本当に、可愛いらしかったし、優しかった。

このまま育てば、聖女の様なお方<sup>かた</sup>になるだろう。

噂2、3とも真実で、噂2は会ったときにキチンとしていた。

噂3は昼のお食事中に確認した。

実にすごかった。

大人の量と変わらないぐらいに……。

御息女は「おいしいから！」と笑顔で仰っていた。

私ごときがボンゴレ9代目の御息女をしっかりと立派な女性に育てられるか、と言われると不安だが、あのように天使の様な少女ならば、私は苦勞しないだろう。



……見てしまった。

御息女は、不思議な能力が使えるらしい。

私が休憩中のとき、「おいしいお菓子が出来たからお嬢様を呼んで来てくれ」と料理人に言われ、御息女を探しに行った。

そして、御息女を発見した。

場所は入り組んでいて、見つけにくい場所であった。

声をかけようとすると、御息女は一瞬で消え、10メートルぐらい先に現れた。

御息女は、瞬間移動をしていたのである。

一瞬で10メートル先に移動するなんて、絶対に超能力者だった。

明日、御息女に聞いてみよう。



御息女……いや、翡翠様は口が悪かった。

私が超能力のことを問い詰めると、態度が急変した。

翡翠様の呼び方は、御息女なんて格式が高くなくてもいい。

純粹無垢とは、正反対に位置するだろう。

私が、あの腹黒少女を立派な女性レディに出来るだろうか？

たぶん、いや、絶対に無理だ。

それにしても、ずる賢い子供だった。

料理人も騙されているんでしょう。

うまく、やっていけるだろうか？



心配だ。

**執事日記帳（後書き）**

新しく、書き直しました。

8月14日再度修正

## 雪奈ちゃんの短い一日

翡翠がイタリアを去った次の日

雪奈は翡翠達と会った公園に来てみると、そこには沢田綱吉の姿があった

どこか昨日と様子がおかしく、心配になった雪奈は不自然にならな  
いようにに声をかけた

「あれっ？ 綱吉くん、どうしたの？」

「雪奈ちゃん……………」

そついう綱吉のまわりには人一人もいない

（なんで一人で公園に？ もしかして、友達いないのかな…………？）

そんなちよつとばかり失礼なことを考えていた雪奈は子供特有の素  
直さ（空気の読めなさともいう）を発揮した

「綱吉くん、もしかして翡翠ちゃん抜かして友達ゼロ？」

「うん。いないの……ぼくがすぐ転んだりするし、足が遅いし、泣いたりするからって、

仲間に入れてくれないんだ……」

（それで1人なんだ……なんか、可哀相かわいそうだな……）

「よしっ！　じゃあね、今日から私と一緒に遊ぼう？」

（私も、恭君といつも一緒にいられるとは限らないからね……友達作ろうっ）

けして“今のうちに綱吉と仲良くなれば……”という下心があったわけではない

「えっ、いいの？　ぼくなんかと……」

綱吉は瞳を輝かせて雪奈に尋ねた

「当たり前よ！　それに、私は翡翠ちゃんの友達。綱吉君は翡翠ち

やんの友達。友達の

友達は友達だって言うでしょ？」

なぜか胸を張って綱吉に答える雪奈

そんな雪奈の言葉に綱吉は笑顔になる

「ありがとう、雪奈ちゃん！」

綱吉の“天使スマイル”が爆裂！ 100ダメージをくらった！  
雪奈は戦闘不能になった！

雪奈はその笑顔の可愛いあまりに思わず一瞬、失神した

「思ったんだけどさ……綱吉くんって何歳いくつなの？ ちなみに私は5歳」

復活を果たした雪奈が親睦を深めようと綱吉に年を聞く

「ぼくも5歳だよ」

そう言つて、片手を開いて突き出してきた姿は、真まことに可愛らしい様子だった

「じゃあ、同い年だね。一緒に小学生になれるじゃん」

雪奈の“一緒”という言葉に綱吉は喜ぶ

「ホント！？ やったあ！」

綱吉はまた笑顔で雪奈に笑いかけた

再び、綱吉の“天使スマイル”発動！ 雪奈はギリギリ回避した！

そんな中、雪奈はこんなことを考えていた

（本当にかわいいなあ、綱吉くんは。5歳とつてことは、中学生を13歳として、後8年後に原作が開始されるのか。8年後………8年？ なんか、引つ掛かるな………）

雪奈の記憶に8年というキーワードが反響し続けるが、結局、それ

がなんなのかは分からなかった

「雪奈ちゃん、何して遊ぶ？ 砂遊び？」

「うん……………どうしよっか？」

雪奈は心に残るもやもやを無視し、綱吉と話し始めてしまった

雪奈は思い出せなかった

もつすぐ起きるであろうクーデター……………ゆりかごを

くイタリア（ヴァリアー訓練場から帰宅後）くく

翡翠は自室にてクッキーと紅茶を手に呟いた

「暇だ、とっても暇だ。暇すぎて逆に忙しくらいさ」

そんな翡翠の様子を見て、ディリアはため息混じりにこう答えた



「翡翠様、暇なのでしたらもつと勉学に励はげんでください」

「勉強？ いいじゃん、僕できるんだから」

ちなみにこの時翡翠が習っていたのは中学校レベルだが、前世で高校までいっているので暇なのだ

「そう言われましても、勉強を教えるのも私の仕事ですし」

「嫌だ。勉強は暇だ」

「ですから、私の仕事の一部ですし」

「暇あゝ。ディアリア、なんか面白いことして？」

「勉学は面白いですよ？」

「勉強は（以下略）」

…… エンドレス

（夢（精神世界））

翡翠は久々に来た精神世界の先客に挨拶をした

「おつす、骸！ 1週間ぶりだね。僕に会えなくて寂しくなかつたかい？」

一方の骸はなぜかテンションの高い発言を無視して答えた

「そうですね、一週間ぶりですね……なぜ、今まで精神世界に来なかつたんですか？」

そう、実は日本に滞在していたこの1週間、この精神世界に翡翠は来ていないのだ

「いやあゝ、日本って遠いじゃん？ 日本からここに行こうと思ったらさ、無理だったん

だよなゝ…… 実力不足ってやつ？ それともやる気の問題？」

頭をポリポリかく動作をしながら翡翠は答える

「精神世界に距離なんて影響しませんよ。やる気の問題でもなさそうですね」

核心を突くような骸の返答に翡翠は顔をしかめた

「うっ、そう来たか」

骸は淡々と翡翠に言い寄る

「白状しなさい。唯<sup>ただ</sup>のド忘れだと」

「ぬぬっ！？ 何故<sup>なぜ</sup>それを……おぬし、只者<sup>ただもの</sup>ではござらん？」

ふざける翡翠に、骸はイラッときたのか三叉槍を手に笑う

「ついに気が狂いましたか、翡翠。今、ここで楽<sup>らく</sup>にして差し上げますよ」

（まあ、目が本気だわ！……これはマジでヤバくない？）

そう、翡翠が思った瞬間

ヒュン

翡翠の頬を三叉槍が掠り、血が垂れる

「冗談だってば！！ おい骸！ 今、本気で狙<sup>ねら</sup>っただろ！ ああ、乙女の顔になんてこ

とを！」

顔に傷つけられたことに激怒する翡翠

「クフフ、冗談ですよ。本気なわけじゃないですか」

そんな骸のひねくれた性格を見て、翡翠はボソツと呟いた

「ムカつくな……僕の執事のディリアって奴にすごく似てる」

翡翠がマフィアのボスの娘だということを知っている骸はその執事がファミリーの仲間だという結論に至る

「マフィアと似てるだなんて言わないでください」

ビュン

さっきよりも早いスピードで、反対側の頬を掠る

「悪い悪い。でもな、精神世界に行けなかったのは、本当にド忘れだったんだよ？」

「こっちは疲れてたんだよ？」

翡翠は冷や汗を掻きながら言い訳をする

「そんなの僕に関係ありません」

そんな翡翠の言葉を骸はバツサリと切り捨てる

「何気に酷いな。話は変わるが、僕の所に新しい使用人が来るんだよ。ソイツに犬と千

種のことを知られたくないから、アイツらを引き取りに来てくれないか？」

翡翠の言葉に骸は数秒考え、答えた

「…良いですよ」

「軽いな〜ホントにいいの？」

「標的のマフィアにはだんだんと馴染なじんできていますからね。不審に思われずに行動

できそうですから」

何気に怖いことを言う骸を翡翠は完全にスルーした

「そうか……じゃあ、よろしくね」

「わかりました」

**雪奈ちゃんの短い一日（後書き）**

途中から、雪奈目線じゃなくなってる！？

8月15日修正



## 翠の天使とヴァリアーとの出会い〜1〜（前書き）

更新遅れてすみませんデシター!!

それはそうと、メリークリスマス!

そして、ちよつとつじつまが合わなかったんで21話を修正しました（12月25日）

もし、「ちよつと知ってるのと違う」みたいな感じになりましたら、21話をご覧ください

今回は長めですね

翠の天使とヴァリアーとの出会い〜1〜

翡翠がヴァリアーと出会ったのは、数ヶ月前

このお話は、その時の様子です

それでは、お楽しみください

「そうだ。お兄様に会いに行こう」

唐突に僕は言った

現在、僕はディリアと中庭でLet's勉強タイム みたいな感じなのだが……

「では翡翠様、問4をお答えください」

……エツ、無視？

スルーなの！？

僕は抗議の意を込めた眼差しでディリアを見る

すると、ディリアは僕の顔を見てため息をついた（失礼な！

「何ボケツとしてるんですか？ 早く答えてくださいよ……………」

……………チンタラしてんじゃねえよ」

一瞬、時が止まったような感覚におちいった

……てか、やっぱりスルーなんだ!?

そして最後の方、本音でちゃってますよディリアさん!?

「えーと、 3。あの、ディリア君……無視?」

僕の言葉に目を見開くディリア

え、そんなに驚くことでスカイ?

「翡翠様……頭、大丈夫ですか?」

そんなことを言われた……唐突に

なんで頭? なんでいきなり頭の話なのかなディリア君

いや、それはそうと…

「正気じゃボケエ! 無視すんじゃないやねえよッ!」

ディリアは、その言葉に眉間に皺を寄せた

（何言っちゃってんのコイツ……………面倒だな）

とか思っているだろうな

ふふふ、この翡翠様には全部お見通しなのさ！

ディリアは再度ため息をつく、僕にこう言ってきた

「翡翠様はザンザス様が今どこにいるか、おわかりで？」

「……………えーっと？ お城、かな？」

「……………フッ」

……………ワラワレタ

知ってるさ！

訓練場だろ！？　ヴァリア　のさあ！

……前に車で連れて行ってもらったから行く道は忘れたけど建物は知ってるんだよ！

「それに、私は9代目から翡翠様専用の執事だけでなく、危険に遭わないように監視

する事も仰せつかっています。そんなこと、許可するわけには、まいりません」

なんだよコイツ……ケチやなあ

「ケチ……ドケチのディリア！　ドケチディリア！　やーいやーい、ドケチディリア！」

バギョッ

「我儘わがまま言いってんじゃねえぞ」

瞳の奥底がキレている事を証明しているディリア君にそう、言われ  
ました

どうやら、ディリア君の堪忍袋かんにんぶくろの緒おが切れて、持っていた赤ボール  
ペンが、折れたようですね

正直言まって、僕をこんなに叱しかってくれるのはディリアだけなのです

ですから、ディリアには感謝しています

「わーい、ドケチディリアが切れたぞ。にげろ、キャハハハ」

上辺うわべだけです

「それじゃあ、明日から毎日2時間だけ自由時間を差し上げますから、その間に会って

来てください」

「わーい……………チヨロいね」

結局、駄々<sup>だた</sup>をこねた僕をなだめきれず、ディリア君が折れました

「言って置きますけど、車は出しませんよ。まあ、ヴァリアー訓練場まで徒歩1時間です」



から、言って帰ってきて終わりですね」

ふふふ、甘い甘い……

この僕が、瞬間移動が出来ることを忘れたのかドケチディリアめ

その夜、翡翠ちゃんは笑いすぎで眠れなかったようです

く翌日（自由時間30分前）くく

「何してるんですか翡翠様！？  
包丁で怪我でもしたら危ないじゃないですか！！！」

ディリアが叫んできました

うるさいですねえ

吠<sup>ほ</sup>えるしか脳の無い駄犬は引ッ込んでろ

ちなみに、現在、僕は厨房にて包丁を片手に料理を作ってます

そろそろ返事をしないとディリア君が可哀想ですね

「ディリアうるさい………こんぐらい大丈夫だってば」

「大丈夫って……アホですか!？ 翡翠様は生まれてから1度も包丁なんて、持ったこ

と無いじゃないですか!……!」

……あ、そうだったっけ………？

〈30分後〉

「ほら！ どこにも怪我なんてして無いだろ？ 心配性なんだよデ  
イリアは」

そう、自慢げにデイリアに話すと、デイリアはどこか遠くを見ているようだった

「……………一体どこからそんな知識を？ 私は教えていないはずだ……  
まさか、あの

料理人か！？」

僕が作ったのは、シュークリームでした

普通の生クリームとかが入っています

唐辛子なんて入ってませんよ!!

「フフン！ お兄様へのプレゼントなのだ！」

僕がそう言っているとディリアに呆れた目で見られた

それにしても、どこをどう間違えたら唐辛子なんて入れるだろうね  
……

「だからって……危険ですよ」

「大丈夫大丈夫」

シュークリーム……

そういえば、輝夜はシュークリームが大好きだったっけ……？

ゴーン

ゴーン

さあ！ 3時の鐘が鳴りました

自由時間の始まりです！

「そんじゃあ、行ってくるべ」

そのまま、僕は厨房を飛び出した

「翡翠様！？ ちょっと………って、もついないし」

そんな声が聞こえたような気がした

「シュークリームって包丁使ったっけ？」

これは馴染みの料理人デイブ君の声だな

午後3時10分（ヴァリアー訓練場・中庭）

ヴァリアー幹部達は久々に訓練場に来ました

最近は仕事が合ったのでなかなか来れませんでした

「ス、スクアーロ隊長！ 大変です」

隊員1が真つ青な顔でスクアーロに駆け寄って来ました

何かあった模様ですね

「うゝおゝおい！ 何かあったのかああああ」

スクアーロ君は大声を出しすぎですね

隊員1が怖じ気づいちゃいました

「じ、実は……………その、ええっと……………」



隊員1は言葉を濁します

「ハッキリと言ええええええ」

だから声が大きい、貴方の所為だと作者は思うんですが……

「もうっ、スクアーロの声が大きすぎて怖がってるじゃないの」

ルツスーリアと心がシンクロしましたね

すると、ようやく決心が付いたのか隊員1が喋り始めました

「な、7歳くらいの……お、女の子を発見いたしましたっ」

すると、ベル少年も会話に入ってきました

「俺と同じくらいじゃん」

ちなみにこのときのベル少年の年齢は8歳です

「この訓練場は警備が強力だから、中の人間が手引きしていないと、子供が入るなん

て出来やしないよ」

マーモンちゃんもこう言ってます

すると、ベル少年が禁句を言ってしまいました

「つまり、誘拐ってこと？」

ベル少年の発言を聞いたスクアーロ隊長は怒り狂って怒鳴り散らし始めました

「お前らはいつから誘拐犯になったあああああああああ」

く翡翠視点く

「うん。迷ったぜ」

いやく…………瞬間移動で来たのは良いけどさあ

どこがお兄様の部屋かわかんなかったよ、アハハハハ

「おい、アレって…………」「やっぱり報告した方が…………」「なんでこ  
う…………」

うーん、なにか隊員さん達が喋ってるけど、全然聞こえないね

僕の方を見て喋っているのは……………なにかの見間違いSA

おや？

隊員の1人（隊員1と呼ばう）がこちらに向かって歩いてきたぞ

「お、お嬢ちゃん、どうしてここにいるのかな？」

無理して笑ってるようで、顔が引きつっている……………ププッ

僕は無邪気に笑って答えた

「あのね、お兄ちゃんに会いに来たの……………そしたら迷っちゃった」

ちなみに最後の方は少し顔を俯うつむいて言った

間違っではないからな

「お、お兄ちゃんはここで働いてるのかな？」

「うん！」

僕は無邪気度100%の笑顔で笑いました

なぜか隊員1は困った顔ですね

すると、他の2人も歩いてきました

「この子どうするんだ？」

「やっぱり報告するか？」

「でもなあ運が悪いことに今日はスクアール隊長が訓練場にいるぞ」

「絶対に報告した奴がおこられるじゃん！」

皆みな一いっ斉せいに僕を見る

あゝ……これって僕のこと？

「お前が見つけたんだから、お前が報告しろよ」

「嫌だよ、お前の方が先だっただろ」

「俺は見つけてない」

話し合いの結果、じゃんけんで決め、隊員1が報告しに行った

隊員１はスクアーロ隊長に怒られる事を予想してか、顔が真っ青であつた

「もう１人のおじちゃん、どこに行ったの？」

僕は知っているが残った隊員２と隊員３に聞いた

「偉い人を呼びにいったんだよ」

隊員３が答えてくれた

「えらい人って？」

「スクアーロっていう、声が大きくて怖い人なんだよ」

今度は隊員２が答える

ということとは、このまま行けばスクアーロとご対面！？

みんな暗殺部隊なのに子供に優しいね

「うゝお おい！ 何かあったのかああああ」

遠くからこんな叫び声が聞こえた

「今のがスクアー口隊長の声さ」

「……おっきいのね」

向こうの中庭から聞こえたな……（ここは入り口付近）

「はつきり言ええええええええええ」

また聞こえた……本当に声、でかいなあ

「近くで聞いたらうるさそう」

「ハハハ、お嬢ちゃんもそう思うかい？」



と笑いながら喋る隊員2

隊員3はそんな隊員2に注意する

「それ、隊長に聞かれたらおこられるぞ」

「大丈夫大丈夫」

そんな時、ひときわ大きい声がこだましてきた

「お前らはいつから誘拐犯になったああああああああ」

なぜに誘拐犯!?

「おじちゃん、ゆーかいはんってなーに？」

僕はとぼけて隊員3に聞く

役演出というやつさ

「誘拐犯ていうのはね、小さい子供とかを誘拐、つまりは無理矢理に連れて行っちゃう」

「ことだよ」

「おじちゃん達は誘拐犯なの？」

「違っただけだね……………」

隊員達は苦笑いをする

「うゝおゝおい！ お前らああああ」

声の方を見してみると白髪頭の男の人がいた

この人って、もしかしてスクアーロ！？

生で初めて見た！

…いつの間にか、スクアーロが近くまで来ていたんだね

そして、そのまま僕確保

翠の天使とヴァリアーとの出会い〜1〜（後書き）

今話は一旦区切ります

12月28日修正

8月17日再度修正

翠の天使とヴァリアーとの出会い〜2〜（前書き）

遅れてすみマセデシタ！！

そして、あけましておめでと〜ございますー！！

## 翠の天使とヴァリアーとの出会い〜2〜

（翡翠視点）

現在、僕は広間にある来客用ソファに座り、向かいに座っているスクアーロに取調べ（笑）を受けていたのであった

そして、その周りには大勢のヴァリアー隊員が群がっていた

「正直に言ええ！ お前はどやってここに入ったんだあ？」

正直に言つと、スクアーロの声はマジでかい

至近距離で聞く僕の身にもなってみろ

「えつとね、うんとねえ……………最初にズキューンってなつてね、バゴゴゴーンってなつ

てね……………えつとね、次はね……………ズゴゴゴゴゴ…ってなつて…

……………」

フツ…………誰が本当の事言っちゃったの！

ちなみに、この説明には手も活用している

「やっぱり子供に聞くのは無理じゃないの？」

と、ルツスーリア

簡単にルツス姐<sup>ねえ</sup>でいいよね

「…………このガキ、よくスクアーロを怖がらないな」

と、エロオヤジ（レヴィ・ア・タン）めちゃくちゃ気持ち悪い。特に表情と顔が

未来のために消しておこうかな

「この年ではそれがフツーなんだよオッサン」

エロオヤジに喧嘩<sup>ケンカ</sup>を売ったのはまだ幼いベル坊…………いや、ベルフェ  
ゴール

「死ねクソガキッ」

ついにエロオヤジが切れた

ケンカ勃発か？

というか、あんさん達ってば僕のこと無視かいな

「静かにしろおおおおおおおおおおお！！！！」

お前がな……………

スクアーロ声でかすぎだろう

僕の繊細な鼓膜が破れてしまう……………

そして沈黙がみんなを包む……………

そんな中、声を張り上げたのは彼女（彼）



「もう！ みんな役立たずね。私にまかせなさい！！」

スクアーロを押しつけ、僕の前に座るルッス姐

ルッス姐はほどよくはにかんで僕に質問する

けど、そのはにかみが逆効果（メツチャ怖い）

「ここには1人で来たのかしら？」

子ども扱い上手だな

「うん！」

またまた、沈黙がみんなを包む

「誘拐じゃねーじゃん」

と、ベル少年が一言

「どういうことだあああああああああ」

ああ、だからスクアーロ声でかいんだってば

それともリアクションが激しいのか？

「それはおかしいよ。どうやって暗号認証をクリアしたんだい？」

マーモンが僕の目の前に来てそう尋ねてきた

てか、浮いてる！？

いや、それよりも……

……………暗号認証？

そんなものあったのか！？

ヤバイな、この状況

すると、あの隊員2から助け舟が！

「それは、お兄さんから聞いたんじゃないっすか？」

良くぞ覚えていた隊員2！

褒めて使わす

「……兄？　どういうことだ？」

スクア―ロがいい感じに混乱してる

すると、またルツス姐がはにかんで尋ねてきた

「お嬢ちゃん、お兄ちゃんから何か聞いてるかしら？」

これは頷いた方がよさそうだな……

「うん！」

すると、間髪いれずベル少年が証言を

「それは、それでヤバくない？ 身内にも話しちゃダメなトップリ  
ークレットじゃん」

……そうだったのか？

まあ、よく考えれば当たり前か

ここって暗殺部隊の本拠地だからな

「このガキの兄貴出て来おおおおおおおい！..」

と、叫ぶスクアーロ

これで出てきた奴バカ正直だよな

まあ、ここにはいないから出てこないけどね

「出て来るわけじゃないじゃない。そんなに怒ってる時に出て行ったら殺されかねない」

「じゃない」

そう言ったルッスーリアが僕の持っていた籠かごを見る

「それ、中身何かしら？」

言外に「その中身に発信機とか盗聴器とかないだろうな」という気持にじちが滲み出ている

「シュークリームだよ。お兄ちゃんに作ってあげたの！」

あくまで子供らしく、ガキっぽく言った

「まあ、優しいのね！　こんな子のお兄さんが、こんな仕事（暗殺）してるなんて知った

ら、どう思うかしら……」

すると、大広間の5つあるうちの通ridorの1つのドアが開いた

「何してるんですか、こんなに集まって……訓練はどうなったんですか？」

入ってきたのは男が1人

あれは、たしか……

「オツタビオオ！ ガキが1人入ったんだあ！」

声を張り上げて言うスクアーロ

その言葉に眉をひそめるオツタビオ

「ガキ？ 子供……ですか？」

あー、オツタビオって僕の正体知ってますよね？

ってことは、見つかったら大騒ぎってことですか

となると、お兄様にもここに来ていたことがバレるってことですよね

それはまずいですねえ……

出来ればお兄様には知らせずに、行って驚かせたいんですが

となれば、隠れないとね

「ちょっと見せてください」

歩み寄るオッタビオ

「コイツだぁ……………って、いない!?!」

と、スクアーロ

「あら本当！ どこに行ったのかしら」

とルッス姐

「消えた……………だと！？ まさか……………幽霊か！？」

と、エロオヤジ

くその頃翡翠（瞬間移動で逃げました）く

「危なかった……………オツタビオとは面識があるからな。お兄様ザンザスの妹だと知られて、大騒



ぎされては……せつかくディリアを説得したのに……」

しばらく歩くと場所は行き止まった

1つのドアの前

「いかにも高そうに作られている扉！ しかも、ここは城の1番奥じゃないか？ だとし

たら、ここがお兄様の部屋という可能性が高いな……」

僕は数秒黙り、決心した

「よしっ！ 開けよう！」

ボタン

「オツタビオ……………ノックしてから開けろ……………かつ消すぞ」

だーいせーいかい！

「やったあ！ お兄様みーつけた！」

僕の姿を見ると、お兄様は目をものすごく見開いていた

お兄様でも驚くことあるんだな

「なっ……………翡翠！？ なぜここにいる！？ 屋敷にいるはずじゃ……………」

あ、なんかお兄様が驚いてるとおもしろいや

「えつとね、ディリアにちゃんと言ってるから約束は守ってるよ」

言われる前に約束のことを言ってやった

「……どうやって来たんだ、車か？」

「うーんとねえ…… ひ・み・つ」

瞬間移動なんて教えられないだろ

「秘密って、お前なあ……」

「お兄様にどうしても会いたくなつたの………ダメ？」

僕は涙腺を操作し、目を潤ませ、上目遣いでお兄様<sup>エモ</sup>を見つめる

そして数分

「……………少しだけだぞ」

お兄様のその言葉に、僕は心の中でガッツポーズ（死語）をした

そして、僕は持っていた籠を差し出して言った

「あのねお兄様……………翡翠ね、お兄様にシュークリーム作ってきたの」

「……………あ？」

僕という言葉に固まるお兄様

なんてマヌケな顔

それにしても、一言で返した……………だと？

理解できていないようだから、再度言おう

「シュークリーム作ってきた」

「お前が厨房に立って作ったのか？」

「そつだよ。何もそんなに驚く事ないと思うけど……」

そつだよと言った瞬間、また目を開いて驚いていた

「まったく……ケガでもしたらどうするつもりだったんだ？  
料理人にでもやらせとけ  
料

ば良いものを……」

お兄様ったらディリアとまんま同じこと言った

「料理人さんが作ったのじゃ、お兄様が食べないかもしれないじゃない？」

お兄様は思い当たる節があるのか、言葉に詰まる

「私が作ったのなら、文句言わずに食べてくれるでしょ？」

僕は小悪魔みたいな笑みを浮かべる

お兄様はハアとため息をつき、<sup>こは</sup>呟いた

「……どこでそんな事覚えたんだ」

「え〜とねえ、ひ・み・つ」

ボンボンボン

時計が鳴る

どうやら、古城をでてから1時間も経<sup>た</sup>っていたようだ

「あつ、もうこんな時間！ ごめんねお兄様、また明日のこの時間に来るから！」

そう言っ僕はお兄様に籠を手渡す

「明日も来るのかよ………」

なんでそんな嫌そうに言うんだザンザス

「そだよ。本当は、もうあと1時間居てもいいんだけどね……………今日は初日だから少し

早く帰るから」

お兄様の部屋を出た僕は瞬間移動で古城に戻った

翠の天使とヴァリアーとの出会い〜2〜（後書き）

更新遅れてすみませんデシタ！

もしかしたら、また1週間後かもしれませんが、読んでくださると  
うれしいです

（悩み事）原作開始はいつになる事やら・・・

8月20日修正



翠の天使とヴァリアーとの出会い〜

（翡翠視点）

「今日は早く帰らずに2時間キッチリいよ！」

僕はそう決心する

「また言ってるんですか？ いい加減<sup>かげん</sup>ウザイですよ」

デイリアが使用人にあるまじき言動で僕を罵倒する

そう、この発言は今日10回程度言っているのだ

それも、全部……

「お前のせいだろうが！」

〽昨日（ヴァリアー訓練場から帰宅後）〽

僕はヴァルアー訓練場から1時間ほど早く帰ってきて、ゆっくりし  
ようと考えてた

「意外と早かったですね」

ディリアが驚いたような顔をして僕を見てきた

「フンッ……僕をみくびるな」

その言葉を聴き、ディリアはニコリと笑った

「じゃ、勉強を始めましょうか」

「“じゃ”ってなんだよ“じゃ”って！　まだ休憩時間は残ってる

ぞ！？」

なんだか今日はイラつく……

あとでカルシウムでも摂取するか

「私が翡翠様に差し上げた時間は、お兄様に会ってくる時間ですよ？ 休憩時間では

「ごいません」

うわー、コイツ心狭ッ！

「早く帰ってきたら勉強だなんて聞いてないし、言ってもいなかったじゃないか」

「先ほど言いましたよ？ “じゃ、勉強をはじめましょうか”とね」

勝ち誇ったように笑うディリアとは対称的に、僕は眉間にしわを寄せる

……が、深いため息を吐いた

「しかたないな。今日は勉強をするが、明日は2時間あっちいるかな！」

く翌日く

「今日は2時間いるっ」

忘れないように何度も言い返す

「昨日も言ってますでしたか？ それ」

ええ、言っていましたか？

……冒頭に戻る

「ウザイって言われた!」

輝夜にも言われたことないのに!!

「もう少し黙ってください。しゃべらないでください」

ディリアは僕をチラツと見てそう言い放った

「ケツ……使用人<sup>メイド</sup>達にキヤーキヤー言われてるからって調子に乗ってんじゃねえよ」

実は、ディリアの顔は案外整った顔立ち（ムカつく）で、母親譲りの金髪に藍の瞳と父親譲りの紅の瞳のオッドアイだし、鼻は高く、中性的な顔立ちで身長は180センチを超えていて、仕事の手際も良く、人当たりが良いので使用人（特にメイド達）から結構モテる

「別にキヤーキヤー言われてませんけど……翡翠様、耳鼻科でも行きますか？ それと

も精神科に行きましようか？」

何を言っているコイツは！

それともよく物語にある鈍感主人公でも演じているのか！？

「黙れ！」

ポーンポーンポーン

休憩時間の始まりの鐘が鳴る

僕は素早く外に出た

「行つてきまゝす」

僕が元気にそういつと、ディリアはため息をついてこう言った

「早く帰って来て下さいね」

くヴァリアー訓練場く

今日も幹部達の仕事は無く、大広間の中央でゆっくりとお茶を飲んでいた

今は、昨日の翡翠の話をしていた

「結局あのガキは何者だったんだあ？」

スクアーロは不機嫌そうに呟つぶやいた

ルツスーリアはその呟きに対して言葉を返す

「お兄さんも見つかってないしねえ」

「結構かわいかったな」

とベル少年の発言に対してエロオヤジも食いつく

「趣味ではないが、確かにかわいらしかったな」

レヴィ・ア・タンの趣味は一体なんなのだろうか

「オッサン……キモッ！」



「死ねい、クソガキイッ」

二人はよくケンカをする

ケンカするほど仲がいいということわざはこの状況では通用しないだろう

「2人とも止めなさいよ」

ルツスーリアがケンカの仲裁に入る

そのとき、大広間の扉が勢いよく開かれ、あわてた隊員がスクアーロのもとへ走った

「たっ、大変です！ 昨日の女の子がまた来てます！！」

「すぐにガキを連れて来い！！！」

「ヴァリアー隊員視点」

数分後、大広間に連れて来られた少女はまさしく、昨日の少女だった

すると、中央にいたスクアーロ隊長を見るなり、こう叫び抱きついた

「お父さん！」

LL

皆の心が一つになった瞬間だった

スクアーロ隊長は石のように固まり、ほかの幹部達も啞然としていた。

そして、**オレ**隊員達は考える

「おい、まさかスクアー口隊長の娘!？」

「隊長って結婚してたのかよ」

「いや、まだしてないぞ」



スクアーロ隊長の一言により、大広間は静まり返る

我に返ったルツスーリアさんとマーモンさんがスクアーロに聞く

「本当なの？ スクアーロ、真実を話してッ！」

「子供がいたのかい？」

スクアーロ隊長はその問いに迷うことなく答える

「いるわけねえだろうがあああああああああ」

マーモンさんが口を開く

「それじゃあ、この子が言っている事は？」

スクアーロは少女の頭を鷲掴み<sup>わしつか</sup>、宙吊りにした

「どついつことだあ？ 本当の子と言わねえとぶっ殺すぞ」

明らかに、怖い

言葉に怒りが籠<sup>こ</sup>もっている

「正直に言わねえと3枚に下ろすぞ<sup>お</sup>」

そして、当然のように少女は泣きながら喋り始めた

「……ヒック……髪が……真っ白で……グスン……お父さんに……  
……ヒック……似て

「たから………」

「だそうだ」

疑いが晴れたスクアーロ隊長はにこやかだが、この後に待つ地獄を知らない……

なんと、少女が大声で泣き出したのだ

「あゝああああああお父さんがいじめたあああああああ  
あ」

「大丈夫？ ……もう！ スクアーロのせいで泣いちゃったでしょ！」

そういつてルツスーリアさんは少女をなだめ始める

「白髪」お父さんって、フツーおじいちゃんだろ」

ベル君、ナイスツッコミ

隊員<sup>オレ</sup>たちは少女の言葉を聞き、かなり残念そうだった

「あゝあ、泣いちゃった」

「隊長サイテー」

「人でなし」

「女の子かわいそう」

「宙吊り！？ 首大丈夫かよ」

「いやっ！ 離してよっ お父さんのイジワル！」

少女はスクアーロ隊長の手を離そうとして足搔<sup>あが</sup>いているが……

さすがは剣士、なかなか離れない

「俺はお父さんじゃねえ！ 次、言ったら殺すぞお！」

まだ若いのに、少女にお父さんと言われた事に怒り、スクアーロ隊



長は手の力を強める

「痛い！　すぐに離してよっ！　お兄ちゃんに言いつけてやるんだから！」

少女の額の中央にはスクアーロの親指部分が当たっていて、青痣になっっている

「てめえの兄貴なんざ怖くねえよ！　俺の方が強いからな。出てきた途端にたたっ切っ

てやる」

この時、誰しもこの少女の兄が一般の隊員だと思い込んでおり、顔を俯く

「嘘だ！　お父さんなんかにお兄ちゃんは切れないもんね！」

少女はそう叫ぶ

妹にとって兄とはそういう存在なのだ

「根拠を言ええ！　それに俺はお父さんじゃねえ！」

スクアーロ隊長……………子供に夢見させてあげようぜ

「僕のお兄ちゃんは最強なんだもん！」

その時、救世主が現れた

「うつるさいですね。何してるんですか？　3階にまで響いてました  
よ」

（オツタビオ視点）

昨日のこともあり、私は1階の大広間の様子を見に行くことにした

すると、3階にいるはずなのに1階にいるスクアーロの声が聞こえた

いつも大きいのが、今日は一段と大きいので、何かに怒っているはずだ

早く行って止めなければ……

1階の大広間前廊下を歩いていると、スクアーロの他に子供のように高い声が聞こえてきた

きっと女の子の声だろう

もしかして、また昨日の子供が来たのだろうか？

……………それにしてもこの声、どこかで、聞いたことがあるような

……………

そう思いながらも、私は大広間の扉を開けた

「うつるさいですね。何してるんですか？ 3階にまで響いてましたよ」

目に付いたのは、スクアーロの右手にぶら下がっている……女の  
子？

どこかで見た事があるような気が……

「大変よオツタビオ！ 女の子を助けてあげて！」

ルッスーリアがそう叫ぶ

ああ、思い出した

この少女は……ザンザス様の妹の

え？

ザンザス様の妹がスクアーロに頭を鷲掴みされて、額から流れているのは……

赤い赤い、真紅の液体

まさか………血？

それしか考えられない

「なにしてるんですかスクアーロ！　すぐにその手を離しなさい！」

「あん？　しょうがねえなあ」

スクアーロはそう言ってすぐ手を離す

ドスッ

彼女はこんな音を立てて床に叩きつけられた

それは、もう死んだ肉塊と似たような音がした

私はすぐ翡翠様に駆け寄った

「良かった……大丈夫ですか？」

翡翠様は涙目だ

いくらザンザス様の妹だとしても翡翠様はまだ幼い少女である

「うっう……頭クラクラするう。あ、もしかしてオツタビオなの？ 痛かったよお……」

そして現在進行形でチョー痛い」

翡翠様はそう言つとスクアーロのことを睨み付ける

まだこんなに元気があるから大丈夫か？

いや、結構な量の血出ている

早急に処置を施さなければ……

「そんなガキ、放つて置いても大丈夫だろ」

私の心配をよそにスクアーロはこんなことを言い放つ

なつ……スクアーロは少女の正体を知らずにこんな事を

とりあえずザンザス様に連絡をしよう

私は通信機を使い、ザンザス様に今の状況を伝えた

……………そうとう怒っていた

これはスクアーロの命が危ないかもしれない

でも、自分のこと以外でこんなに怒るザンザス様を見たのは初めてかもしれない

とりあえず、スクアーロに釘を刺しておかなければ……

「なにしてるんですか貴方は！　この子のお兄さんがどんな方が知らないのですか？」

スクアーロはしれっとした顔で答える

「ただの一般のヴァリアー隊員だろ？　そのガキは自分の兄貴は最強だとか言ってた

けどな」





みんなが啞然としていた

……誰も知らなかったのか

静寂・沈黙・驚きが周囲を包む

そして、約1名が真っ青な顔に

「兄貴が最強つてのは本当らしいな……」

ベルがただ1人呟く

その時、建物が振動する

ゴオオオオオンッ

広間の入り口の所に煙がたちこめる

徐々に煙が収まり始める

現れたのは、鬼

というか、ザンザス様……仕事のときの殺気より、今の殺気の方が鋭いのですが……

その日、スクアーロの悲鳴が訓練場全体に響き渡ったらしいです

そして、私を含むヴァリアー幹部と隊員はザンザス様の見たこともない一面を見ました

なぜなら、ザンザス様が

「翡翠を送るついでに帰る」

と言ったからだ

他人を優先し、自分の事をついでと言ったザンザス様を見たのは初めてだったから

く余談く

「ザンザス様、やっと落ち着きましたか。翡翠様、今治療いたしますね」

私はザンザス様と翡翠様に近づく

「見るオツタビオ！ お兄様にお姫様抱っこされたぞ」

翡翠様の発言通り、今、翡翠様はザンザス様にお姫様抱っこをされている状態だ

「元気なら落とすぞ」

ザンザス様は翡翠様を降ろそうとする

「ちょっと待ってよ、少しぐらいいいじゃん」

ポンッ

あ、優しく降ろした

「とりあえず治療しますので、ちょっと待っててください」

私は翡翠様の額に絆創膏と包帯を巻く

「ああ、女性が顔に怪我を作るなんて……お嫁に行けなかったらどうするつもりなんで

しょうね」

私がそう言つと、ザンザス様が明らかに不機嫌そうな顔をした

「僕を怒ってるの？ それより、お嫁に行くころにはもう傷治ってるでしょ」

翡翠様がそう言つと、ザンザス様はますます不機嫌な顔になった

今絶対に

（嫁に行くのか？ 相手の奴は絶対に認めん）

と思っているだろう

「あ、お兄様もしかして僕がお嫁にいけないかもって思って不機嫌なの？」

いえ、違います翡翠様

「ご安心ください翡翠様。もし翡翠様の貰い手が無かったら私が貰いますので」

ははは、と冗談交じりに言つと2人から冷めた瞳で見られた

「それよりお兄様！ あの白髪野郎がね、お兄様には絶対に負けな  
いし〜お兄様のこ

とたたっ切るって言ってたよ？」

「後で消しとく」

「ほどほどにね」

なんと怖い兄弟だろうか

それと翡翠さま、そこは止めましょう

スクアーロ、ご冥福お祈りいたします



翠の天使とヴァリアーとの出会い〜3〜（後書き）

長かった・・・これでヴァリアーとの絡みは終了！

後は、犬達と別れてゆりかご起こして・・・

- ・ 2話ぐらい書いたら、ようやく原作開始時刻までといたしますんで・・・

## 黒曜チームとの別れ

（翡翠視点）

僕は現在、自宅の寝室のベッドの上に寝転がっていた

「ハア……今日も暇だったな。輝夜にも会いに行けなかったし」

昨日、輝夜がヴァリアー訓練場に来た以外はいつもと変わらない毎日を過ごしていた

足をブラブラさせながら

「明日は何か面白い事がありますように！ できれば、ボンゴレ令嬢専用執事変死事

件とか」

と天に向かって祈っていたところ、ふと誰かが呟いた

「だから誰なんらよ、そのカグヤって奴！」

.....アレッ？

「お宅<sup>たく</sup>、どちら様で？」

とっさにこの言葉が出てしまった.....

今、僕の部屋には僕1人しかいないはずだ

たしか、僕が今座っているこのベットの下らへんから犬の声が聞こえたと思うけど.....

なんで犬が部屋の中（しかもベッドの下）にいるのさ！

「何わけわかんねー事言ってんだよ」

そう言葉が返ってきた

ああ……………この子には皮肉とか冗談なんてものは通用しないのね

ハア、とため息をつき僕は犬に言い返す

「なんでアンタが僕の部屋にいるのさ。しかもベットの下ってさあ……………まるっきし

不審者じゃんか。出てきなよ」

すると、ザザッザザッと這いずり回る音が聞こえていた……………リアルにホラーだ！

「いるなら、いるって言ってよ……………ビククリしたじゃないか」

出てきたのは犬と千種

千種、君もいたんだね

気付かなかったヨ……………だって影薄いんだもん！ 喋ってなかったし

「それより君達、なぜ僕の部屋のベッドの下にいるのかね？」

僕がそう尋ねると、千種が答えにならない答えを言った

「骸様が翡翠に別れを告げとけて……………めんどいけど」

……………アレッ？

こいつらって骸のこと骸様って呼んでたっけ？

いや、それより僕の部屋のベッドの下にいた理由にはなってないよ  
！！

「君達、骸に会ったの？」

僕は寝ていた上半身を起こし、犬と千種の方を見た

「知らねえの？ 骸様が夢に出てくるんだぜ」

……夢？

もしかして、僕と同じ方法で夢（精神世界）で意思疎通とか？

「千種もその夢って見るの？ 犬だけだと本当の夢かもしれないしねえ」

「んな！ 俺のこと信用ならん」犬……黙って」「犬には聞いてない」……チッ」

ああ、犬へのツツコミが数秒遅く、千種に負けてしまった……

「見てる。それで話したり、状況を伝え合ったりしてた」

………知らんかった（ 3 ）

あのとき精神世界で骸に伝えた事がこんなにも早く実現するだなんて

「じゃあ、お別れって事？」

僕がそう言つと、さふああ、とカーテンがなびいた

「そうですよ」

「「骸（様）」」

音も無く、閉めていたはずの窓に骸が座っていた

「お久しぶりですね犬、千種……そして翡翠」

そして、さも何とも無いように言った

えー、どうやって窓開けたのさ

とりあえず返事をするか

「やあ、骸……………いや、不法侵入s y「ベシッ」イタッ  
！」

骸のことを不法侵入者と言おうとしたら、頭を叩かれた

なんでー？

「誰が不法侵入者ですか」

僕は口を尖がらる

「何も叩くことないじゃんかー！ ケチ」

骸が口を開こうとしたとき、「コンコン」と扉を叩く音が聞こえた

「誰？ 何の用？」

僕がそう言つと、扉の向こうから聞き慣れた声が聞こえてきた



「私です。いつまで起きているつもりですか？ 夜遅いので子供<sup>ガキ</sup>は寝る時間ですよ。

さっさと寝てください」

相変わらずムカつく言い方をするな、コイツ

「わかったから、もう行け」

僕がそう言うため息と共に足音が遠ざかって行った

なぜため息をつかれたんだ？

「今<sup>かた</sup>の方は？」

なんか骸が冷たい目で見てくる（なぜ？）

……が、無視だ

「コイツの執事れすよ骸さん。しかもこのファミリーの幹部なんれ

す」

うわっ！　なんで言っちゃったのかな、この馬鹿犬は

「執事ですか。しかも幹部……貴方がマフィアの娘だという事は本当だったんですね」

「信じてなかったのかね骸君」

「クフフフ」とか笑ってるけれども無視だ

てか夜にこの声聞くと気味悪いぞ

「とりあえず、もう眠いし早めに終わらせるぞ」

そうして、僕はあるものを3人に手渡した

「説明しよう！　君たちに渡したものは僕からのプレゼントさ！　千種にあげたのは

ヘッジホッグっていう、ヨーヨーに似た武器なんだよ」

千種はヘッジホッグを右手で持ったり左手で持ったりしている

「俺のはなんなんらよ！ この歯！」

「犬は気が付いてるでしょ？ 自分の能力を。歯を変えるとその動物の能力が使える

けど、その歯がないと意味無いじゃん？ だから、歯だよ。何の能力かはつけてか

らのお楽しみサ」

ぼくは犬に説明する

なんだろう………だんだんとテンションが上がっていく

「それじゃあ、僕のh「骸のはね、ただの銃だけど、中身の銃弾が普通のとは少し違う

んだよ」………というと？」

「他人に憑依できるんだよ」それって憑依弾じゃないですか！」………そうだけと」

憑依弾と聞いて驚く骸に僕はさらに言い続ける

きっと僕は悪魔のような笑みを浮かべているだろう

「まさか、施設を燃やすときに……………」

「そのまさか……………」

僕は骸と目を合わせる

「武器をくださった事、感謝しますね。それでは犬、千種行きましようか」

これで、ここも静かになるのかな……

そう思ったとき、骸が僕に向かって口を開いた

「貴方<sup>アナタ</sup>にはもう精神世界で会いに行きません」

.....ハ？

僕が啞然としていても、骸は話し続ける

「貴方に頼りたくないんですよ。僕が先輩なのに、僕は後輩の貴方に頼ってばかりです

から。また現実で再会するまで、連絡はしないでおきましょう」

僕は俯いた

「僕のほうから会いに行きますから.....泣かないでくださいよ」

何を言っているんだろう骸は

だって、僕は

「泣いてなんかいないもん.....約束だよ。絶対に会いに来るんだ

よね？」

僕の言葉に少し驚きながら、骸は頷く

「じゃあ、これも持って言って」

僕はそう言って、骸に小指の爪ぐらいの大きさの翡翠色の宝石が付いたピアスを片耳につける

「これは？」

骸がそう聞いてくる

「……お守り。肌身離さず持っていて、僕も片方つけるから」

僕はそう言つと、自分の左耳にピアスをつける

「今度こそ、サヨナラだね」

僕は骸に微笑みかける

「違いますよ。『さようなら』じゃありません。『また会いましょう』ですよ」

「そっか…………骸、また会おうね」

「ええ、また会いましょう」

骸がそう言った途端<sup>とたん</sup>に風が部屋を吹き抜けた

そこにはもう、誰もいない

「約束は絶対だからね」

そう、僕は<sup>つぶや</sup>呟いた



## 黒曜チームとの別れ（後書き）

終わった・・・なんでしょうね、この雰囲気・・・えっシリアス！？

そういえば、千種の一人称ってなんだったっけ

## 親子喧嘩（前書き）

サブタイトル『翡翠ちゃんは結構なブラコンのようです』（笑）  
『

## 親子喧嘩

〈輝夜視点〉

その日はいつもと変わらないはずなのに、なぜか妙な胸騒ぎがしたんだ

俺は、いつもの通りヴァリアー訓練場の庭（すげえでかい庭）ランニングをしていた

すると、スクアーロが後ろから走ってきた

最初は怖くて必死逃げていた

だって奇声を発しながら追いかけてくるんだぜ！？

……………追いつかれた

すると、スクアーロは俺を少し見てけわしい顔をした

「お前……は止めとこ。いくら才能があるからって早すぎるな」

俺の横でスクアーロはそう言った

たぶん、本人はつぶやいたと思っている

わけが分からなかったので、俺はすかさず

「なんの話だ？ 何かやるのか？」

と聞いたが、スクアーロは答えずに走り去っていつてしまった

（数時間後）

俺は生き物を殺すことに慣れるため、今は訓練場の厨房でさっきま

で生きていた新鮮な魚をさばいている

最初は気持ちが悪かったが、最近は慣れ始めてきた

素人はまず、魚 兎<sup>うさぎ</sup> 豚 牛 熊の順番で慣れさせ、最終的に人を殺すらしい……

この話を最初に聞いたとき、やっぱり暗殺部隊なんだなあ実感した

……ん？ なんだか、外がざわめいてるな

俺は近くにいた数ヶ月先輩の人に聞いてみた

「なんかあつたんすか？」

すると、先輩は暗い顔をしてこう答えた

「ボスたちが本部にクーデターを起こしたらしいんだ。

俺達新人は戦闘に不慣れだからって内緒にされていたんだとさ」

……え、もしかしてさっきのスクアーロの発言って、俺を連れて行くか行かないかを決める重大なものだったんじゃないか！？

「……………結果、どうなったんだ？」

俺がそう聞くと、先輩は暗い顔をする

「結果は……………こっちの負けだ。これから先、ヴァリアーは活動停止になるらしい……………」

……………ん？

これって“ゆりかご”か！？

もしかして、スクアーロに会った時に少し間違えてたらクーデターに参加させられてたんじゃ…………

先輩、入隊してすぐに活動停止とか運無いな

そういえば、翡翠はどうしてるんだろう？

所属している組織が活動停止になるというのに、どうやら俺は彼女のほうが重要らしい

〈数時間前・翡翠視点〉

「今日も仕事がある。」

うまくいけば今日中に帰れるが、もし失敗したら二度と会えないかもしれない」

お兄様は言った

今まで任務に失敗したことのない「お兄様」がもし失敗したら、と言った

それは、敵が強大なことを表しているのか、それとも、うまくいかないかもしれないという不安があるのか……

僕はいろいろと考えてから、やっと口を開いた

「お兄様は失敗なんて絶対にしないよ！

だって今までお兄様が失敗したことなんて一度もないじゃないか  
」

僕がそう言うと、お兄様は瞳の奥に安堵ともう一つ、罪悪感なのか、決意なのかは分からないが、感情を浮かべていた

僕がお兄様を見つめていると、しばらくしてお兄様が口を開いた



「……翡翠、お前はジジイが好きか？」

神妙な顔していきなりなんだ？

お兄様の言う　ジジイ〓お父様なので、少し分かりづらい

「はい、好きですよ？　それとお兄様、前にも言いましたがお父様をジジイだなんて言わないで、ちゃんと親父おやじとか父上とかお父様と呼んであげたらどうなんですか？」

僕がそう言うのと、お兄様はあからさまに不機嫌な顔になった

お兄様が父様を「父上」と呼んでいる姿を思い浮かべて、僕は吹きそうになった

「そんなのオレの勝手だろ。それじゃあ、ジジイがいなくなったら嫌か？」

まったく……

さつきからお父様の事ばかり……

「お兄様？ 一体何なんですか、さつきからお父様の事ばかり……

もしかしてお父様と喧嘩でもなさったんですか？」

お兄様は黙り込み、数分後に口を開いた

「これからケンカするかもな……それと、質問に答えるよ」

……ハア

まったく、これからファミリィを巻き込んだの親子喧嘩かい……

でも、これから8年間、話せないし会えないから、今のうちにたくさん話しておかなきゃな！

「嫌か、嫌じゃないかで言ったら嫌ですけど、お兄様がいなくなるのも私は嫌ですよ？」

その瞬間、お兄様の動きが止まる

そう、このヒトは愛情に慣れていないのだ

あんなにも、父様や私に愛されているのに

まあ、これだから、からかいがあるのだけれども…… オイ！

「世辞は止せ」

お兄様はそう言って、また顔を窓へ向ける

外に何か気になるものでもあるのだろうか？

「あのねえ、お兄様……私達は家族なんですよ？

それも血の繋がった兄妹きょうだいじゃないですか！ 兄妹は世辞なんか言  
い合いません。

根っからのホンネです！ 少しは私を信じてくださいよ……

母様が死んで、私の肉親は父様とお兄様だけなんですよ？

分かってますか？」

僕の長い説教みたいな話が一旦終わり、お兄様がつぶやく

「肉親、か……………」

その微弱な呟きを僕は聞き逃さなかった

「とにかく、私はお兄様と血の繋がった兄妹なんですから心配ぐらいさせてくださいよ。」

わたしの兄は、兄妹は……………お兄様だけなんですから」

お兄様は普段、感情を表に出さない

だから余計に心配なのだ

自分ひとりで抱え込んでしまわないか、と

その反面、お兄様を見ているとこの人に付いて行こう！という、兄貴<sup>にじ</sup>的オーラが滲み出ていることに気が付く

不意に、お兄様の口が動いた

「心配ぐらいさせてくれ、か……もう一度言っ。

今回は失敗したらもう会えないかもしれない……………

……だから、お前に心配させないよう努力するよ」

僕は驚いた

お兄様が努力すると言ったのだ

原作では、まずありえないであろう変化だ

僕という存在も、少なからず彼らに影響しているのだと実感した

そして、僕はお父様にも言ったであろうセリフを口にする

「お兄様？ 私はお兄様の妹であるのに誇りを持っていますが、少

しだけ……

……ほんの少しだけ残念なことがあるのです」

「なんだ？ 急に」

僕の突然の発言にお兄様は驚く

そして、僕は次の言葉を口にした

「お兄様がカッコ良過ぎて、妹じゃなかったら惚れてしまってますわ！」

絶対に、断言できます。可愛い年下もいいけれど、頼れる年上も良いですね」

この場面での可愛い年下とは綱吉のことなのだが……

お兄様は予想もしなかった言葉を受け、困惑している

ああ、なんてかわいらしい

バゴンッッ

勢いよく、扉が開かれた（勢い良すぎだろ）

と、一応ツツコミを入れておいた

「うゝお おい！ もうすぐ時間だぞお」

明らかに場違いな彼に、僕は苦笑いをしていた

皆さん、お気づきのスクアーロ部隊長です

まあ、18年後には副隊長ですけれど

「うゝお、おい翡翠イ何笑ってんだあ！」

上司の部屋の扉をノックもしないで蹴飛ばす非常識な人間なんて何処にいるのだろうと思っていたが、毎度思う

ヤツは失礼だ

「上司の部屋の扉を蹴飛ばすなんて私には考えつきませんわ。

貴方<sup>アナタ</sup>の脳ミソを一度覗いてみたいですわね？ お父さん」

最後の言葉にキレたのか、ものすごい形相で睨んでくるが、お兄様の前なので襲って来れない様子

まあ、襲い掛かってきても瞬間移動で逃げれるしね

「次にお父さん言ったら3枚に下ろすぞお」

コイツはグロキシニアか？と思うほど頭の血管が浮き出していた

それを見た途端、僕は吹いてしまった



そのことに、また血管がピキピキいつているのだから、実にオモシロイ

「時間だ。行くぞカスザメ」

お兄様は立ち上がり、愛用の拳銃を懐ふところに入れた

「あつ、お兄様、約束してくださらない？ 早く帰ってくるって。

もし約束を破ったら、次に会った時に私の欲しい物全部買ってね  
」

せめてもの、イヂワルだ

僕は、結果を知っているからこそ、この行動をとった

「分かった分かった。早めに帰ってくるから」

お兄様はそう言って部屋を出て行った

僕は、その後姿を見送った

後に部屋には僕以外、誰も残らなかった

そして僕はその後8年間、兄の姿を目にすることは無かった

親子喧嘩（後書き）

ああ、ザンザスってば翡翠ちゃんにいぢ繰られて可愛そうに（笑）

9月1日修正

く灰く（前書き）

すみません・・・原作を始める前にこれだけは書いておきたかったです

それとちょっと急だったかな？

く灰く

く輝夜視点く

ゆりかごから1週間がたった……

俺らヴァリアーは仕事はもちろんだが、練習でさえも制限されている

そして、今日も俺は魚を裁いている

……なんでだろう？

魚が3枚ではなく、2枚におろされてしまう

俺って料理の才能が無いのかな……？

そういえば翡翠も俺の料理が下手だとか言ってたっけ……？

クソッ、あの死神め！

くれるんなら料理の才能の方が良かったよッ

そんな事を俺が考えているときに、誰かが俺に話しかけてきた

「うゝおゝおい！ なに１人で百面相してるんだあ？」

……………エッ！？

……………ウソ……………だろ？

俺はその声を聞いたとき、顔の血の気が引いていく音をハッキリと聞いたんだ

「スクアーロって死んだはずじゃ？」

だってそうだろ？

ヴァリアーは負けたんだから、幹部だって殺されるはずだ



俺の背中に峰打ちが当たった音がッ

俺はすぐさまスクアーロを睨<sup>にら</sup>んだ

「いきなり何すんだよ！」

「急に奇声を叫ぶなああ！」

ごもつともな発言です

……む！　そういえば、なぜスクアーロが？

「なあ、なんでスクアーロがここにいるんだ？」

「輝夜、お前に話がある。すぐに、裏庭に來い」

スクアーロは、それだけ言うと、去って行ってしまった

「あんなに、傷だらけなのに何で動いていられるんだ？」



俺は思った疑問をボソツと口にした

く数分後く

俺はすばやく魚をさばき、裏庭にダッシュで向かったのだ！

うおっスクアー！口発見なのだ！

「それで、俺になんの用なんだ？ スクアーロ」

俺は話を切り出した

コイツが俺に用って……………なんだ？

幹部への昇進か？

いや……………早すぎるし、今なっても意味無いし

スクアーロはなにか気まずそうな顔をして言った

「……………それはだなあ、お前にはヴァリアー抜けてもらう」

……………ハ依依？

「もう一度言っぞあ。お前はヴァリアーを抜けることになる」

……… ってウソおおおお！？

「俺がヴァリアー抜けんの！？　なんで？？」

俺はスクアーロに向かって叫ぶ

スクアーロは俺の問いに答える

「お前はもともと金を稼ぐために、手っ取り早く暗殺にしたからヴァリアーに入れられたんだあ。それでも、ヴァリアーが活動停止になれば、仕事ができねえからお前も金が稼げねえ。だから、入っている必要が無くなったんだあ………ま、ガンバレ」

……… 最後、軽くないですか？

でもまあ、理屈は合ってるんだよね

……もともとそうだから

ウンウンと、俺は顎<sup>あご</sup>に手を当てて頷<sup>うなづ</sup>く

その様子に納得したのか、スクアーロは立ち去ろうとする

そのとき、平然と、いつものように話す彼女の声が聞こえた

「あらあ？ どこに行くのかしら、お父さんったら」

（翡翠視点）

「あらあ？　どこに行くのかしら、お父さんったら」

僕がそう言つと、何かがピキツという音をたてた

「うゝお　おい！　オレのことはお父さんって呼ぶなって言つたよなあ！」

振り向きながら、そんな言葉をスクアーロは発していた

……おや？

輝夜がなにか勘違いしてるな

僕とスクアーロがホントの親子だと思ってるよアイツは

「違うぞ輝夜。僕とスクアーロは断じて親子ではないぞ？　僕がただ単にそう言っているだけだ。だいたい、こんな奴から生まれて来たくもないぞ」

本当に輝夜はアホだなあ

「生まれて来たくもないってどういうことだああ」と叫んでいる  
スクアーロは無視

輝夜は納得したのかしてないのかわからない表情で固まっている

そうだ、コイツのことは放って置いて本題を話さなければ

「ねえ、スクアーロ。お兄様は……………どこ？」

瞬間、スクアーロの顔が引きつった

スクアーロは数秒、考え込み、口を開いた

「…なんのことだあ？」

あくまでコイツはしらを切るつもりか……………

「皆、傷だらけだしヴァリアーは活動休止だって聞いたわ……………反

乱でも起こしたのかしら？」

今度は少しもスクアーロの顔は動かなかった

それでも、僕には分かる

「アタリ……ね。お父様や家光さんは教えてくれなかったけれど、やっぱりそうなのね……負けたんでしょ？ あんた達」

「……………」

僕の問いかけにスクアーロは答えない

数分、僕たちは睨みあったが、僕は根負けして俯いた

「お願い……！　これだけ分かれば良いから……お兄様は……生きてるの？」

故意に声を震わせる

きつとお兄様は原作通りに生きているだろう

しかし、心配なのだ……

もし、僕が生まれたことで原作が壊され、お兄様が死んで、僕が代わりになったりはしないのか？ と

すると、かすかにスクアーロがこぶや呟いた

「……………死んでは、いねえよ」

スクアーロにしては小さすぎる声量だったが、それは僕を安心させるには十分だった

「よかったあ！」

つい、ボソリと言ってしまったが、輝夜が以外なモノを見たような目つきをしていた

あ、そうだ。アレを渡さなきゃ！

僕はあるものを2つ取り出した



「あの……お腹、空いてると思ったから………食べて？」

普通に言っ たつもりだったが、輝夜が「なんなの、このギャップ！  
萌えるっ」などと呟つぶやいていた

勝手に燃えてる………字が違うつて？ 合ってるよ

2人は僕の手からおにぎりを取り、スクアーロが先に食べた

「うおっ！ すっぺえ！！ なにを入れたんだっ 翡翠ィ！」

何度見てもスクアーロの反応は面白いなあ

いつも僕が苦い料理や辛い療理持つてきてるのに、なんで今日は警戒心ナシなのかな？

「それ梅干つていう日本ジャッポーネの伝統の漬物」

ワオ 輝夜の目がキラキラしてきたよ

コイツってば梅干好きだからなあ……って、豪快に1口

「ギョエツ<sup>にげ</sup>苦え……な、なんじゃこりやあ！」

輝夜のおにぎりからは緑色の物体が顔を覗<sup>のぞ</sup>かせている

ギョエツってコイツ……さかなクンかよ

「それはゴーヤだけど……何？ その訴えるような目は」

なんで皆、同じような反応をするんだろっ……？

「そんなに苦いかなあ？ 僕は結構気に入ってるんだけど……  
何？ その信じられない的な目は」

スクアーロは先ほど水を求めて走っていった……魚かよ

あっ……おにぎり1個残ってる

僕はもう食べたしな（塩味のおにぎり）

「どうしよう……ほとんどの人に食べさせたしな。今日は消費係  
犬と千種）がいないしな」

ほかにあげてない人………

なるべく原作キャラか親しい人……

あつ、白ちゃんにあげてないや

そう思った僕は、すぐさま白ちゃんのもとへ向かって行った

くある路地裏く

ああ……………どうしよう……………

実は、白ちゃんと会った路地裏に居るんだけど……………迷っちゃった

一応、白ちゃんのことテレパシーで呼んでみよ

『もしもし白ちゃん、聞こえてますかー？ 私は今、白ちゃんと会った路地裏に居ますので大至急、来て下さーい さもないと……………フフフフフ』

よし！　おーけーだね　ホントに聞こえたかは不明だけど

↓10分後↓

暇だなー　うん、暇だ

やっぱり聞こえてなかったのかな？

しょうがない……………帰るとするか

そう思って、テレポートしかけたとき、彼は間に合いました

「翡翠ちゃん見つけ」

わっすっごい息切れてるよw

なんか悪いことしたかも…………

ホントにだいじょーぶかな？

「白ちゃんだいじょーぶ？　息切れすっごいよ」

なんか、ホント申し訳ないような…………

いや、スミマセンデシタ

白ちゃんはハアハアと未だ息切れをしており、走ってきたことと、  
疲れていることは明確だ

「とりあえず…………　お水でも飲む？」

一体どこから出したんだ？　この水は、と自分でも不思議に思った  
が気にしない

白ちゃんはコクンと頷いたので水を手渡す

ゴクッゴクッとすごい勢いでペットボトルの中の水が無くなっていった

「ップハ〜……………生き返った〜ありがとうね、翡翠ちゃん」

どこの風呂上りのオッサンですか……………

まあ、落ち着いたようだし話してもするか

僕が近くにあったビール箱に座ると白ちゃんも同じようにして座った

「すごい息切れてたけど……………もしかして走ってきたの?」

そっぴゃあ、自分が10分で来いと言ってたね

10分でこれる距離じゃなかったから走ってきたのかな?

今更ながら、当たり前前の質問をしてしまいましたね……………すみません

「驚いたよ、まさか授業中に急に翡翠ちゃんの声が聞こえるんだもん。ビックリして立ち上がったよ。それで先生に怒られたけどね」

うつ……………それはまたまた悪いことをしたな……………

うつ……………アレエ？

「……………授業？　白ちゃん学校に通ってるの！？」

驚いて、つい大声を出して立ち上がってしまった……………すみません

僕はすぐ座ると、白ちゃんの方を見る

彼も驚いたようで、目を大きく開けている

「普通は通ってるでしょ？　もしかして翡翠ちゃん、学校行って無いの？」

コクン、と頷うなづいてしまった



だってホントの事なんだもんっ

僕が顔を赤らめていると、白ちゃんは「そっか」と言った

「ごめんね、なんか白ちゃんに悪い事しちゃった」

ハハハ、と彼は笑った

まるで、他人の事のように

「どうってことないよ。そんな事よりも、僕のはまた翡翠ちゃんに会えた事の方が重要だからね」

そういえば、これで会うのは2回目だ

白ちゃんとの連絡手段が無かったため、今まで会えなかったのだ

「そういえばさあ、どうやって僕に話しかけたの？ まさか、超能力とか？」

図星です……………なんて勘のいい人、とか思ったけど、あの状況で

はそうとしか考えられないだろう

「うん……私ね、超能力が使えるの。家族にも話してないんだからね、内緒だよ？」

白ちゃんは、またまた驚いて目を大きく開いた

そして、数秒たって頷いたうなづ

「分かった。でもね、最後のアレは怖かったよ？ さすがに」

アレ？

ああ、‘フフフフ’のことが

そんなに怖いのかな……雪奈といい白ちゃんといい

まあ、とりあえず謝らないと

「ごめんなさい」

そう言っつて僕は俯うつむく

ポフッ、と僕の頭の上に白ちゃんが手をのせる

「まあ、いいよ。でも、次はもうちょっと優しくね？ それと……」

それと、なんだ？ と思った瞬間、白ちゃんが僕の真正面に来た

白ちゃんは膝を地面について、僕の背と同じぐらいになる

目の前に白ちゃんの顔が………え？ ナニコレ

まさかの恋愛フラグとかじゃありませんよね

ハハハ、それだったら彼はロリコンかなにかの性癖をお持ちの方のようですねアハハ

僕がこうして混乱していても、白ちゃんはおかまい無しに喋る

「この眼どうしたの？」

アア、ソノコトデスカ

「あの、えっと……悪いマフィアにね、知らない所に連れ去られて……うーんと、人体実験施設？　ってゆーところで何日か過ごして……」

オイオイ、ホントの事言っちゃっていいのかよ？

“人体実験施設”という言葉で白ちゃんの眉間にしわが寄った

「じゃあ、その人体実験やられたの？　それで目の色が変わったの？」

コワイヨ白ちゃん……

おもわず気迫で頷いちゃったよ

「他はなんとも無い？」

心配してくれているのか、彼の口からそんな言葉が出た

僕は、その言葉に即刻、頷いた……………ダッテシロチャンノメガコワ  
インダモン

「よかったあ」

あー、その言葉僕も今日言ったな……………何か、忘れて……………

「あゝ ああああ！ おにぎり忘れてたっ！」

ゴメンナサイ……………突然の奇声にビックリしてたね白ち  
ゃん

（数分後）

「結構おいしいね……………この、ゴーヤっていうのとおにぎりが以外  
に合う」

それが第一声でした……………

「ゴーヤおにぎりをおいしいと言う仲間が出来たことに喜ぶべきか、  
つまらないリアクションにガツカリするべきか

……………迷う！

「そういえば、今何時？」

これもスツカリ忘れてた

「午後の4時半ぐらいじゃないかな。何か用事でもあるの？」

……………4時半はヤヴァいっすね

自由時間30分オーバー……………ディリアに叱られるっ

用事っちゃあ用事だね

「そうなの！ ごめんね白ちゃん。また会おう？」

「うん……………時間が合ったらね」

僕はその言葉を聞いて、テレポートをした

なぜだか、白ちゃんの傍にいと落ち着くのだ

全然違うけど、似てるんだ……………お兄様に

ゝ 8 年後 〵

部屋には朝の明るい光が差し込んでいる

部屋には、イスに座る少女とその正面に立つ少年の 2 人だけだ

少年は彼女の綺麗な翡翠色の瞳を見つめる

そして、少女の口が開く

「今日より、お前は 10 代目候補沢田綱吉を影から見守り、危険から遠ざけよ。絶対に守りぬけ！」



少女の言葉を聞き、次は少年の口が開く

「……お前は、来ないのか？」

少年の言葉を聞いた少女は口角をあげ、答える

「研究が一段落したらすぐ行くよ。でも、報告書は毎日書け！  
るな。並盛中学には書類を送ってあるから、すぐ通えるよ」  
怠おこた

少年は部屋を出て空港へ向かう

その顔は嬉々（きき）に溢れていた

ゝ灰ゝ（後書き）

長かった・・・

次は必ず原作を開始させます！

心機一転\*転生者紹介\*(前書き)

すみません、区切りがいいので説明をいれさせてもらいます

## 心機一転\*転生者紹介\*

転生者1人目

名前：田川翡翠  
たがわひすい

性別：女

年齢：15歳

見た目：髪は黒艶くろつやのある艶あでやかなロングで膝ひざぐらいまである。目の色はエメラルドで二重でパッチリとしている。結構な美少女（美女？）で姐御系あねこけい。身長は165センチだけどまだ成長期の最中で本人は期待している（目標は170センチ）。

性格：大体の人には敬語を使うが、親しい人の前ではタメ口である。一人称が「私」と「僕」。輝夜かくやには強暴だが、それは彼女なりの愛情表現（アメと鞭ムチ）。結構なブラコン。女の子が泣くと必ず泣かせた男を殴る。泣かせたのが男でない場合は輝夜に八つ当たる。相手によってツツコミとボケを切り替えたりする。

好きな人：自分に正直な人、からかいがいのある人、面白い人、優しい人、仲間思いな人

嫌いな人：他人を理由にして生きる人、ウザイ人、性格がブサイクな人、甘い人、

好きな色：黒と白

趣味：読書、イタズラの内容を考えること、輝夜イジリ

つけたし：ボンゴレ9代目の娘で一応、綱吉の許婚。頭はよく前世では常に学年1位の学力だったが、体育が苦手だった（現在では超能力を使ってズルをしている場合も）。

何か一言：「一言？　そうだね……………この世の中って結構おもしろいよね」

転生者2人目

名前：新崎雪奈  
あらさきゆきな

性別：女

年齢：13歳

見た目：髪は茶髪でひじぐらいまであるが、いつもツインテールにしている。目の色も薄茶色でクリクリしている。雪奈も美少女の部類で、雪奈の場合は庇護欲をかきたてるような可愛らしさで妹系。身長は146センチ。

性格：誰にでも優しく、モテるためファンクラブが結成されている。しかし、獄寺隼人とは気が合わず苦手としている。キレると自分で何を言っているか分からなくなるときがある。主にボケを担当(?)している。というより天然。

好きな人：翡翠ちゃん、綱吉君、恭君、輝夜君、仲間を大切にする人、優しい人

嫌いな人：獄寺君、翡翠ちゃんの悪口を言う人、綱吉君をいじめる人、仲間を大切にしない人

好きな色：ピンクとオレンジ

趣味：運動

つけたし：雲雀恭也のいとこで綱吉の幼馴染。運動神経はバツグンだが頭が残念な子。前世では翡翠と同じ名門高校に通っていたが、それはソフトボールの推薦入学でテストの順位は毎回最下位である。現在は前世と同じソフトボール部に所属している。輝夜のこととは知らない（翡翠が教えないため）が、輝夜が翡翠に貸したりボーンの手行本を借りてファンになった。

何か一言：「今の中学校の勉強が2度目なのにわからない……！誰か教えて！」

転生者3人目

名前：鳳雷山輝夜<sup>ほうらいざんかくや</sup>

性別：男

年齢：13歳

見た目：髪は金髪で耳ぐらいまである。目の色は藍色で一重。10人中10人が振り返る超絶美少年だけど、翡翠には逆らえない。身長は179センチ（いまだに成長中）。

性格：結構な常識人だが翡翠を絶対としている。自身のファンクラブが結成していることに気付かない鈍感なやつ。ツンデレがタイプ。主な担当（笑）はツツコミ。

好きな人：優しくておしとやかで<sup>やまとなでしこ</sup>大和撫子な年上の女性（タイプの女性）、正義感のある奴、素直な奴



嫌いな人：ウザイ奴、自慢する奴、仲間を平気で見捨てる奴

好きな色：灰色

趣味：音楽鑑賞

つけたし：前世では普通の高校に通っていたため、頭脳は普通だが転生してからは翡翠に強制的に覚えさせられているため、並中の中では頭が良い部類に入る。暗殺を仕事にしているため、戦闘能力は高く、イタリアでも有名だが、一部の人間にしか顔を明かしていない。現在、ボンゴレ所属の殺し屋ヒットマンで翡翠に雇われている。雪奈のことは前世で写真を見せてもらったことぐらいしか知らない。料理の才能が壊滅的に無いが、それ以外の家事ならばたいいのことは出来る。

何か一言：「一言かぁ……………ヨロシク、ぐらいしか思いつかないなぁ」

以上！

心機一転\*転生者紹介\*(後書き)

書いててやっぱ輝夜が一番の常識人だなあと思います

3月22日修正

9月9日再修正

アイツ確信犯だろ！！by輝夜

（輝夜視点）

現在、俺は並盛の住宅街で俺の家の住所が書かれている紙とにらめっこをしている

ぶっちゃけ、迷った……………だって道知らないんだもんっ！

うう……………どうしようか？ ああ、夕日は綺麗だな

って現実逃避してる場合じゃないな

とりあえず、歩いたほうが良いよな

そして、通行人がいたら聞いてみよう

そう思い、俺は歩き始めた

数分経過……ようやく前方に人影を発見！ 後ろ姿からして女性のようだな

俺は急いで女性に追いつき、肩を掴んだ

別にやらしいつもりなんかないぞ！？

「すみません。道、教えてもらっても良いですか？」

女性は振り返った

「え？ ええ、いいですよ」

そう女性は言った

なんて良い人なんだろう……しかも結構美人だし

……ん？ どこかで見たことがあるような、無いような

まあ、いつか

ちゃっちゃんと道聞こう

俺は女性に住所の書いてある紙を渡した

「この住所なんですけど……」

俺の住所を見た女性は驚いた顔をして俺に言った

「まあ、この住所ったら私の家の隣じゃない」

マジで！？ 何この偶然！ すごいラッキーじゃん

「偶然もあるもんなんですネ。俺、鳳雷山輝夜っていいいます」

お隣さんなら名乗っておいて損は無いし、いずれ挨拶に行かなきゃならなかったから、さっきも思ったけどすごくラッキーだ

そう思い、俺は女性に名乗った

「本当にすごい偶然ね。私は沢田奈々っていうの」

.....え？

沢田だつて！?!?!?

じゃあこの人、ツナの母親か!?

メチャ美人ジャン優しいし

翡翠の奴……何が適当に選んでおいた、だよ！

完っ全に仕組んでんじゃねえかつ

「よろしくね輝夜くん」

俺は奈々さんの声で現実に戻された

「あ……………ヨロシクオネガイシマス」

「じゃあ、行きましようか」

奈々さんはそう言つと歩き始めた

「そついえば、輝夜くんって何歳なのかしら？」

歩き始めて数分後、奈々さんが話しかけてきた

「俺は13です。明日から並盛中学に転入する予定です」

俺はそう答えた

すると、奈々さんは驚いたよう顔をして言葉を返してきた

「13歳なの？ 私の息子も13歳だけど輝夜くんほどしっかりしてなくて、」

最近家庭教師を頼んだほどのよ」



まあ、そりゃあダメツナですから、と言いつつになつたが押さえ込んだ

「奈々さんつてお子さんがいらっしやるようには見えないぐらいお美しいですよ」

うん、これは本当のこと&俺の本心だ

ツナ羨ましいな

奈々さんは俺の言葉を聞き、「そんなことないわよ」と照れていた

美人ダナー

「1人暮らしなの？」

またまた奈々さんが質問してきた

「はい。両親は8年ぐらい前に死んでしまつて……その後、育ててくれた人が、

日本は治安が良いから行って来いって言ったんです」

俺がそう言つと、奈々さんの顔が曇った

「それは、大変だったんでしょね」

ああ、この人は他人の悲しみをまるで自分のことのように感じる、とても優しい人なんだな

それに加え、無邪気な笑顔

まるで聖母みたいだな

そう思っていると、奈々さんがとある家の前で立ち止まる

「着いたわ、ここよ。そうだ輝夜くん、家で夕ご飯食べて行かないかしら？」

あああ、食<sup>く</sup>いてえ……………腹減<sup>く</sup>ったしな

「すみません、荷物を今日中に片付けたいので、また別の機会に」

俺がそう言っと、奈々さんは残念そうな顔をして「そうなの、また誘っわね」と言って家の中へ入って行った

↓数時間後↓

「ふう」。これにて掃除は終了つと」

俺が軽く背伸びをすると背中がボキボキとなった

やっと片付けと掃除が終わったよ

ふと、時計を見てみると、もう10時を指している

「あゝ、もうこんな時間かよ。もう疲れたしシャワー浴びて寝るか」

俺は夕ご飯を食べず、シャワーを浴びて寝着になってフカフカのベ  
ットにダイブした

目覚まし時計をセットせずに……………

く翌日く

パチクリ

朝の明るい日差しを受け、目が覚める

目が覚めた俺がまず思ったこと

「今、何時だ？」

転校初日とはいえ、少しでも遅れてしまったてはあの最強の風紀委員長  
長の餌食になることだろう

俺はベットからは出ずに、目だけを動かして時計を探す

なれない部屋だから、時間がかかった

「え」と現在の時刻は……………8時40分？」

……………え？ メッサ遅刻じゃね？

このとき、俺は翡翠の言葉を思い出した

「時差ボケとかあるかもしれないけど、目覚まし時計なんて輝夜に  
は必要ないでしょ？」

学校にはちゃぁんと、遅れないで行ってよ？ ……………フ  
フフフ」

アイツ、最後笑ってたじゃねえかつ

俺は心から叫んだ

「アイツ確信犯だろっ！！！」

チクショウ！ こうなったら朝飯も抜いてやるっ

うう、2食抜きはキツイけど仕方が無い

俺は急いで服を着替え、制服を着て家を飛び出た

程なくして、並盛中学校に着いた（今度はちゃんと道覚えたんだよ  
っ）

さっすが俺！ 門を易々（やすやす）と飛び越え、昇降口まで一直線に駆けた

昇降口に……人影？

今の時間だったら風紀委員か？

これで雲雀だなんてオチは面白くない！ ってか雲雀だったらオワリだけどな…ハハッ

俺は苦笑いをしながら走って行った

俺があともう少しで昇降口に着く、という所で人影がこちらへ振り向いた

瞬時に分かる、カリスマ性と本能的な恐れ

やっぱり人影は雲雀のようでした

では済まされない

雲雀は口を開く

「君、遅刻だよ」

バツチリと目が合ってしまった……誰のことだろうかと辺りを見回しても、いるのは俺1人

とりあえず………言い訳だよな

弱腰とか言っちなよ？ これは生き残るための手段なんだっ！

「あゝ俺転入生で、何時まで登校とか知らなくて……？」

アハハハハハハハ、と笑ってみるが雲雀の目がヤヴァイ

数秒たったあと（俺には数時間に感じた）、雲雀が俺に言ってきた

「ああ、なんか有ったね。君の写真」

オイオイ……翡翠ってば写真なんか送ったのかよ



雲雀はハアとため息をついた（なんで？）

「着いておいで。教室に案内するから」

雲雀はそう言っているとスタスタと歩き始めてしまった

俺はあわてて雲雀の後を追う

咬み殺されなくてよかったあゝと思ったが、たかが転入生は咬み殺すほどでもないってか？

というか、雲雀が案内してくれるって普通ありえないよな……

なんか裏にあんのか？

しばらく歩いたり階段を上ったりした

「ここを真っ直ぐ行けば君の教室だから」

雲雀はそう言うところかへ行ってしまった

最後まで送ってくんねえのかよ……そう思いながら俺は歩き始めた

そつえば俺の転入するクラスはツナ達がいる1ーAだ

誰かさんが仕組んだ感じもするが気にしないでおう

「オツ、ここだな1ーA」

…ん？　なんか教室の中が騒がしいな

ま、いつか

中に入るゝ

ガラッ

「すみません、遅れました」

その時、俺は生徒全員の注目の的となった

く雪奈視点く

つい先ほど、獄寺君が紹介された

マンガで見るよりカッコイイなく翡翠ちゃんにも見せてあげたい

ガッ

この音は獄寺君が綱吉君の机を蹴った音だ

あゝマンガ通り……ついに原作開始なんだね

これまでどれだけ待ったことが……

つい先日、綱吉君が京子ちゃんに告白したって聞いてから「ついに始まったの!？」って思ってたんだ

私は風邪で休んだから、まだリボン君にも会ってない

ガラッ

誰かが教室の前の方のドアを開けた

そこには、すごいイケメンの美少年が立っていた

「すみません、遅れました」

声も綺麗で、声優になったっておかしくない

獄寺君が不良銀髪少年なのに対して、彼はマジメな金髪少年という所だろうか

原作ではありえないことだが、私達というイレギュラーがあるため、何が起きたって信じられる

「おお、君も自己紹介したまえ」

担任の先生がそう言うと、彼は黒板にスラスラと綺麗な漢字で「鳳雷山輝夜」と書いた

……読めない

……でも、

「綺麗な、字」

思わず口に出てしまっていた

「ホウライザンカグヤといいます。イタリア生まれイタリア育ちです。」

「よろしくお願いします」

彼、いや輝夜君がそう言っと、先ほどの獄寺君のときと同じような反応が見られた

「席は〱新崎の隣だな」

先生は言う

へえ〱新崎さんの隣かあ……………いいなあ新崎さん……………つて、新崎って私じゃん！

「オイ新崎、大丈夫か？」

「ハッ、ハイ！」

一瞬、思考がフリーズしてた……………

私が返事をしたことで、席の位置が分かり、輝夜君がこちらへ歩いてきた

「よろしくね、新崎さん」

輝夜君はそう言った

一瞬目が合った

私は彼の深い海の底のような瞳に見とれていた

輝夜君にはどうってこと無いかもしれないが、私はイケメンの免疫がない分、慣れるまで時間がかかりそうだ

うっ……………こんな時に翡翠ちゃんがいてくれたらな

アイツ確信犯だろ！！by輝夜（後書き）

すみませんが一旦区切ります

なんか雪奈ちゃんにフラグが立ちそうだよ！？輝夜っ

結構、雲雀さんもイケメンだと作者は思っているが……

9月9日修正



うわぁ・・・何この急変ぶりbY雪奈

（雪奈視点）

私はチャイムが鳴り終わった後、綱吉君に話しかけようとした

けれど、綱吉君は気付かずどこかに行ってしまった

後を追いかけると、なにやら性質たちの悪い3年生にぶつかったらしく、走って行ってしまった

そして私は綱吉君が逃げ込んだ、中庭に着いた

「綱吉君」

私がそう言っただけで彼の肩に手をかけると、綱吉君は私のほうへ振り返った

「なんだ雪奈か・・・ビックリしちゃったよ」

どうやら私のことを、さっきの3年生だと思ったらしい

「ごめんごめん、驚かすつもりはなかったんだけどね」

私がそう言ってアハハと笑うと、綱吉君もつられて笑った

「そういえば雪奈、カゼ大丈夫？」

「うん、もうスッキリ治ったよ。その代わりに体力とか落ちちゃったけどね」

とは簡単に言うものの、現在、絶賛スランプ中なのだ

何をやってもうまくいかない

球の速さや足の速さも、うまく上がらない

バットを振ってもボールが当たらなくなってきたるし

私は運動で一番取って、翡翠ちゃんとの約束を守らなくちゃいけないのに……

そのとき、後ろから声が聞こえてきた

「ム力つく野朗やろうだぜ。目の前でイチャつきやがって」

ご、獄寺君……いたんだ………てか、イチャついてない！

そんな関係じゃないし！

「き…君は転入生の………！」

綱吉君、声が震えてるよ

「そ、それじゃあこれで。雪奈、行くよ」

綱吉君は私の手を取って走ろうとするが、それを防ぐかのように獄寺君が綱吉君の前に移動した

「お前みたいなカスを10代目にしちまったら、ボンゴレファミリーも終わりだな」

獄寺君は普通に平然と言う

「え！？　なんでファミリーのことを？」

綱吉君は驚いた表情を……

ちよつとちよつと、私がいるの無視してボンゴレファミリーの話し  
ちやうの！？

「オレはおまえを認めねえ！　10代目にふさわしいのはこのオレ  
だ！！」

「なんなんだよ急に？　そ……………そんなこと言われたって……………」

「球技大会から観察していたが、貴様のような軟弱な奴をこれ以上  
見ていても

時間のムダだ」

「バレー見てたの！？」

え？　私ったら存在感薄すぎないかしら……………

なんか2人とも話し進めちゃってるし

「目障りだ。ここで果<sup>は</sup>てる」

そう言っと、獄寺君はどこから爆弾を取り出した

「んなあ！？　バ！　爆弾！？」

「爆弾なんて、どうやって日本に持ち込んだんだろう……」  
観<sup>め</sup>点

636

「あばよ」

獄寺君はそう言っ<sup>て</sup>両手に持っていた火の着いた爆弾を綱吉君目<sup>め</sup>掛けて投げた

綱吉君は「うわ！」とか「ひっ」とか言ってるけど、うまく避けるから大丈夫でしょ

ズキユウウウ

瞬間、銃声が鳴り響いた

「ちゃおっす」

ああ！ 生の<sup>なま</sup>リボーン君だ！

すっごくカワイイよ………抱きしめてみたい………

「リボーン」

「思ったより早かったな獄寺隼人」

声！ 声カワイイ！ ってか全部カワイイ

「ええ？ 知り合いなの？」

「ああ、オレがイタリアから呼んだファミリーの一員だ」

「じゃあ、こいつマフィアなのか」

「オレも会うのは初めてだけだな」

その時、今まで黙っていた獄寺君が喋った

「あんたが9代目が最も信頼する殺し屋リボーンか。」

沢田を殺ればオレが10代目内定だというのは本当だろうな」

うわ！　なんか一気に物騒になってきた

一般人の私は今のうちに逃げたほうが良いのかな？

「ああ本当だぞ。んじゃ殺し再開な」

「おい！　まてよ！！　オレを殺るって……何言ってるんだよ、冗談だろ？」

「本気だぞ」

リボーン君、即答ですかい

綱吉君はその言葉を聴いて、「なっ」とか「ま……………」とか呟つぶやいていたけど、急にリボーン君を指差して叫んだ

「オレを裏切るのか？ リボーン！！ 今までののは全部ウソだったのかよ！！？」

すると、リボーン君は拳銃を構えて言った

「ちがうぞ、戦えって言ってたんだ」

「は！？ た……………戦う？ オレが転入生と……………？」

もしかして、私がいること皆さん忘れてるんじゃないでしょうか……………？

私はそう思っていたけど、違ったみたいだ

「じよ、冗談じゃないよ！ マフィアと戦うなんて！！ 逃げよう、雪奈！！」



そう言つて綱吉君は私の手を掴んで走り出そうとしたが、獄寺君が綱吉君の前に立ち塞がる

「まちな」

「うわぁ！」

「え？ 早っ！ てゆーか、未成年はタバコ禁止なのに……」

私の眩きが聞こえていないのか、獄寺君は手にしていた箱の中のタバコ全部を銜え、ライターで火を着けた

「いっ」

「うわぁ……もったいない」

そして、彼はたくさんの爆弾を持ち、導火線にタバコの火を着けた

「なあっ！！？」

「1本ぐらい火が着いてなさそうだなぁ……」

さつきから怯えまくっている綱吉君とは正反対に、私は冷静な意見を述べていた

すると、リボン君は獄寺君のことを説明してくれた

「獄寺隼人は体のいたるところにダイナマイトを隠し持った人間爆撃機だっけ話だぞ。

又の名をスモークン・ボム隼人」

なんかカツコイイな……二つ名ってゆーのかな、そういうの

「そ！ そんなのなおさら冗談じゃないよ！！ 雪奈！ 早く逃げよう」

綱吉君はそう言つと、また私の手を握って走り出そうとするが、そんな所に獄寺君が「果てろ」なんて言ってきて、ダイナマイトを投げてきた

「うわぁーーーーーっ」

しょうがない……こんなんじゃないよ

そう思った私は、数年前に翡翠ちゃんから貰った『痴漢撃退用伸び縮み鉄製棒』を取り出した

これは好きな長さにできるから多用しちゃって所々《ところどころ》に血が着いちゃってるのが特徴なの

そして私は投げられたダイナマイトを全て空に打ち返した

綱吉君と獄寺君は口を開けて啞然としていた（タバコ落ちそう）

「たしかアイツはツナの………」

リボン君はようやく私の存在に気が付いたらしい……

どんだけ私って影薄いの！？

ようやく我に戻った獄寺君がまたダイナマイトを投げてきた

そして私はまた空へ………だって校舎に傷つけたら恭君が怖いんだ

もん！

「これでどうだ！」

獄寺君はさらに数を増やしたダイナマイトを投げてきた

そして、また私はそれを空へ

読者の皆さん、つまらないと言わないで！？ 私だって活躍したいんだもんっ

忘れてる人もいるかもしれないから一応言っけど……私だってヒロインなんだよ！？

そんなことを考えて、気を取られているうちに私は当然のように転んだ

「キャッ」

「ゆ、雪奈!?!」

「ボーっとしてるからだ…………果てる!」

そう言って獄寺君はダイナマイトを綱吉君目掛けて投げた

「どひゃああ!」

綱吉君は変な悲鳴をあげながらも、私の前に（私を守るかのように）立った

……………カッコいいかも

「終わりだ」

「ぎゃあああつ」

「死ぬ気で戦え」

リボン君はそう言っつて綱吉君に銃口を向け、引き金を引いた

ズガン

弾は綱吉君の額に命中した

「グロいなあ……………血い出ちゃってるよ」

綱吉君は1度、後ろに倒れ、死ぬきモードとなって起き上がった

「リ・ボン復活！！！！死ぬ気で雪奈を守る！！！！」

荒々《あらあら》しいですな、普段の綱吉君とは全然違うよ

「消す！！！！」

そう言った綱吉君はダイナマイトの導火線を握り、火を消した

「熱くないの！？ 綱吉君！！！！」

綱吉君の勢いはさらにヒートアップしていった

「消す消す消す消す消す消す消す消す」

「なっ！ 2倍ボム」

綱吉君の勢いに驚いたのか、獄寺君はさらに多くのダイナマイトを投げてきた

「消す消す消す消す消す消す消す消す」

「3倍ボム」

一気に決着を着けようとしたのか、獄寺君はかなりの量のダイナマイトを出して火を着けた

ポロッ

1本のダイナマイトが手から落ちた

それを拾おうとして手を広げ、全てのダイナマイトが獄寺君の足元に落ちた

ジ・エンド・オブ・俺

たしか彼はそう思っただろう

そのとき、綱吉君の声が響く

「消す!!!」

諦めていたであろう獄寺君の足元のダイナマイトの火も綱吉君は消したのだ

「消す消す消す消す消す消す」

シューウウウ

綱吉君の額の炎が消えた……どうやら死ぬ気モードが終わったよ  
うだ



「はあゝなんとか助けられてよかったゝ」

「本当に一時はどうなるかと思っちゃったよ」

そんなことを言っていた私たちに、獄寺君が土下座のポーズをして  
言ってきた

「御見逸れしました！！！！おみそ あなたこそボスにふさわしい！！！！」

うわあ……………何この急変ぶり

綱吉君も私も啞然としていた

「10代目！！ あなたについていきます！！ なんなりと申し付  
けください！！」

「はあ！？！？」

「負けた奴が勝った奴の下に着くのがファミリーの掟だおきて」

「えゝえゝ」

「オレは最初から10代目ボスになろうなんて大それたこと考えていません。」

ただ、10代目が俺と同じ年の日本人だと知って、どうしても

実力を試してみたかったんです……………」

もうしわけなさそうな顔をする獄寺君に綱吉君は黙ってしまう

「でも、あなたはオレの想像を超えていた！」

オレのために身を挺<sup>てい</sup>してくれたあなたに、オレの命預けます！」

「そんなっ困るって、命とか…………ふ、普通にクラスメイトでいいじゃないかな？」

ゆ、雪奈もそう思うでしょ？」

突然のフリに私は反応が遅れてしまった

「えっ？ 私？ 事情は知らないけど、いいんじゃない？ 普通が1番って言うし」

「そーはいきません！

… 10代目に守られなきゃ生きて行けねえ足手まといはすつこんでろー！」

最初は綱吉君のほうを向いて敬語だったが、途中から私のほうを見て睨<sup>にら</sup>んできた

「今回は体力が落ちてただけなの！ なんなのよアンタ！

私の扱いが綱吉君とは全く違うじゃないの！

アンタなんか私の従兄<sup>いとこ</sup>に言えば瞬殺なんだからね！！

……ってゆうか、あと何日かしたらボコられるしねー！」

ちなみに、私の従兄とは雲雀恭弥のことである

一方、綱吉はこんなことを考えていた

（ こ……怖くて何も言い返せない……っーか何なのこの状況って

……

………雪奈のキャラあんなだったけ？

このおかしい状況の中にリボーンの声が響いた

「獄寺が部下になったのはお前の力だぞ。よくやったなツナ」

「な、何言ってたんだよ！ 困るよ」

ニツとりボーンは笑っているが、横では獄寺と雪奈が大きな火花を散らしていた

「ありゃりゃ、サボっちゃってるよ」イッツラ

「こりゃ、お仕置きが必要だな」

「サボっていいのは3年からだぜ」

「うおっ！ イイ女じゃん」

「何本、前歯折って欲しい？」

なんと、先ほどツナがぶつかった3年の不良がそこにいたのだ

（ゲッ……ヤ、ヤバイよ……）

ツナはそう思っているが、2人は違った

「オレに任せてください10代目」

「今ちよつとイラついてんのよ……寝てなさい」

獄寺はダイナマイトを両手に、雪奈は先ほどの鉄の棒を握っている

「消してやら——」

「全治半年ぐらいにしてあげる——」

「ちよっ……待ってよ2人とも！ 鉄の棒はともかく、ダイナマイ  
トは駄目だってー！」

このあと、不良たちは全治10ヶ月の怪我を負った

そんな彼らを屋上から見つめる人影

輝夜はフェンスに寄りかかり、ことの一部始終を見ていたのだ

そんな彼の手には、1枚の紙と鉛筆が握られている

「んゝ報告書ってこんな感じかな？」

『 ＊ 報告書 ＊ 』

題名：獄寺隼人 題名なんて要らなくね？

・ 獄寺隼人と沢田綱吉が接触

・ その場に見知らぬ少女も混入。てか、この子と席が隣

・ 追記

生のリボーンはメチャカワイイです  
なま

沢田の母親はスゲー美人です

獄寺の急変っぷりが面白かったです  
おもしろ

見逃すのは損だと思うので、早く並盛に来てね  
『

「っと、こんなんでいいか。本当に……早く来ると良いな」

彼は知らない………というか、忘れている

数日後、このフェンスを越えて自殺しようとするクラスメイトが出て、一騒動が起きることを………



うわぁ・・・何この急変ぶりb y雪奈（後書き）

長かった・・・ああ、でもこれで雪奈ちゃんのが好きだとい  
う方が増えますように

9月9日修正

男版翡翠だ………by輝夜

〔輝夜視点〕

俺は昨日より2時間ぐらい早く学校に来た

理由？ それは、探検さ！

鍵がかかってたけど、ピッキングして侵入

これは翡翠に教わったんだが、なんで翡翠はピッキングの技術なんかも持ってたんだよ

俺は一人呟く

「ほうほう、ここがあのかの応接室か」

そう！ 今俺はあのかの応接室の前に立っているのだ

「ここで色々と起きるのか……よし、次！」

そして、俺は後ろを向き歩き出そうとした

そう、過去形なのだ

なぜならば、その時いるはずの無い人間の声を聞いたからだ

「どこに行くんだい？ 鳳雷山輝夜」

紛れも無く風紀委員長まきの声でした

「あれ？ 学校には誰もいないはずじゃあ……」

だってこれまで誰にも会わなかったんだもん！

それに鍵かかってたし

なら、この声は空耳だろうか？

「いつまで無視するつもり？ 咬み殺すよ」

モノホンでした

背後からは常人でない殺気が……………

これは振り向かねば、俺の命に危険が……………

「なんでございましょうか？ 風紀委員長殿」

俺はそう言いながら応接室の方を向いた

そこにはかの風紀委員長、雲雀恭弥がいました

えっ？ いつドア開けたの！？ 音とか全然しなかったんだけど

ていうか、俺は六道骸派つつつかファンだから、あんまり雲雀って好きじゃないんだよね……………

俺がそんなことを考えていると、雲雀が声をかけてきた

「いつまでそこに立ってるつもり？ 早く入りなよ」

……言っ事を聞かないと後が怖そうなのでちゃんと入りましたよ？

前言撤回、雲雀恭弥もダイスキです

っていうか、なんか雲雀不機嫌だな……

応接室は意外と綺麗だった

ソファーとか、メチャクチャふわふわで気持ち良かった

なぜ、ソファーがふわふわだということが分かるかというと、現在俺がそのソファーに座っているからだ

「俺になんか用か？」

俺がそう言っと、雲雀は書類みたいなものがたくさん乗っている大きい机の中から紙を1枚取り出した

「昨日、書類整理をしていたら君の書類を見つけたんだよ。」

転入者の写真の一覧に君の写真があったから昨日は案内したけど、

実はまだ君の書類を最後まで見ていなかったんだよね。

すると、裏に面白いことが書いてあったんだよ」

おもしろいこと？ 仕事（暗殺）のことか？

「ホラ、これだよ」

雲雀はそう言っていると、持っていた紙を渡してきた

そこにはこう書いてあった

名前：鳳雷山輝夜

出身地：イタリア

家族：無し

説明：生粋のイタリア人。幼いころに両親を亡くし、孤児院に入れ

られるがすぐに引き取られる。身体能力は高いが頭のキレは悪い。

この文章＋俺の顔写真

ヒドイ言われ様だが、これはあくまで表

問題なのは裏だ

『 恭弥く元気にしてるかい？ 翡翠ですよ さっそくだけど、

この写真の男を並盛中学に転入させてくれないかな？ 組は1  
のAで！

僕もいろいろと区切りがついたら、そっちに行って復学しよう  
と思ってるから、

約2年ぶりの再会というわけなのだ！

輝夜は頭は悪いけど運動神経がいいから、咬み殺しがいいがあると思うよ〜

並盛中学に入れる代わりに、コイツ好きに使っちゃっていいから

じゃ、よろしくね〜  
『

.....なに？ この文章

まず第一に、翡翠って雲雀と知り合いなの！？

それと、咬み殺しがいいがあるとか言うなよ！ 俺を売るな！

そりゃあ、翡翠と比べれば頭は悪いですけど！？

今日返ってくる理科のテストには自信ありますよー



俺の事情は関係無いらしく、1人で百面相をしている俺を無視して雲雀は話を進める

「それで、君には風紀委員に入ってもらおう」

.....なんで、そうなるのかな

風紀委員とかどこから出てくるのさ

「なんで俺が？ それに、素直に入るとでも？」

たまには言い返そうぜ俺！ とか思ってたが、雲雀……いえ、雲雀さんは怖かったです

おもに無表情な顔と殺気が

みなさんちょっと待とうか？

暗殺やってる俺が怖がるなんて一般人じゃありえないんだぜ？

俺だって獄寺みたいに二つ名のある、有名な暗殺者なんだ

「紙には君を好きなように使って良いと書いてある。

風紀委員の仕事をしてもらうんだから、風紀委員に入るのが道理  
だろう?」

理に適<sup>かな</sup>ってる

俺はうまい言葉が思いつかず、言い返せない

「それに、風紀委員にはいろんな特権が与えられてるし、

君が学校の鍵をピッキングしたことは黙<sup>も</sup>っていてあげるけど」

見てたのか!? 時間にしてわずか3秒の早業<sup>はやわざ</sup>を

なんかコイツ翡翠に似てる! オレ様感がツ

「それに、もともと君に拒否権なんて無いけどね」

そう言って雲雀さんはニヤリと笑った……………笑った!?

「……………男版翡翠だ」

俺は自分の顔の血が引いていくのが分かった

そのとき、携帯の着信音が応接室に鳴り響いた

ブルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル

雲雀はチラリと俺を見た

「携帯、出ないの?」

あつ、俺のか…………

雲雀さんに言われ俺はポケットに入れていた携帯を取り出した……………

そういえば、携帯って学校に持ってきて良かったっけ？

「メールか。送り主は……………翡翠!？」

なんという偶然

……タイミングが良すぎやしないか？

俺はそう思いながらもメールを開いた

内容は簡単

『恭弥の言う事を聴け。風紀委員に入れ』

それを見た瞬間、俺は体中から冷や汗が噴<sup>ふ</sup>き出した

えっ？ どこから見てんの？

なんで知ってんの？ リアルタイム？

盗聴器？ 隠しカメラ？

彼は知らない

翡翠が超能力の千里眼を使って見ている事を

見れるならば、報告を書かせる意味も無いのに

再度、携帯が鳴る

プルルルルルルルルルルルルルルルルルル

に、2通目！？

俺はすぐさま内容を見た

『何をボケツとしている。さっさと風紀委員に入れ』

軽くホラーを超えてますよ？

俺は幽霊とか怪獣とかは恐くない

たぶん、天下のザンザスも恐くないだろう

俺が世の中、宇宙で1番恐いもの

俺が一つだけ恐いものは、皆さんお解<sup>わか</sup>りの翡翠ちゃんです

俺は携帯を持ったまま雲雀さんの方を向き、頭を下げた

「風紀委員に入れてください」

その後は早かった

数枚の書類にサインをしするだけだった

もう授業の始まる時間のため、俺は教室に戻った

男版翡翠だ．．．．．by輝夜（後書き）

メールの着信音ってこんなんだっけ．．．？

9月10日修正



何この点数・・・悪すぎでしょby雪奈

（雪奈視点）

1時間目は理科……

テストが返ってくるし、担当は嫌味で有名なあの根津だ

私は憂鬱<sup>ゆううつ</sup>になりながら、自分が呼ばれる番を待った

ハッキリ言って、私は頭が良い方じゃない

前世では名門エリート高校に入ったけど、それは運動面での推薦<sup>すいせん</sup>のおかげ

現在でも前世と同じソフトボール部に所属して、前世同様、勉強そ  
ちのけで部活に取り組んでいる

理科はやヴァイよ……………

体育とか技術なら、まだ大丈夫なんだけど……

国語とか数学とか理科は全くダメ

もう諦めてる

ガラリ

教室の前のドアが開かれた

入ってきたのは中年の男性

彼こそは 根津 銅八郎（55）

仮定とか言って遠回しに悪口を言っし、生徒に嫌な思い（テストの点数を他の生徒にわざと見せる）をさせるし、自分がエリートコースを歩んできたからって調子に乗っている

根津が生徒の名前を呼び始めた

「川田」

「はい」

「栗原」

「はい」

「近藤」

「はい」

どんどんとテストが返されていく

50音順で、次は綱吉君の番だ

「沢田」

「はい」

根津がいつもの仮定の話を持ち出した

「あくまで仮定の話だが……クラスの中で20点台を取って、平均点を著しく下げた生徒がいるでしょう。」

エリートコースを歩んできた私が推測するに、

そういう奴は学歴社会において足をひっぱる“お荷物”にしかない。

そんなクズに生きている意味があるのかね？」

そう言っただけで根津はわざとテストの解答用紙の点数の部分をクリック全員が見えるように曲げた

見えた点数、26点

「うわーーーーーっ」

綱吉君………26点て………平均点大幅に下げてるじゃん

「見えた！」

「わわ、26点かよ!？」

「やっぱりダメツナか…」

クラスがどつと笑った

「次、鈴木ーっ」

綱吉君………かわいそう可哀想………

根津ってば、本当に嫌な奴だ

ほどなくして、輝夜君が呼ばれた

「あくまで仮定の話だが………クラスに100点を取る、頭のいい奴

がいるとしよう。

その生徒は素行も良く、礼儀正しい。

転入してわずか1日で、ほとんどの教師に好感度こうかんどを持たれた。

私が推測するに、その生徒はこれから私と同じエリートコースを進むだろう」

そして根津がテストの点数の部分を曲まげた

「うっわ100点満点かよ！」

「顔も良くて頭も良いのかよ」

「ファンクラブ会員、増えるわね」

す…すごい、輝夜君100点だ

これで運動もできるなら惚ほれるかも

「すごいね、輝夜君。満点だなんて」

私は隣に座った輝夜君に呟いた

「いやいや、イタリアでは大学レベルまで訓えこまれてたから……」

……幼馴染に……」

この年で大学レベル!?

その幼馴染さんってスゴイ人なんだなあ……

性別どっちだろう……? 男の人? 女の人?

それでも、勉強できるって輝夜君はスゴいなあ……

それに比べて私は運動しか取得無いしなあ

その運動も、足を挫いちゃって出来ないし

昨日、転んだ部分がやけに痛む

見てみると、赤く腫<sup>は</sup>れていた

恭君に「誰の所為<sup>せい</sup>なの？」って500回は聞かれたけど、私は答えなかった

「新崎、新崎！ 新崎――っ！！！」

そのとき、輝夜くんの手が私の肩に乗<sup>の</sup>った

！！？！！？！！！！

私は顔が熱くなるのを感じながら輝夜君の方を見た

「輝夜、君？」

すると、輝夜君はこう言った



「新崎さん……………根津が呼んでる」

あつ私、女子の1番じゃん

「ハッ、ハイ！」

私は席を立ち、急いで教卓へと向かった

そして、私がテストを根津から取ろうとすると、根津は仮定の話をはじめた

「あくまで仮定の話だが……………クラスで唯一、一桁ひとけたを取って平均点をものすごく下げた生徒がいるでしょう。」

エリートコースを歩んできた私が推測するに、そんな奴はこの世界にいない！

クス以下のそのまた下の存在だ」

カチン

と、きた私は根津にニツコリと笑いかけた

「根津先生……？ たかが５流大学卒のアンタに言われたく無いんだよ。」

アンタは私以下のクズなんだからさあ」

なお、この発言は小声で言ったので根津にしか聞こえていない……  
…ハズだ

根津が口をポカンと開けているうちに私は席に戻った

点数は………言えない………言えない位くらいやヴァイ

ブツチャケ綱吉君よりも悪いよ

「あーもうヤダ！ 何この点数…悪すぎでしょ」

私がそう言ってテストを机の上置くと、座っていた輝夜君に点数を見られてしまった

ああ……頭の悪いオンナだと思われっちゃったかな

しかし、思いがけず輝夜君は言った

「根津センサー！ 新崎さんの解答で本当はマルのところはバツになってますよー。」

もしかして、それぐらい分かんなかったんですか？

根津センサーってたいしたこと無いんですね

東大卒っての何かの間違いまちがいなんじゃないっすか？

だってえ、東大出たんならそれぐらい分かりますよねエ？」

その瞬間、教室が騒さわぎ出した

「えっ？」

「ウソだろ？」

「でも、100点の輝夜君が言ってるんだから……………」

私は驚いて輝夜君の方を見た

彼の横顔が一段と輝<sup>かが</sup>いて見えたのは気のせいだろうか…………

「なっ…………何を言っているんだ鳳雷山！ この私を疑うのかね!？」

明らかに動揺<sup>どうごう</sup>している根津

そのとき、教室の後ろのドアが開いた

ガラッ

入ってきたのは、獄寺だった

「コラ！ 遅刻だぞ！！ 今ごろ登校してくるとはどういうつもりだ！！」

話を切り替えるチャンスだと思ったのか、根津はここぞとばかりに教卓をバンツと叩いて言った

「ああ！？」

獄寺君は視線で人を殺せるように鋭く根津を睨んだ

「やっぱ、こえーよアイツ……」

「先輩達をしめ返したって話だぜ」

そんな話し声が囁かれる中、獄寺君はあくまで他人のフリをしたい綱吉君の机に向かって歩いて行った

そして、大声でこう言った

「おはよー……いびきます！ 10代目……！」

その発言にクラス中が騒然となる

「なっ、どうなってるんだ!？」

「いつの間に友達に？」

「いや………きっとツナが獄寺の舎弟になったんだよ」

そんな事を言われている綱吉君は挙動不審きぎょうふしんになって、こう言った

「い……いや、違うんだよ………」

綱吉君が青い顔をして言う

やっぱり綱吉君とその他では扱いあつかが違う！

そんな中、根津がまた仮定を始めた

「あくまで仮定の話だが………平気で遅刻してくる生徒がいるとしよう。」

そいつは間違いなく落ちこぼれのクズ達とつるんでいる。

…なぜなら、類は友を呼ぶからだ」

なっ！ クズって綱吉君のこと！？

もうガマンならない

私は立ち上がって言った

「おっさん、よく覚えとけ」

「根津！ よく聞きなさい」

うわ！ 獄寺君と声がかぶった…

それでも言い続ける

「10代目沢田さんへの侮辱はゆるさねえ！…！」

「綱吉君の事、悪く言ったら容赦やじやいしないんだからね！！！」

獄寺君は根津の胸ぐらをつかんだ

ほぼ同時に同じようなことを言ったので私が獄寺君の方を見ると、  
「パクるんじゃない！ こっち見んなっ」という目で睨にらんできた

こっちのセリフよ！ アンタだって私の方見てるじゃない

「あくまで仮定の話だと言ったはず……だ……ッガハア」

獄寺君は綱吉君の方を見てニカッと笑い、こう言った

「10代目、落とします？ コイツ」

「ゲフッ」

さっきから根津が首を絞しめられすぎてキタナイ声を出していた

一方、綱吉君は巻き込まれたこと（名前を出されたこと）にあわてて顔を隠すようにうつずくまった



そのまま私は校長室に呼び出されてしまった

何この点数・・・悪すぎでしょbV雪奈(後書き)

9月17日修正

「ゆ、雪奈ちゃん・・・この点数・・・」b y 網吉

（輝夜視点）

「貴様ら全員、退学だーーーーっ」

校長室に根津の汚い声が響いた

「落ち着きたまえ根津君」

興奮状態の根津を校長がなだめようとするが、無駄に終わる

「これが落ち着いていられるか！ 私に暴力を振るったのですぞ！！

連帯責任で沢田、新崎、鳳雷山も即刻退学にすべきだ」

とりあえず……………ッッコミを入れて冷静になろう

根津よ、校長にタメ口ぐちだぞ

そして、中学は義務教育であり、退学はできないんだぞ

はあ……なんでこんなことになったんだろう

俺はそう思いながらチラリと隣の新崎さんを見ると、顔色が真っ青だった

……大丈夫かな？

今現在、俺は校長室に沢田たちと一緒に立たされている

なにも女の子を巻き込むことは無いのに……

彼女の点数はあまりにもヒドかった……

初めて見た時は我が目を疑った

だって綱吉よりも下だぞ！？

俺がこんな点数を取ったら絶対に翡翠に殴<sup>なぐ</sup>られてるって！！

そんな彼女の点数を少しでも上げたかったんだ……

それがこんな事になるなんて……でも、後悔<sup>こうかい</sup>はしていない！

だって、根津の採点は本当に間違っていたし、新崎さんとも仲良くなれるチャンスじゃないか！！

ハッキリ言って、新崎さんはスゲーかわいい！

白い肌によく似合う茶髪のツインテールに天使のような無邪気な笑顔

うん、翡翠と同じくらい綺麗<sup>きれい</sup>だ

あー……でも俺、年上がタイプなんだよな

俺がそんな事を考えている中、校長室に電子音が響いた

ブルルルルルルルルル

校長の机の上にある電話機が鳴り響いているのだ

「は、はい」

校長があわてて電話を取る

「はい……………そうですが……………いえ、そのような事は決して」

なんだか校長の顔色が悪い

「わっ、分かりました。はい……………今後そのような事は……………はい……………え？」

……………ですが……………はい」

話の内容は分からないが、相手は相当エライ立場らしい

だって校長が真っ青な顔をしているんだから

すると、校長が俺を手招きしてこう言った

「鳳雷山、電話を代わりなさい」

「え？　俺っスか？」

なんで俺？　てか、相手誰なんだよ

「いいから早く代わりなさい！」

「はあ……………」

俺は校長に急<sup>せ</sup>かされ、訳が分からないまま電話を代わった

が、次の瞬間、相手が誰だか分かってしまった

『やあ』

「あー……雲雀さんですか。なるほどね」

校長の顔色が青ざめた意味が分かったよ

「そんで、なんか用ですか風紀委員長さん」

『なんで退学しかけてるのさ。君がこの学校からいなくなると僕が困るんだよ。』

……しかも、雪奈も一緒だっけ？』

ん……校長室に電話を掛<sup>か</sup>けたって事は、俺達<sup>か</sup>が校長室にいるって知ってたのか？



退学しかけてることも知ってるし……

やっぱり、雲雀<sup>コイッ</sup>って翡翠みたいだな

その前に……………雪奈って誰だ？

雲雀にいろいろと質問しよう

「なんで退学しかけてる事知ってんの？」

俺がそう言つと、雲雀は思いもよらない事を言った

『翡翠から連絡があつたんだよ。詳しく聞きたいなら応接室に来な  
よ』

「翡翠……………から？」

見てたんだね、翡翠は

『校長には雪奈と君の退学は絶対にしないように、』と言っておい  
から……

それじゃ、切るね』

「え　？　オイ……切りやがった」

俺は受話器を戻した

その様子を見て、校長はまだ青い顔で俺たちに言った

「新崎さんと鳳雷山君はもう戻っていいよ」

「ワイイ」

「え、いいの？」

「なんで雪奈と蓬萊君だけ！？」

「チツ、なんであの女が」

「こっつ、校長！　どういう意味ですか！？」

上から校長、俺、新崎さん、沢田、獄寺、根津、の順番だ

ああ、新崎さんの下の名前が“雪奈”なのか

でも、なんで新崎さんを雲雀が気にするんだ？

もしかして、男女なんなんのの関係とか？

新崎さん、カワイイしな

雲雀も男なんだな

「しょうがないだろう、根津君。ヒバリ君の命令なんだから」

「ひっ、ヒバリ君の！？」

うわあ、根津の顔が引きつってるよ

ドンだけ怖いのか、雲雀ってば!?

「恭君だったんだね、今の電話。すごいな、恭君、校長に命令できるんだね」

隣にいた新崎さんがポツリと呟つぶやいた

同感ですが、“恭君”って呼ぶのも難しいと思いますよ

一体、どんな関係なんですかアンタらー

「と、とりあえず2人は出て行きなさい」

そう校長に言われた俺たちは、そのまま校長室を出て行った

「俺は応接室行くけど、新崎さんは？」

校長室を出た後、俺がそう聞くと、新崎さんは数秒考えてから、こう言った

「屋上でグラウンドでも見てるよ」

あー……屋上なら、これからおきるバカ騒ぎの眺めがよさそうだな

「あ……テストのとき、根津に意見してくれてありがとうね」

新崎さんはそう言つと、行つてしまった

「ありがとう」と言つたとき、彼女は微笑した

可愛<sup>かわい</sup>かつたな、新崎さん

……そういえば“新崎雪奈”つて、どこかで聞いたことあるような  
……

気のせいか……？

俺はそう思い、深くは考えずに応接室へ向かつた

「それで、翡翠から連絡があつたって本当か？」

俺は応接室のソファに座り、紅茶を飲んでいるヒバリに言った

「うん、そうだけど」

そうだけど……って、軽いなあオイ

〽数分前〽

『もしもし、恭弥あ？　こちら翡翠！　元気だった？』

応接室で書類の整理をしていた雲雀に、突然電話が掛かり、出るといきなりこの調子だ

「なんなの急に？　異様にテンション高いし……用が無いなら切るよ」

雲雀は受話器の向こうにいる親友に辛口のコメントを言う

『ああゝ切らないでえ！　イイコト教えてあげるから！』

「イイコト？　もうすぐ君が並盛に帰ってくる、とか？」



そうなれば雲雀は毎日、翡翠という強敵と戦うことができる

彼にとって、それは喜ばしい“イイコト”なのだ

雲雀の顔から笑みが零れ落ちる

『あゝ……それはもうちょっと後になるかな』

「じゃあ何？」

雲雀がそう言っていると、翡翠は少し間を空けて言った

『ふふ、今ねえ、校長室で雪奈と輝夜が退学の危機に瀕している、とか？』

「全然、イイコトじゃないよ」

即座に雲雀が不機嫌になる

『輝夜が並盛中学校からいなくなったら、僕、並盛中学に行かないよ』

「へえ、なんで？」

『物語の傍観<sup>ぼうかん</sup>なんて、どこでも出来るでしょ。

従者が主と離れてちゃあ、意味を成さない。

どうせ、近くに居るのなら一緒にいたほうが暇<sup>ひま</sup>つぶしになるでしょう？』

それを聞き、また雲雀の顔に笑みが戻る

「最初の方は意味不明だけど、要<sup>よう</sup>するに彼といれば君は暇<sup>ひま</sup>つぶしになるんだね。

僕には、そんなに強そうには見えなかったけれど」

雲雀がそう言うと、受話器の向こうで笑い声がした

『へえ、そうなんだ？ でもね、輝夜は僕の幼馴染<sup>おさなじみ</sup>だよ』

「じゃあ、強いんだね」

翡翠の幼馴染〃強い　という方程式は一体どこから出てくるの  
だろうか

「それに、彼は風紀委員長代理補佐だから退学できないはず。

心配することは無いよ」

『“風紀委員長代理補佐”ってことは、“風紀委員長代理”が必然的に  
いることになるよね。』

そついやあ、僕も風紀委員会に入ってたような……役職とかあんの？』

「あるよ。君は僕の代理を任せれるから風紀委員長代理だけど」

『ふうくん、知らなかったよ。まあ、とにかく頼んだよ』

ブツッ

ツーーーーツーーーーツーーーーツーーーー

「あ、切られた」

く現在に戻るく

「そんなことが……」

俺は開いた口がふさがらない

一体、どこから見ているんだ？

そのとき、校庭からオカシナ音が

ドーンッ                  ドーンッ

「なんの音？」

雲雀はそう呟きながら顔を顰めた

うっ……なんか雲雀の機嫌がご機嫌斜めになって行く

「あー、ダイナマイトで校庭ドツカーン……て！ 報告書書かねえと！」

俺はそのまま応接室を飛び出て、屋上へと走って行った

そして、屋上には新崎さんがいた

「あ、輝夜君も来たんだ。すごいよね、この光景」

ただ今、グラウンドでは爆風により砂埃すなほこりが舞っていた

なんで雲雀に咬み殺されないんだろう

「リ・ボン復活……！ 死ぬ気でグラウンド真っ二つ……っ……！！

地盤の弱点を探す……！ ダウジングウウ……！！」

これ、沢田の声だよな？　こっちまで聞こえるぞ

「あれが本当に沢田か？」

俺はいつの間にか声が漏<sup>も</sup>れていた

「荒々しいけど、こういう声って頼りがいがあったいいよね……  
あ！

私が輝夜君って名前で呼んでるんだから、輝夜君も私を“雪奈”  
って名前で呼んで？

というより、呼んでほしいな　なんちゃって」

そう言って新崎さん……いや、雪奈は笑った

「そつか……じゃあ、よろしくな雪奈。早速だが聞きたいことがあるんだが、良いか？」

「うん、いいよ。なんでも、なあ〜んでも聞いちゃって！」

彼女はそう言つと首を傾げる

その仕草が可愛らしくて、つい顔がにやけてしまう

「沢田との関係とヒバリとの関係を聞いて良いか？嫌なら答えなくて良いぞ。」

俺は風紀委員だから退学を免れたけど、雪奈はなんでなんだ？」

俺がそう言つと、彼女は少しガツカリした様子でこんなことを呟いた

「なんだ、そんなことか。彼氏いるの？とか、好きなタイプは？」

とかだつたら良かったのに……………」

本人は俺に聞こえないように呟いたつもりらしいが、仕事で暗殺やつてる俺の聴覚なめんなよ！

「ええつと、私と綱吉君の関係はただの幼馴染よ。」

「ちょうど8年ぐらい前に公園で一緒に遊んだのがキツカケかな」

「雲雀は？」

「恭君はね、私の従兄いとこなの」

……ハア！？

この可愛い雪奈ちゃんが、あの怖い雲雀と血が繋がってるって言うのか！？

「ありえねえ……似てねえじゃん」

「うん、よく言われる。けど、ちゃんと血は繋がってるよ」

う……………そうなんだ

「地脈発見！！！！ここを割るう！！！！」

またまた沢田の声が聞こえた



ドンッ

ドガッ

オイオイ、グラウンド割れちゃってるよ

原作ではどうやって直したんだ？

「ちょっと私、様子見に行くね」

雪奈はそう言って走り去って行ってしまった

（雪奈視点）

私は急いで校長室にいらるであろう綱吉君のもとへと走った

「このガツコのテストってちよろいっスね」

そう言つて、獄寺君は100点のテストを綱吉君の見せびらかしていた

「つーなーよーしー君！」

「ゆっ雪奈！？ もう、どこに行つてたんだよ！ 心配したんだぞ」

「ケッ」

わあ、獄寺君が私を見た途端一気に嫌そうな顔をした

「屋上にいたんだよ。綱吉君つてば、すっごくカツコ良かった！」

私がそう言つと、綱吉君は頬を赤らめながら頭を掻いた

「いやゝ、そんな事無いつてばゝ」

（この生活も案外悪くないかも）とか綱吉は思つてた

「当たり前だ！ 10代目がカッコ悪いわけ無えだろうが!!」

なんで怒鳴ってくるのよ

そう思いながら獄寺君を睨む

ポロリ

私のスカートのポケットから何かが落ちた

そして、嫌な予感

ひらひらと落ちている

落ちたものは

折りたたまれた紙



26点の綱吉が哀れむような視線を送る

そんな雪奈の点数とは一体なんなのか

☞  
\* 報告書 \*

題名：退学クライシス    だから題名要らなくね？

・ 隣の席の女の子と仲良くなりました

その女の子はヒバリの従妹でした

その女の子はスツゲエ可愛いです

でも頭が可哀かわいそうです

理科のテストが8点でした

でも、根津の採点ミスで4点になってました

・ 沢田綱吉の死ぬ気モードはすごいです

・ 追記      どこから見てんの？    なんか怖い  
『

「イタリア某所」

「輝夜ったら、なんで雪奈の事ばかり。もしかして惚れちゃった系かしら」

翡翠は日本ジャッポーネから届いたばかりの書類を見て呟つぶやく

翡翠は今イタリアの某所にある、とある屋敷の一室にいる

彼女はイスに座り、一枚目の報告書を見た

「輝夜って熟女好きだったっけ？　いくら奈々さんがキレイでも人妻はダメでしょ」

翡翠は冗談交じりに笑いながら呟つぶやいた

そんな彼女の後ろには数名の人影が

「あら翡翠、またお友達からの手紙かしら」

そのうちの1人、肩ぐらいの黒髪の女性が紙を見て言った

「ええ、最近送ってくれてるんです」

翡翠は女性に微笑<sup>ほほえ</sup>む

「近く、その友達が住んでいる日本<sup>ジャッポネ</sup>に私も移住することにしたんです」

友達、というのは輝夜のことだろう

翡翠の言葉を聴き、女性は悲しそうな顔をして言った

「じゃあ、翡翠に会えづらくなるのね」

翡翠は静かに首を振る



「いいえ、師匠はお忘れですか？ 私の能力を」

女性は「そうだったわね、忘れてたわ」と言い、先程とは正反対に明るく笑う

「お腹空<sup>なかす</sup>いてきたわね。お昼にでもしましょうか」

女性は翡翠に笑いかけ、翡翠は頷<sup>うなづ</sup>いて言う

「今日は私が日本<sup>ジャッポーネ</sup>の伝統料理でも作りますよ」

その日の昼、翡翠ちゃんは師匠とその仲間にお寿司<sup>すし</sup>と刺身を作ってあげたそうです

「ゆ、雪奈ちゃん・・・この点数・・・」b y 網吉（後書き）

最後に出た翡翠ちゃんのお師匠さんの正体は・・・・・・・・・・なんでしょうね

9月17日修正

ユキナの願いゝ約束ゝ

「雪菜<sup>せつな</sup>は偉い子ね。それに比べて……………」

それが、親に言い続けられていた言葉だ

私は勉強が出来なかった

でも、運動が出来た

双子の姉は勉強も運動も出来た

母と父は俗に言うエリートだった

『 学歴こそ全てだ 』

それが我が家の家訓だった

私が母に怒られた時は、いつも、姉が助けてくれた

姉は、とても優しくかった

姉だけが、私の味方だった

私の友達みんな、姉の友達でもあった

姉と私と比べると、姉の方がみんな仲が良かった

姉は、優しくかった

姉はいつも私を助けてくれた

いつも私を守ってくれた

いつも私を庇<sup>かば</sup>ってくれた

いつも私を慰<sup>なぐさ</sup>めてくれた

私は、そんな姉が誇りだった

自慢だった

私の目標だった

私の、全てだった

私は姉を敬愛していた

そして、姉に依存していた

そう思うと、どうしようもない嫌悪感がした

私が姉の一部で、姉は私の全てだった

私は、姉無くしては生きていけなかった

自覚していた

姉は私がいなくても生きていける

けれど、私は姉がいないと生きていけないのだ

自立しようとはした

努力した

でも、姉の優しい言葉にいつも負けてしまった

「雪奈はがんばらなくていいよ。お姉ちゃんが雪奈の代わりにがんばるから」

それは、言い換えれば

「お前はいてもいなくても同じ」

分かっていた

分かっていたんだ

そんなあるとき、姉が全寮制の高校に行こうと言い出した

全寮制ならば親に何か言われることは無い、と

姉に“何かが変わるかもよ？”と言われた

変われるのならば、あなたから自立したい

自立して、一人で生きていきたい

姉の言った“全寮制の高校”はエリート高校だった

両親は喜んで許可してくれた



私は運動での推薦すいせんで入れた

そこで、私は運命を変える出会いをした

姉とは違うクラスだった

これで少しは自立できると思った

隣の席の女の子は可愛くて、綺麗な女の子だった

「はじめまして、田川翡翠といいます」

女の子はそう言った

隣の席だからか、もともと相性が良かったのか、私たちはすぐ仲良くなった

ある日、姉と出会った

翡翠ちゃんと一緒にいるときに

「あら、雪奈のお友達…かしら？ 私はセツナっていうの。

いつも妹が世話をかけてますね。私で良ければいつでも相談に乗りますよ」

姉はそう言って微笑みながら手招きをする

翡翠ちゃんも姉に取られてしまうのか

そんなのは嫌だ

でも、翡翠ちゃんはこんなことを言った

「結構ですよ。それにしても、貴方<sup>あなた</sup>はヒドイ人なんですネ」

一瞬、その場の空気が固まった

「行こうか、雪奈」

私は手を引かれて歩いていった

なんであんなことを言ったのか、と私が聞くと翡翠ちゃんはこう答えた

「だって、あの人が雪奈を見下してたから……」

なんで、友達かどうか聞いてくるんだよ。

友達じゃなかったら一緒にいないだろうが！

それに、‘雪奈が僕に世話をかけてる’っていう前提で話し進めんなよ。

雪奈のことでの悩みなんかあるはずが無<sup>ね</sup>えだろうがよ。

姉のくせに、妹を悪く言ってるんじゃないっつもの！

無自覚だろうが、自覚していようが、あの女は絶対に雪奈を自分より下に見てた。

友達を悪く言われてんだ。

その友達の家族だろうがなんだろうが、許せないよ」

私の瞳の奥から熱いものがあふれてきた

「雪奈、あの姉さんを見返してやろうよ」

私は言った

私は頭が悪いから、運動で勝っても姉には勝てない

翡翠ちゃんは言った

「私、あのお姉さんより頭良いよ？　だってあの人、学年でいつも2位の人でしょ？」

雪奈も運動だけだったら姉に勝てるって言ってたでしょ？

雪奈の運動神経と、私の頭脳を合わせればあのお姉さんに勝てる  
「よ」

「うん」

あ、でも、私、運動しかとりえないよ？

お姉ちゃんはどっちも出来るけど……

それで、勝ってる、って言えるのかな」

私はそう、口にしていた

すると、翡翠ちゃんは言った

「人はね、1つの分野でしか頂点を目指せないんだよ？

私は雪奈の分も頭脳で1番を目指すから、

雪奈は私の分も運動でがんばって」

私はうなづく

「約束だからね」

私たちはつらや呟く

そして、私は姉から自立できた

でも、今度は翡翠ちゃんに依存していかないだろうか？

そうかんがえたけど、お姉ちゃんのとくみたいに嫌悪感はしなかった

翡翠ちゃんなら依存してもいいかな



そう呟いてた

すると、翡翠ちゃんはこう言った

「雪奈が依存してきたら、何度でも突き放してあげる」

私は翡翠ちゃんに感謝しています

感謝してもしきれません

だから、約束だけは守りたいです

これが私の願いです

ユキナの願い〜約束〜（後書き）

お姉ちゃんは生粋の悪役（笑）

ちなみに作者は雪奈ちゃんのお姉ちゃんが嫌いです

9月18日修正

俺の名字って鳳雷で定着してんのかな……？by輝夜

く輝夜視点く

ピ

ッ

校庭に笛の音が響いた

「チーム分けは終わったか？」

「あと2人です」

体育の先生の問いに誰かが答えた

残っているのは俺と沢田だ

「だから、ダメツナはお前達のチームにくれてやるって」

「やだね！ 負けたくねーもん」

「バレーはすごかったけど、野球が下手なのは分かってるからな」

そうだ

沢田の運動神経は未だ悪い方だと考えられているのだ

なので沢田が残るのは分かるが、何故俺まで残るんだ？  
なぜ

確かに、転入生の運動神経はどのくらいか分からないかもしれないが、沢田と一緒に残されるのは心外だ

ちょっと沢田が可哀想になっかわいそうてきたが本当のことだ

「鳳雷は」

お、俺の事話してるな……

てか、俺の名前は鳳雷山だっつの！

「鳳雷君はカッコいいし頭も良いけど、そういう人って運動が全然駄目だよね」

ハア！？

今言っただの誰だゴルア！

女でも容赦ようしやしねえぞオルア！

……と思っただけど、女に手を出したら俺が翡翠に殺されるな

それだけは勘弁かんべん

てか、今言っただの女子だよな？

授業しろよ！

俺は頭より運動神経の方が良いっていつつも翡翠に言われてんのになあ

「言っておくが俺は運動だけが取り得だ」

俺がそう言つと周りがざわめく

「運動だけ……って俺らを馬鹿にしてんのか!？」

「やっぱ、輝夜君ってすごいなあ」

「ドンだけ凄いんだよ」

「ファンクラブ会員ますます増えるな」

「鳳雷君サイコー!」

「チクショー!!!!」

「鳳雷……死すべし!」

なんか、一部の反感を買ったが、ここは翡翠みたいに無視しよう!

翡翠は無視するのが得意だからな!

「早く決める！」

わあ！ 体育の先生に怒鳴られちゃったよ

「でもなあ…ダメツナが」

「鳳雷も微妙だな…」

こりゃ決まらんわ……しょうがねえな

俺は声を張り上げて言った

「じゃあ俺は沢田の入ったチームに行くから」

「ほっ、鳳雷君……」

沢田がボソリと呟いたが、俺の名前は鳳雷山だ！！



「いーんじゃねーの？ こっち入れば」

まさに鶴の一声、辺りが静まり返った

言ったのは山本武だ

すると、山本と同じチームの男子が言った

「マジ言ってんの山本……っ。何もわざわざ、あんな負け男入れんのかよ。」

転入生だって自称だから、どんなもんか分かんねえぞ」

確かに自称だが……その何が悪い！

山本のチームの奴ほとんどがブーイングを言っている中で、山本はこう言った

「ケチケチすんなよ。俺が打たせなきゃいーんだろ？」

すると、さっきまでのブーイングが収まり、「山本がそっいうんなら、ま、いっか」などと言い出した

どんだけ山本スゴいんだよ…

そして、試合は始まった

カキーーーーーン

その音と共にボールが空高くへと舞う

「いや、わりーねー」

「ちえ、お前は片手で打て」

バッターとピッチャーがそんな会話をする

打ったのは山本武

ホームランであり、同じチームの者から「ナイス！！山本！」や「さすが野球バカ！」などと言われており、『山本命』とかかれた八チマキをした女生徒たちからも黄色い声援を送られている

一方、女子の体育でもソフトボールをしており、そのうちの1人がホームランを打った

カキーーーーー

「イエーイ！ ホームランだ やったよ翡翠ちゃん」

女版山本と言われている、運動神経はピカイチの新崎雪奈だ

そんな彼女に「さっすが雪奈ちゃん」や「新崎がいれば体育は負けないわね」などなどの声が聞こえる

そんな彼女たちを屋上の給水タンクの上から見つめる小さい人影が

皆さんお分かりのリボーンだ

すると、リボーンは双眼鏡を手にして言った

「山本武、新崎雪奈。2人の運動能力と人望はファミリーに必要な」

グラウンドに戻る

両方とも試合は終わったが、山本のチームは負けた

輝夜は、というと試合が始まった直後、翡翠からのメールが届き戦

力外に

『山本より目立つなよ。人妻にも手を出すな。法律違反だからな』  
冷や汗の出しすぎで脱水症状をおこし、保健室行きになったとか、  
ならなかったとか……

沢田はトンボがけを押し付けられていた

(帰ろっかな……………)

沢田がそう考えたとき、思いがけない人物から声がかけた

「助っ人とーじょーっ」

「俺も手伝ってやるよ」

「山本に鳳雷君!？」

そこには山本武と鳳雷山輝夜の姿があった

「大丈夫なの鳳雷君、保健室に行つてたんでしょ？」

それに、ごめん。俺のせいで……せつかくチームに入れてくれたのに」

沢田は申し訳なさそうな顔で2人に言う

「ああ、もう大丈夫だ。それに、負けたのは俺のせいでもあるしな」

輝夜もまた、申し訳なさそうな顔をする

そんな2人に山本は明るい声をかける

「気にすんなつた2人とも。たかが体育じゃねーか。頼むぜ、俺の注目株！」

「？」

「注目株ってなんの事だ？ 沢田の事だろ？」

そう輝夜は言い、沢田の方を見るが、沢田に心当たりは無いようだ

「最近ツナスゲーだろ？ 剣道の試合でも球技大会でもさ。

俺、お前に赤丸チェックしてっから」

山本がそう言うと、沢田が驚いたような顔をして、それから照れ始めた

「エッ……いや……そんな……」

「知らねーな。球技大会つつたら、俺がまだ転入する前じゃねえか」

あの時のツナは凄かったぜ、と山本は自慢するように輝夜に言う

「それにひきかえ、俺なんてバカの一つ覚えみたいに野球しかやってねーや」

「なっなに言ってるんだよ！ 山本はその野球が凄（すこ）いんじゃないか」

「一つのこと打ち込めるっていうのが凄（すこ）いんだよな」

暗い顔をした山本に沢田と輝夜がどことなく寝めるが、山本はもつと暗い顔となった

「それがどーもうまくいかなかったさ。

ここんどこ、いくら練習しても打率落ちっぱなしの守備乱れっぱなし……

このままじゃ、野球初めて以来初のスタメン落ちだ」

どんどん、空気が重くなっていく中、沢田と輝夜はこう思う

（や、山本……スランプ……？）

（実際見てみると、いかにも自殺しそうな人間の雰囲気だな。沢田ってなんて答えるんだっけ……？）

そんな中、山本は一言、言った

「なあ……俺、どうすりゃいい？」



「えゝえゝ！？」

（俺に聞くのー！？?）

山本の一言に沢田はたじろぐ

「山本らしくないぞ」

（山本の事全然知らないけど）

輝夜がそう言つと、山本の顔色はコロリと変わった

「何つってなゝ最近のツナ頼もしいから、ついな……………」

「エッ！？ 俺は！？ もしかして、俺には聞いてなかったのか！  
??」

「鳳雷は頭良いからなゝ」

「話噛み合つてないぜ！！？」

彼らがそんな会話をしている中、沢田はこんな事を考えていた

（あんな山本の顔、見た事無いよ。相談に乗りたいけど……リボ  
ンのことは知られたくないしなー）

そして沢田は言う

「やっぱ……努力……しかないんじゃ……ないか……な……」

（ぐへへへへ俺って嘘つきへへへ）

「まあ、努力も大切だしな……」

（俺の場合、努力を強制させられたからな……）

沢田と輝夜がそう言うと、山本は

「だよな」

と言い、2人の肩を組んだ

「いや、俺もそーじゃねーかなーって思ってたんださすがツナと鳳  
雷！ 気が合うねえ」

「そ……そう?」

「俺の名字って鳳雷で定着してんのかな……………」

ついさっきの暗い顔とは全く違う山本武の顔がそこにはあった

そして、山本は笑いながらこう言った

「おゝし、今日は居残ってガンガン練習すつぞーっ」

そんな山本の発言に対し、ツナも笑う

「ハハハ…」

（良い事言ったー!!）

そんな二人遠目で見ながら輝夜は言う

「ムチャすんなよ」

（骨折するほど努力するって言うのもあれだしな）

↓放課後↓

「た、武君！？ こんな遅くまで練習してるの！？？」

放課後のグラウンドには山本武の姿があった

「よっ！ 新崎。こんぐらいしねーと努力したうちに入んねーからな！」

そーゆーお前も、練習してんだろ？」

そう、新崎雪奈もまた居残って練習をしていたのである

「うん……私、最近スランプ状態だからね……休んでるうちに体力

落ちちゃったし」

雪奈は俯きながら言った。そんな雪奈に山本は笑いながら言った

「やっぱりスランプ状態には努力が1番なんだってな！一緒に練習すっか」

「うん、そうだね。ありがとう、武君」

雪奈は頷く

こうして雪奈達は夜遅くまで2人っきりで練習したとき

その努力がとんでもないことを引き起こす、ということ忘れて

俺の名字って鳳雷で定着してんのかな・・・・・・・・？by輝夜（後書き）

ちなみに、この夜の練習で雪奈はもともと挫<sup>く</sup>いていた足を、もっと  
ヒドくしちゃいます

9月18日修正

翡翠を悲しませたいのか！b y輝夜（前書き）

地震の影響により停電してしまい、投稿が遅れてしまいすみません  
デシタ

翡翠を悲しませたいのか！b y 輝夜

く輝夜視点く

次の日、俺は普通に登校して教室にいた

そんな中、誰かが勢いよく教室のドアを開けてこっ叫んだ

「大変だー！ー！！！」 山本と新崎が屋上から飛び降りようとして  
いるー！！」

一瞬で教室がざわめいた

「山本と新崎って、うちのクラスの？」

「あいつらにかぎって、ありえねーだろ！」

「言っていい冗談と悪い冗談があるわ」



「そーだ！　いくら2人の仲がいいからって一緒に飛び降りやしねーだろ」

皆、口々に言う

それほど、信じられない内容なのだから

すると、飛び降りの情報を伝えに来た奴はこう言った

「あいつら、昨日居残って野球の練習してたんだ。

2人ともムチャして山本は腕を骨折して、新崎は足首を挫<sup>くじ</sup>いちまっただ」

雪奈も！？　原作がまるつきり変わってるじゃないか！

何者なんだ……？　新崎雪奈

いや、今はこんなことを考えている暇ないな

俺はそう思い、沢田の顔を見てみた

すると、沢田の顔色は真っ青だった

たぶん、山本がムチャしたのは自分のせいだとも思っているんだ  
ろう

「と、とにかく屋上行こうぜ」

「「「「おう！」「」「」」

誰かが言い、皆がいつせいに教室を出た

俺と沢田だけが教室に残った

「沢田は行かないのか？」

俺がそう言つと、沢田は齒切れの悪い返答をします

「あ……………うん！…………ト…トイレに行ったら行くよ」

俺はそのまま、屋上へ向かった

屋上には何十人かの生徒が集まっており、皆一同に自殺を止めさせようとしていた

ある1人の生徒が言った

「オイオイ、冗談きついで2人ともー！」

もう1人の生徒が言う

「そりゃやりすぎだつて」

それを聴き、山本と雪奈は言った

「へへっ、わりーけどそーでもねーんだ。

野球の神さんに見捨てられたら、俺にはなーんも残ってないんで  
ね」

「冗談じゃないんだよ。運動が出来ないなら……

…約束が守れないなら、私が生きている意味なんて無いに等しい  
んだよ」

オイオイオイ！？

山本の動機ねいては分かるが、雪奈のはちょっと意味が分からん

ドンッ

誰かが俺の背中にぶつかった

ソイツはフェンスの近くまで転んでいってしまった

よく見ると、ソイツは沢田だった

「え……あ……どっ、どーしよーっ」

スツゲエ動揺どうぶしてるぞ沢田…

どんくさいにも程ほどがあるだろ

そんな沢田に山本が言った

「止めにきたならムダだぜ。

お前なら俺の気持ち分かるはずだ。ダメツナって呼ばれてるお前なら、

何やってもうまくいなくて死んじまったほーがマシだって気持ち分かるだろ？」

何アレ？ 沢田に同情求めてんのか？

いやいや、“うまくいなくて死んだほうがマシ”！？

それで、いちいち人が死んでたら日本は少子化どころじゃなくなっちまうぜ！？

すると、沢田はこう答えた

「いや……山本と俺は違うから……」

オイオイ……今この状況でそれを言うのか？

かんちが  
間違いされちまうぞ

そして、俺の思ったとおり山本は沢田に言い返した

「さすが最近活躍めざましいツナ様だぜ。俺とは違って優等生ってわけだ」

そんな山本の発言を聞き、沢田はあわてて言い直した

「ちつつちつ違うんだ！ ダメな奴だからだよ！！

俺、山本みたいに何かに一生懸命打ち込んだこと無いんだ……

『努力』とか調子のいいこと言ったけど、本当は何もしていないんだ……

昨日のはウソだったんだ……ごめん！」

沢田は頭を下げ、また話し始める

「だから俺は山本と違って、死ぬほど悔しいとか挫折させつして死にたいとか……

そんなすごいこと思ったこと無くて……

むしろ死ぬときになって後悔しちゃうような情けない奴なんだ……

……

どーせ死ぬんだったら、死ぬ気になってやっておけばよかったって、

こんなことで死ぬのもつたいないなって……

だから、お前の気持ちは分からない……ごめん……」

ほう、沢田でもこんな事言えるんだな

クラスの奴が見ている中で

原作ではここで沢田が走ろうとして、山本が沢田の腕を掴んだ衝撃でフェンスが倒れて2人とも落ちる

はずなのだが、沢田は原作とは違い、雪奈の方へ向いた

「雪奈……どうして、自殺なんか」

山本と話しているときより声が小さくなったような

そっぴゃあ、沢田と雪奈って幼馴染だったっけ…？

幼馴染が自殺するまで追い込まれてたのに、気付かなくてショックでも受けたのか？

そうして、雪奈が重々しく口を開いた



「ゴメン綱吉君……私も山本君とほぼ同じ理由。

運動ができなきゃ私に生きてる意味なんて無いの」

いやいや、だからなんで 運動が出来ない〃生きてる意味無いになるんだよ

それだったら、沢田はとっくの昔に生きてる意味無くしてるぞ！

俺と同じことを考えたのか、沢田が口に使っていた

「それだったら、俺も運動が出来ないよ。

運動が出来なくなつて生きていけるんだよ。

だから……自殺なんかしないでよ」

それを聴き、雪奈は目に涙を溜<sup>た</sup>めて叫んだ

「私は今！ 約束を守るために生きてるも同然<sup>どうぜん</sup>なの！

約束が守れないのなら、死んだ方がマシだよー！」

こりゃあ、“約束”がどんな内容かわからないと説得もできないぞ

むむう……どうしたものか

ん？ ちよつと待てよ…

約束が守れないから死ぬのか？

その約束は命よりも大切な事なのか？

山本も言っていたが、死んだ方がマシ……だと！？

「命をなんだと思ってるんだッ！ 残された人間の気持ちも考えろ  
ッ！！」

俺は知らないうちに雪奈に怒鳴っていた

俺は翡翠が死んだ後、辛かった

そして、薫さんは今1人だ

いや、暗殺やってる俺が言える立場じゃないんだが

「かつ……輝夜君……でつ、でも…約束…守らないと………」

もう目から涙が溢れ<sup>あふ</sup>出ていて、声も小さくなって震えている

なんか小動物みたい……じゃなくて！

今はこんな事考えている場合じゃないだろう！

そう思い、俺はまた雪奈に大声で言った

「どんな約束か知らねえけどよ、お前が……雪奈が死んだらさ、

お前と約束した相手が悲しむだろうが！

それとも、約束した相手は、運動が出来なくなったら死ね、って  
言ってるのか！？」

「翡翠ちゃんはそのなこと絶対に言わないよ！……！」

即答された……

てか、ヒスイちゃんて俺の知ってる翡翠と同じ人じゃないよな？

もし同じ人だったら……雪奈が死んだら

翡翠は‘自分と交わした約束のせいで追い詰めてしまった’って責任を感じるだろう

「それじゃあ自殺なんてしようとするな！

お前と約束した相手を……翡翠を悲しませたいのか！」

最後の方、完全に感情移入してしまった……

雪奈の言っている‘ヒスイ’とは俺の知っている‘翡翠’とは別人かもしれないのに

でも、俺が叫び終わると雪奈は目を見開いていた

そして、また大粒の涙を零す<sup>こぼ</sup>

「ごめん……翡翠ちゃん……輝夜君、ありがとう……自殺なんて、もうしないよ」

どうやら、自殺を止めさせることができたようだ

「よかった……じゃ!」

沢田はそう言いつと、後ろを向いて走り出した

ウソだろ!?! ここから原作通りなのかよ!

「待てよツナ」

山本はそう言いつと、沢田の腕を掴んだ

沢田は暴れ、その衝撃でフェンスが倒れて2人が落ちた

「あつ、落ちた」

「綱吉君！？ 山本君！！」

雪奈は青ざめた顔で叫んだが、あつ、落ちた、だなんて、俺軽いな

ズガンッ

銃声が聞こえた

「空中復活！！！！<sup>リ・ボーン</sup> 死ぬ気で山本を助ける！！！！」

「ツナ！」

おつ、山本と沢田の声だ

俺は急いでフェンスに掴まり、下を覗いた

「かゆーーーーーい！！！！」

クラスの皆も下を見る

そこには傷一つ無い沢田と山本がいた

「うそーっ」

「ぶ…無事だぞー!!」

「こんな事ありえんだろ…」

そんな声がクラスの中であがる

俺は大声で言った

「山本のジョークだったんだぞ。ワイヤとか使って大変だったんだぞ。」

みんなうまく騙だまされたよな」

「えっ、輝夜君何言って…むぐう」

俺はあわてて雪奈の口を押える<sup>おさ</sup>

俺の発言を聞いたクラスのみんながうまく信じて帰っていく

「なーんだ！ 俺真剣に心配しちゃったよ〜」

「やっぱりダメツナってヘンタイだよなー」

「帰ろ、帰ろ」

俺と雪奈は残されてしまった

「あーーーーー……俺らも帰るか」

「むぐむぐもがあ」

あ……口を押さえたままだった

「スマン、スマン」



俺はすぐ手を離す

「プハア……そつ、そだね。帰るか」

雪奈はフェンスを跨<sup>また</sup>いで俺の腕を体に寄せた

「さっきは、ありがとう。今考えると、私、翡翠ちゃんにヒドイことしてたよね……」

輝夜君、止めてくれて、ありがとうね。

自分でもなんであんなことしようとしたのかわかんないの……

思い当たるとすれば、今朝、変な夢を見た気がして……」

「……変な夢？」

不思議に思い、そう聞き返すと雪奈は声を小さくして答える

「うる覚えなんだけど、とってもとっても厭<sup>イヤ</sup>な夢だった気がするの。

だって……私はこの世界に、翡翠ちゃんに必要とされてない、

って言われる感じがしたから……

でも、もう大丈夫！ 輝夜君のおかげで目が覚めたよ

なんだか、夢に出てきた人に似てる輝夜君に、死ねな、って言われて、

心が軽くなっ たみたい」

雪奈はそう言っ て俺に微笑<sup>ほほえ</sup>む

年下も良いかも……とか考えてる、もう1人の自分を押さえ込む

「輝夜君……すごくカッコ良かったよ」

ムリ無理……押さえ込めません

\* 報告書 \*

題名：山本武

・ 山本武と俺の隣の席の子が自<sup>じ</sup>殺<sup>さつ</sup>未<sup>み</sup>遂<sup>すい</sup>をしました

・ その隣の子の名前は 新崎雪奈 です  
知り合いではありませんか？

・ 追記 特殊弾ってスゴイね

くイタリア某所く

「師匠、どうしましょう……コイツ、スゴイ、ムカつきます」

翡翠は紙を持つ手に力を入れ、後ろにいる女性に話しかける

「どうかしたの?」

師匠と呼ばれた女性は穏やかな声で翡翠に話しかける

「最初はねえ、良いこと言っただなあ良くやってくれたなあ、後で褒<sup>ほ</sup>

めてやるう！

とか思ってたんですよ。でもねえ……コイツ、雪奈を……

…あの純粹無垢な雪奈を嫌らしい目つきで見やがって！！

よし！ 明日殺しに行こう

今まで高級そうなイスに座っていた翡翠は、立ち上がり拳を握り締める

「まあまあ、落ち着いて。

その友達だって男の子なんだから、カワイイ女の子にぐらい見惚れるわよ。

カワイイんでしょ？ 雪奈ちゃんて子」

女性の言葉を聴いた途端、翡翠の顔色がパアッと明るくなった

「そうなんですよ！ すっごく可愛いんですよ〜クリクリした目！

艶があり、サラリとしているのに毛先が少しハネてる髪！

スラリとした鼻！ 照れたときにほんのり紅くなる頬！

整った顔立ち！ 綺麗でキメ細やかな肌！ 運動が得意なのに細い腕と足！

それに  
「

マシンガンのように続く翡翠の言葉に女性のような母親のように見守る

「数時間後」

「ねえ翡翠、もうお昼にしない？ なんだか、私おながが空いてきて……」

「もっと聴いてください！ 誰かに話したくてウズウズしてるんです……」

その後、女性はやがて途切れること無い言葉を永遠と聴き続けたとか……



翡翠を悲しませたいのか！by輝夜（後書き）

シリアスをぶち壊す思考が・・・・・なんかスミマセン

3月17日修正

9月18日再修正



## セツナの願い（前書き）

雪奈の自殺の理由が曖昧だという旨の感想をいただき、割り込み投稿させていたたきます

ぜひ、読んでください

## セツナの願い

時刻はさかのぼって、雪奈と山本が自殺未遂を起こす前夜

〔雪奈視点〕

ここはどこだろう……？

気が付いたら、知らない場所にいた

うつん、なんとなく、懐かしいような気もする…

もしかしたら忘れているだけで、過去に行った事のある場所かもしれない

ここは………どこかのお城？

私の横に巨大な石造りの城壁が聳<sup>そび</sup>え立っていた

見上げてると首が痛くなっちゃいそう…

キャハハハハッ

今の、なんの音？

そう思い、私は音のした方向へ向いて見る

そこには……………幼い子どもがいた

その子は笑っていた

ああ、これはきつと幼い私だ

ということは、ここは夢の中？

アハハハッ

甲高い声を響かせ、幼い私はどこかへ走って行ってしまった

すると、幼い私を追って誰かが走って行く

どこかで、見たことのある懐かしい人

でも、なぜかその人の顔がぼやけていてよく見えない

かろうじて判<sup>わ</sup>かるのは、そのキラキラ輝く金色の髪

私は彼を知っているはずなのに、どうしても思い出せない

彼は……誰だったっけ？

『彼は、悪い人よ』

声が、空に響いた

……あなたは、誰なの？

ここは私の夢の中なのに

『私よ、セツナお姉ちゃんよ。忘れたとは言わせないわ』

せつな、お姉ちゃん？

そんなの知らない

私にお姉ちゃんなんていない

いるのはお父さんとお母さんだけ

『私を覚えてないの？』

そう、覚えてない

思い出したくない

永遠に

『可哀想に雪奈……忘れてしまったのね。これも全部あの女のせいだわ』

あの女？

知らない

知らない

“せつなお姉ちゃん”も“あの女”も知らない

『田川翡翠よ。この女のせいで雪奈は死んでしまった……全部この女のせいなのよ』

翡翠ちゃん？

どうしてあなたが翡翠ちゃんを知ってるの？

『雪奈……あなたは田川翡翠に騙だまされてるのよ？ それを自覚して』

翡翠ちゃんは私を騙してなんかいない！

あなたに私の何がわかるって言うの？

「わかるわよ！　ずっと貴女あなたと一緒に生きてきた。なのに……

……なのに、あの女が私と雪奈の仲を引き裂いたのよ」

ずっと、一緒に生きてきた？

あなたのことなんて知らないし、わからない

でも、翡翠ちゃんはそんなことしない！

私は翡翠ちゃんを信じてる！

「ああ、なんてこと……赦ゆるせない。赦してやるもんか！

私と雪奈との仲を引き裂いただけでは飽き足らずに、

純真無垢な雪奈を洗脳するなんて！　赦せない！　赦さない！

」

何を、言ってるの……？

『 ああ、なんとしてでも雪奈を守らなきゃ……！

それが、私の‘姉として’の義務なのだから……』

だから、なにを……

わからない、全然わからない

この人は何を言っているの？

なぜそんなに翡翠ちゃんを目の仇にするの？  
かたき

『 私がやらなくちゃ……！ 私が雪奈をあの子から取り戻さなきゃ……！ 』

言っている意味がわからないよ

『 雪奈を取り戻さなきゃ。そのためには雪奈とあの子を離れさせなきゃ……！



そのためには……」

なに？　なんなのこの人……

たとえどんな人でも翡翠ちゃんを悪く言う人は大っ嫌い！

「ねえ、雪奈。雪奈はその‘翡翠ちゃん’に迷惑かけたくないんだよね？」

当たり前よ！

私は翡翠ちゃんのおかげでここまで歩むことができた……

だから、翡翠ちゃんのために私にできる事ならなんだってやりたい！

「…そう。じゃあ、約束は覚えてる？」

もちろんよ！

でも、なんであなたがそのことを……？

『 そんなことはどうだっていいでしょ。』

雪奈は今、足首を捻挫ひねりしていて運動ができないんだよね？』

そ、そうよ……

でも、それと約束のなんの関係があるって言うのよ！

『 その約束では運動を雪奈が担当するって内容で合ってるかしら？』

……そうね

だから、それとなんの関係があるのよ

『 ここまで言ってまだ気付かないの？ さすが我が愚妹ぐまい。』

運動を担当してるのに運動それができない子なんて必要ないって意味よ』

そ、そんな……！？

たしかに、そうだけど……

でっ、でも！ 翡翠ちゃんは体力無いし、運動全然ダメだって言ってたし……

『それがあの女の策略よ！ 思い出しなさい。』

あの8年前、雪奈の目の前に現れた翡翠は一瞬にして、

自身の倍もある体格差のある相手を倒したのよ？ つまり……

…わかるわね？ 』

翡翠ちゃんは運動ができる、ってこと……？

『そうよ、でもそれは‘人並み’。』

普段‘人並み以上’の雪奈には敵<sup>かな</sup>いはしないわ。

でもそれは雪奈が‘人並み以下’だったら話が変わるわ 』

今の私は、足が痛くて、運動も出来ないから

それって、つまり……

『 そう、雪奈は今、人並み以下、' なの。翡翠ちゃんには必要の無い人間ってことよ 』

じゃ、じゃあ私は何をすればいいの!?

何をすれば翡翠ちゃんに必要とされるの!?

『 雪奈、これを見て 』

彼女がそう言うのと、周りの風景が一変し、どこかの崖へと変わっていった

そこにいるのは、幼い私と金色の髪の人

すると、幼い私は金色の髪の人へと手を伸ばし……

彼を崖から突き落とした

『…ね、雪奈。あなたのそばにいる人は、みんなあなたが不幸にするの。』

大切な大切な、翡翠ちゃんを自らの手で殺したくは無いでしょ？  
『』

なら……なら私になにをしろっていうのよ！

彼を突き落としたことは信じられない……

でも、罪から逃れたくて彼のことを忘れていたのなら辻褄が合う

信じたくないけど……

私は、なにをすればいいの？

なにをすれば赦されるの？

『死になさい』

……え？

『死んで、罪を洗い流すのよ。考えてもみて？

翡翠に必要とされないあなたに何が残るの？

死んで罪を償<sup>つぐな</sup>って、また新しい人生を始めましょう？』

で、でも……私、神様から不老不死の能力を貰って、死ねないし

……

『私を誰だと思ってるの？ あなたの姉よ、見縊<sup>みくび</sup>らないで！

無策でこんなことしてると思ってるの？ ちゃんと策ぐらいあるわ。

雪奈達を庇護している神は、‘アルフレム’なのでしょう？

それなら大丈夫よ。

私がどうやって雪奈の夢に介入しているかを考えてもみなさいな。

の  
『 私に出来ないことは無いのよ。だってあなたのお姉ちゃんだもの』

……あ、ね？

私の、お姉ちゃん……？

雪菜<sup>セツナ</sup>お姉ちゃん？

なんで、ここに雪菜お姉ちゃんが……

『 やつと思いついたのね、手間のかかる子。…あら？ もう時間ね、起きなさい』

え、時間……？

もう朝なの？

ああ、急速に私の意識が薄れてく……

もう、夢は醒<sup>さ</sup>めるんだ

お姉ちゃんが何か言った

その言葉たちが耳に響いていく

やっと、お姉ちゃんの本音を聞けた気がする……



『 忘れないで、絶対に死になさい。あなたに生きる価値なんて無いの。』

むしろ死ね！ あの女になんか盗<sup>と</sup>られて堪<sup>たま</sup>るかッ！！

死ねよ！ 死になさい！！ 死んじまえ！！！！

雪奈は私のモノなのに……なんで、なんであの女に媚<sup>こび</sup>売<sup>う</sup>ってんのよ！

覚えてろよ田川翡翠イ！！

雪奈を支配するのは私なんだからなッ！！！！』

## セツナの願い（後書き）

次話も大幅に変わっておりますので、目を通していただければ幸いです

く神の名前く（前書き）

今回はチョイ短めです

く神の名前く

その日、翡翠は毎日と変わらない日常を過ごしていた

午前9時まではディリアとの勉強or修行

昼過ぎまでは師匠のところに

夕方から夜にかけては研究所にて研究結果を観察

ちなみに、今は午後3時

研究所にいる

「ねえ、ヴィツちゃんは研究が恋人なの？」

唐突に翡翠は言い出した

それに“ヴィツちゃん”と呼ばれた人物は答える

「その呼び方、なんとかならないのか？」

それとも、君のネーミングセンスがどうしようもなくイカれているのか？」

彼は翡翠の方へは見向きもせず、画面に映し出された棒グラフやら円グラフを見つめている

「僕のネーミングセンスを侮辱<sup>ぶじやう</sup>するとは

君の研究への支援金を無くしてしまうよ？

それでも良いのかい？ うーんとね……………ヴィヴィッチは」

“ヴィツちゃん”から“ヴィヴィツち”という名前に変えられた人物は眉間<sup>みけん</sup>に皺<sup>しわ</sup>を寄せて翡翠に言い返す

「やはり君のネーミングセンスは壊滅<sup>かいめつてき</sup>的にイカれているようだね」

「はい！ 100万減らす……………次言ったら5000万は減らす」

翡翠の声は最初は明るいトーンで言ったが、徐々に低くなっていく

「たしか‘万’は日本の金単位だったな……

前々から思っていたが、なぜ君は日本のものを多用するんだ？

おかげで此方まで日本に詳しくなってしまったじゃないか」

「ううーんと……日本が好きだから、じゃない？」

首をかしげて翡翠は答えた

「君が疑問形なのは気になるが、その情報は私の得にはなりはしないな」

それを聴き、翡翠はボソリと呟いた

「随分と老けている餓鬼なこと」

そんな時、翡翠の頭の中に聞き覚えのある声が響いた

「おーい、聞こえておるかぁ？ ワシじゃ、ワシワシ」

そして、翡翠はその声を無視する

「ヴェーちゃん、そういえばヴェーちゃんは透明人間になれるスーツとか作ってたよね」

“ヴィヴィツチ”から“ヴェーちゃん”へと変わったが、そちらの方がマシであったため“ヴェーちゃん”は翡翠の問いに反応した

「そうだ。今は部隊を作り、いろいろなマフィアのボスを暗殺しているところだ」

「それってえ、ボンゴレも入ってんの？」

「そういえば、君はボンゴレファミリーの令嬢だったな。すっかり忘れていた。」

9代目には手を出さないでおこう」

「すっかり、って……失礼な」

‘9代目には手を出さない’ということは、逆に言えば‘10代目には手を出そう’と“ヴェーちゃん”は考えているらしい

そんな中、また翡翠の頭の中に声が響いた

「おい、無視せんといってくれんかのう。今日は大切な話があるんじゃが…」

それでも、翡翠は無視を続行している

声の主は諦めたのか、深いため息をついてこんなことを言った

「しょうがないのう……雪奈ちゃんから言っておくか」

『話せ、クソジジイ』

「じゃから、クソジジイじゃないと言っておろつがっ！」



『死にたいの?』

へ ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ へ

いまだに「ゴメンナサイ」を連呼している神に翡翠はため息をついた

『早く話せよ。時間がもつたいない』

へ そうじゃのう。実はのお、おぬし達に渡した‘不老不死’の能力じゃが……

……無効にしてもらえんかの へ

『……………ハア?(怒)』

表情は眉一つ動かしていない翡翠だが、それが逆に怖らしく、神はおびえながら説明した

へ 実はのう、上の神様：創造神様に今回のことがバレてのう、

創造神様が「不老不死は輪廻転生を狂わすからダメだ」

と言っておつてな……すまぬ」

『なるほどね。たしかに正論だ』

そう思いながら翡翠は頷いた

「じゃが、それでは雪奈ちゃんの願いが叶えられないため

“不老長寿であり、回復能力がきわめて高い”

という能力を付属することになったんじゃ」

『ふむ、なるほどね』

翡翠が納得すると同時に目の前に白い玉が現れる

「いっただつきまゝす」

翡翠はそう呟いて玉を掴み、飲み込んだ

「何か言ったかね？」

存在を忘れていた“ヴェーちゃん”が話しかけてきたが、翡翠は「なんでもないよ」と言っていてあしらった

「ワシはもう、用事がないから天界に帰るからな……言い忘れていたが、

！  
ワシの名前は“アルフレム”じゃ！ クソジジイではないぞ！  
」

神改めアルフレムの声はそれ以降聞こえなくなったが、僕はその名前を3秒後には忘れ去った

そのかわり、僕の頭の中はある疑問で埋め尽くされていた

話を聞く前、クソジジイは「雪奈から先に話す」とか言おうとしたが、さっきは「もう用事がないから天界に帰る」と言った

この矛盾はなんだ……？

こんな大切な話、雪奈にしないわけにはならないだろう

だから、雪奈にはもう話してるか、別の神が話すけど僕の興味を引かせるためにああ言った

と、考えるのが妥当だが……このモヤモヤはなんだ？

僕は心の中で叫ぶ

『聞こえるかクソジジイ！！！！』

すると……来た

「なんじゃ、喧<sup>やかま</sup>しい……もう話はないぞ？」

『さっきの話し、全部が真実じゃねえだろう？ 本当のことを言え。さもなくば殺す』

殺気を含ませ言うと、案外簡単にクソジジイは承諾した

「しょうがないの……そういうところ、本当にあのお方にそっくりじゃ。」

あのお方に免<sup>めん</sup>じて話してやろう。感謝するのだぞ？」

あのお方？

言い方からして、クソジジイよりも地位の高い存在ってことだな

「わしがそなたらに授けた能力……いや、厳密には雪奈ちゃんだけが“不老不死”と

その他多数の能力を失ったのじゃ」

雪奈の能力だけ…？

『……どういうことだ？』

「わしは能力を管理する神じゃ。わしが授けた能力を取り消せるのは、

わしよりも上級な神だけじゃ。じゃが、それは今、天界に3人ほどしかおらぬ。

この3人が意図的に雪奈ちゃんだけの能力を消した意図が分かるぬ。

しかも、雪奈ちゃん的能力が消えたと分かったとほぼ同時に、

創造神様からあの御言葉を授かったのじゃ。

それから考えると、創造神様がやったとは考えられぬ。

しかし、その他2名は創造神様のことしか考えぬ。

なので、その2名もやったとは考えにくいのじゃ……

たとえ3人のうち誰かがやったとして考えても、

なぜ雪奈ちゃんだけでおぬしには何もせんかったことが気になる……

複雑だなあ

『他のクソジジイより上級な神では考えられないのか？』

へ 2名ほどおったが、今はもう……死んでおる

神って死ぬんだ

あれ……？

『もしかしてそれって、後追い自殺した上司とその恋人のこと……？』

「そうじゃが……なぜ、後追い自殺だと知っておるのじゃ？」

……うつ、痛いところ突かれた

『……まあ、まずは雪奈の能力を消した奴を探すのが先だな。  
頑張つて探してくれ、アルフレム』

「本当に、そういうところ……大切なときにだけ、わしの名を呼ぶところが」

……サキ様にそっくりじゃよ。まかせておれ。必ずや、必ずや……」

その言葉を聴いたつきり、クソジジイは話しかけて来なかった

それにしても…

“サキ様”ねえ…



く神の名前く（後書き）

やっと神（変態）の名前が出てきた・・・

そして急展開っばい

9月18日修正

影の王子と陰の王？

く輝夜視点く

「だから僕はお前をボコりに来た」

彼女は俺に言った

えっ？ どういう意味？ と皆さん思っているでしょう

それではIt's 回想Time

俺は日本に来て初めての休日ライフを楽しんでいた

まあ、主にゲームやら音楽鑑賞なんだが……

ピンポーン

チャイムが鳴った

誰だ？ こんな時間に…

よし！

めんどくさいんで無視だ！ 居留守だ！！

ピンポン ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン  
ピンポン

「だあああ！ 誰だ俺の休日をジャマする奴は！！！」

「僕だが……何か問題でも？」

ドア越しでも分かる      この声は

「ひつ、翡翠！？」

俺はつい叫んでしまった

「分かっているのならさっさとドアを開けんかバカ者<sup>もの</sup>！」

アッ、ハイ……………

俺はすぐ玄関へ行き、ドアを開けた

ドアを開けたそこには、シンプルな白ワンピースを着た翡翠が仏頂面<sup>ぶつていめん</sup>で立っていた

「抱きしめても、良いですか？」

それが俺の第一感想

「失<sup>う</sup>せる変態」

怒られちゃいました

というか、冷めた目で見られた

でも、本当に清纯派っぽくてカワイイ

翡翠はますます不機嫌な顔になった

俺はすばやく翡翠を家にあげ、お茶を出す

翡翠はそのお茶をすすると、幾分か表情が柔らか<sup>やわ</sup>くなった

俺は改めて翡翠の格好を見る

翡翠のワンピースは下のスカートの部分が膝上<sup>ひざの上</sup>くらいまでしか無い

つまりは……露出度が普段と比べて高い

あゝ……肌白いな……ちゃんと外で運動してんのかよ……

でも、その白い肌に白ワンピースの組み合わせ良いなゝメチャクチャ似<sup>に</sup>合う<sup>あ</sup>

とか思つてジロジロ見てたら、なんか翡翠に白い目で見られた……

「その変態思考を今すぐ止める」

俺はすばやく自分の分のお茶を出してソファに座る

「そつえば、なんで翡翠がここにいるんだ？」

俺がそう言つと、翡翠はこんな事を言つた

「話せば長くなるな。要点だけ話すぞ」

俺はゴクリと唾を飲み込む

何かイタリアであつたのだろうか……？

そう思つた俺の予想を、翡翠ははるかに裏切つた

「最初はねえ、輝夜を殺そうとも考えていたんだ」

.....エッ？

俺の思考が真っ白になっても翡翠は話し続ける

「でも、師匠が『殺すのは止めときなさい』って言うから...

...だからお前をボコりに来た」

空白の時間が過ぎる

「輝夜？ 聞いてんの？」

（なんか輝夜の様子が変だな.....目が死んでる魚みたいに虚ろだ）

「ハハハハハハ.....人生終わったよ」

乾いた声で俺は笑った

ほんとに、終わったよ

今なら雪奈ちゃんの気持ち分かるかも

なんだか翡翠に「お前を殺そうと思った」だなんて言われてショックが大きすぎる

これなら生きていく気力も無くなるだろうな……

（うわっ！ どうしよう、輝夜が壊れた……

なんか、このままだと廃人になっちゃいそうだ……とりあえず、冗談だって言っとくか）

「えっと、冗談だよ？」

「え！？ なんだあ、冗談かあ……………ヨカッタア」

本当に良かった

うわ、なんか目から熱いものが溢<sup>あふ</sup>れ出ていく



「本ツ当に冗談だから…泣かないでよお」

ナイテナイヨ、目カラ汗ガデルダケサ

もしや、翡翠って泣きに弱いのか？

あゝなんかカワイイかも

俺はそんなことを考えながら、目からボロボロと溢れていく汗を拭いた

「じよ、冗談なのは殺すことに關してだぞ！

お前がいやらしい目つきで雪奈を見ていたのは事実なんだし……

そのまま輝夜に何も罰を与えずに放っておくのは、この僕が耐えられないんだッ！」

あゝ、なんか話がヤヴァイ方向に……

てゆうか、雪奈と翡翠は知り合いなんだね

‘知り合い’というよりも、雪奈があんなになるくらい仲が親しいんだろうな

俺は今まで会ったこと無かったけど

「だから僕はお前をボコりに来た」

コレ本日2度目のセリフじゃんか

まあ、こんなんで回想終了

「でもよお、俺は雪奈の自殺を止めてあげたんだぜ？

っつーことは、雪奈の命の恩人なわけだ。それでも俺をボコれるのか？」

俺は声を張り上げて言った

だってさ、翡翠の言う‘ボコる’って、そこらへんの不良のプライ

ドがスタスタになるだけじゃなく、五体不満足になるかもしれないんだよ！！

皆さん分かる！？ この恐怖がッ！！

翡翠は数年前、中小ファミリーを1人で全壊させたんだぞ！？

どうやったかは知らないけどさ

ファミリーを全壊させた理由が「町の子供のお母さん方に麻薬とか売ってたし、ボスの性格最悪で部下からは誰1人としてしたわれてなかったし、家族がいなかったし、ボンゴレの傘下じゃなかったから」だそうです！

俺だって依頼で中小ファミリーを潰した事あるけど、全壊じゃなかったし5日かった

でも翡翠は1日で……しかも、俺が目離れたほんの数十分の間で

……

翡翠、なんて恐ろしい子！？

話が脱線したね

俺の言ったことに反論できないのか、可愛らしく唇を尖らせて翡翠くちびるとがは言った

「むう……そう言われると、コッチは何も言えなくなるんだが

……それにしても、“雪奈”って呼び捨て？」

よし！ もう一押し

なんか最後のほう聞こえなかったけど、大丈夫でしょ

「それにさあ、俺がボコられたりしたら雪奈も悲しむんじゃないかな？

『ひどい傷ね……私が看病してあげるわ！』とか言っただけで雪奈ちゃんも直々に、

ナース服を着て俺を看病してくれたり……！？」

「むう……なんか言い方ムカつくし、気持ち悪いけど……

雪奈が悲しむことはしなきゃならんな」

キタ

雪奈って翡翠にメツチャ、キクーーーー！

これは未来に生かせるな、グハハハハ……ゴホン！ 変な笑い声が出てしまった

「そっぴゃあ、翡翠はもう日本に住めるのか？」

翡翠は首を横に振った

「もうチョイかかるぞ。今だって本体はイタリアにいるしね」

本体はだ……って？

「もしや、幽霊？」

生霊とか翡翠ならありえそっだ

あれ、でも幽霊には足無いよな…？

てか生霊じゃなくて幽霊だったら死んでるじゃん！？

「僕には足がちゃんとある。お前だってジロジロ見てただろ」

じゃあ、なんなんだ？

「まあ、間違いではないな。‘生霊’で合ってるよ。幽体離脱って奴だ」

一昔前に、流行<sup>はや</sup>ったギャグだな

あの双子の芸人のコンビ名なんだったっけ？

……て！　なんでそんなことができるんだよ！？

「なんでって……そりゃあ、出来るから出来るんだもんっ！」

‘出来るんだもんっ’てカワイイなゝああ、翡翠がほった膨<sup>ふく</sup>らましてる！触<sup>さわ</sup>りたい！！！！

てか、理由になってないし

「いーの、いーの。理由なんて後からついてくるんだから」

カッチョエエ！

ズガンッ

隣ん家から銃声が聞こえた

たぶんリボーンだろう……なんか慣れた

「んじゃ、僕イタリアに帰るわ」

エッ？　なんでさ、もっといれればいいじゃん

ゆっくりしてってよ

「この状態って結構疲れるんだよね…てか、この家って正確には僕のだから」

そうなんだ

アレッ？　じゃあ、翡翠が日本に住むことになったら、この家に住むのか？

そうだったら……2人つきり……だよな……？

「残念ながら、ディリアも連れてくるからな」

なぐんだ…って！　あの嫌味な執事もかよ、気が滅入るな

「そんじゃあね」

翡翠はそう言つと、霧のよつに消えてしまった

さて、何をしようか……？

そう思ったとき、奈々さんの悲鳴が聞こえた



「キヤアアア」

沢田の家で何かあったんだろう……？

それにしても、慣れって怖いね

ガシャーンッ

ドゴッ

なんかスゴイ音がしてる

今日なんか、あったっけ？

「ぎゃああああー！」

スカーン

ていうかコレ、何の音だよ

「気になる……よな」

沢田の家に行くか？ それとも止めとくか？

しかしなあ、ヘタに見に行つて失敗したら翡翠に

あつ、今日発見した「雪奈ちゃんシールド」を使えばっ！

「…見に行こ」

俺はそう呟<sup>つぶや</sup>いて家を出た

だつて気になるんだもんっ！

## 影の王子と陰の王？（後書き）

輝夜視点と書いておきながら翡翠ちゃんの心の気持ちも書いてる・  
・

まあ、お許しくださいませ

タイトルの意味は次話で分かります

9月23日修正

## 影の王子と影の王？

ピンポーン

輝夜がチャイムを押してから、ほどなくしてツナが出てきた

「ハイ、どちら様で　　って、鳳雷君！？　　なんで家に……」

ツナは家を訪れた輝夜に驚いた顔を見せ、心の中でこんなことを思っていた

（な、なんで鳳雷君が家に……！？　と、とりあえずリボーンのこととかマフィアのこととかは絶対に知られないようにしなきゃ）

「やつぱりココ沢田の家だったのか……俺さあ、隣に引っ越してきたんだけど、

表札に「沢田」ってあったから『もしや……？』とは思ってたんだが、ピンゴだったな」

輝夜は「ハハハッ」と笑いながらツナに言った

「なんだ〜…隣に引っ越してきたのって鳳雷君だったんだね」

ツナは安心して笑みをこぼす

「それでさあ、なんかスゴイ音してたけど……大丈夫なのか？　なんかあったのか？」

輝夜の確信を突いた発言にツナの顔が固まる

（やっぱり聞こえてるんだ……！　どうしよう、変な奴だとか思われたら……マフィアの次期ボスだとか絶対に知られちゃいけない！）

ツナは瞬時にそう思い、なんとも齒切れの悪い返答をした

「あ、うん………ちょっと、ね………」

（やっぱり秘密にしたいよな〜こういうのってさ。どうやってこの壁を越えようか……）

ツナの返答を聞き、こんなことを輝夜が考えていたとき、可愛らし

い声がツナの後ろ側から発せられた

「何してんだ？ ツナ って、なんでお前がココにいるんだ？」

カチャリ

出てきたのはリボーン

そして、何を思ったのか輝夜に銃口を向けていた

「なっ、何してるんだよりボーン！ 銃おろせて！！」

「沢田の言うとうりだな。俺に銃口を向けたってなんにもなんないぞ」

あせる沢田に冷静に答える輝夜

だが、輝夜は本心ではこう思っていた

（ビクった…撃たれるかと思ったよ。てか、俺なんで銃口向けら

れてんの？ 俺なんかしたか？ 同じボンゴレファミリーに恨み売  
るようなマネなんてして無いぜ……！？ たぶん、してないよな？

チャリ

しばらくして、リボーンは銃をおろして輝夜にこう言った

「どういづつもりか知らねえが、ツナに手を出すのは止めとけ」

「どういう意味だよ、リボーン！ 鳳雷君のこと、なんか知ってん  
のかよ！！」

ツナは叫んだ

輝夜もリボーンに言う

「俺が沢田を殺す理由が無いんだがな、なんでそこまで警戒して  
るんだ？」

警戒されてるんだ？」

輝夜はそう言い終わると「ふう」とため息をつく

「あら、輝夜君じゃないの？　もしかしてツツ君と知り合いなの？

さ、あがつてつて」

現れた奈々さん

少し髪が乱れてますねえ

「か、母さん！？　大丈夫なのかよ」

ツナは奈々さんに心配そうに言う

「大丈夫よ……さ、遠慮せずにあがつてつて」

やや強引ながら、奈々さんに言われるがまま輝夜達はツナの部屋へ



「どういふことなんだよ、リボーン」

「沢田、落ち着けって」

部屋に着くと早速ツナはリボーンに叫ぶが、あいかわらず輝夜は冷静だ

そして、リボーンはそんなツナに輝夜の説明を言う

「コイツはな、ボンゴレファミリーの一員なんだ。」

しかも、一部の人間しか姿を見たことが無い、超トップシークレットで、

イタリアでは名の知れた殺し屋だ<sup>ヒットマン</sup>」

「ええ！？ 鳳雷君って殺し屋なの！！？ しかもボンゴレファミリーなの！！？」

リボーンの説明を聞き、ツナは驚きを隠せない。輝夜は無表情で聞いている

そして、リボーンはまた話し始めた

「名の知れた」と言っても、知られてるのは二つ名だ。

いつのまにか現れ、気が付くと消えている。

そんな中、幹部の1人が言ったんだ。『まるで影のようだ』……と。

それからとったのか、奴の二つ名は“シャドー・プリンス”だ。

プリンスってのは男ってことが数少ないコイツの情報だからつけられた

とか色々な諸説があるぞ」

諸説って、民話なんかですかい

リボーンは1度輝夜の方を見たが、輝夜は興味が無いのか窓の外を見ていた

ツナはまだ納得できていない表情で言った

「なんでリボーンは銃なんか向けたんだよ！ 仲間なんだろう？」

「そーだ、そーだ。同じボンゴレファミリーじゃないか」

今度は輝夜も興味があつたのか、食い付いて来た

「ファミリーの上部にいる奴は1人を除いて全員が9代目に忠誠を誓っている。」

…が、コイツは違輝夜うんだ。

一緒に行動していると考えられるもう1人の命令に従っているにすぎない。

一緒に行動してる奴ってのは、あらゆる個人情報を知り尽くしているっていう、

一流の情報屋だ。ソイツの二つ名は“シェイド・キング”。

“シェイド” ってのは英語で“陰” って意味だ。

ソイツもボンゴレファミリーだっけ言う話だが、誰もソイツの姿を見たことが無い。

輝夜  
ソイツを除いてな。

輝夜  
ソイツを裏で操っている得<sup>えたい</sup>体の知れない野郎だ」

ソイツやらコイツやら、少々分かりにくい説明でツナが納得するはずも無く、ツナはリボーンに質問する

「なんで、それで危険になるんだよ。

それに、9代目に忠誠を誓ってないもう1人は危険じゃないのかよ」

リボーンはツナの質問に答える

「もう1人ってのは身元がハッキリしてるから安心なんだ。

輝夜  
コイツはあくまで‘陰’に従う。

‘陰’が9代目を裏切れと命令すれば、輝夜  
コイツは9代目を殺すだろう。

しかし、‘陰’の正体はこのオレでさえ分からない。

裏切り者がファミリーの中に潜<sup>ひそ</sup>んでいると知られれば、ファミリーが混乱し、

疑心暗鬼に陥<sup>おちい</sup>るからな」

もつともない分だが、それは‘陰’がボンゴレ9代目を裏切る、という前提が必要であるから、実際の所は心配のし過ぎ<sup>す</sup>なのだ

まあ、‘陰’がファミリー内に姿を現して裏切らない、とでも言え  
ば一番良いのだが

ツナはもっと混乱したようで、沈黙が3人を包む

数分が経過し、しびれを切らしたリボーンが口を開いた

「で、なんでお前はココにいるんだ？」

「え、いや……なんでって言われても……命令されたから？　かな

あ  
」

頭を掻きながら当然のように言う輝夜に、リボンはため息をつく

そんなリボンを見て、輝夜はもう一言

「別に沢田に危害を加えるつもりは無いんだがなあ……

今回の命令は、むしろ沢田のためになる命令だぞ」

「え？」

輝夜の発言に疑問符を浮かべるツナ

「今回の命令はなあ、沢田綱吉を守れつつう感じだったぞ」

「ええ！？ どうゆーことなんだ？」

ツナはさらに疑問符を並べる

そんなツナを見て、輝夜は詳しく説明をする

「俺が受けた命令は『沢田綱吉を影から見守れ。その命を盾にしてでも』って感じ。

俺ブツチャケ、死ね、勧告受けたようなもんだぜ？

てか、アイツがボンゴレ裏切るとかアリエナイ」

「どうしてそう言い切れるんだ？ 何か証拠でもあるのか？」

リボンがそう言っと、輝夜は黙り込む

「証拠なんて……あるわけねえじゃん。だってそう思うし」

自暴自棄に輝夜がそう呟いた瞬間、ツナの部屋にリズムのある電子音が鳴り響いた

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

輝夜はポケットに入っていた携帯電話を取り出す

「通話？」

画面に映し出された文字は、翡翠、

輝夜は急いで電話に出る

「もしもし」

『ハローハローそちら輝夜？　デイスイズ翡翠！』

輝夜の顔が引き攣る

それを見て、リボーンは電話の相手が立場が上、つまり、陰の王、だと確信する

「代われ」

チャキリ



リボーンはそう言って輝夜に銃口を向ける

輝夜はそれを見て、先ほどとは全く違う様子で焦る<sup>あせ</sup>

ツナは早すぎる展開に混乱する

そして、輝夜は言った

「ツッコミぐらいさせてくれよう！」

チャ

リボーンはゆっくりと銃をおろす

そんな光景を見て、混乱したツナは心の中で思いつきりツッコんでいた

（普通は銃向けられて「ツッコミさせろ」だなんて言えないよ！

鳳雷君のこと常識人と非常識人、どっちだと思えばいいの！？ て  
ゆうか、急展開すぎるって！！？）

そうして、輝夜は翡翠にツツこむ

「とりあえず、ココ日本だから日本語で話そーか<sup>はな</sup>」

『しゃーねーな。…てか、コッチはイタリアだっつの』

「じゃあイタリア語話せよ！ なぜに英語！？」

『なんとなくに決まってるだろうがッ！！！！』

即答ですかい

「それとさあ、なんかリボーンが電話代われって言ってるんだけど  
……」

リボーンをチラ見して輝夜は言った

すると、翡翠はこんなことを言った

『ちょうどいいねえ。代われ』

それを聞いた輝夜は携帯電話をリボーンに渡す

「お前が“陰の王”か？」

リボーンは真っ先にそれを言った

『いかにも。我が<sup>われ</sup>“陰の王”であるとも。我に何用か？』

声はロボットのような機械的なものだった

「なぜツナを守らせる？ 一体何が目的だ」

『沢田綱吉に死なれると我の計画に狂いが生<sup>う</sup>じるでな。

なに、たいした計画じゃありませんて』

「証拠はあるのか？」

『そうじゃのう……どうすれば御主<sup>おぬし</sup>は信じよるのじゃ?』

翡翠がそう言うと、リボーンは数秒考え込む

「まず、お前が姿を現せ。そうでなければ信じない」

リボーンがそう言うと、電話の向こうで笑い声がする

『そう来たか。残念じゃがの、我は今手が離せない大仕事をしておる。』

会に行くのは、早くとも来年の春ぐらいになるのう』

「くだらないウソはつくな。お前の手下を殺すぞ」

リボーンはそう言いながら輝夜の頭に銃口を向けた

『ハア……しょうがないのう。』

もし我が春に御主に会いに行かなかったら、そこにいる輝夜を殺してもよいぞ』

思いがけない発言にリボーンは驚く

「どういっつもりだ？ まさか本当にお前は手下を道具として見て  
いるのか？」

『道具じゃと？ 御主は本当に面白<sup>おもしろ</sup>いのう。』

話は簡単<sup>はなし</sup>、春に御主に会えば良い。それだけじゃ  
』

「それじゃあ、春にお前が俺の目の前に現れなかったらコイツは殺  
すからな」

『承知した』

話はそれで終わったのか、リボーンは携帯電話を輝夜に返した

「オイ、大丈夫なのか？ なんか命の危機を感じるんだが……」

輝夜はまだ繋<sup>つな</sup>がっている携帯の向こうにいる翡翠に言った

『大丈夫っしょ。輝夜だし』

そこからは普通の生なまの声が聞こえた

「それって信頼なのか？　もしそうだったら、すごくうれしいんだけど……」

リボーン達に背を向けて話す輝夜

その頬ほおにはほんのりと赤みがかっていた

『信頼って言うより、輝夜に何かあっても僕には被害がこないし』

それを聞いた瞬間、輝夜の顔は真っ暗になった

『んじゃ、もう切るぞー』

ブツツ……ツーー　ツーー　ツーー

「切られた」

携帯を閉じ、ポケットに仕舞<sup>しま</sup>おうとする輝夜にリボーンはこう言った

「お前はこれからツナが監視するからな。妙なマネしたら……わか  
ってるな？」

リボーンは黒い笑みを浮かべながら尋常<sup>じょうじょう</sup>でない量の殺気を放つ

「なっ！？ リボーンッ何言ってるんだよッッ！」

叫<sup>こ</sup>ぶツナを無視して、リボーンの殺気も余裕<sup>じゆうよ</sup>の笑みを零<sup>こぼ</sup>す

「じゃあ簡単だ。妙なマネしなきゃいいんだな」

輝夜はそう言うときまだ混乱しているツナに「また明日な」と言っ  
て窓から隣の家の窓へと飛び移って行った

リボーンが彼らを「似ている」と思ったのは考えるまでも無い

## 影の王子と影の王？（後書き）

うん、疲れた

でもお気に入り件数が・・・うん、すごくうれしいです

読んでくださる皆様、本当にありがとうございます！

・ 輝夜のプリンスがプリンセスになっており、感想にて知りました・・・

ゴメン！輝夜

9月23日修正



番外編〜いつの日かの2人〜（前書き）

最近、番外編が多いですが・・・まあ、気にせず読んでください

今回はメチャクチャ短いです

番外編　いつの日かの2人

ある日、翡翠のもとへ輝夜からある物が送られてきた

それは、手紙と1輪りんの花だった

手紙には、こう書かれてあった

『翡翠へ

お元気ですか？　ちゃんとご飯を食べて外で運動していますか？  
心配なのです。

話は変わりますが、最近、町の花屋さんの店員さんと仲良くなり  
なりました。

その店員さんに“幼馴染おこなじみの女の子にプレゼントするには何が良  
い  
か”

と相談したところ、この花を勧めてくれました。花言葉がどうと

か……

其方そちうに着くまでに枯れていないと良いです。

輝夜より』

「赤いアネモネの花、ねえ」

翡翠はそう呟つぶやいて少し笑う

そうして翡翠がその赤いアネモネの花を手にとって眺ながめていると、  
後ろうしろからこんな声がかけられた

「たった1輪ですか？ しかも枯かれかかってますし」

デイリアだ

彼は持ってきたケーキを皿へ分ける

「乙女心の分からん奴だなあ、お前は。大切なのは‘気持ち’だ。つまりは‘愛’だ！」

「よくそんな恥<sup>は</sup>ずかしい事を大声で言えますね」

（ツッコまれた！？ 恥<sup>は</sup>ずかしいって言われた！？ コイツに！？）

彼らはいつもこんな風<sup>ふう</sup>にコントを毎日やっている

すると、翡翠は突然ディリアに言い出した

「そういえばディリア、赤いアネモネの花の花言葉って知ってるかい？」

「花言葉、ですか？ 残念ながら私<sup>わたくし</sup>はその方面はさっぱりなので……

庭師<sup>にわし</sup>にでも聞いてみましょうか？」

その言葉を聴き、翡翠は勝ち誇<sup>ほこ</sup>ったような笑みを浮かべる

「赤いアネモネの花の花言葉はね、たしか……“君を愛す”だったよな」

瞬間、ディリアの動きが止まる

数十秒が経ち、ディリアはやつと口を開いた

「その花は、あの少年……鳳雷山輝夜から送られてきたんですね？」

「そうだが……どうしたんだ？」

いつもと様子が違うディリアに翡翠は疑問を覚える

「翡翠様、あのガキを殺してきてもよろしいでしょうか……？」

途端にディリアから鋭い殺気が放たれる

「ハア……お前が敵でなくて良かったよ。」

殺気が自分に向けられていないと分かっている、まだ怖いからね……

ディリア、輝夜を殺しているのは僕だけだからガマンしなさい」

「そうですか、残念ですね。本ッ当に残念ですね……」

それにですね翡翠様、私は10代で幹部にまで登りつめたんですよ？

これぐらい、出来なくてどうします？」

翡翠はケーキを一口食べ、誰にも聞かれないように呟いた

「その幹部の中で、お父様の守護者も合わせて、僕が『恐い』って思うのは……」

ディリアだけなんだけどね」

自分の知らない間に自分の命を危険にさらして、また自分の知らない所で命拾いする輝夜であった

ちなみに、リボンの言っていた、9代目に忠誠を誓っていない、もう1人の幹部、とはディリアのことだということは言うまでもない

番外編 いつの日かの2人 (後書き)

さて、デイリア君が忠誠を誓っているのは誰でしょうね？

10月1日修正

…俺の出番は？……by輝夜（前書き）

少々セリフをカットしていますが・・・まあ、分かると思います



…俺の出番は？……by輝夜

「ふぁ~~~~~眠い」

「綱吉君があくびするから私まで眠くなって…ふぁ~~~~」

校舎の前でツナと雪奈がこんな話をしていると山本が現れた

「よおツナ、新崎」

「山本！ おはよ！」

「おはよう、武君」

すると、山本は突然ツナの肩に腕をのせて言った

「なんだ寝不足か？ ツナ、クマできてんぞ」

「あ、そーいえば」

雪奈は山本に指摘され、ツナの顔のクマの存在に気が付く

「え…あ……ちよつとね…」

（山本と雪奈とは普通の友達でいたいんだ……家にいる殺し屋を他のマフィアの殺し屋が暗殺しに来て、泣かれて大変だったなんて言えないよ）

「ま、勉強で寝不足でねーならいいんだけどな」

「え？」

山本の思いもよらない発言にツナは聞き返す

「落ちこぼれ仲間が減っちゃうだろう？」

「ホント、武君の言う通り。私たち、勉強は全然だからね」

「アハハハハ」

一方で獄寺が

（ちつきしょー野球野郎共！！ 10代目に馴れ馴れしくしゃが  
ってー！！）

という風に3人を影から見ていることにツナたちは気づいていない

そして獄寺はリボーンに「山本と雪奈をファミリーに入れている」  
という発言を聞き、考え直すよりリボーンに言うのであった

くプール（放課後）く

「つつーわけで獄寺を納得させるためにも、

山本と雪奈の『入ファミリー試験』をすることにしたんだ」

リボーンは浮き輪でプールに浮かびながらツナに言った

…あれ？ 今夏なの？

てか、帽子プールに浸かってるんだけど…

プールの水って虫の死骸とか入ってて汚いの…

リボーンの周りにはひよこ型のレオンが浮かんでいる他、ぷりんや飲み物が板に乘せられ、浮かんでいた

「俺が納得できーん！！ 何勝手に決めてるんだよ！

ってか、勝手に学校のプール入んなよ！！」

ツナ、ナイスツツコミ

「山本はクラスメイトだし、雪奈は幼馴染だぞ！ 友達だぞ！

それに2人とも部活で忙しいんだ！ お前達の変な世界に巻き込むなって！」

リボーンは足だけを水上に出し、それ以外を水中へと入れる

「もう獄寺に山本と新崎を呼びに行かせたぞ」

よくその状態で喋れるなりボーン

ああ、もう完全に帽子水に浸かってるし…

「なんだってー!!!? あ、あの獄寺君だぞ!!」

山本と雪奈に何かあつたらどーすんだよ!!」

ツナはそう言つて顔を真っ青にして山本たちのもとへと走る

一方、その山本たち

「おいおい獄寺……呼び出しといてといてだんまりにらめっ」はね  
「んじゃねーの?」

「そうよ! 武君と私になんの用なの!?!」

獄寺は何も言わず、山本と雪奈をギロギロと睨み続ける

（いけすかねえ野郎共だ……こんなやわそつな奴らが10代目を守れるわけがねえ）

すると、山本は獄寺に紙パックの牛乳を差し出して言った

「お前牛乳飲むと良いぜ。イライラはカルシウム不足だ」

「…私のも飲む？」

山本の発言を聞き、雪奈は自分の牛乳パックも差し出す

（限界だ……）

獄寺はそう思い、どこからかダイナマイトを取り出す

するお、誰かが遠くから3人を呼ぶ

「おい！！！」

ツナが3人のもとへ辿り着いたのだ

「10代目！」

「よお、ツナ」

「綱吉君、そんなに息切らしてどうしたの？」

（は~~~~何もまだ起きてないみたいでよかったーっ）

ツナはゼーゼーと息を切らしている

「!? 何そいつ……ツナの弟？」

「へ？」

山本に指摘されツナが後ろを見ると、そこにはツナの腰に紐を巻き付け、その紐を手に掴み、スケボーに乗るリボーンの姿があった

「ちゃおっス」

「げっ、リボーン!! どーりで重いと……」

「弟じゃねーぞ。俺はマフィアボンゴレファミリーの殺し屋リボーンだ」

(あーバカーー!! いきなりバラしやがった!!)

「ハハハハ、そっか! そりゃ失礼した」

「そうなんだ、リボーン君ってスゴイのね」

「へ?」

2人の普段と変わらない態度にツナは困惑する

「こんなちっせーうちから殺し屋たぁ大変だな」

「そうね、少しくらい休んだら?」



「大丈夫だぞ。それに、大変でもなんでもねーからな。」

お前たちもボンゴレファミリーに入るんだぞ」

「ちょっ、おいリボーン！」

「まーまー相手は子供じゃねーか。俺らもガキン<sup>とき</sup>時<sup>とき</sup>やったる？

刑事<sup>ご</sup>っこだのヒーロー<sup>ご</sup>っこだの」

「そつだよ綱吉君。年下の遊びに付き合つのも年上の義務だよ」

（なっ！！ この2人マフィア<sup>ご</sup>っこだと思つてんのーーーーー  
！！？）

山本は「よっ」という掛け声でリボーンをじぶんの肩の上に乗せる

「ファミリーの10代目ボスはツナなんだ」

「っほーーーーーそりやまたグッドな人選だな」

「ボスだって綱吉君、スゴイね」

「うわーーーーーっ」

（リボンの奴、俺が触<sup>ふ</sup>れただけで半殺しにするくせに、山本の前では借りてきた猫みたいいい子ぶってやがるー！！）

「よし、わかった……んじゃ、俺も入れてくれよ。そのボンゴレファミリーってのに」

「あゝ、私も入りたあい」

2人がそう言うと、リボンはニカツと笑う

「えー！ー！！　や…山本！？　雪奈！？　何言ってるの！？」

「ちっ」

ツナは驚き、獄寺は舌打ちをする

「それで、どうすればファミリーに入れるのかしら」

「まず入ファミリー試験だぞ」

「っへーーーーー試験があんのか…本格的じゃねーか」

リボーンはぴょんと山本の肩から飛び降りていった

「試験に合格しなくちゃファミリーには入れないからな」

それを聞き、ツナは「あっ」という声を漏らす

（そ…そーだ。試験に受かりさえしなければ……）

「ちなみに不合格は死を意味するからな」

「んなーーーーっ！！！」

「わーリボーン君、そんな冗談どこで覚えたのよ」

「冗談じゃねーぞ」

「ハハハ、マジでお前面白いな」気に入ったぜ」

2人は笑いながらリボーンの頭（帽子）を撫でる

（違うんだよ2人とも！ このガキはやると言ったら本当にやるんだよ！！）

「試験は簡単だ。とにかく攻撃をかわせ」

リボーンはそう言うと同時に両手に武器を構える

「んじゃ、はじめっぞ」

リボーンのこの一言で入ファミリー試験は幕を開けた

…俺の出番は？……by輝夜（後書き）

輝夜の出番はサブタイトルだけです（笑

10月2日修正

存分に死んで来い（笑）…by翡翠

「んじゃ、はじめっぞ……と、その前にいい加減隠<sup>かげん</sup>れてねーで出て来い。

いるのは分かってんだ」

リボーンはそう言うのと近くにあった木陰に向けて一発、銃弾を撃ち込んだ

「!？ 何してんだよりボーン!!」

「リボーンさん!?!」

「小僧？ 何してんだ？ ……それにしてもリアルなおもちゃだな」

「リボーン君、どうしたの？ あそこに誰かいるの？」

みんなの視線が木陰へと集まる

すると、木陰から両手を挙げて、‘降参’のポーズをとった輝夜が出てきた

「おっかねーガキなこと。銃刀法違反で捕まっちゃまえ……」

よお！ 沢田に雪奈に山本に……えっと……獄寺、だっけ？」

「ほっ、鳳雷君！？　なんでそんな所に……！？」

まあ、そりゃあそう思うだろう……普通は

「誰だテメエ……」

輝夜のことを知らない獄寺……それもそのはず

獄寺と輝夜は何気に初めての会話だったりするのだから

「おっ、鳳雷じゃねえか」

「輝夜君、大丈夫なの？　さっき撃たれてなかった！？？」

銃のことは無視して（気付かないだけかもしれないが）話しかける  
山本は反対に雪奈は輝夜のことを心配する

「んゝ大丈夫みたいだな。ケガ無<sup>ね</sup>えし、心配してくれてありがとう  
な雪奈！

それと…俺になんか用か？ リボーン君」

輝夜は雪奈に微笑みかけた後、少しとぼけたような声でリボーンに  
訊<sup>たず</sup>ねた

「お前も入ファミリー試験を受ける」

リボーンの言った意味が分からなかったのか、皆黙り込む

数十秒後、輝夜が口を開いた

「え、フツーに嫌だけど？」

（なんで俺がわざわざ死に行くようなことしなきゃなんねえの？  
てか、俺もうボンゴレファミリーに入ってるんですけどー。受けなき  
やいけない理由を教えてくださいよ。理由をさあ）



輝夜がそう言うと、リボーンは即答した

「おめーの実力を知つといたほうが、後々便利そうだからな」

「どーゆーことっすかりボーンさん！！ やっぱコイツ敵なんすか  
！？」

「「?」?」

リボーンの発言に反応し、輝夜を睨みつける獄寺

話し自体が分からず、疑問符をたくさん量産している山本と雪奈

そして、混乱しまくってツッコミ役の仕事を果たしていないツナ

すると、輝夜は勝ち誇つたような笑みを浮かべてリボーンに言った

「残念だったな……俺は命令がなければ何もできないんだよ」

（嘘だけど、このままじゃ強制参加になっちまうからな！ 弱腰と  
か言っなよ？ 生き残るための知恵さ！！）

ピーピーピー~~~~ピーピー~~~~

電子音が鳴り響く

音は輝夜の方から聞こえた

どうやら輝夜の携帯電話のメールの着信音だった

アレ？　なんか変わってないか？　メールの着信音

（俺の電話番号とメアド知ってんのは……１人しかいねーよな）

輝夜は半ば呆れ、ポケットから携帯電話を取り出す

シュタッ！

「！？？　何すんだリボーン」

驚いたことにリボーンが輝夜の携帯電話を奪って勝手にメールの内

容を見たのだ

「『命令が欲しいのならあげようじゃないか。』

輝夜、 “入ファミリー試験を受ける”……そして、存分に死んで来い」

……だそうだ。なるほど、おめー、輝夜、って呼ばれてるんだな」

リボーンはフムフムと頷く

ちなみにその他の状態

ツナ：啞然としている

獄寺：輝夜にガンたれている

山本：状況を分かっておらず、思考停止中

雪奈：上記山本と同じ

そして残る輝夜：真っ青な顔色で、まるで、この世の終わりに直面

した、' かなのような表情をしている

「んじゃ、はじめっぞ」

「おっ、ようやく始めんのか」

「輝夜君も参加するってことでいいのかな？」

状況を分かっていないが故にリボンの発言に素早く反応する2人

「まずはナイフ」

リボンはそう言つと山本や雪奈だけでなく啞然としているツナや輝夜にまでナイフを投げた

ビュビュビュッと、ナイフが風を切る音が聞こえる

「キャッ」

「うおっ」

「うわっ、あつぶねえ……でもこんなの序の序の口」

慣れている輝夜はすぐに気を取り戻し、華麗にナイフを避ける

だが、慣れていない上にいきなり投げられたナイフに驚きながらも寸でのところでかわす山本と雪奈

バツとツナは雪奈の前に盾になるように移動した

「ま！ 待てよりボーン！！ 本当に山本と雪奈殺す気かよー！」

（殺せ殺せ）

（ツナ、俺のことはいいーのかよ……）

ツナはそう言うが、そのかたわらで獄寺と輝夜はこんなことを思っていた

「まあ待てツナ」

山本はそう言つとツナの肩を組んだ

「俺らもガキン<sup>とき</sup>時木刀で遊んだりしたろ？ いーじゃねーか付き合  
おーぜ」

（まだ子供の遊びだと思つてるー！！！！）

木刀で遊ぶ子供は山本しかないと思う

「ボスとしてツナも見本を見せてやれ」

「はあ！！？」

リボーンに言外に“ツナも入ファミリー試験を受ける”と言われた  
ツナ

「そいつぁーいい。誰が試験に受かるか競争だな」

「綱吉君も受けるの？ 一緒にがんばろうね」

「ちよつ、えゝえゝー！！？」

「ドンマイ沢田！ 合掌<sup>がっしょう</sup>するぜ」

慌てふためくツナに向かって輝夜は手を合わせる

「さあ逃げろ！」

「置いてっちゃうよ！ 綱吉君」

2人はそう言って走り出し、ツナは

「そんなあーつまつたー！！」

と叫びながら2人の後を追う

リボーンは再びナイフを準備し、投げ始める

ビュビュッ

山本の頭目<sup>めが</sup>掛けてナイフがとんでくる

山本は頭を下げ、すれすれで避ける

「おっと…いい肩してらー」

雪奈も山本と同じく、頭すれすれの所で避ける

「スリル満点だね　デ　ズニールランドより楽しいかも」

そんなこと思うのは山本と雪奈だけだと思う

一方、輝夜の方へは他の3人とは比べものにならないほどの量のナイフがとんできている

正直、本当にリボーン1人でこの量を投げているのか疑問だ

「なあって俺だけ雪奈達のと比べて50倍ぐれーの量のナイフが……」

ま、翡翠との修行に比べたら1000倍はマシだな」

輝夜君はまだ余裕のようです



（スゲー！ この3人、命懸けいのちがの状況楽しんでやってるよ！）

ツナは呆れながら、そう思った

存分に死んで来い(笑) ∴ b y 翡翠(後書き)

数日後、加筆いたします！

遅れてすみマセンでした！！

10月2日修正

翡翠様は私の母が苦手なんだそうです・・・byディリア（前書き）

ゴメンナサイ！

加筆するとか言って、なんかスゴク長くなってしまったので、改めて投稿しました

翡翠様は私の母が苦手なんだそうです・・・byディリア

「山本と雪奈はさすが部活で鍛えてるだけあるな。反射神経バツグンだ。」

輝夜の方は……まあ、予想通りだな」

山本と雪奈を褒めたりボーンの発言に獄寺は不満気に言った

「そーすかねえ……ケツ」

すると、山本は走りながらこんなことを言った

「しかし最近のおもちゃってリアルなー。」

さっきの銃もナイフも本物にしか見えなかったぜ」

「山本おもちゃだと思ってるのー！！？」

「た、武君……それはさすがに………」

「雪奈と同感。ある意味スゲエよ」

山本の発言に呆れる3人<sup>あき</sup>

「次の武器はボウガンだ」<sup>エモノ</sup>

急にツナたちは立ち止まる

リボーンがいつの間にかツナ達の前に移動していたのだ

「げっ、先回り!!」<sup>さきまわ</sup>

「やるねー」

「いつの間に!? スゴいわ、リボーン君」

「やっぱこのガキおつそろしーな」

その時、上から…校舎の外の階段から子供の声が聞こえた

「ガハハハハ、リボーン見　　っけ!!」

ツナ達は声のした方を見た

「今度はなんだ？」　山本

「ずいぶん汚い笑いかたね…」　雪奈

「聞くだけでウザさ100倍だな…」　輝夜

「ま…まさか……」　ツナ

「オレっちはボヴィーノファミリーのランボだよ!!」

5歳なのに中学校に<sup>き</sup>来ちゃったランボだよ!!」

ガハハハハ、とランボは笑う。それを見て、ツナはすかさず

「ウザイの出た　　っ!!」

と、叫んだ

「ボヴィーノ？ 聞かぬー名だな……リボーンさん、どーします？」

獄寺がリボーンに聞いた

まあ、ボヴィーノって中小マフィアだもんね…

リボーンは獄寺の問いに

「続行」

と、一言<sup>ひと言</sup>だけ言い、ボウガンで撃ち始めた

「っつ」

ドシュッ

山本の脇下をボウガンが掠る

「ひいつ！」

ドシュッ

ツナはボウガンを頭を下げて避ける

「キャッ！ 驚いたあ…でも慣れればどうってことないのね」

ドシュッ

雪奈にもボウガンが襲う

雪奈は……着々と楽しんでた

ドシュドシュドシュドシュドシュドシュドシュドシュドシュドシュ  
ドシュドシュドシュ

「なんでッ…オレだけッ…量がッ！ こんなにッ…多いんだよオッ  
！！」

ガンバレ輝夜！      ファイトだ輝夜！

読者の皆様はきつと輝夜を応援してるよ！



ランボにかまう人がいなかったため、ランボは1人、目に涙を溜め  
「が・ま・ん」と<sup>つぶや</sup>呟いた

やがて、悲痛な独り言を言い始めた

「そーっおだ！ イタリアのボスが、がんばってるランボに武器送  
ってくれたんだもんね」

ゴソゴソとカバンをあさるランボ

「パンパカパ〜ン ミサイルランチャー~~~~ツ！！ 死<sup>ち</sup>ねり  
ボーン！！」

ランボはそう言つと、ミサイルランチャーをツナ達に向けて、カチ  
ツと引き金を引いた

ドシュドシュドシュウウウ

「んなあ！！!?」

「ちょっと……アレを子供に持たせるなんて、どーいう教育してんのよー！」

「雪奈が珍しく突っ込んでる！？」

ドドドオンッ

暴風がツナを襲う

ちなみに、その他の奴はうまく避けたので事実的な被害（？）を受けたのはツナだけだ

「おしいな、あと10メートル」

子供らしくないセリフをランボが呟いた

「フッ……こいつぁ、なめてっつと合格できねーな」

「でも逆にこーいうのって燃えるよねえ」

「この2人なんなんだ！？ 本当に一般人かよ！」

輝夜は呆れながら、まだ余裕の山本と雪奈を見て呟いた

ツナはリボーンに向かって叫んだ

「リボーン！！ 試験なんてやめよーぜ！！ 今の見たる？」

ランボがミサイル撃ってきたんだぞ！！」

「次はサブマシンガンだぞ」

リボーンはツナの発言を華麗にスルーして新たな武器を取り出した

「まずは見習いの殺し屋レベルだ」

サラリとそう言うと、リボーンはツナ達めがけてサブマシンガンを撃つ

パラパラパラパラ

シュルルルルルルルル

ドドドオオオオンッ

「うわぁあー!」

主に被害を受けているのはツナだけだ（ほかの3人は華麗に避けているので）

「獄寺もぶっぱなしていいぞ」

サブマシンガンを撃ちながら、リボーンは獄寺に言った

獄寺は

「しかし…」

と、とまどうが、さらにリボーンが

「山本と新崎、そして輝夜ををぶっ殺すつもりで行け」

と言ったため多少ワクワクしながらダイナマイトを手を持った

(し…仕方ないよな…リボンさんがそう言うんだから……)

「10代目」

(よけて、くださいね)

獄寺はそう思い、ウインクと手を動かしてツナにダイナマイトを当てまいとしていたが、当のツナは

「へ？」

と、とぼけており、獄寺の思いは一ミリたりとも伝わってはいなかった

「ちくしょーリボンめ……！　こうなったら10年バズーカだもんね」

そう言うと、ランボは自分の頭に10年バズーカを当て、引き金を引いた

カチャッ

ドンッ

ピンクの煙がモクモクと上がった

その煙の中から出てきたのは10年後の大人ランボだった

「やれやれ、10年後のランボがやるしかねーな」

「最後はロケット弾だ」

「果てろ」

バアッ

ドウッ

バシユウウ

獄寺のダイナマイトとリボーンの放ったロケット弾と10年後ランボのミサイルランチャーがツナ達めがけて放たれた

「おいおい……」

「えゝえゝえゝえゝえゝ……!!」

「まだ死にたくないよぉ〜翡翠ちゃん」 シャキンッ

「御冥福をお祈り致します<sup>いた</sup>す」

少し焦り言う山本、慌てふためくツナ、なぜかあの“痴漢撃退用”の鉄製棒を持つ雪奈、遠くへ避難して余裕の輝夜など、反応はさまざまだった

ドガアアアアンッ

大きな爆発…よく雲雀さんが来ないな……

その爆発の大きさに獄寺は

（やっべ 調子にのりすぎたかも……）

と思っていた

「10代目      ！！      大丈夫ですか10代目      ！！」

心配し、叫ぶ獄寺にリボーンは煙の中を指差して言った

「あそこだぞ」

リボーンが指差したところには、ツナの腕を自分の肩に回して支えている山本と雪奈の姿があった

「ふー、あぶねーあぶねー」

「ホント、あぶなかったわ……」

「山本と雪奈が引つ張ってくたおかげで、た…助かった」

リボーンは山本と雪奈のところへ行き、試験の合格を伝えた

獄寺は山本の胸ぐらを掴み（さすがに女の子の雪奈の胸ぐらを掴むわけにもいけないので）、こんなことを言った

「よくやった…10代目を守ったんだ…」

ファミリーと認めねーわけにはいかねえ……でも10代目の右腕はオレだからな。



お前らはケンコー骨と肋骨だ<sup>おはひほね</sup>」

…輝夜はファミリーと認めていないようだ

「け…ケンコー骨!？」

「肋骨って、何よこの扱い<sup>あつか</sup>……」

すると突然、山本は笑い出し、獄寺の肩を組む

「前から思ってたけど獄寺って面白<sup>おもしろ</sup>えー奴だな!

…だがツナの右腕を譲る気はないね。お前は耳たぶってことで」

「んなあ!？」

ツナは山本のいきなりの発言に驚き、声を上げる

2人は言い争いを続ける

「んだとコリア？ てめーは鼻毛だ！」

「なにい」

「だったらお前は鼻クソだ」

「ぐっ」

（この2人ある意味息合っていない？ つーか2人で部下気分だ  
！！ やめてくれー）

すると、山本はサブバックを持って言った

「んじゃ、部活行くわ。」

つくづく思ってたけどよ、さっきの爆発といい、最近のおもちや  
ってスゲ リアルな」

（まだマフィアごっこだと思ってたのね

！！）

山本が去ったあと、リボーンは雪奈に言った

「お前はツナの右腕になりたくねえのか？」

「ちよっ！ 何言ってんだよりボーン！！」

雪奈は「うゝん」と考え、言った

「私、綱吉君の右腕にならなくてもいいし……」

（良かった　！　雪奈はまだ普通だ　！！）

と、内心ツナは安堵あんどしていたが、雪奈の次の発言にそれは崩される

「私、綱吉君の右腕じゃなくて左腕ひだりうでだから」

ニコリ、と雪奈は笑って言った

「えゝえゝ　！？　雪奈！　何言ってんの！！？」

皆さん、お忘れではないだろうか……

今、大人ランボはポツンと1人でツナ達を眺めています

そのほかに……もう一人

そうです

みなさん、輝夜を思い出したでしょうか？



「……………」

『……………』

沈黙

沈黙

沈黙

そして沈黙

「……………ちよつ！　なんか言つてよ！！　翡翠なんだろ？」

『え、ええ、うん。まあ、一応？　翡翠ですけど……………』

「一応って何！？　一応って！！？　…まあ、それより何か用？」

『用？　……………暇つぶしと輝夜いじりだけど？』

「何そのサイアクな用事！！

それとさあ、なんで“入ファミリー試験”をオレにやらせようとしたわけ？」

翡翠は十数秒黙り、そして言った

『お前の腕を鈍<sup>なま</sup>らせないため……かなあ。私の暇<sup>なま</sup>つぶしでもあるけどね』

「ぜってー後のほうが本音だろ！」

『あ、今回は報告書書かなくていいから。いちいち読むのも面倒だし』

ボソリ、と最後の方を呟いた翡翠

その言葉に輝夜は「書く方が面倒だよ」と呟く

「そついやあ、さっき私<sup>わたし</sup>って言ってなかったか？？」

誰<sup>たれ</sup>か傍<sup>そば</sup>にいるのか？」

『……………ディアリィのかーさん』

輝夜は「ブッ」と吹き出した

「アイツの母親？　どんな人？　…あつ、切れた。言いたくないって事なのか？」

輝夜は携帯をしまうと、見たことのないディリアの母親の顔を思い浮かべるのであった



翡翠様は私の母が苦手なんだそうです・・・bYテイリア（後書き）

読んでいただきありがとうございます！

おかーさんってどこの国でも最強なんですよ

10月2日修正

雪奈ちゃん、料理の実力を発揮する！

その朝、雪奈はツナと一緒に登校していた

「おはよ、ツナ君」

後ろから京子が挨拶あいさつしてきた

「おはよー京子ちゃん！」

（朝からついてる　っ）

ツナは下心満開（笑）な気持ちになった

「おはよう、京子ちゃん。」

そういえば、今日の家庭科の授業っておにぎりの実習なんだよね

私、料理あんまり好きじゃないけど楽しみだよね」

雪奈は同じクラス、同じ班の京子に言った

「うん、楽しみだよー」

京子は花のような笑顔を見せる

「へー」

ツナがそう答えた瞬間、後ろの方から「チリンチリーン」という、自転車のベルの音が聞こえた

その瞬間、ツナは青い顔をして「あ！」と言って振り返る

「「？」」

雪奈と京子は疑問符を浮かべる

「人の恋路を邪魔する奴は毒にまみれて死んじまえ」

ビアンキはそう言った

アレッ？ 今なんか聞こえたカナ？？ みたいに勘違いしてしまう

ような声で

「どうぞ」

と言い、コカコ ラの缶を2つ投げてきた

するとツナはすかさず

「だめえー!!」

と叫び、サブバックでコカコ ラの缶を弾き飛ばした

「今の人、ツナ君の知り合い？」

「あんな美人な人、綱吉君の知り合いにいたの？」

雪奈と京子はツナに聞くが、ツナは

「さ…さあ、誰だろうーね？」

と、言った

(ビアンキの奴……京子ちゃんと雪奈まで巻き込む気か?)

一方、ツナが弾き飛ばした缶は蓋ふたが開あいており、不気味な色の煙が立ちこめていた

その煙を吸い込んだのか、2羽のカラスが嘴くちばしからあわを吹き、倒れている

く学校く

「「「「今日は家庭科実習で作ったおにぎりを男子にくれてやる  
っ」「」」」」

そんな女子の声が1 Aの教室に響いた

「「「「オ

「！！」「」」」」

男子の狂喜きょうきの雄叫おたけびも教室中に響いた

輝夜は雪奈が教室にいないことに気が付く

（あれっ？ 雪奈ってどこ行ったんだろ…まあ、このまま教室に  
いれば沢田におにぎり食われちゃうから好都が良いいんだけど……雪  
奈のおにぎり貰もらおっかな）

そう思い、輝夜は教室を出て雪奈を探しに行く

一方、その雪奈は応接室から出てきたばかりであった

「おゝ雪奈めっけ」

「アレ？ 偶然だねゝ輝夜君、教室じゃなかったの？」

バタリ、と輝夜に会ったのだ…偶然ではないのだが

雪奈の手には、おにぎりが2つのついていた

「あつ、そつだ輝夜君！

私のおにぎり食べない？ 一個、恭君に食べてもらっただけど忙しいからって…

二個余<sup>あま</sup>つちやつたの。勿体<sup>もったいな</sup>無いから食べてくれない？」

雪奈のこの発言を聞き、輝夜は心の中でおもいつきりガッツポーズをした

「そついつことなら……食っしかねえよな」

輝夜はそう言い、おにぎりを手に取り自らの口へと運ぶ

そうして一口

(……ん？ この具は……なんだ？？ 天ぷら……なのかな……中身の具はわからないな)

輝夜は一生懸命、噛み飲み込んだ

「なあ、雪奈………このおにぎりの具は、なんなんだ？」

「あ、それはね、”揚げた蛙”だよ」

(！?!?!?!? 揚げた蛙!? 確かにオレは翡翠にいろいろな食い物を食べさせられてきた……ハチノコとかもあった……けどさあ！ 蛙はさすがに無いぜ!?)

「その……蛙って……もちろん……食用の、だよな？」

「えっ？ 違うよ。だってスーパーで売ってなかったから

そこらへんにいたのを捕まえてチョロツと……ね」



（“チョロツと…ね”じゃあねえだろ！オレが思うに、雪奈…雲雀は忙しいんじゃないかって、このおにぎりを食べなくなかったんじゃない…）

「おいしい？ 私、味見してないから、どんな味かわかんないんだよねえ」

あ！ でもでも、恭君は“おいしい”って言ってたよ！！」

雪奈はそう言って、無邪気満開の笑顔を輝夜に見せた

「う、ん……おいしい、い……ね」

輝夜は青い顔をして続けた

「でも、なんだって雪奈は蛙なんかおにぎりの具に…？」

輝夜の問いに、雪奈は顔をキラキラと輝<sup>かが</sup>かせて答えた

「テレビで見たの…！」

食用の蛙は栄養価が高くって、健康にも良いんだって!!

だから…ね？ 全部食べちゃって良いよ」

雪奈のその笑顔に押し切られ、輝夜は無我夢中でおにぎりを食べる

「本当は……全部、翡翠ちゃんにも食べてもらいたかったんだけど……イタリアに着く前に腐っちゃうかもしれないから……」

雪奈の呟きを、輝夜は、聞いていなかった

その後、輝夜がどうなったか知っている者は いない

**雪奈ちゃん、料理の実力を発揮する！（後書き）**

雲雀さん・・・・・・・・

なんかスミマセン・・・

翡翠ちゃん、何気に危機回避？

10月2日修正

## 姉と弟と妹と一人っ子（前書き）

いや、ホント更新遅れてしまってすみませندシタ！

サブタイトルは・・・・・・・・・・気にしないでください！！

## 姉と弟と妹と一人っ子

雪奈は無意識にツナの家へと向かっていた

理由は無く、あるとすればそれはツナの家が“居心地がいい”からだろう

知らず知らずのうちに顔が微笑む雪奈

そんな彼女がツナの家の塀の角を曲がった瞬間に、彼女は

「うげええええ」

「あつ、テメーは！」

奇声を発した

同じくツナの家に向かっていた獄寺と目が合ったからだそうだ

ちなみに獄寺は大きなスイカを持っている

そしてそのままケンカへと発展

「なんでデメーまで10代目のお宅に！」

「幼馴染だからよ！」

「ジャマだ！ 帰れ！」

「そっちが帰って！」

「デメーが帰れ！」

「アンタが帰って！」

ケンカはそのまま続いたとか…

（10分後）

「チッ！　こうなったら、このボムで……」

「全治5年ぐらいがいいかしら…?」

ついに戦闘にまで発展し、2人が武器を手にした瞬間

「ハア、お前ら何やろうとしてんだよ」

「「!!??.」」

獄寺の右手首と雪奈の左手首を掴み、輝夜は溜息混じりに言った

「か、輝夜君!?　どうしてココに…?」

「テ、テメーは…たしか入ファミリ―試験の時の……敵?」

少し違う認識をしている獄寺に輝夜はまた溜息を吐いた

「敵じゃねえって!　…まあ、とりあえず闘うのは止めておけ。」

「ご近所<sup>きんじょ</sup>さんに迷惑だかな」

「ア、ア、ン!? そんなで納得するとも思ってたのか?」

獄寺の中では輝夜は敵で決定したようだ

「ハア……なんだ、わからねえの? それとも理解できなかったか?  
いや、同じか。」

あのなあ、“ご近所さんの迷惑” 沢田の迷惑” にもなるんだぜ」

輝夜は獄寺にニヤリと笑い言った

「どついう意味だ?」

獄寺は“沢田の迷惑” という言葉に反応し、輝夜に聞き返す

「ご近所さんには沢田も含ま<sup>ふく</sup>れるからな。

それによお、騒<sup>さわ</sup>ぎを起こした人達が沢田の知り合いだと分かれば、

沢田が近所のみなさん達から変な目で見られるしな」



「……ぐっ……しょうがねえ」

輝夜の言葉を聴き、獄寺はしぶしぶとダイナマイトを仕舞<sup>しま</sup>う

そのころ、雪奈はこう思っていた

（アレ??? も、もしかして私の左手首に当たってるのは…か、輝夜君の…手だね?? ああゝ以外と輝夜君の手ってガツシリとして男の子らしいなあゝ強く握<sup>にぎ</sup>りすぎてもいないし…これなら一生握<sup>にぎ</sup>ってもらってもいいかも って！ これじゃあ私が変態みたいじゃない！ 夢じゃないよね!? 現実だよね!? これで夢オチだったら私泣くよ!? ああ、どうしよう、今心臓がバクンバクンいつてるよ……自分でも分かるくらいに！ 心臓、破裂しないよね？ 煩<sup>うるさ</sup>いくらい心臓が……あーもう！ 煩<sup>うるさ</sup>いよ心臓!! あっ………今、輝夜君がニヤリって……！ カッコ良い！ 滅茶<sup>めっちゃ</sup>苦茶<sup>く</sup>良いよ!! しゃ、写真！ カメラカメラ！ あゝもう！ なんて無いのよ！ あっ、輝夜君…コツチ向いた……）

「雪奈………顔超真<sup>かおちようま</sup>っ赤<sup>か</sup>だぞ！ 大丈夫なのか？」

「ふえ？ うそ？ 真っ赤？ わあ、チョー恥<sup>は</sup>ずかしい!! 見ないでえ!!」

雪奈はそう言つと輝夜の手を振り解<sup>ふ</sup>き、両手<sup>ほど</sup>で顔を覆<sup>おお</sup>つ

（雪奈、スツゲエ顔赤かつたな。リンゴ病？ いや、それは無いよな…雪奈に限<sup>かぎ</sup>つてそれは無い…と思う…）

輝夜はよくあるマンガの主人公並みに鈍<sup>にぶ</sup>かつた

「チッ！ オレは行くからな」

獄寺はそう言つと、スイカを持ってツナの家チャイムを鳴らす

ピンポーン

「10代目~~~~っ！」

獄寺の声は先程<sup>さきほど</sup>とは大違いで、明るいものだ

すると、ツナが階段<sup>お</sup>から下りてくる

「こ、獄寺君どーしたの？　って…そこにいるの雪奈と鳳雷君!？」

気付かれた2人はツナの家玄関内へと入って行った

「綱吉君、遊びにきたぞ」

「ちーッス」

獄寺は「チッ」と雪奈と輝夜を見て舌打ちしたが、ツナには爽やか  
笑顔を見せ、スイカを手を持ち言った

「このスイカどーすか？　めちゃくちゃ甘いらしいんすよ!」

それを聞いたツナは少し困った顔をし、右手で頭を掻きながら言った

「す…すごく嬉しいんだけど、今ちょっといろいろ取り込んで…

…」

(う…ウソじゃないよな……帰ってくれるかな？　ピアノキを雪奈  
に近づけたくないのに……)

ツナの言葉を聞き、獄寺は目をギロツと光らせる

「トラブルっスね。なんならオレがカタをつけますよ」

「え!？」

ツナは驚いて声を漏<sup>も</sup>らす

（トラブルと言えばトラブルだけど…あ！でも確<sup>たし</sup>かに獄寺君なら  
ビアンキを追い出してくれるかも …）

ツナはそう思い、獄寺がビアンキを追い出すシーンを思い浮かべる

「じ…実は今、うちに…」

ツナが話そうとしたその瞬間、獄寺の手がスイカを離<sup>はな</sup>す

「あ                      スイカ                      っ」

スイカが沢田家玄関の床へと着く瞬間、輝夜が超人的な反射神経を  
発揮し、スイカをキャッチする

「ふううう、あつぶねえなあ……」

「……あ……アネキ!!!!」

獄寺は真<sup>ま</sup>っ青<sup>さお</sup>な顔をし、口からタバコを落としながら言った

「隼人」

ビアンキは眩<sup>くら</sup>く

「え？ アネキって？ ん？」

ツナは2人の言葉に混乱しだす

ぐきゅるるう

獄寺の腹から盛大な音が聞こえ、獄寺は腹を押<sup>お</sup>さえ蹲<sup>ひづく</sup>った

「失礼します!!!」

次の瞬間そう言うと、獄寺はツナの家を飛び出る

「ちよっ…獄寺君!!?」

「トイレか?」

「綱吉君の家にもトイレあるのに。わざわざ、出て行くこと無いじゃない」

勝手にトイレだと断定している輝夜と雪奈

「いつもあーなのよ。変な子」

ビアンキは誰に言うでもなく、呟いた

「アネキ…アネ……? ってことは、つまり……え」

っ

獄寺君とビアンキって姉弟なの……!???」

「そーだぞ。腹ちがいのな」

ツナは大声で叫び、リボーンはいつもと変わらず言う

「ああ俺、一人っ子でよかった~~~~」

「へえ、お姉さんいたんだあ。良いお姉さん、だね。

……弟を大事に思ってるって伝わってくるよ」

輝夜はニヘラ〜と笑い、雪奈も微笑む

この時、雪奈の表情がどこか悲しげに思えた輝夜の目は間違っ  
てはいなかった

姉と弟と妹と一人っ子（後書き）

輝夜、良い観察眼してますね

10月23日修正



## アルバムの最後のページという名の最終兵器

出て行った獄寺をツナが追い、ツナの家には輝夜、雪奈、リボーン、ビアンキの4人が残った

しばらく沈黙していたが、空気に耐えられなくなった輝夜が口を開いた

「あのさ、雪奈…この獄寺が持って来たスイカ、俺ん家で食わねえか？」

「ふえ？ …あ、うん。いいよ……じゃあね、リボーン君、ビアンキさん」

輝夜は雪奈の返事を聞き、玄関から出て行き、雪奈はリボーンとビアンキに手を振り、輝夜の後について出て行く

このとき、リボーンとビアンキの間で<sup>あいだ</sup>“なぜ雪奈がビアンキの名前を知っていたか”という話になったが、<sup>いた</sup>ツナが大声で叫んでいたから雪奈にもわかった、という結論に至った

く蓬萊山（田川）宅く

「へえ、輝夜君の家って綱吉君の家の隣だったのねえくスツゴク近いじゃない！」

私もこの家に住みたあい」

「そうかあ？ 結構大変だぞ？ 隣から爆発音が大量に聞こえるかな……」

この時、輝夜は

（「住みたあい、ってなあ。ここに2人で住んだら絶対に俺、翡翠に殺されっから」）

と、思っていた

「さ、早速スイカ食うか」

輝夜はそう言うと、スイカを持って台所へと向かう

（俺、料理の才能は壊滅的に無いけど、包丁で切るだけなら大丈夫だよ……な……？）

輝夜は内心、そう思いながらも包丁を両手に持ちスイカを切り始めた

一方、雪奈は輝夜の家のリビングのソファに座っており、部屋の中を眺めていた

リビングには現在雪奈が座っているソファの他に、テーブル、テレビ、棚があった

雪奈は棚の中にある少しはみ出たアルバムがさきほどから気になっていた

「ちょっとくらい見るだけなら、良いよね……?」

雪奈はアルバムを取り出し、1ページ目を開く

「えっと、この子って……翡翠ちゃん、だよな……?」

1ページ目には雪奈が8年前に見た翡翠と瓜二つうりふたの少女が写っていた

半信半疑の雪奈だったが、写真の下には決定的な文章が書かれていた

【 翡翠 8歳の誕生日 】

「やっぱり翡翠ちゃんなんだ。でも、なんで……なんで、輝夜君と翡翠ちゃんが……?」

名前まで出されていて、もう写真の少女が翡翠だと確信している雪奈

ページを捲めくり、2ページ目を見てみると、そこには幼い輝夜だと思われる少年が涙目で変な料理を食べていた

【輝夜少年 大人の味を知る】

「変な料理！　こんなんで大人の味は知りたくないよお」

3ページ目には蹲つまずっている金髪きんぱの青年の写真があつた

【アホ執事 大人の味を知る（笑）】

「うわっ……この人、可哀想かわいそう……！」

4ページ目には涙目で真つ赤な顔の幼い輝夜が写っていた

輝夜の傍そばには、唐辛子とうがらしやタバスコが入っていると思おもしき皿があつた

【輝夜少年 恋の味を知る】

「うわっ、辛<sup>から</sup>そう!」

5ページ目にはさっきの金髪青年と思しき人物が顔にさきほどの皿を当てられてた

【アホ執事 恋の味を知る（笑）】

「この人、災難だなあ。目とかに入ってるんだろっし…」

不意に、輝夜の声が聞こえた

「おおい、雪奈ってスイカに塩つけるのか？ 俺はつけねえけど」

ビクリ、と雪奈はしたが輝夜はまだ台所にいるようで安心する

「あゝ……うん………」

雪奈は輝夜がスイカを切り終わったのだと思い、アルバムの最後のページを開く

「アレ？ このページ、最後から2番目じゃん」

雪奈はそう思い、最後のページを開こうとしたが、そのページの写真が目に入り、手の動きが止まる

その写真には翡翠の部屋を背景とした現在の輝夜、翡翠、そして後ろ姿のディリアが写されていた

「やっぱり翡翠ちゃんだ。2年前とそっくりだもん。…アレ？

この後ろ姿の人……もしかして、あの災難な人かな？」

（この後ろ姿、どこかで……見たような、気が……？）

思い返せば、幼い頃の蹲うつまっている姿にも雪奈は見覚えがあるような気がしていた

いや、むしろ幼い頃の方が見覚えがあったのだ

【輝夜 と翡翠 とアホ執事】

雪奈は思い出を遡り、この青年とどこで会ったのか思い出そうとする

「ダメだ、ちゃんと顔が見えれば思いだせそうなのに……！」

雪奈は思い出すのを諦め、ページを捲り、最後のページを見た

最後のページにあった写真には、前の写真と同じ場所で輝夜と翡翠とディリアが並んで写っていた

その瞬間、雪奈は幼い時に見たある人物を思い出す

「……え？　嘘……！　ど、して……どうして……？」

雪奈の大きな瞳から涙が零れ落ちる

雪奈の声は震え、どんと掠れていく

「……どうして……？　……ディリア、お兄ちゃん

」



よみがえ  
甦る、幼い頃の記憶

『一緒に遊ぼう！ デイリアお兄ちゃん！！』

ボールを持って、年上のデイリアお兄ちゃんに話しかける私

『走ると危ないですからね、気をつけてくださいね』

いつも優しく私を見守ってくれた、デイリアお兄ちゃん

そうだ、どうして、思い出せなかったんだろう

「雪奈あゝスマン！ 塩がみつからねえんだ、ちょっと待ってくれ」

輝夜の声で意識が覚醒する

雪奈は涙<sup>なみだ</sup>を拭<sup>ぬぐ</sup>い、アルバムを閉まってソファに座る

「輝夜君、私、塩無し食べるから大丈夫だよ」

雪奈は声を張り上げて台所にいる輝夜に話しかける

「そうか、なんかすまねえな…」

すると、輝夜は切ったスイカを乗せた皿を持って来た

「それじゃあ、食うか」

輝夜はスイカに食いつき、雪奈も食べ始める

「うおっ、ホントに甘えな！ このスイカ」

「…う、うん。そうだね……」

（…ゴメン輝夜君。今はそんな気分じゃないから、甘さとか感じられない。…早めに食べて帰ろう）

数分後、雪奈はスイカを食べ終え、買えって行ってしまった

その雪奈の瞳が少し赤くなっていたことに気付かなかったほど、輝  
夜は鈍感ではなかった

アルバムの最後のページという名の最終兵器（後書き）

グダグダで申し訳ありません！

ちゃんと続きの内容は考えている……ハズ

とにかく、今回、脇役で可哀相な役回りの輝夜に合掌を

10月30日修正

間違いは誰にでもある(前書き)

今回はちょっと短めです

間違いは誰にでもある

雪奈は輝夜の家から帰った後、布団に丸まっていた

「どうして、輝夜君と翡翠ちゃんとディリアお兄ちゃんが…？」

さきほどからそればかり呟つぶやいており、頭の中には疑問符ばかりが浮かんでくる

「こづいうことは本人に聞くのが一番てつとり早いんだけどなあ。

…でも、私は輝夜君のケータイの番号知らないしい……………

って！ 私、翡翠ちゃんの番号登録してるじゃん！！」

自らのケータイの番号一覧を見て呟つぶやく

さっそく雪奈は電話をかける

ブルルルルルルルル      ガチャッ

「もしもし、翡翠ちゃん？」

『 えっと、何方どなたですか？ 』

雪奈がそう言うと、電話の向こうからありえない声が聞こえてきた

（お、男の人の声！？ ひ、翡翠ちゃん、もしかして性転換手術で  
も…？）

「 え、えと……雪奈、だよ？ 」

『 …ゆ、きな……？ 』

「 もしかして、覚えてないの？ 」

（まさかとは思っけど、事故に遭あって記憶喪失、とかありえるか  
ら…！ ）

『 もしかして、雪奈お嬢様！？ 』

（そうそう、やっぱり覚えててくれたんだね

…っで、ん？ お嬢様…؟؟？ ）

『なぜ、雪奈お嬢様が私の携帯の番号を？』

『なに、デイリアが携帯で電話してる！？ 相手なんて存在したのか！？』

デイリア君、それは間違い電話じゃないのかね？ 何気に日本語？

もしかや日本人！？』

『失礼にも程がありますよ？ 翡翠様』

電話の向こうで誰かが大声で話しかけてきたのだらう、他の人物の声も聞こえてきた

イタリア語だったため、大部分は分からなかったが、聞き取れた部分もある

「デイリア？ …… って、デイリアお兄ちゃん！？！？？」

思い出す2年前の出来事



『雪奈あ、ちよつと僕、飲み物買いに行つて来るね〜』

『はあい！　じゃあ、ケータイの番号登録しとくから〜』

『頼んだ！』

翡翠は財布を持って自動販売機へと向かう

『アレ？　アレレレレ？　翡翠ちゃんのってイタリアのだからどうやるのか分かんない！』

てか読めない！　でも、数字は読めるから、一番前の番号登録しとこー！』

〜回想終了〜

（…あつ、アレってディリアお兄ちゃんの番号だったのか　フム  
フム、なるほどねえ…）

「って、どうしてディリアお兄ちゃんが!？」

『どうしてって、それはコチラのセリフなんですが…  
なぜ、雪奈お嬢様が私の携帯番号を知っているんですか?』

「え、いや……それは、翡翠ちゃんの携帯」

『やはり翡翠様でしたか!?!…ん? 僕がなんかした?』

あと  
後で話し合いましょうか翡翠様

「な、なんだ!?! ディリア! なぜにそんなオソロシイ表情を  
!?!」

静かにして下さい

(今イタリア語だったけど“翡翠”って聞こえた!?! やっぱ2人  
って知り合いなんだ…)

「あ、あの、ディリアお兄ちゃんって翡翠ちゃんと知り合いなの?  
?」

『知り合いというか、なんというか……』

それよりも、私には2人が知り合いだという事の方が驚きですよ』

（ディリアお兄ちゃん、なんだか翡翠ちゃんの事、あんまり言いたくなさそうな感じ…？ 居心地が悪いなあ……）

「わ、私もう電話切るね！」

『え？ ちょ ブツッ』

雪奈は携帯をしまい、クッションを抱き寄せる

「なにがなんだかわかんないよお」

雪奈はそう呟きながら、また携帯電話を開く

すると、そこには着信があった

「ん？ メール、誰からだろ…？」

『 着信アリ 田川 翡翠 』

「翡翠ちゃん!？」

雪奈は急いでメールの内容を見る

『何があつたかは分からないけど、輝夜に様子を聞きました』

僕はいつでも雪奈の味方だからね!

相談したい事があつたらなんでも言つて! 絶対聞くから!

この世界には、雪奈の味方はたくさんいるから、気を楽にして?

…目に、涙ためないでね』

「っ! 翡翠ちゃん、ありがとう」

雪奈はそう呟くと、瞳から大きな雫を零した

間違いは誰にでもある（後書き）

10月30日修正

ぜんかいのうらばなし　く前編く

僕はその時、庭でディリアと一緒に紅茶を飲んでいた

「……………つまっ」

思わず声が出た

相<sup>あい</sup>変<sup>か</sup>わらず、ディリアの淹<sup>い</sup>れる紅茶うめえな……………

一緒に喰<sup>く</sup>ってるケーキはセレブ御用<sup>ごよう</sup>達の高級品店だ

料理人さんの気持ちも籠<sup>こも</sup>ってるし……………サイコーだ

そう思っていると僕の携帯のアラームが鳴った

見てみると、輝夜からのメールだった

「翡翠へ伝えたいことがある。今日、雪奈と会ったんだが、目が

赤くなっていたんだ。

きつと、泣いていたんだと思う。俺じゃ、何を言えばいいか、分からない

だから、頼む。なんでもいいから、慰めてやってくれないか』

ふう〜ん、なるほどねえ

『なぐさめてくれ』かぁ、輝夜にしては良い心遣いじゃないか

そういえば、電話は間違い電話のしすぎで恭弥に止められてるって  
言ってたからメールでやるか

そういえば、かれこれ2年以上生の声を聴いてないな

そう思いながらメールを打っていく

「うん、内容完ペキ…かな？ 送信！ っと」

「翡翠様、おかわりを…」

「あ、うん」

ディリアが空になった僕のティーカップに新らしく紅茶を淹れる

グウウウウ　グウウウウ

……？

なんの音だ？　……と思ったらディリアの携帯か…

てか、ディリアの携帯に電話なんて初めて見たな……

そういえば、ディリアは携帯番号は僕にしか教えてないって言うってたな

相手は誰だ？　仕事か………まさか女か！？

いや………さすがのディリアでもそれはさすがに無いだろう



いくらイケメンでカッコ良いからって、あの鉄面皮だぞ！？

性格、超悪いぞ！？

そんな奴好きになる物好きものずな女性なんていないだろう

じゃあ……………仕事か

うん、仕事で決定！

「えっと、何方どなたですか？」

え？ 知り合いでもないの！？

と、すると……………間違い電話か

「？」

ああもっつ！ 聞こえねえよ

ディリアの奴、もっとデカイ声で話せよ

「もしかして、お嬢様!？」

嗚呼<sup>ああ</sup>、今、ディリアの口からなんと……

‘お嬢様’と……

やっぱ女か!!!

しかも様付けだから結構、地位高いのか

……ん？　なんかディリアの顔が青褪<sup>あおお</sup>めて

「なぜ、雪奈お嬢様<sup>わたくし</sup>が私の携帯の番号を？」

いや、ちょっと待て……

今、‘ユキナお嬢様’と？

そういえば、僕の知ってる雪奈じゃないだろうな！？

よし、ここは一発、ちゃちゃを入れよう

「何<sup>なに</sup>イ、デイリアが携帯で電話してる！？ 相手なんて存在したのか！？

デイリア君、それは間違い電話じゃないのかね？ 何気に日本語？

もしかや日本人！？」

「失礼にも程<sup>ほど</sup>がありますよ？ 翡翠様」

横目で睨<sup>にら</sup>まれた

うつつ、怒ったデイリア怖いよお

もう、こうなったらシカトだ

無視してやる

「『どうして』って、それはコチラのセリフなんですけど…  
なぜ、雪奈お嬢様が私の携帯番号を知っているんですか？』」

また『ユキナお嬢様』って！

やっぱり相手は女で位が高く、日本語を使う奴か

どんな奴だ……？

「やはり翡翠様でしたか！！」

「…ん？ 僕がなんかした？」

久々に日本語で翡翠って呼ばれたよ

っていうか、なんで2人の会話に僕の名前が？

チラリとディリアを見ると、それはそれはにこやかな笑みを浮かべていたが……

この僕が奴の瞳の奥に隠された憤怒を見抜けないはずがなく

メツチャ怖え！

え、なんでディリア怒ってんの？

「あと後で話し合いましょうか翡翠様」

「な、なんだ！？ ディリア！ なぜにそんなオソロシイ表情を！  
？」

「静かにして下ください」

一蹴された……

というか、執事に命令されてる僕って何？

僕が何か怒られるようなことした？

「知り合いというか、なんというか……」

それよりも、私には2人が知り合いだという事の方が驚きですよ」

言葉から推測するに、相手の‘ユキナお嬢様’は僕の知っている雪奈と同一人物という可能性がでてきた

えー、なんで雪奈がディリアにお嬢様って呼ばれてんのー？

ていうか、2人って知り合い！？

うそ、ディリアみたいな性格の悪い人間と雪奈が知り合ったら……  
…絶対に純真無垢な雪奈が騙されたりしちゃうだろ！

あ、でもお嬢様って呼んでるし、ディリアの中じゃそれなりに地位が高いってこと？

うわー……頭混乱してきた

「え？ ちょ……」

ブツッ

どうやら電話が切られたようだ

あ、ヤバイ

ディリアが鬼の形相おにがたけでこっちを見てる

「とりあえず翡翠様、どうやって私と雪奈お嬢様の関係を知ったんですか？

簡潔に説明してください」

関係？

いや、そんなもん知らないですけど

むしろこっちが説明して欲しいんですけど

「……ううん、関係？ イケナイ関係とかあ？」

とぼけて言ってみた

ヤバイ、睨にらんでるよ、ちょー怖い！！

なにあの冷えた目、メツチャ怖い！

字じゃ伝えられないくらい怖いから！！

「とぼけないでください。嘘言ったって無駄ですから、正直に話してください」

ディリア、目が本気

ここでもう一度とぼけたら、マジ恐ろしい目に会っわ

でも、ここで知らないと言っても信じてもらえるかどうか……

ディリアは僕がやったと確信している

でも、僕はディリアと雪奈の関係なんて知らない

ディリアは雪奈を「お嬢様」って呼んでた



僕を‘お嬢様’と呼ぶことは嫌がってたのに……

ディリアにとって‘お嬢様’は雪奈だけなのだ

そんな重要な関係なんて知るもんか

「……知りません」

「はあ？ まだそんなこと言ってるんですか？ 本当のことを言いなさい。」

今言えば許して差し上げますから」

ディリアは「まだ白を切るのか」と言うような顔だ

嫌だなあ……………

ディリア  
相手が絶対に僕が故意にやったと思ってるから、どうやって説明しても相手はそれを嘘か言い訳と捉える

それに、ディリアはなんか怒ってて物事の捉え方が普段と違う

今、僕がここでディリアに信じてもらえる確率は限りなく低いだろう

たぶん、絶対に信じてくれない

冤罪で捕まった人ってこんな気持ちなんだな……………

でも、ディリアが正直に言えと言ったのだ

だから、僕は言い続けてやる

「本当に知りません。ディリアと雪奈の関係なんて知りません」

「だからですねえ、翡翠様……………」

ウソはつかない方が後々助かることを助言して差し上げますよ」

つまり、このまま同じ答えを言い続けければコイツは後々僕に何かやらかすつもりなのだ

「本当なんですよ。僕を信じなさい」

まっすぐ、ディリアの瞳を見ていった

「翡翠様、もしかして……………」

……………このまま同じ答えを言っていたら私が信じるとでも思ったんですか？」

あ、ひどいコイツ

深々と溜息つきやがった

「あのですねえ、私は怒っています。騙そうとなんて思わないでくださいね？」

翡翠様に信じろと言われ、信じた後にひどい目にあったことが多々あります。

信じろと言われても信じられませんから」

ディリアはそう言う僕を睨みつける

まさにオオカミ少年みたいな感じ…

ああ、なんか心折れそうかも

ここで「ハイ、知ってました」なんて言ったら、間違いなくヒドイ目に合う

なんでそんなことしたんですか、とか言って怒られるだろう

でも、知らないと言い続ければこの言い合いの延長戦が……

もしくは、もっと怒らせてしまってヒドイ目に合うか

……………どっちにしろヒドイ目に合うじゃんか……!!

ヤバい、メツチャ心折れそうだわぁ

そういえば、こんなこと昔にもあったような…?

何度言っても、何を言っても、信じてくれない

そんなことがあった

「さあ、翡翠様。黙ってないで本当のことを言ってください」

そう言っさいそくてディリアが催促するので、いよいよ僕は耐え切れなかつたらしい

「知らないって言っさいそくてんじゃないかあ」

そう呟ささやいて瞬間移動をする

「… どうして、翡翠様が泣ないてるんですか？」

そう、ディリアの声が聞こえた気がした

ぜんかいのうらばなし　　く前編く（後書き）

おひさしぶりです、お待たせして申し訳ありませんでした。  
執筆活動再開でございます。

次回はなるべく近くに投稿したいと思っていますので、何卒よろしく  
お願いいたします。

ぜんかいのうらばなし　ゝ中編ゝ（前書き）

こんかいは他の話と比べて短いと思います。  
次の話（後編）へのつなぎなので……

ぜんかいのうらばなし　　中編

瞬間移動した先は自分の部屋のベッドの上だった

「でいりあのばかぁ……………」

そう呟きながら大きなクッションを抱きかかえ顔を埋める

「うっ、でいりあのやつ…………ぜったいにゆるしてやんないかな  
…！」

なんかいあやまってもゆるしてやるもんか！」

返事をする人間はいなく、ただ、僕の言葉が部屋にこだましただけ  
だった

その時思った

身近な人に信じてもらえないって、こんなに辛いことだったんだね



あの時彼もこんなに辛い気持ちだったのかな、と

『…信じてくれ、ワタシは悪くないッ！　ワタシは悪くないんだッ  
…！』

ワタシはただ…ただ“　様”に認められたかった。それだけだ  
ったのに…！』

“　様”の墓の前で彼は泣きながら僕に訴えてきた

そんな彼に、僕は無性に腹が立った

『うるさい！ 黙れ！ “ 様” はアンタのせいで死んだんだ！！

なら、それはアンタが殺したも同然じゃないのか…？

そうだ、アンタが “ 様” を殺したんだ！ 僕はアンタが許せない…！

もう、二度と僕の目の前に現れるな。 …… 貴方も、僕のこと  
忘れてください』

そう、言い放った僕はその場を立ち去った

帰り際、聞こえてきたのは彼のすすり泣く声だけだった

頬を涙が伝う感触で目が覚める

無意識に手で拭った

僕は、一体なんの夢を見ていたんだろうか…？

時計を見ると、さっきより時間がたっていた

泣いたのなんて久しぶりじゃないだろうか？

なぜ泣いたのかはともかくとして、涙は女の武器とも言つし、涙腺のコントロールはきちんとしとかないとな……

そんなくだらないことを考えていたとき、不意に聞いたことのある声  
が頭に響いた

「 やっほお翡翠ちゃん、元氣かのう？ 」

こんなアホな声をしているのはアイツしかいないだろう

そう思い、ため息をつきながら言う

「 今、気分悪いんで死んでくれますか？ 」

「 そんな…！ ヒドイ扱いじゃ！ わしの繊細な心が傷ついてしまっぞ！？」

どうぞ、傷ついてください

こちらもアナタが傷つくことを望んでいますので

というか、繊細な心って……乙女かよ！ ジジイが乙女を語るなんて…！

「 ……んで？ 何の用かなあ、クソジジイ 」

僕がそう言つと、先程までのチャラけた雰囲気が一変し、重々しく

なった

ふむ、それでは単刀直入に言うとするかのう。

そのお、雪奈ちゃん的能力喪失の件なんじゃがのう……

実はのう、わしはそれを行ったのがサキ様じゃないかと思うと  
るんじゃ。

翡翠ちゃん。わしには、そうとしか思えないんじゃよ……

‘そうとしか思えない’というのは、他のできる3人に動機がない  
からか

でも、だからって……死人を犯人にでっちあげるのは善くないよねえ

そう、僕はコイツの言っていることを信じていない

だって死人が犯人って、合理的に考えて無理な話しだよね

死んだら、何もできないんだよ

☞ ……ねえ、分かって言ってるの？

アンタが犯人だって言ってるそのサキ様は、もう死んでるんだよ？  
』

「いや、実は死んだフリをしていて、本当は生きているんじゃないかな」

「と、わしは考えているんじゃないよ」

んな強引な！

なにが“生きているんじゃないかな”だよ！

一応聞いてみる

『…それはありえることなの？  
』

「ウム！ あのお方の力を持つてすれば、そんなことぐらい容易じゃろうて」

なにが“ウム！”だよ！

コイツ、本当は何も考えていないんじゃないか…？

『具体的な推測がないのはよくわかったよ。あのさあ、1つ言  
って良いかな？

…アンタ、どんだけサキ様に生きていて欲しいワケ？』

…何が言いたいんじゃない？ ハッキリ言ってみい、翡翠ちゃん

明らかに怒っている声色だった

もしや、挑戦的に言っただけがいけなかったのかな？ でも、僕は悪  
くない

ハッキリ言えと言われたので、ハッキリと自分の考えを言うことに  
した

『もしかしたら、上級神3人の中の誰かが気まぐれにやったのか  
もしれないよ？

そっちの方が、死人がやったっていうアンタの推測よりは信憑  
性があるけどね。

でもアンタは、サキ様がやったって考えてる。

それにより、こんな方程式が成り立った。

雪奈の能力を消せる「事件を起こせる」生きてる

っつーことで、アンタはただサキ様が生きているって思いたいだけなんだろう？」

しばらく、沈黙が続いた

数分して、ようやくジジイの声が響く

「よく考えると、そうかもしれないな。そなたの言うように、わしはただ

サキ様に生きていて欲しいだけなのかもしれない……」

その声は、先程聞いたものとは打って変わってか細い声だった

「わしはきつと誰よりもサキ様に生きていて欲しいと思っているのじゃろつな。」

ワケを、理由を聞いてくれるか？ 翡翠ちゃん。

今わしは、誰かに話して痛みを共有し、救われたいのじゃ……



っ

僕は無言だったが、ジジイは気にせず語りだした

## ぜんかいのうらばなし 〳後編〳（前書き）

今回はどっぴりとサキ様のお話になりますので、サキ様を知らないという方はいったん「〳神の名前〳」を読んだほうが言いかと思えます。

## ぜんかいのうらばなし　　く後編く

場所は天界

アルフレム（縮めてアル）がサキ様と出会ったのは、彼が生まれてすぐだったらしい

上級神とは創造神が特別に手をかけて創造した存在で、生まれながらにして完成されたものとされている

その上級神でもあったアルが目覚めて最初に見たのが、作り手である創造神とサキ様だったらしい

そして、アルを見たサキ様は開口一番こう言っただけ

「なんだ、女かと思っただけの老いぼれたジイさんじゃないか。

ねえ創造神様、まさか僕に『コイツを育てろ』とか言い出さないよね？」

その後、創造神に世話を命じられたサキ様は嫌々ながらアルを連れ帰ったらしい

なんとも衝撃的な出会いであつたそうなの

そうして、サキ様に育てられていったアルはいつしかサキ様を敬愛し、サキ様に認められたいと思い始めたらしい

認められるために思いついたのが、不可能とされていた上級神の神格の奪略だつた

神様になるためには神格というものが必要で、その神格を手に入れると人間でも神になれる

…が、逆説的にその神格を奪われると、神でいられなくなり、神としての死、を迎える

それは下級神、中級神によって証明されていた

だが、上級神は創造神によって作られたため神格が魂と同化していて神格をなくすことがないと言われている

不可能を可能にし、認められたかつたらしい

アルは能力を管理する能力、能力を作り出す能力を持っていたため、  
それで作り出したらしい

結果としてアルは、神格を奪略することに成功したらしい

完成した能力を使って神格を奪った上級神が“イナミ様”という神  
様だった

当然、神格を奪われたイナミ様は死んだ

そして、その翌日にサキ様は自分自身の魂から神格を強引に剥ぎ取  
って自殺した

イナミ様とサキ様は恋人同士だったらしい

恋人の死を知ったサキ様は恋人を殺したアルの目の前で自殺した

そこからアルは屍のように毎日を過ごしていた

そんなある日、友人（神）の誘いである世界で隕石を落とし、テン  
プレをさせたのだった

ジジイの話を聞いて思ったこと

『明らかに絶対に必ずお前が悪い！！』

「そんな！ 結構、勇気を振り絞って話したのに！？」

『勇気を振り絞って言ったら、理不尽にイナミ様を殺したことを善行と言える？』

答えは否<sup>いな</sup>だ！』

「確かに、そうじゃのう。イナミ様には本当に悪いと思うておる……」

『……“イナミ様には”？ まさか、お前

殺したのはイナミ様だけだと思ってる？』

無意識のうちにそんな発言が自分の口から出ていた

「……どういう、意味じゃ？」

ホント、どういう意味なんだろうね

僕自身でも分からないよ？

客観的に考えると、僕がジジイとなんらかの関わりがあったってことなのかな

『なんでもない。もう用はないだろう？ 天界に帰れ』

へ 言い方はムカツクが、本当のことじゃからここは大人しく帰るとするかろう

ジジイが帰ろうとした瞬間、また無意識に思ったことを言葉にしてみました

『お前、いつからジジイ口調になったんだ？』

そのまま十数秒無言だったので、もう言ったのかと思いため息をつく

へ ……なぜ、知っておるのじゃ？ 確かに昔とはちと口調は違うん

じゃが……

今は一人称が“わし”じゃが、昔は一人称が“ワタシ”だったんじゃよ。

友人の神がこちらの口調のほうがしっくりくると言っているの  
う　　

その言葉を聞きながら、やっぱり自分はコイツの過去に関わっているのだと実感する

そのまま何も聞こえなくなったので、たぶん天界に帰ったのだろう

何もすることもなく、眠気もないので、僕はただ宙を眺めていた

これからどうしようか考えながら……

「デリアのやつ、僕が勝手に瞬間移動テレポートしたこと怒ってるかなあ……

いや、それ以前に誤解をとかなきゃなんないのか？ ……面倒な」

頭を理解を深めるために声に出してみる



そこで、ふと気付く

…もしかして瞬間移動テレポートしたことで逃げたと思われてるかも！？

そういえば、ディリアが昔「自分が濡れ衣を着せられた時は、堂々と毅然としていれば良いのです。だって罪を犯してないんですからね」と言われてたじゃんー！

うわぁ、自分で自分の墓穴掘った力モ…

瞬間移動テレポートしなければ良かったと後悔する

そんな時だった

コン コン コン

部屋の扉をノックする音が聞こえた

「はあい、鍵かけてませんよー？」

僕がそう返事をする、ガチャリと扉が開く

ディリアはいつもノックしないで入るから、きっと別の使用人なんだろう

そう、思ってた

そう、思いたかった

「…どうして、翡翠様が泣いているんですか」

入ってきたのは、ディリアだった

「どうして…」

ディリアはまたそう言う

「…僕は、泣いてなんかないけど？」

そう答える

いや、実際はさっき寝てる時に泣いてたからウソなんだけど

「いえ、確実に泣いてました。…私が原因なんですか？

翡翠様が、知らない」と答えたのに私が信じなかったからなんですか…？」

ちよ、ディリアさん！？ 真顔でそんなこと言われると怖いんですけど！

ワタクシなにか変なこと言いました！？

「だーかーらー泣いてないって言ってんでしょーが！ あんまりクドイと嫌われるよ？

とっ、とりあえずアンタらの関係を知らないっていうのは信じてくれた？」

「……………ハイ」

一体その間はなんなんだ！？

「翡翠様が消えた後、考えたんです。泣くほど真剣だったんだ、って」

泣くほど真剣、ねえ

真剣って言うより、ただホントのことを言い続けてたらなんか涙が出てたっていうか…

…ありゃ、結局僕って泣いてんじゃない

それは置いていて、ディリアが信じてくれたから今回のことはお咎めナシにしていってやろうか

「ま、私が信じられなかったのもムリありませんよ。

翡翠様の日頃の行いが悪いのですから」

……え、うそ。コイツ開き直った？

「これに懲りたら二度とウソをつかないようにすることですね。

それでは、私は他の仕事がございますので失礼いたします」

ディリアはそう言つと足早に僕の部屋を出ていく

.....はあっ!?

なんやねんアイツ! まるで悪いのは全て僕のような感じで話しやがって!

今回の五分五分だろうが!

ああ、もうっ! せっかく涙ポロリな展開になつたと思つたのに!!

「でもまあ、いつか。しょうがないなあ、許してやるか……」

その言葉は、静かな部屋に響いて消え去つた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5016o/>

---

家庭教師ヒットマンリボーン ～二人の天使～

2011年12月1日19時53分発行